

国立研究開発法人  
国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所

# 精神保健研究所年報

第 36 号(通巻 69 号)

令和 4 年度

National Institute of Mental Health  
National Center of Neurology  
and Psychiatry

———2023———



## 卷頭言

令和 4 年度の精神保健研究所の業績年報をお届け致します。

令和 4 年度は 3 年余り続いたコロナ禍の中、医療研究機関としての精神保健研究所でも行動制限、在宅勤務の推奨などが続き、以前のように活発な人的交流が繰り広げられた研究の場としての研究所の姿は変貌を遂げたままでした。健康管理の負担も一部の研究者には過剰に感じられ、社会の精神保健だけではなく、若い研究者のスピリットを保つことも私たちの課題となりました。しかしこの 1 年は、このような環境に適応しつつ市民の負託に応えるための努力も実を結んできた年でもあります。在宅環境においても研究者は熱心な研究を続けており、300 件近い論文・総説を出版しております。また精神保健研究所の重要な使命は研究成果の発信、日本の精神保健医療水準の向上のための教育研修であります。web を用いての遠隔研修の利点を最大限に生かすことによって、研修会の件数は前年の 8 課程 16 回から 16 課程 25 回へ、参加人数は 1,969 名から 2,597 名へと増加しました。従来、地理的、時間的制約のために参加できなかった人々も多く参加されるようになったことは、望外の喜びであります。またコロナ状況において、従来の精神保健支援活動の意義が見直され、その成果を活用して解説したコロナ心の情報支援サイトも多くの方々に閲覧して頂き、活用されています。

令和 4 年は精神保健研究所開設 70 周年でもありました。これを記念して、厚生労働省の担当課と協議を重ねつつ、心の情報サイト開設の準備作業を進めました。また WHO のエキスパートを集めた国際会議が精神保健研究所で開催され、精神保健医療における地域実装の国際連携について 1 週間の討議を行いました。その会議の結果を踏まえ、地域実装についての WHO との連携が進行中であります。

精神保健研究所の長い歴史を通じて、市民のニーズに応えた研究を行い、その成果を現場に役立つ形で還元するという方針は一貫して受け継がれてきました。コロナ禍も明け、活動の自由度を取り戻すことになる令和 5 年度は、さらに一層の活動に精励し、市民および関係者からの期待に応えて参りたいと存じます。

2023 年 3 月

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所 所長 金 吉晴



目次

<b>I. 精神保健研究所の概要</b>	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	9
3. 国立精神・神経医療研究センター組織図	12
4. 職員配置	13
5. 精神保健研究所構成員	14
<b>II. 研究活動状況</b>	17
1. 今年度の活動概要	17
2. 公共精神健康医療研究部	19
3. 薬物依存研究部	28
4. 行動医学研究部	50
5. 児童・予防精神医学研究部	64
6. 精神薬理研究部	73
7. 精神疾患病態研究部	80
8. 睡眠・覚醒障害研究部	102
9. 知的・発達障害研究部	115
10. 地域精神保健・法制度研究部	131
11. ストレス・災害時こころの情報支援センター	153
<b>III. 研修実績</b>	158
<b>IV. ランチョンセミナー開催実績 および研究報告会プログラム・抄録集</b>	190
1. ランチョンセミナー開催実績	190
2. 研究報告会プログラム・抄録集	191
<b>V. 令和4年度委託および受託研究課題</b>	217



## I. 精神保健研究所の概要

### 1. 創立の趣旨及び沿革

#### I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された。

#### II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉県市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることになった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官(3名)が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生

指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修宿舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

### III. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武藏療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹、研究所事務係）が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎える、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武藏）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に精神生理部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

### IV. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患、神経疾患、筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり、精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは、自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室の3室編成。

精神保健計画部は、精神保健計画研究部へ名称変更され、統計解析研究室、システム開発研究室の2室編成。

薬物依存研究部は、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成。

心身医学研究部は、ストレス研究室、心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され、精神発達研究室、児童期精神保健研究室、思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は、成人精神保健研究部へ名称変更され、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、犯罪被害者等支援研究室、災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は、精神薬理研究部へ名称変更され、精神薬理研究室、気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は、社会精神保健研究部へ名称変更され、社会福祉研究室、社会文化研究室、家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は、精神生理研究部へ名称変更され、精神生理機能研究室、臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は、知的障害研究部へ名称変更され、診断研究室、治療研究室、発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は、社会復帰研究部へ名称変更され、精神保健相談研究室、援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は、制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室の3室編成。

以上、自殺予防総合対策センター及び11部、計33室となった。

また、研究所の事務部門は、主幹が研究所事務室長となり、研究所事務係とともに、研究所の所属となった。

平成23年4月、事務部門の組織変更が行われ、研究所事務室は総務部の所属となった。

平成23年12月には災害時こころの情報支援センターの新設により、情報支援研究室の1室が認められた。

以上、自殺予防総合対策センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計34室となった。

平成24年1月、千葉県市川市の地に国立精神衛生研究所が設置されてから、創立60周年を迎えた記念祝賀会を開催し、創立60周年記念誌を発行した。

平成27年4月1日、独立行政法人から国立研究開発法人へ改組。

## V. 国立研究開発法人後の編成等

平成28年4月1日、自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設、自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室の4室編成。

以上、自殺総合対策推進センター、災害時こころの情報支援センター及び11部、計35室となつた。

平成29年10月1日、社会精神保健研究部（1部3室）を廃止し、その機能の一部を精神保健計画研究部へ移管（1室）、併せて精神疾患病態研究部（1部2室）を増設。

平成30年4月1日、精神保健研究所の組織改編を行つた。

社会復帰研究部（1部2室）と司法精神医学研究室（1部3室）を地域・司法精神医療研究部として統合、臨床援助技術研究室、精神保健サービス評価研究室、司法精神保健研究室、制度運用研究室の3室編成。

心身医学研究部（1部2室）と成人精神保健研究部（1部5室）を行動医学研究部として統合、精神機能研究室、診断技術研究室、認知機能研究室、災害等支援研究室、ストレス研究室、心身症研究室の6室編成。

災害時こころの情報支援センター（1室）をストレス・災害時こころの情報支援センターへ改名、情報支援研究室、犯罪被害者等支援研究室の2室編成。

精神保健計画研究室（1部3室）を精神医療政策研究部へ改名、保健福祉連携研究室、政策評価研究室、精神医療体制研究室、NDB集計企画担当室の4室編成。

児童・思春期精神保健研究部（1部3室）を児童・予防精神医学研究部へ改名、児童・青年期保健研究室、精神疾患早期支援・予防研究室の2室編成。

精神薬理研究部（1部2室）2室を改名、分子精神薬理研究室、向精神薬研究開発室の2室編成。

知的障害研究部（1部3室）を知的・発達障害研究部へ改名、発達機能研究室、知的障害研究室の2室編成。

精神生理研究部（1部2室）を睡眠・覚醒障害研究部へ改名。

以上、自殺総合対策推進センター、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計33室となつた。

令和2年4月1日、自殺総合対策推進センターを廃止、厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承。

令和2年11月1日、精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室（NDB集計企画担当室）を廃止）に名称変更。

以上、ストレス・災害時こころの情報支援センター及び9部、計28室となつた。

## 沿革

年次 事項	所長	組織等経過
昭和25年5月		精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月		厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月	黒沢 良臣 (国立国府台病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として、千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始
35年10月		心理学部を精神衛生部に、社会学部を社会精神衛生部に、生理学形態学部を精神身体病理部に、優生学部を優生部に名称変更し、精神薄弱部を新設
36年4月		精神衛生研修室、心理研究室、精神衛生相談室及び生理研究室を新設
36年6月		厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され、医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
36年10月	内村 祐之	
37年4月	尾村 健久 (公衆衛生局長が所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長が所長事務取扱)	
39年4月	村松 常雄	主任研究官を置く
40年7月		社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年4月	笠松 章	
46年6月		社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設

49年7月		老人精神衛生部に老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2ヵ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に名称変更し、精神科デイ・ケア課程を新設
55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月	土居 健郎	
58年10月		老人精神衛生部に老人保健研究室を新設
60年4月	高臣 武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により、国立高度専門医療センターの設置を決定
61年9月		厚生省組織令の一部改正により、国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定
61年10月		国立高度専門医療センターの一つとして、国立武藏療養所、同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し、国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組、精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設、1課9部19室となる
62年4月	島薙 安雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し、2病院、2研究所となる 庶務課廃止、研究所に主幹を置く
62年6月	藤繩 昭	
62年10月		心身医学研究部（ストレス研究室、心身症研究室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大塚 俊男	
9年4月	吉川 武彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり、心理社会研究室と依存性薬物研究室となり、診断治療開発研究室を新設

I 精神保健研究所の概要

		精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月	堺 宣道	
14年1月		精神保健研究所創立50周年
14年6月	高橋 清久 (総長が所長事務取扱)	
14年8月	今田 寛睦	
15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定研究室）
16年4月	金澤 一郎 (総長が所長事務取扱)	
16年7月	上田 茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井 曜子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室、適応障害研究室、自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室、災害時等支援研究室）
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年4月		独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所となる 8つの研究部の名称を変更（精神保健計画研究部、児童・思春期精神保健研究部、成人精神保健研究部、精神薬理研究部、社会精神保健研究部、精神生理研究部、知的障害研究部、社会復帰研究部）し、知的障害研究部に発達障害支援研究室を新設、11部33室（室長定数29）となる 所長補佐及び自殺予防総合対策センター副センター長を置く
23年12月		災害時こころの情報支援センターの新設（情報支援研究室）
25年4月	野田 広	
25年7月	福田 祐典	

27年4月		国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所となる
27年9月	富澤 一郎	
27年12月	中込 和幸	
28年4月		自殺予防総合対策センターを廃し自殺総合対策推進センターを新設（自殺実態・統計分析室、自殺総合対策研究室、自殺未遂者・遺族支援等推進室、地域連携推進室）
29年10月		社会精神保健研究部を廃止 精神疾患病態研究部を新設（基盤整備研究室、病態解析研究室）、精神保健計画研究部精神医療体制研究室を増設
30年4月		4つの部を2つの部へ統合、また部名及び室名変更等再編し結果、2センター、11部35室から9部33室となる
31年1月	金 吉晴	
令和2年4月		自殺総合対策推進センター（4室）を廃止、厚生労働大臣指定（調査研究等）法人いのち支える自殺対策推進センターに業務を継承
2年11月		精神医療政策研究部を公共精神健康医療研究部（1室を廃止）に名称変更
4年4月		地域・司法精神医療研究部を地域精神保健・法制度研究部に名称変更し、現在の1センター9部28室となる

## 2. 内部組織改正の経緯

國立精神衛生研究所											國立精神・神經センター精神保健研究所
組織	創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	58年10月	61年4月	61年10月
	総務課	→	総務課 精神衛生研修室 (6月)						総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室	
	心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室	精神衛生部 心理研究室		
						老人精神衛生部 老化研究室		老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 老化度研究室 老人保健研究室	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室	
	児童精神衛生部		→	児童精神衛生部 精神発達研究室					児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	
	社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室				社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	
	生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)						精神身体病理部 生理研究室 (4月)	精神生理部 精神機能研究室	
優生学部	優生学部									優生部	
	精神薄弱部								精神薄弱部	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室	
			社会復帰部				社会復帰相談部 精神衛生相談室		社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	

国立精神・神経センター精神保健研究所									独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	平成23年12月
運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	
						自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	
										災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室
	精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 システム開発研究室			精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室	
	薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		
	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	
	成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 灾害等支援研究室			成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 灾害等支援研究室	
	老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	
	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	
	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	
	精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室			精神生理研究部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室	
	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	
	社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	
					司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	

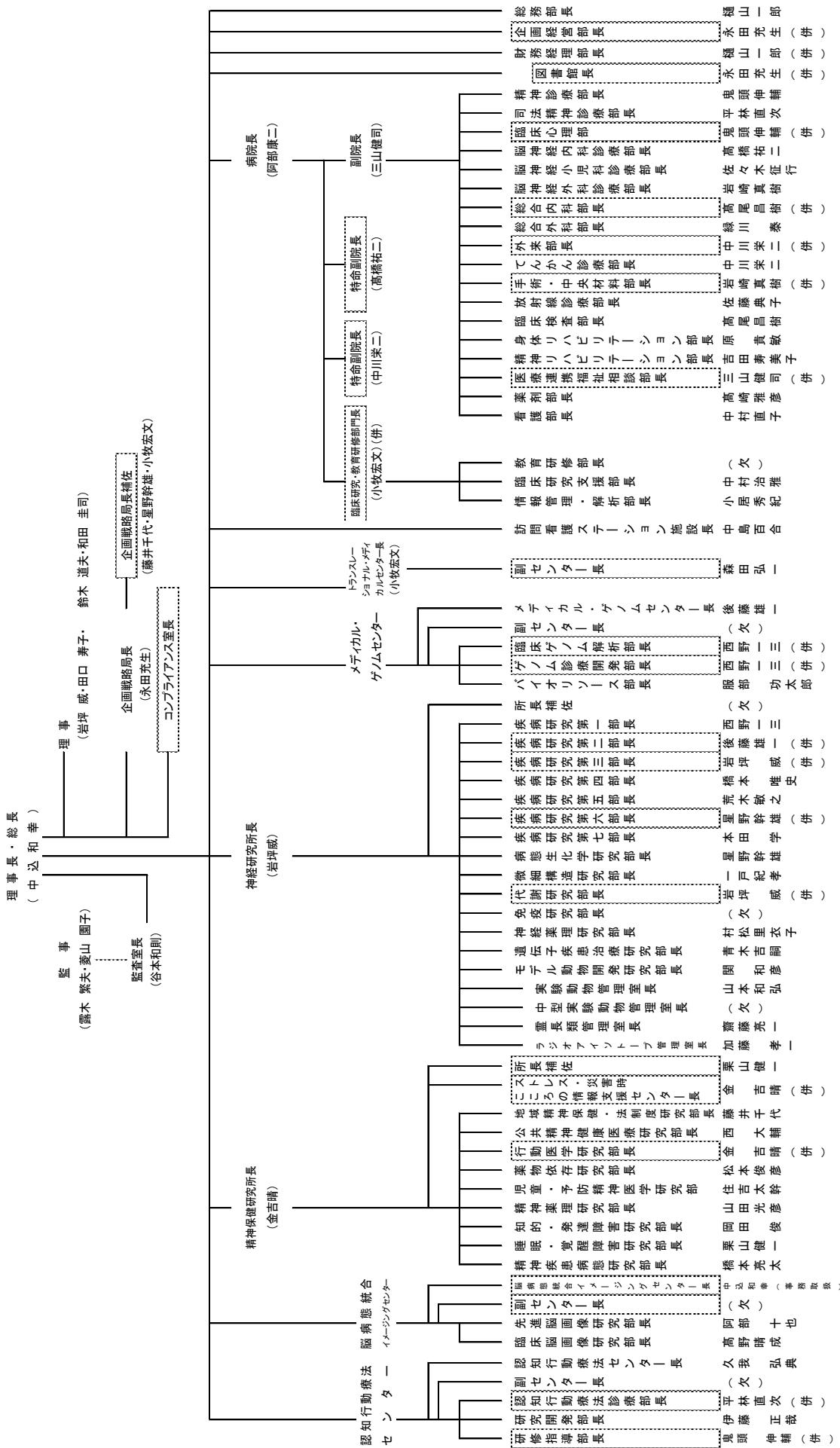
# I 精神保健研究所の概要

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所						
平成27年4月	平成28年4月	平成29年10月	平成30年4月	令和2年4月	令和2年11月	令和4年4月
研究所事務室 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係	研究所事務室 研究所事務係
自殺予防総合対策センター 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室	自殺総合対策推進センター 自殺実態・統計分析室 自殺総合対策研究室 自殺未遂者・遺族支援等推進室 地域連携推進室			
災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室			ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室	ストレス・災害時こころの情報支援センター 情報支援研究室 犯罪被害者等支援研究室
精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室	精神保健計画研究部 統計解析研究室 システム開発研究室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	精神医療政策研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室 NDB集計企画担当室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室	公共精神健康医療研究部 保健福祉連携研究室 政策評価研究室 精神医療体制研究室
薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室
心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室		行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室	行動医学研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室
成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 灾害等支援研究室	成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 灾害等支援研究室		災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室	災害等支援研究室 ストレス研究室 心身症研究室
精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室	精神薬理研究部 分子精神薬理研究室 向精神薬研究開発室
児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室	児童・予防精神医学研究部 児童・青年期精神保健研究室 精神疾患早期支援・予防研究室
社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室						
精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室	睡眠・覚醒障害研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室		知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室	知的・発達障害研究部 発達機能研究室 知的障害研究室
社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室		社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室	地域・司法精神医療研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室	地域精神保健・法制度研究部 臨床援助技術研究室 精神保健サービス評価研究室
司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室		司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神保健研究室 制度運用研究室	司法精神保健研究室 制度運用研究室	司法精神保健研究室 制度運用研究室	司法精神保健研究室 制度運用研究室
		精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室	精神疾患病態研究部 基盤整備研究室 病態解析研究室

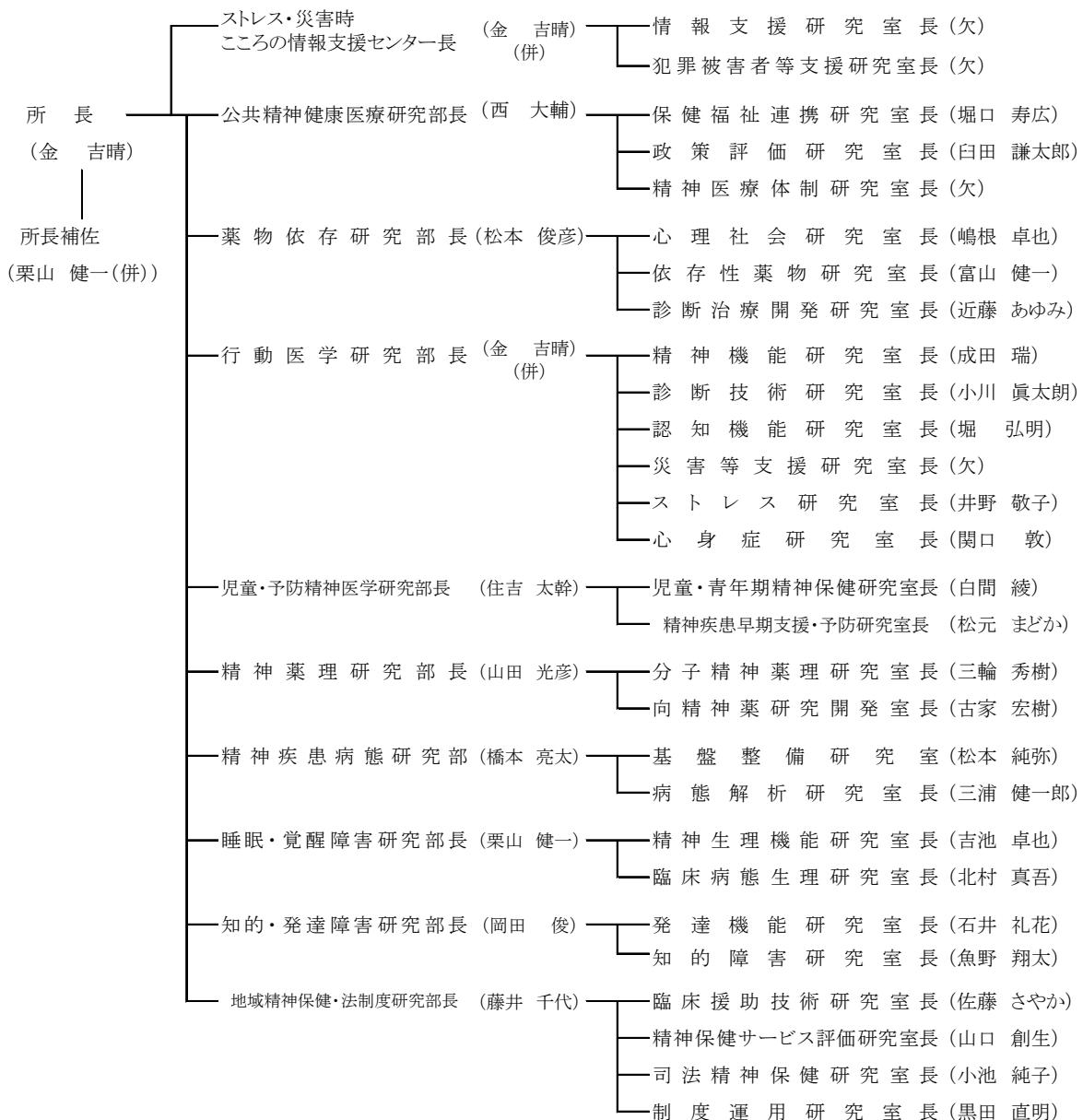
3. 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター一組織図  
(令和5年3月31日現在)

國立研究開発法人  
(令和5年3月31日現在)

— 12 —



## 4. 職員配置(令和5年3月31日現在)



精神保健研究所年報 第36号

## 5. 精神保健研究所構成員（令和4年度）





## II. 研究活動状況

### 1. 今年度の活動概要

#### I. 概要

##### 1) 人事

令和 4 年度の精神保健研究所所長は前年度に引き続き金 吉晴が所長を務めた（行動医学研究部長、ストレス・災害時こころの情報支援センター長、5 月 1 日～8 月 31 日公共精神健康医療研究部長を併任）。

本年度の常勤研究員人事は、下記のとおりである。

4 月 1 日に、公共精神健康医療研究部政策評価研究室長 白田謙太郎、薬物依存研究部依存性薬物研究室長 富山健一が採用された。5 月 1 日に、行動医学研究部精神機能研究室長 成田 瑞が、6 月 1 日に、地域精神保健・法制度研究部司法精神保健研究室長 小池純子が、7 月 1 日に、児童・予防精神医学研究部児童・青年期精神保健研究室長 白間 綾が採用された。9 月 1 日に、公共精神健康医療研究部長 西 大輔が着任（再任）した。また、令和 5 年 1 月 1 日に、地域精神保健・法制度研究部制度運用研究室長 黒田直明が採用となった。

令和 4 年度退職者は、薬物依存研究部診断治療開発研究室長 近藤あゆみ（3 月 31 日付）、精神薬理研究部長 山田光彦（同日付、定年退職）、知的・発達障害研究部知的障害研究室長 魚野翔太（同日付）であった。

##### 2) 概況

精神保健研究所は、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を担う一方で、研究発表分野でも精力的な活動を行っている。令和 4 年度には英文原著 160 編、和文原著 17 編、英文総説 4 編、和文総説 117 編、英文著書 1 編、和文著書 49 編を報告した（分担執筆含む）。また、学会発表としては国際学会で 45 件、国内学会で 287 件の発表を果たした。主要学会等では、若手研究者を中心に優秀賞や奨励賞等の学会賞を計 10 件受賞した。詳細は各研究部の活動状況を参照されたい。

第 34 回精神保健研究所研究報告会を令和 5 年 3 月 20 日にオンライン開催し、優秀発表賞（青申賞）に上條諭志（精神薬理研究部）、若手奨励賞に林 小百合（知的・発達障害研究部）および川口 敬之（地域精神保健・法制度研究部）が選ばれた。詳細はプログラム・抄録集を参照されたい。

精神保健研究所は、専門家を対象とした各分野の研修（精神保健福祉、薬物依存、摂食障害、発達障害、災害時心理対応等）を行っている。令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴い対面形式での研修実施が困難なため、オンライン開催の研修、計 16 課程（計 25 回）を実施し合計 2,597 名が受講した。詳細は後述した。

## II. 精神保健研究所プレスリリース一覧

日付	件名	担当 (所属・肩書は当時のもの)
2022年6月3日	多様な立場からの「患者・市民参画」に対する見解を分析 — 地域精神保健サービスの研究における「患者・市民参画」の実現に向けて —	地域精神保健・法制度研究部 室長 山口 創生
2022年6月8日	複雑性 PTSD 治療前進へ ～ 心理療法(STAIR Narrative Therapy)の成果～	所長 金 吉晴、 行動医学研究部 外来研究員 丹羽まどか、 客員研究員 大滝涼子
2022年6月30日	不適切な成育環境が成長後に社会生活上の困難さを 生じさせる仕組みを解明 ～ マウスモデルで神経回路の異常を発見～	精神薬理研究部 リサーチフェロー國石 洋、 部長 山田 光彦
2022年7月26日	統合失調症の社会認知機能を経頭蓋直流刺激で改善 ～ 精神疾患を対象とした特定臨床研究～	予防精神医学研究部 部長 住吉 太幹
2022年10月3日	北陸地方で初「石川県摂食障害支援拠点病院」 (全国5カ所目)が金沢大学附属病院に開設されました	行動医学研究部 室長 関口 敦
2022年10月7日	就労条件の希望マッチ度が就労期間と関連することを実証 — 当事者の希望を優先する就労支援の後押しに —	地域精神保健・法制度研究部 科研費研究員 五十嵐 百花
2022年10月13日	アスリートのメンタルヘルス支援の促進へ ～ 国際オリンピック委員会(IOC)によるメンタルヘルス教育教材の日本語翻訳版を公開～	地域精神保健・法制度研究部 研究員 小塩 靖崇
2022年11月9日	摂食障害治療施設リスト(Web版)をWEB公開いたしました	行動医学研究部 室長 関口 敦
2022年11月15日	野菜・果物およびフラボノイド豊富な果物とうつ病との関連について 果物およびフラボノイドの豊富な果物にうつ病発症リスク低減を確認	行動医学研究部 室長 成田 瑞
2023年2月1日	RP58/ZBTB18 ハプロ不全の原因として興奮性シナプス障害を発見	精神薬理研究部 室長 三輪 秀樹

## 2. 公共精神健康医療研究部

### I. 研究部の概要

当研究部の英語標記である Public Mental Health が示すように、当研究部は国民全体の精神健康増進および精神疾患の予防や精神疾患からの回復を目指して、疫学研究を中心とする幅広い学術的な研究と政策研究および政策に資する事業を実施している。今年度は主に、精神医療計画等に資する厚労省の指定研究、厚労省の事業で NCNP が受託した心のサポーター養成事業、COVID-19 感染後の心身への中長期的影響を検討する疫学研究、精神科医療機関の看護師を対象としたトラウマインフォームドケア研修の効果を検討する研究を行った。これらの活動は、他研究部や全国の精神病床をもつ医療機関、行政機関等との幅広い協働によって行われており、公共の精神健康・精神保健や精神医療に資する研究部としてのミッションに沿ったものと考えている。

#### 研究部の構成

部長：金 吉晴(併任 5/1～8/31)、西 大輔 (~4/30, 9/1～)、室長：堀口寿広、臼田謙太郎、研究員：羽澄 恵、客員研究員：西 大輔 (5/1～8/31)、竹島 正、安西信雄、今井健二郎、杉山雄大、東尚弘、久保田明子、中村江里、後藤基行、本屋敷美奈、佐々木那津(9/13～)、岡崎絵美(3/1～)、リサーチフェロー：三宅美智、片岡真由美、科研費研究員：岡崎絵美(~1/31)、小倉加奈子、古野考志、佐々木那津(~5/31)、澤田宇多子(11/1～)、中下綾子(3/1～)、研究生：北村真紀子、辻田あづさ、飯島由佳(4/12～)、月江ゆかり (5/10～)、研究補助員：穴澤恵美子、櫻庭亜希子、鈴木和香子(10/1～)

### II. 研究活動

#### 1) 良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究

精神科と他の診療科との連携、地域の多様な生活支援との連携による良質かつ適切な精神医療の持続的な確保のための要件を明らかにし、その促進を図るモニタリングの体制と、今後の医療計画および障害福祉計画に資する指標を提案することを目的として研究を行った。本研究は A～F の 6 つの分担研究によって構成される。A 班：第 8 次医療計画の指標および基準病床算定式について検討し、医政局での医療計画検討会までに研究班として指標と新算定式の提言を行った。B 班：令和 4 年度の 630 調査の企画・立案・実施・集計を行い、各自治体への本調査前の聞き取りなどを経てより正確かつ回答者負担を考慮した調査票を作成し、例年通りの悉皆性を確保した調査を実施することができた。C 班：精神科重症度の検討は、重症度概念の明確化を踏まえたうえで、フィージビリティスタディの結果にもとづいて、精神科医療ニーズと精神科心理社会的支援ニーズの合計 14 項目を確立でき、臨床現場で利用可能な重症度尺度の確立に向けた基礎とすることができた。D 班：NDB 分析については、NDB データを用いて第 7 次医療計画および第 8 次医療計画指標を算出するために、匿名レセプト情報等第三者提供窓口への相談を経て利用申請を行い、データを受領するための手続きを行った。E 班：ReMHRAD については例年のアップデート作業・過去のデータの表示を年度末までに完了予定であり、また新機能の追加（第 8 次医療計画指標・「にも包括」に関するデータ表示・発達障害支援リソースの表示）に関する検討を行うことで次年度以降の実装の準備を行った。F 班：措置入院患者コホートについては、病状や状態の変化、提供された医療等のサービス、また退院後の転帰に関する前向きコホート調査を引き続き実施し結果の分析を行った。（西、臼田）

#### 2) 心のサポーター養成研修の効果評価に関する調査

厚生労働省より委託された「心のサポーター養成事業」の一環として開発された研修の有効性を明らかにすることを目的とした研究を行った。心のサポーター養成研修の受講者、研修を実施する自治体の担当者、研修講師に対して自己記入式質問紙を実施し、受講による受講者の知識や態度の

変化、ならびに自治体担当者や研修講師の研修への満足度を検討した。本研究を行うことで、今後全国に事業を普及していくために必要となる、研修効果の科学的裏付を得ることができる。

(西、臼田、羽澄、岡崎、小倉、片岡、澤田、中下)

### 3) 新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討

新型コロナウイルス感染者の罹患後症状の特徴や関連要因を明らかにすることを目的として、新型コロナウイルス感染者を対象に調査を実施するとともに、新型コロナウイルス感染拡大禍の一般人口を対象としたデータベースを用いて、感染者と非感染者の精神症状の比較検討を行った。

その結果、横断調査から、新型コロナウイルス感染者のうち精神科既往がある場合は罹患後精神症状や罹患後身体症状の予後が不良である可能性、感染に伴うネガティブな心理的体験が罹患後症状に関連する可能性、日本においては感染者の精神症状は非感染者の精神症状と比べて不良とは言えない可能性等が示唆された。

また、横断調査参加者に追跡調査および、オミクロン株感染者を対象とした新規の調査を計画し、データ収集を完了した。当該データから、罹患後精神症状等についての継時変化および従来株感染者とオミクロン株感染者の間の異同が明らかになると期待する。(西、羽澄、臼田、片岡)

### 4) 精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討

精神病床を有する医療機関の看護職（看護師・准看護師）・看護補助者を対象に動画を用いたトラウマインフォームドケア（Trauma Informed Care: TIC）研修を実施し、その効果について検証することを目的に、調査1、調査2を実施した。研究協力施設は11施設で、そのうち動画研修の実施を希望した介入群6施設、動画研修の実施を希望しなかった対照群5施設に分類された。COVID-19の感染拡大の影響により病棟機能に大幅な変更のあった1施設を除く10施設が解析対象となつた。調査1では、既存のデータ収集システムを用いて収集されたデータを用いて、入院患者を対象とした解析を行った。調査2では、看護職（看護師・准看護師）・看護補助者に対して行った、質問紙調査によって収集されたデータを用いて解析を行った。現在、解析が進行中である。これらの研究結果から、今後のTICの普及・実装に向けた示唆を得ることが期待できる。

(西、臼田、三宅、羽澄)

### 5) 6NC連携による医療政策研究

当センターを含む6つの国立高度専門医療研究センター（6NC）の研究者が協力し、匿名レセプト情報・匿名特定健診等情報データベース（NDB）を用いて、NCが担う重要疾患等に関するエビデンスを創出し、政策調査・提言に関わる基盤情報を提供することで、「根拠に基づいた政策立案」や政策評価に貢献することを目指す課題である。

令和4年度は、定期的な合同の担当者会議を行い情報交換や各分野の解析手法などについての議論を行い、データハンドリング等に関する研究班内情報共有や、次年度以降のデータ申請の枠組みに関する議論を行った。また昨年に引き続き、各NCが所掌する主要疾患を対象としたレセプトデータ研究について6NC合同でのスコーピングレビューを行い、日本公衆衛生学会にて成果報告が行われた。(臼田、古野)

### 6) 医療的ケア児のインクルーシブ保育を実施

人工呼吸器や胃ろう等により医療的なケアを必要とする児童いわゆる「医療的ケア児」とその家族の社会参加を促進する目的で、東京都三鷹市および武蔵野市の参加を得て設置された協議会に参加して、訪問看護師が付き添い保育所で他の児童たちとともに保育を受ける「インクルーシブ保育」の実施に協力した。(堀口)

**III. 社会的活動に関する評価**

## (1) 市民社会に対する一般的な貢献

## (2) 専門教育面における貢献

- ・ 武藏野大学 非常勤講師（臼田）
- ・ 立教大学 非常勤講師（羽澄）
- ・ 小石川東京病院 臨床心理学的研究および実践指導（羽澄）
- ・ 駒沢女子大学 精神看護学実習助手（三宅）
- ・ 東京情報大学 講義担当（三宅）
- ・ 成仁病院 臨床心理学的研究および実践指導（小倉）

## (3) 精研の研修の主催と協力

## (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・ 国土交通省 総合政策局 安心生活政策課：移動円滑化のために必要な旅客施設又は車両等の構造及び整備に関する基準等検討会 構成員（堀口）
- ・ 全国精神保健福祉センター長会 倫理審査委員会 委員（堀口）

## (5) センター内における臨床的活動

- ・ NCNP 病院睡眠障害センターの外来にて不眠症の認知行動療法の提供を行った（羽澄）

## (6) その他

**IV. 研究業績****A. 刊行物**

## (1) 原著論文

- 1) Tsuno K, Okawa S, Matsushima M, Nishi D, Arakawa Y, Tabuchi T. The effect of social restrictions, loss of social support, and loss of maternal autonomy on postpartum depression in 1 to 12-months postpartum women during the COVID-19 pandemic. *J Affect Disord.* 2022 Jun 15;307:206-214.
- 2) Nishi D. Desire for Shorter Life Expectancy From a Mental Health Perspective. *J Epidemiol.* 2022 Sep 30. doi: 10.2188/jea.JE20220197. Epub ahead of print. PMID: 36184557.
- 3) Nishi D, Imamura K, Watanabe K, Obikane E, Sasaki N, Yasuma N, Sekiya Y, Matsuyama Y, Kawakami N. The preventive effect of internet-based cognitive behavioral therapy for prevention of depression during pregnancy and in the postpartum period (iPDP): a large scale randomized controlled trial. *Psychiatry Clin Neurosci.* 2022 Nov;76(11):570-578.
- 4) Hazumi M, Usuda K, Okazaki E, Kataoka M, Nishi D. Differences in the Course of Depression and Anxiety after COVID-19 Infection between Recovered Patients with and without a Psychiatric History: A Cross-Sectional Study. *Int J Environ Res Public Health.* 2022 Sep 8;19(18):11316.
- 5) Carrozzino D, Christensen KS, Patierno C, Woźniewicz A, Møller SB, Arendt ITP, Zhang Y, Yuan Y, Sasaki N, Nishi D, Berrocal Montiel C, Ceccatelli S, Mansueto G, Cosci F. Cross-cultural validity of the WHO-5 Well-Being Index and Euthymia Scale: A clinimetric analysis. *J Affect Disord.* 2022 Aug 15;311:276-283.
- 6) Imamura K, Sasaki N, Sekiya Y, Watanabe K, Sakuraya A, Matsuyama Y, Nishi D, Kawakami N. The Effect of the Imacoco Care Psychoeducation Website on Improving

- Psychological Distress Among Workers During the COVID-19 Pandemic: Randomized Controlled Trial. JMIR Form Res. 2022 Mar 10;6(3):e33883.
- 7) Horiguchi T, Takanashi K, Sato S, Sone N. Assessment of Abuses of Children with Disabilities in Japanese Nursery Schools by Municipality. Journal of Intellectual Disability -Diagnosis and Treatment 11(1): 1-9, 2023.
  - 8) Hazumi M, Matsui K, Tsuru A, Otsuki R, Nagao K, Ayabe N, Utsumi T, Fukumizu M, Kawamura A, Izuhara M, Yoshiike T, Kuriyama K: Relationship between COVID-19-specific occupational stressors and mental distress in frontline and non-frontline staff. Heliyon 8(8):e10310, 2022.
  - 9) Hazumi M, Okazaki E, Usuda K, Kataoka M, Nishi D: Relationship between attitudes toward COVID-19 infection, depression and anxiety: a cross-sectional survey in Japan. BMC Psychiatry 22(1):798, 2022.
  - 10) Fukasawa M, Miyake M, Kikkawa T, Sueyasu T: Development of the Japanese version of Staff Attitude to Coercion Scale. Frontiers in Psychiatry 13: 1026676, 2022.
  - 11) Kataoka M, Hazumi M, Usuda K, Okazaki E, Nishi D: Association of preexisting psychiatric disorders with post-COVID-19 prevalence: a cross-sectional study. Scientific reports 13(1): 346, 2022.
  - 12) Kataoka M, Kotake R, Asaoka H, Miyamoto Y, Nishi D: Reliability and Validity of the Japanese Version of the Attitudes Related to Trauma-Informed Care (ARTIC-10) Scale. Journal of Trauma Nursing 29(6): 312-318, 2022.

#### (2) 総説

- 1) 堀口寿広 : 特別支援教育と医療の連携. 教育と医学 70(3) : 216-221, 2022.
- 2) 片岡真由美, 西 大輔: COVID-19 関連トラウマに対するトラウマインフォームドケアの応用. 精神科 41(3) : 457-462, 2022.
- 3) 臼田謙太郎 : 【特集 トラウマインフォームドケアの実践】精神保健福祉センター・保健所からみたトラウマインフォームドケア. 精神科 41(3) : 449-456, 2022.
- 4) 竹島 正, 河野 稔明, 臼田謙太郎, 立森 久照 : 曲がり角に立つ精神科入院医療-マクロ状況と精神科臨床から- 統計から見た精神科入院医療の変化. 精神神経学雑誌 124(4 付録) S-328, 2022.

#### (3) 著書

- 1) 西 大輔 : 不安症研究. 2022.
- 2) 西 大輔 : 福岡行動医学雑誌. 2022.
- 3) 臼田謙太郎, 西 大輔 : 精神保健福祉センター・保健所調査からみえるトラウマインフォームドケア. 実践トラウマインフォームドケア, 亀岡智美編: 日本評論社, 東京, pp192-204, 2022.

#### (4) 研究報告書

- 1) 国立精神・神経医療研究センター (中込和幸, 金 吉晴, 西 大輔, 藤井千代, 久我弘典, 黒田直明, 臼田謙太郎, 羽澄 恵, 岡崎絵美, 小倉加奈子, 片岡真由美, 澤田宇多子, 中下綾子, 小塩靖崇, 梅本育恵, 牧野みゆき) : 心のサポーター養成に係る調査・分析業務等一式 事業報告書. 2023
- 2) 西 大輔 : 良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指した指標に関する研究. 令和 4 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究 (研究代表者: 西 大輔)」. 令和 4 年度総括・分担研究報告書. 2023

- 3) 西 大輔: 新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費 令和 4 年度 総括研究報告書. 2023
- 4) 羽澄 恵: COVID-19 感染後の予後に関連する要因の検討. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 4 年度 分担研究報告書. 2023.
- 5) 臼田謙太郎: 感染時期による罹患後精神症状の比較検討. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 4 年度 分担研究報告書. 2023.
- 6) 片岡真由美: COVID-19 罹患経験の有無による精神症状の比較. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討（主任研究者：西 大輔）」令和 4 年度 分担研究報告書. 2023.
- 7) 臼田謙太郎: 精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討. 令和 4 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「精神保健医療福祉施設におけるトラウマ（心的外傷）への対応の実態把握と指針開発のための研究（研究代表者：西 大輔）」令和 4 年度分担研究報告書. 2023.
- 8) 羽澄 恵: 眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））令和 4 年度 総括研究報告書. 2023.
- 9) 羽澄 恵: 睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））令和 4 年度 総括研究報告書. 2023.
- 10) 三宅美智: 精神障害当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））令和 4 年度 総括研究報告書. 2023.
- 11) 三宅美智: BPSD 緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護－介護共同介入モデルの作成. 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究 C））（主任研究者：畠山卓也）令和 4 年度 分担研究報告書. 2023.

## (5) 翻訳

## (6) その他

- 1) 堀口寿広 : 編集後記. 小児保健研究 81(3) : 317, 2022.

**B. 学会・研究会における発表**

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
  - 1) 西 大輔 : 心のサポーター養成事業 Nippon COCORO Action. シンポジウム 19. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
  - 2) 西 大輔 : 新型コロナウイルス感染後の精神症状. シンポジウム 23. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
  - 3) 羽澄 恵 : 日中の眠気に関連する自己報告尺度. 第 47 回日本睡眠学会学術大会. 福岡, 2022.6.30-7.1.

## (2) 一般演題

- 1) 佐々木那津, 秋山 浩杜, 川上 憲人, 西 大輔 : 妊娠前の月経周期異常と妊娠期のうつ症状との関連. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 2) 堀口寿広, 高梨憲司, 佐藤彰一, 曽根直樹 : 障害者虐待事案の調査を参考にした児童虐待の対応の人的コストの推計. 第 69 回日本小児保健協会学術集会, 三重, 2022.6.24-26.
- 3) 西 大輔 : 第 96 回日本薬理学会年会, 第 43 回日本臨床薬理学会学術総会（同時期開催）, 神奈

川, 2022.12.1.

(3) 研究報告会

(4) その他

- 1) 三宅美智：隔離身体拘束を受けた患者との対話ー聞き取りのむずかしいときだからこそー. 第30回精神科看護管理研究会, 沖縄（オンライン）, 2023.1.28.

**C. 講演**

- 1) 堀口寿広：クリティカルパス. 日本精神科病院協会令和4年度通信教育シニアコース前期スクリーニング, 東京, 2022.6.28.
- 2) 羽澄 恵：睡眠は私たちに本当に必要なか. 学校訪問型睡眠講座, 多胡小学校, 2022.11.29.

**D. 学会活動**

(1) 学会主催

(2) 学会役員

- 1) 西 大輔：日本行動医学会 理事
- 2) 西 大輔：日本周産期メンタルヘルス学会 評議員
- 3) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会 小児保健奨励賞研究助成選考委員
- 4) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児科学会 小児科サブスペシャルティ連絡協議会 第三者委員

(3) 座長

- 1) 西 大輔：日本トラウマティック・ストレス学会, 東京, 2022.7.23-24.
- 2) 西 大輔：日本行動医学会, 大阪, 2022.12.10-11.
- 3) 堀口寿広：第6回多職種のための投稿論文書き方セミナー. 第69回日本小児保健協会学術集会, 三重, 2022.6.24-26.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 西 大輔：日本精神神経学会 PCN 編集委員
- 2) 西 大輔：日本トラウマティック・ストレス学会
- 3) 堀口寿広：公益社団法人 日本小児保健協会「小児保健研究」誌 編集委員長
- 4) 堀口寿広：「チャイルド・ヘルス」誌 編集協力者
- 5) 三宅美智：日本精神科看護協会 査読委員

**E. 研修**

(1) 研修企画

- 1) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第1回こころサポーター指導者養成研修. オンライン, 2022.8.22.
- 2) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第2回こころサポーター指導者養成研修. オンライン, 2022.9.6.
- 3) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第1回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.10.11.
- 4) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第2回こころサポーター養成研修. オンライン,

2022.10.19.

- 5) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 3 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.10.20.
- 6) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 4 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.10.27.
- 7) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 5 回こころサポーター養成研修. 名古屋, 2022.11.7.
- 8) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 6 回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.11.7.
- 9) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 7 回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.11.7.
- 10) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 8 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.10.
- 11) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 9 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.11.
- 12) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 10 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.12.
- 13) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 11 回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.11.14.
- 14) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 12 回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.11.14.
- 15) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 13 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.11.16.
- 16) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 14 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.11.16.
- 17) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 15 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.18.
- 18) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 16 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.21.
- 19) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 17 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.11.22.
- 20) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 18 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.22.
- 21) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 19 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.11.28.
- 22) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 20 回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.11.28.
- 23) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 21 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.29.
- 24) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 22 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.11.29.
- 25) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 23 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.11.29.
- 26) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 24 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.1.
- 27) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 25 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.2.
- 28) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 26 回こころサポーター養成研修. 和歌山, 2022.12.5.
- 29) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 27 回こころサポーター養成研修. 和歌山, 2022.12.7.
- 30) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 28 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.7.
- 31) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 29 回こころサポーター養成研修. 板橋, 2022.12.8.
- 32) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 30 回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.12.9.
- 33) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 31 回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.13.
- 34) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 32 回こころサポーター養成研修. 豊中, 2022.12.13.
- 35) 心のサポーター養成事業, 令和 4 年度 第 33 回こころサポーター養成研修. 尼崎, 2022.12.13.

- 36) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第34回こころサポーター養成研修. 和歌山, 2022.12.14.
- 37) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第35回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.14.
- 38) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第36回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.12.14.
- 39) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第37回こころサポーター養成研修. 和歌山, 2022.12.16.
- 40) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第38回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.16.
- 41) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第39回こころサポーター養成研修. 豊中, 2022.12.20.
- 42) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第40回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.20.
- 43) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第41回こころサポーター養成研修. オンライン, 2022.12.20.
- 44) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第42回こころサポーター養成研修. 世田谷, 2022.12.22.
- 45) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第43回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2022.12.22.
- 46) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第44回こころサポーター養成研修. 岩手, 2022.12.23.
- 47) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第45回こころサポーター養成研修. 広島, 2022.12.23.
- 48) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第46回こころサポーター養成研修. 名古屋, 2023.1.14.
- 49) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第47回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2023.1.17.
- 50) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第48回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.18.
- 51) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第49回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.18.
- 52) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第50回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.18.
- 53) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第51回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.19.
- 54) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第52回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.20.
- 55) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第53回こころサポーター養成研修. 板橋, 2023.1.20.
- 56) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第54回こころサポーター養成研修. 広島, 2023.1.21.
- 57) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第55回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.24.
- 58) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第56回こころサポーター養成研修. 広島, 2023.1.24.
- 59) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第57回こころサポーター養成研修. 神奈川, 2023.1.25.
- 60) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第58回こころサポーター養成研修. 吹田, 2023.1.25.
- 61) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第59回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.26.
- 62) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第60回こころサポーター養成研修. 吹田, 2023.1.26.
- 63) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第61回こころサポーター養成研修. 横須賀, 2023.1.27.
- 64) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第62回こころサポーター養成研修. 川口, 2023.1.27.
- 65) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第63回こころサポーター養成研修. 岩手, 2023.1.27.
- 66) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第64回こころサポーター養成研修. 広島, 2023.1.28.
- 67) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第65回こころサポーター養成研修. オンライン, 2023.1.28.
- 68) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第66回こころサポーター養成研修. 尼崎, 2023.1.30.
- 69) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第67回こころサポーター養成研修. オンライン,

2023.1.31.

- 70) 心のサポーター養成事業, 令和4年度 第68回こころサポーター養成研修. 広島, 2023.2.15.

(2) 研修会講師

- 1) 三宅美智: 行動制限最小化看護 2 行動制限最小化の方略. 日本精神科看護協会主催, オンライン, 2022.6.12.
- 2) 三宅美智: 行動制限研修会. 日本精神科看護宮城県支部主催, オンライン, 2022.7.30.
- 3) 西大輔, 三宅美智: 「トラウマ・インフォームドケアの基本と実践」研修会日本精神科看護協会主催, オンライン, 2022.8.27.
- 4) 西大輔, 立森久照, 臼田謙太郎: 令和4年度630調査自治体担当者向け説明会, オンライン, 2022.9.10.
- 5) 三宅美智: 看護過程の基本. 日本精神科看護協会主催, オンデマンド, 2022.10.11~2023.3.10
- 6) 三宅美智: 観察と記録. 日本精神科看護協会主催, オンデマンド, 2022.10.11~2023.3.10
- 7) 西大輔: 令和4年度厚生労働省「こころの健康づくり対策事業」PTSD 対策専門研修会, オンライン, 2022.10.25.
- 8) 西大輔: 令和4年度厚生労働省「こころの健康づくり対策事業」PTSD 対策専門研修会, オンライン, 2022.11.25.
- 9) 西大輔: 災害・事故時のこころのケア対策事業専門研修, 北九州市立精神保健福祉センター主催, オンライン, 2022.12.6.
- 10) 三宅美智: 行動制限最小化の普及のために—コア・ストラテジーとTICを学ぶ—. 全国精神保健福祉連絡協議会主催, 2023.1.21
- 11) 西大輔: 2022年度~2023年度日本助産師会主催研修会, 事前収録, 2022-2023.

F. その他

### 3. 薬物依存研究部

#### I. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」(総務庁、平成10年5月)により、機能強化が要請され、平成21年度より研究室の改組及び1研究室の新設がなされ、下記のように3研究室体制となっている。

##### 心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導、研修の方法の研究に関すること。

##### 依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

##### 診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

人員構成は、次のとおりである。

部長：松本俊彦、心理社会研究室長：嶋根卓也、依存性薬物研究室長：富山健一、診断治療開発研究室長：近藤あゆみ、客員研究員：淺沼幹人（岡山大学脳神経機構学分野）、尾崎茂（東京都保健医療公社豊島病院）、宮永耕（東海大学健康科学部）、成瀬暢也（埼玉県立精神医療センター）、森田展彰（筑波大学医学医療系）、谷渕由布子（同和会千葉病院）、三島健一（福岡大学薬学部）、境泉洋（徳島大学大学院）、山田正夫（神奈川県立精神保健福祉センター）、池田朋広（高崎健康福祉大学健康福祉学部）、平田豊明（千葉県精神科医療センター）、高野歩（東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科）、大嶋栄子（NPO法人リカバリー）、池田和隆（東京医学総合研究所）、高岸百合子（駿河台大学心理学部）、奥村泰之（東京都医学総合研究所）、引土絵未（日本女子大学人間社会学部）、古田島浩子（東京医学総合研究所）、山口重樹（獨協医科大学医学部）、宮地尚子（一橋大学大学院社会学研究科）、高橋哲（お茶の水女子大学生活科学部）、村瀬華子（北里大学医療衛生学部）、川口貴子（福岡市精神保健福祉センター）、新海浩之（いのち支える自殺対策推進センター）、蛭川立（明治大学情報コミュニケーション学部）引地和歌子（東京都監察医務院）、船田正彦（湘南医療大学薬学部）、山田千佳（京都大学東南アジア地域研究研究所）、Tooru Nemoto (Public Health Institute 5月～)、大宮宗一郎（上越教育大学教育学部 5月～）、白川教人（横浜市こころの健康相談センター 5月～）、科研費研究員：喜多村真紀、加藤隆、瓜生美智子、古市亘、堤史織、長島努、片山宗紀、藤本真理子（8月～）、併任研究員：今村扶美、川地拓、山田美紗子（以上、病院臨床心理室）、船田大輔、宇佐美貴士、沖田恭治（以上、病院第二精神科）楳野絵里子（司法精神診療部）、研究生：青尾直也、今井航平、加藤重城、橋本美保、花岡晋平、福森崇之、大澤美佳、高木のり子、田中紀子、邱冬梅、山田理沙、山本泰輔、青木彩香、阿久根陽子、菊池美名子、池上大悟、江島智子、水野有紀、金澤由佳、アティジュ・セリムギヨクチャ（～10月）、村上真紀。

#### II. 研究活動

##### A. 疫学的研究

###### 1) 保護観察の対象となった薬物依存症者のコホート調査システムの開発とその転帰に関する研究

本研究は、保護観察所と精神保健福祉センターなどの地域支援機関との橋渡しをしながら、保護観

察の対象となった薬物事犯者の長期転帰を調査する、「Voice Bridges Project」である。平成29年3月から令和4年12月末までに、23の精神保健福祉センターから計753名の保護観察対象者が調査に参加した。1年後追跡完了者は319名、2年後の追跡完了者は182名、3年後の追跡完了者は98名であった（追跡率は1年後79.2%、2年後78.4%、3年後75.4%）。初回調査時における対象者の平均年齢は46.2歳で、男性が75.2%、週4日以上働いている者が39.2%であり、保護観察の種類の内訳としては、仮釈放の者が62.0%と最多であった。主たる使用薬物としては覚せい剤が94.0%，逮捕時DAST-20得点の平均値は10.9と中程度、90.1%が中等症以上の薬物問題の重症度を示し、治療プログラムを受けている者が74.5%（半分以上は保護観察所のもの）であった。追跡中の各調査期間における違法薬物再使用率は、3か月後では2.6%，9か月～1年では5.3%，1年6か月～2年では1.6%，2年6か月～3年では6.1%であった。治療プログラム参加率は1年後には43.6%に減少し、2年後36.8%，3年後22.4%と年々低下した。カプランマイヤー解析を実施したところ、約1年経過後の累積断薬継続率は約90%，2年経過後の累積断薬継続率も約90%であり、3年経過後の累積断薬継続率は約80%であった。（厚労省依存症調査・研究事業 松本俊彦）

## 2) 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2022年）

本研究は、わが国で唯一の全国の中学生を対象とする薬物使用に関する疫学研究である。全国の中学生における飲酒・喫煙を含めた薬物使用の状況、および生活に関する実態を把握することを目的に、全国から都道府県単位で無作為に選ばれた計244校の中学校における全在校生（想定生徒数113,722名）を研究対象に、無記名の自記式調査を実施した。計154校（回収率63.1%）から調査協力を得て、計53,623名より有効回答を得た（想定生徒数の47.2%）。COVID-19パンデミックの影響で4年ぶりの全国調査となった今回、アルコール、タバコ、薬物乱用のいずれの経験率も前回調査（2018年）に比べて有意に減少したことが確認された。これら結果は、アルコールや薬物乱用といった物質使用を行う中学生が減っていることを示唆している。減少の背景として、COVID-19パンデミックにより学校生活を含む様々な社会的活動が制限されている中で、アルコールや薬物を使う機会が少なくなったことが影響している可能性が考えられた。（令和4年度厚生労働行政推進調査事業費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業 嶋根卓也、猪浦智史、邱冬梅、堤史織、山口裕貴）

## 3) 大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、危険ドラッグの乱用実態に関する研究

近年、高濃度に抽出されたTHCを含有する大麻ベイプ（リキッド、ワックスなど）の使用実態を明らかにすることを目的とした。対象は、福岡県の少年用大麻再乱用防止プログラムに参加した17名の大麻使用少年のうち、研究参加の同意が得られた12名であった。過去1年以内の大麻ベイプの使用率は、全体の66.7%であった。大麻ベイプ使用群は、対照群（非使用者）に比べて、大麻使用開始年齢が若く（ベイプ群13.3歳、対照群15.8歳）、DAST-20スコアの平均値が高く（ベイプ群8.6点、対照群3.3点）、それぞれ有意差が認められた。一方、MINIによる薬物依存および薬物乱用の診断には有意差が認められなかった。大麻使用少年の間で、大麻ベイプの使用が着実に広がっている可能性を示唆する結果が得られた。大麻ベイプ使用者は、非使用者に比べて、大麻の初回使用年齢が若く、薬物使用関連問題の重症度が高いといった特徴がみられたが、未だ十分なサンプル数が得られておらず、大麻ベイプの使用実態を明らかにするためにはさらなるリクルートが必要である。（厚労科学研究所：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業 嶋根卓也、船田正彦）

## 4) ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究

令和3年度まで厚生労働科学研究の一環として実施された「ダルク追っかけ調査」のデータベースを分析し、当事者団体による依存症回復支援の現状と課題を抽出した。主観的幸福感尺度（Subjective Happiness Scale）で、ダルク利用者の幸福感を測定すると、25～49歳の幸福感は、日本全体を大きく上回っているが、50～54歳は一般住民と並び、55歳以上の利用者は一般住民を大きく下回ることが明らかとなった。幸福感の高さの背後には、ミーティング以外の時間でのメンバーとのフェローシップが影響している可能性があることが示唆された。メンバー同士の交流が乏しい人、55歳以上の人、

コロナ禍での自粛生活が欲求・渴望に直結している人は、幸福感が低く、より丁寧なケアが必要であることが示唆された。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、猪浦智史、喜多村真紀、水野聰美、千葉奈津子、大淵拓真、松本俊彦)

#### 5) 覚醒剤事犯者の理解とサポートに関する研究

全国の刑務所で収容されている覚醒剤事犯者に関する実態を明らかにすることを目的とした。覚醒剤事犯者の小児期の逆境体験 (adverse childhood experience ; ACE) に着目したところ、覚醒剤使用者の4人に3人が何らかの逆境体験を有しており、覚醒剤使用者のACE体験は、国内の一般人口によりもはるかに高い値であることを明らかになった。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、近藤あゆみ、喜多村真紀、松本俊彦)

#### 6) 薬物使用と生活に関する全国高校生調査

薬物使用開始の好発年齢とされる高校生（主として16～18歳）を対象とした薬物使用に関する全国調査を実施し、高校生における大麻などを含めた薬物使用に関する基礎データを収集・整理する。新型コロナウイルス感染症が拡大する中で、第2回目の全国調査を実施した。各違法薬物の経験率は、前回調査に比べて全体的に減少しており、コロナ禍において高校生の薬物使用はむしろ減少傾向にあることが示唆された。これは米国における青少年の薬物使用の全国調査とも一致した傾向である。今回の調査において、最も経験率が高いのはいずれも大麻であり、次いで有機溶剤、MDMAという順序であった。前回調査（2018年度）では、有機溶剤の経験率が最も高く、次いで大麻、MDMAという順序であり、有機溶剤と大麻の順序が入れ替わる結果となった。救急医療や精神科臨床で若年者の間で市販薬乱用の問題が拡大していることを受け、今回の調査では、初めて市販薬乱用の実態について調べた。市販薬乱用の経験率は、大麻の経験率の10倍に相当し、市販薬の乱用が違法薬物よりも深刻に広がっている可能性が示唆された。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業。嶋根卓也、猪浦智史、喜多村真紀、山口裕貴、松本俊彦)

#### 7) 女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

医療機関で薬物依存症治療を受けている女性患者（約60名）を対象に、薬物問題を抱えた女性の生活実態および支援ニーズを把握することを目的としたアンケート調査を継続実施している。また、既にデータ収集を終えた、覚醒剤取締法違反により刑事施設に収容されている女性（約107名）を対象とした同目的のアンケート調査のデータ分析を行った結果、覚醒剤事犯女性の多く（72.5%）は、暴力や児童虐待などのトラウマ体験を有しており、そのなかには、PTSD診断を満たすほどの症状を抱えている人（31.6%）も少なくないこと、また、抑うつ障害など物質使用障害以外の障害をもつ人の割合（64.9%）も高いことなどが示された。(厚生労働省依存症に関する調査研究事業。近藤あゆみ、嶋根卓也)

#### 8) ゲイ・バイセクシュアル男性の薬物依存症者に対する回復支援に関する研究

① 薬物依存症の回復支援施設であるダルクの利用者を対象とするコホート研究で得られたデータベースから、覚醒剤をメインの薬物とするシスジェンダー男性235名を抽出し、異性愛（ヘテロセクシュアル）群218名、同性愛・両性愛（ゲイ・バイセクシュアル）群17名とに分類し、基本属性と物質使用状況を比較検討した。ゲイ・バイセクシュアル男性では、覚醒剤の影響下において無防備なセックスを行うことにより性感染症への感染リスクが高くなる可能性が示唆された。よって、ゲイ・バイセクシュアル男性においては、薬物使用とセックスとの関係性を念頭においていた、感染リスク低減を目指した予防的介入が必要である。

② ゲイ・バイセクシュアル男性固有の支援ニーズを明らかにするため、薬物（覚醒剤）使用に問題を抱えるゲイ・バイセクシュアル男性の8名に半構造化面接を実施し、分析した。(1)支援内容の再検討（セクシュアリティ／性感染症に関する専門的支援、友達づくりやコミュニティ参加の手伝い）、(2)支援形態の再検討（気軽な相談窓口、複数かつ多様な相談先・居場所づくり、同時並行かつ切れ目のない横断的支援）、(3)当事者の話しづらさ（相談しづらさ）の理解、(4)新たな「回復」モデルの提案が支援課題として抽出された。結果をもとに、ゲイ・バイセクシュアル男性に対する新たな支援モデル

の構築に関する提言を行う。(厚生労働省：依存症に関する調査研究事業. 新田慎一郎, 嶋根卓也, 松本俊彦)

## B. 臨床研究

### 1) 覚醒剤使用障害患者の臨床像の経年変化に関する研究

本研究では「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査(実態調査)」の2000年から2022年までのデータベースを活用した。研究実施にあたっては、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会の承認を得た(A2020-042)。各調査年度の実態調査の回答率、報告患者数、患者特性のcrude prevalence rate (CPR)を計算した。各調査年によって異なる年齢構成による影響を調整するために、2000年から2020年までの調査データは2022年の男女の年齢構成にしたがって年齢荷重調整し age-weighted prevalence rate (APR)を計算した。CPRとAPRの変化に対して Cochran-Armitage 傾向検定を行った。その結果、2020年までの実態調査においては、調査回答率は上昇し、2012年以降は70%以上で推移していた。報告された覚醒剤使用障害患者数は回答率の上昇以上に増加していた。治療を受ける覚醒剤使用障害患者数と薬物関連逮捕歴を持つ患者の割合は増加傾向にあることから、逮捕を契機に治療を受ける患者が増加したと考えられ、覚醒剤使用者を司法から医療につなげる社会的対策の有効性が示された。精神病性障害と診断される患者の割合が減少し、1年間の断薬を達成した患者の割合が増加したことから、精神病症状を生じる前に覚醒剤断薬に至る患者が増加したと考えられ、外来での依存症治療による医学的対策の有効性が示された。新たな問題として患者は高齢化し、ベンゾジアゼピン乱用を併存する患者が増加している。(精神・神経疾患研究開発費、松本俊彦)

### 2) 女性薬物依存症者の回復支援に関する研究

医療機関で薬物依存症治療を受けている女性患者(約60名)を対象に、薬物問題を抱えた女性の生活実態および支援ニーズを把握することを目的としたアンケート調査を継続実施している。また、既にデータ収集を終えた、覚醒剤取締法違反により刑事施設に収容されている女性(約107名)を対象とした同目的のアンケート調査のデータ分析を行った結果、覚醒剤事犯女性の多く(72.5%)は、暴力や児童虐待などのトラウマ体験を有しており、そのなかには、PTSD診断を満たすほどの症状を抱えている人(31.6%)も少なくないこと、また、抑うつ障害など物質使用障害以外の障害をもつ人の割合(64.9%)も高いことなどが示された。(厚生労働省依存症に関する調査研究事業. 近藤あゆみ, 嶋根卓也)

## C. 基礎研究

### 1) NMDA受容体を標的とする解析

NMDA受容体を標的とする化合物の有害作用を迅速に予測する手法は確立されていないことから、本研究課題でNMDA受容体発現細胞を利用した評価法の確立を行った。樹立安定株であるHEK-293細胞を利用してテトラサイクリン誘導型NMDA受容体発現細胞を作成した。NMDA受容体は、グリシン存在下でグルタミン酸の刺激を行うと、細胞外のCa<sup>2+</sup>を取り込んで細胞内Ca<sup>2+</sup>濃度が増加する。一方で、NMDA受容体拮抗薬を併用するとこの機能が阻害される。細胞内カルシウムイオンに反応する特殊な蛍光指示薬と蛍光プレートリーダーを組み合わせ、麻薬であるケタミンおよびNMDA受容体選択性拮抗薬添加によるCa<sup>2+</sup>動態を解析したところ、濃度依存的に細胞内の蛍光強度が低下した。これらの受容体-Ca<sup>2+</sup>応答細胞、NMDA受容体を標的とする薬物の検出や薬理作用の強度の評価に利用可能であることを確認した。(令和4年度精神・神経疾患研究開発費、富山健一)

### 2) 新規オピオイド化合物の中核作用と薬物依存性の解析

従来の合成オピオイドとは構造の異なるニタゼン系化合物が登場し、我が国を含め世界的に流通が拡大しつつある。ニタゼン系化合物は、フェンタニルなどと同様にオピオイド受容体に作用すると考えられるが、その薬理作用や薬物依存性については不明であった。そこで、ニタゼン系化合物イソトニタゼンを利用して薬理学的特性、運動活性および薬物依存性の解析を行った。オピオイド受容体を発現するCHO細胞を利用して、イソトニタゼンのオピオイド受容体作用を解析した結果、イソトニタゼンの刺激により細胞内Ca<sup>2+</sup>の有意な増加が確認された。また、イソトニタゼンの投与によって用

量依存的に運動量の増加が確認された。この運動量の増加は、ナロキソンの前処置によって抑制されたことから、オピオイド受容体を介した作用であることが確認された。さらに CPP 法による薬物依存性の評価を行った。イソトニタゼンの条件付けによって、有意な CPP の発現、すなわち報酬効果の発現が認められた。本研究により、イソトニタゼンはオピオイド $\mu$ 受容体を介して中枢興奮作用を示し、さらに精神依存を誘発する恐れがあることから、乱用によって健康被害を示す危険性があると考えられる。（厚労科学研究：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業。富山健一）

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(IV. 研究業績 C. 講演 参照) ・報道：(IV. 研究業績 F. その他 参照)

#### (2) 専門教育面における貢献

- ・研修会・研究会

第 11 回薬物依存症に対する認知行動療法研究会、2020 年度厚生労働省依存症治療拠点機関設置運営事業（薬物依存症回復施設職員研修、依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修（薬物））

- ・各種教育研修会等への講師派遣 (IV. 研究業績 C. 講演 参照)

- ・大学

早稲田大学人間科学学術院非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人東京医科歯科大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人東京大学非常勤講師（松本俊彦）、国立大学法人岡山大学大学院医歯薬学総合研究科非常勤講師（嶋根卓也）、東京薬科大学薬学部非常勤講師（嶋根卓也）、津田塾大学非常勤講師（嶋根卓也）、昭和大学医学部薬理学兼任講師（嶋根卓也）

- ・その他

日本アルコール・薬物医学会雑誌編集委員会（査読委員）（近藤あゆみ、嶋根卓也）

#### (3) 精研の研修の主催と協力

#### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・政府委員会

厚生労働省医薬・生活衛生局「薬事・食品衛生審議会」臨時委員（松本俊彦）、厚生労働省医薬・生活衛生局「依存性薬物検討会」構成員（松本俊彦）、文部科学省生涯学習政策局「青少年を取り巻く有害環境対策の推進（依存症予防教育推進事業）」技術審査委員（松本俊彦）、厚生労働省精神・障害保健課「依存症の理解を深めるための普及啓発」に係る企画委員会委員（松本俊彦）、文部科学省初等中等教育局「児童生徒の自殺予防に関する調査研究協力者会議」（松本俊彦）、厚生労働省「依存症対策全国センター」事務局長（NCNP）（嶋根卓也）、厚生労働省「依存症に関する調査研究部会」副会長（嶋根卓也）、厚生労働省「令和 4 年度依存症の理解を深めるための普及啓発事業」企画委員（嶋根卓也）、厚生労働省薬物乱用防止啓発訪問事業有識者検討会委員（嶋根卓也）、厚生労働省「薬事・食品衛生審議会薬事分科会医薬品等安全対策部会安全対策調査会」参考人（嶋根卓也）、厚生労働省医薬・生活衛生局総務課「医薬品の販売制度に関する検討会」参考人（嶋根卓也）、法務省矯正研修所「効果検証業務（大麻使用歴を有する在院者に対する指導教材等の作成）」アドバイザー（嶋根卓也）、法務省保護局観察課「薬物再乱用防止プログラムに関するワーキンググループ」アドバイザー（嶋根卓也）、法務省矯正研修所「効果検証業務（薬物依存離脱指導の充実化に係わる助言）」（嶋根卓也）

- ・その他公的委員会

東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦）、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（松本俊彦）、東京都立中部総合精神保健福祉センター「薬物乱用防止プログラム（OPEN）改訂監修者（嶋根卓也）、福岡県「少年用大麻再乱用防止プログラムに係わる監査及び補正業務」（嶋根卓也）、福岡県「大麻乱用防止教育用動画に係わる監修等業務」（嶋根卓也）、埼玉県地方

薬事審議会薬物指定審査委員会（富山健一）

・研究成果の行政貢献

令和4年度第3回薬事・食品衛生審議会薬事分科会医薬品等安全対策部会における審議を踏まえ「医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律施行規則第十五条の二の規定に基づき濫用等のおそれのあるものとして厚生労働大臣が指定する医薬品の一部を改正する件」により改正し、濫用等のおそれのある医薬品の範囲が見直された（嶋根卓也）

(5) センター内における臨床的活動

毎週月・木曜日に薬物依存症外来での診療を行うとともに、デイケアにて薬物再乱用防止のための集団認知行動療法プログラムを実施している。（松本俊彦、近藤あゆみ、嶋根卓也）

#### IV. 研究業績

##### A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Masataka Y, Sugiyama T, Akahoshi Y, Matsumoto T : Risk factors for cannabis use disorders and cannabis psychosis in Japan: Second report of a survey on cannabis-related health problems among community cannabis users using social networking services. *Neuropsychopharmacology Rep.* 2022;00:1–10.
- 2) Takahashi M, Yamaki M, Kondo A, Hattori M, Kobayashi M, Shimane T : Prevalence of adverse childhood experiences and their association with suicidal ideation and non-suicidal self-injury among incarcerated methamphetamine users in Japan. *Child Abuse Negl.* 2022 Sep;131:105763. doi: 10.1016/j.chabu.2022.
- 3) 山田理沙、嶋根卓也、近藤あゆみ、米澤雅子、松本俊彦：薬物依存症回復支援施設の利用者を対象とした物質使用とHIV感染リスクの高い性行動に関する研究。日本エイズ学会誌 24 (3) : 89-98, 2022.
- 4) 宇佐美貴士、熊倉陽介、高野 歩、金澤由佳、松本俊彦：薬物犯罪による保護観察対象者の1年後転帰に関する検討：保護観察から地域精神保健的支援への架け橋「Voice Bridges Project」。日本アルコール・薬物医学会雑誌 57(3) : 143-157, 2022.
- 5) 今村扶美、竹林由武、伊藤正哉、出村綾子、松本俊彦、平林直次、鬼頭伸輔、堀越 勝：医療機関における公認心理師の雇用と業務の実態—心理支援の拡充と制度の見直しに向けて—。精神神経学雑誌 125(2) : 116-128, 2023.
- 6) 服部真人、小林美智子、高橋 哲、高岸百合子、大宮宗一郎、谷 真如、嶋根卓也：覚醒剤使用の引き金に関する実証的研究—薬物依存と他のアディクションの併存に焦点を当てて—。日本アルコール・薬物医学会誌 57(3):127-142 2022.
- 7) 新田慎一郎、嶋根卓也、猪浦智史、近藤あゆみ、米澤雅子、松本俊彦：覚醒剤使用に問題を抱えるゲイ・バイセクシュアル男性の特徴—ヘテロセクシュアル男性との比較から—。日本アルコール・薬物医学会雑誌 57(5): 182-192, 2022.
- 8) 引土絵未、喜多村真紀、新田慎一郎、菊池美名子、岡崎重人、加藤 隆、山本 大、山崎明義、嶋根卓也：依存症回復支援施設における治療共同体 エンカウンター・グループの意義に関する質的考察。日本アルコール・薬物医学会誌, 57(6), 2022.12. (in press)
- 9) 菊池美名子、近藤あゆみ、松村美穂、森 美緒、大嶋栄子：女性薬物使用者のニーズとジェンダー—薬物依存症専門外来利用者及び更生保護施設入所者の語りから。障害学研究 18 : 169-196, 2023.

(2) 総説

- 1) 沖田恭治、松本俊彦：大麻・覚醒剤使用障害。精神医学 64(5)増大号 : 784-789, 2022.

- 2) 松本俊彦：専門家として情報発信すること. 精神療法 増刊第9号 : 194-201, 2022.
- 3) 松本俊彦, 船田大輔, 沖田恭治:物質依存症のゴール設定をどう考えるか. 臨床精神医学 51(6) : 635-643, 2022.
- 4) 松本俊彦：市販薬のオーバードーズについて. 健康教室 860 : 94-96, 2022.
- 5) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか～思春期の薬物乱用～. 愛媛県小児科医会雑誌 3(1) : 38-43, 2022.
- 6) 沖田恭治, 松本俊彦:精神作用物質使用に伴う精神障害に対する薬物療法の適応と注意すべき点. 臨床精神薬理 25(8) : 871-878, 2022.
- 7) 松本俊彦：薬物依存症診療におけるたとえ話－「背水の陣」「保険」「心の松葉杖」－. 精神科治療学 37(7) : 769-771, 2022.
- 8) 井出聰一郎, 伊佐 正, 西谷陽子, 南 雅文, 村井俊哉, 高橋英彦, 宮田久嗣, 久我弘典, 松本俊彦, 中込和幸, 池田和隆：わが国におけるアディクション研究の方向性. 精神科 41(2) : 279-285, 2022.
- 9) 松本俊彦：薬物依存症における法と医療. 精神科 41(2) : 272-278, 2022.
- 10) 松本俊彦：コロナ禍がもたらした依存症回復支援への影響－依存症のケア. 精神療法 48(4) : 496-501, 2022.
- 11) 松本俊彦：安克昌先生によるアディクション臨床への影響. HUMAN MIND SPECIAL ISSUE 2022 こころの科学 総合失調症のひろば編集部編 安克昌の臨床作法 : 21-27, 2022.
- 12) 松本俊彦：薬物使用症. 日本医師会雑誌 151 特別号(2)生涯教育シリーズ 103 : 227-228, 2022.
- 13) 松本俊彦：「大麻は薬物じゃない。植物だ」－周囲の説得により渋々受診した大麻使用障害患者－. 精神科治療学 37巻増刊号, 186-190, 2022.
- 14) 松本俊彦：市販薬乱用について. 少年写真新聞 高校保健ニュース 768 : 1, 2022.
- 15) 松本俊彦：10代の市販薬乱用・オーバードーズ. チャイルドヘルス 25(11) : 1, 2022.
- 16) 林 直樹, 松本俊彦, 黒田章史, 奥野栄子：参考／BPD 当事者の家族の状況についての調査報告（要約）. 精神療法 48(6) : 68-70, 2022.
- 17) 水野雅文, 松本俊彦：一般社団法人日本社会精神医学会 見解 相模原市障害者施設殺傷事件を再考する. 日本社会精神医学会雑誌 31(4) : 323-327, 2022.
- 18) 松本俊彦：「シャブ漬け生娘の何が問題なのか. 心の社会 53(4) : 44-48, 2022.
- 19) 松本俊彦：子どもの自傷・自殺－基本的な考え方と近年の動向. 小児科 63(12) : 1347-1354, 2022.
- 20) 松本俊彦：自殺企図. 小児疾患診療のための病態生理 3 改訂第6版 小児内科 54巻増刊号 : 786-790, 2022.
- 21) 松本俊彦：精神領域に”神話”がうまれやすい要因は何だろうか?. 精神看護 26(1) 6-8, 2022.
- 22) 松本俊彦：「ダメ、ゼッタイ」を覆した エッセイ「誰がために医師はいる」. 精神看護 26(1) : 9-13, 2022.
- 23) 松本俊彦：人はなぜ依存症になるのか?. 季刊 刑事弁護 113 : 62-67, 2023.
- 24) 松本俊彦：日本社会精神医学会相模原事件特別委員会の問題意識と活動. 精神神経学雑誌 125(1) : 56-62, 2023.
- 25) 松本俊彦：依存症とは何か 身体依存と精神依存. BRAIN and NERVE 75(3) : 275-278, 2023.
- 26) 松本俊彦：自傷・オーバードーズ・自殺. 若者たちの生きづらさ 不確実なこの社会でいかに伴走するか, 131-141, 2023.
- 27) 嶋根卓也：市販薬乱用とセルフメディケーション. 精神科治療学 37(7) : 793-797, 2022.
- 28) 嶋根卓也：コロナ禍における薬物使用の動向：薬物使用に関する全国住民調査 2021 より. Newsletter KNOW (麻薬・覚せい剤乱用防止センター) 第 107 号 : 2-6, 2022.
- 29) 嶋根卓也：OTC 薬乱用の現状と対応－最も身近な医薬品の意外な落とし穴. 日本医事新報 No.5133 : 18-34, 2022.

- 30) 嶋根卓也 : 「助けて」という気持ちをクスリと一緒に飲み込んでしまう. こころの科学 226 : 71-75, 2022.
- 31) 嶋根卓也 : 若年者における薬物乱用の理解と課題. ダメ、ゼッタイで終わらせない薬物乱用防止教育. 令和4年度全国学校保健・安全研究大会 課題別研究協議会 : 114-117, 2022.

## (3) 著書

- 1) 松本俊彦 : 誰がために医師はいる クスリとヒトの現代論 (韓国語版). みすず書房, 東京, pp1-232, 2023.
- 2) 松本俊彦 : 第7章 アディクションと精神保健. 精神看護学 精神保健 第5版 半澤節子 大田保之 藤田長太郎 編著, 医歯薬出版, 東京, pp164-185, 2023.
- 3) 松本俊彦 : 薬物乱用. 小児科診療ガイドラインー最新の診療指針ー, 総合医学社, 東京, pp746-752, 2023.
- 4) 松本俊彦, 今村扶美 : 物質使用障害. 臨床心理学スタンダードテキスト, 金剛出版, 東京, pp883-893, 2023.
- 5) 松本俊彦 : 2覚醒剤. Jmed84 あなたも名医! 日常生活に潜む急性中毒24の対処法, 日本医事新報社, 東京, pp148-153, 2023.
- 6) 國分功一朗, 松本俊彦 : 対談 孤独・孤立と人のつながりを問う. 孤独と孤立 自分らしさと人のつながり, 日本看護協会出版会, 東京, pp3-16, 2023.
- 7) 松本俊彦 : コロナ禍における「孤立の病」. 孤独と孤立 自分らしさと人とのつながり, 日本看護協会出版会, 東京, pp37-52, 2023.
- 8) 松本俊彦 : ワークブックを使った認知行動療法的アプローチの実際. 内科医・かかりつけ医のためのアルコール使用障害治療ハンドブック, 東京, pp229-234, 2023.
- 9) 監修 松本俊彦 : 死にたいと言ってください. 漫画 アクション, 東京, pp13-68, 2022.
- 10) 監修 松本俊彦 : ニュートン式超図解最強にわかる!! 精神の病気 依存症編. NEWTON PRESS, 東京, pp1-125, 2022.
- 11) 松本俊彦 [監修], 高野歩, 古藤吾郎, 新田慎一郎 [監訳] : パット・デニング, ジーニー・リトル [著] ハームリダクション実践ガイド. 金剛出版, 東京, pp1-223, 2022.
- 12) 松本俊彦 編 : こころの科学 特別企画 「助けて」が言えない子ども編. 日本評論社, 東京, pp1-136, 2022.
- 13) 監修 松本俊彦 著者 中原ろく : 死にたいと言ってください. 双葉社, 東京, pp1-181, 2022.
- 14) 監修 松本俊彦 : 高校保健ニュース. 少年写真新聞社, 東京, pp1, 2022.
- 15) 著者 三森みさ 監修 今成知美, 松本俊彦 : 母のお酒をやめさせたい. KADOKAWA, 東京, pp1-314, 2022.
- 16) 松本俊彦 編 : 孤独と孤立 自分らしさと人とのつながり. 日本看護協会出版会, 東京, pp1-63, 2023.
- 17) 監修 垣渕洋一, 松本俊彦, 栗山健一, 白川美也子, 堀内史枝, 張 賢徳 : 依存症 トラウマ 発達障害 うつ 「眠り」とのただならぬ関係. アスク・ヒューマン・ケア, 東京, pp1-77, 2023.
- 18) 嶋根卓也 : 20.物質使用障害. 医療者のための LGBTQ 講座 (総編集:吉田絵理子), 南山堂, 東京, 2022.
- 19) 新田慎一郎 : 生まれてこなければよかったですと思っているあなたへ:セクシュアルマイノリティの子どもへの“手紙”-「助けて」が言えない子ども編;「助けて」が言えないあなたへ:当事者へのメッセージ. こころの科学, 日本評論社, 東京, pp88-91, 2022.

## (4) 研究報告書

- 1) 松本俊彦, 宇佐美貴士, 沖田恭治, 楳野絵里子, 山本泰輔 : 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 令和4年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レ

- ギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」総括・分担研究報告書. 2023.
- 2) 嶋根卓也, 猪浦智史, 邱 冬梅, 堤 史織, 山口裕貴, 北垣 邦彦, 小出彰宏：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2022年）. 令和4年度厚生労働行政推進調査事業費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究（研究代表者：嶋根卓也）」総括・分担研究報告書. 2023.
  - 3) 嶋根卓也, 中島美鈴, 市村清隆, 児玉 臨, 桁田昂志, 野村由紀子, 加々美誠, 森 治美：大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、危険ドラッグの乱用実態に関する研究. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究（研究代表者：船田正彦）」分担研究報告書. 2023.

#### (5) 翻訳

- 1) 原著者 アン・ハリントン 監訳 松本俊彦 訳 沖田恭治：Mind Fixers 精神疾患の原因はどこにあるのか?. 金剛出版, 東京, 2022.
- 2) 松本俊彦, 高野 歩, 古藤吾郎, 新田慎一郎：ハームリダクション実践ガイド：薬物とアルコールのある暮らし, 金剛出版, 東京, 2022. (Patt Denning and Jeannie Little, Over the Influence, Second Edition, The Harm Reduction Guide to Controlling Your Drug and Alcohol Use, Guilford Press, New York, 2017) (監訳)

#### (6) その他

- 1) 松本俊彦：<叱る依存>という現代病への最良の処方箋. Scripta 16(3) : 46-47, 2022.
- 2) 松本俊彦：自傷行為と子どもたち. 高校保健ニュース 751 : 4-5, 2022.
- 3) 松本俊彦：オピオイド漸減に過剰摂取や精神的危機を引き起こす危険性. MMJ 18(2) : 36, 2022.
- 4) 松本俊彦, 渡邊洋次郎, 太田順一郎, 熊倉陽介：依存症治療の現在. 精神医療 6 : 10-36, 2022.
- 5) 松本俊彦：精神療法の基礎と展開－「受容～共感～一致」を実践するために 原田誠一著. 心と社会 189 : 107, 2022.
- 6) 仲野 徹, 松本俊彦：誰がために医師はいる〈対談編〉 薬物依存に対する常識的な見方を覆す. 週刊 日本医事新報 5135 : 14-15, 2022.
- 7) 松本俊彦：妻はサバイバー 「底つき体験」は死を招く 精神科医療の無力告発. ジャーナリスト, 2022.
- 8) 松本俊彦：中井久夫と依存症治療. 現代思想 50(15)12月臨時増刊号 : 151-156, 2022.
- 9) 松本俊彦：追悼 中井久夫とレイン. 文藝別冊 増刷新版 中井久夫 精神科医が遺したことばと作法, 14-19, 2022.
- 10) 松本俊彦：「サケビバ！」 キャンペーンにもの申す!. 週刊日本医事新報 5150 : 25, 2023.
- 11) 松本俊彦：終業時の薬物中毒診断. ドクターサロン 37(2) : 15-19, 2023.
- 12) 松本俊彦：健康づくり Q&A 市販薬を多量に飲んで精神的な苦痛から逃れようとする「オーバードーズ」が、特に若者に増えていると聞きます。どんな背景があるのでしょうか。 健康づくり 539 : 22, 2023.
- 13) 松本俊彦：【帯コピー】木曜日のシェフレラ. 秋田書店, 2023.
- 14) 嶋根卓也：クスリ早見帖 2022年版 10号. 株式会社プラメドプラス, 東京, 2022.4.
- 15) 嶋根卓也：薬物使用に関する全国住民調査 2021：広がる大麻問題と医薬品乱用 機関紙“新情報” 110: 23-30, 東京, 2022.11.

- 16) 北垣邦彦, 嶋根卓也, 原田 進, 鈴木貴晃, 松下妙子: 保護者向け薬物乱用防止パンフレット「NO! DRUG うちの子に限って…本当に大丈夫ですか…?」一般社団法人全国高等学校 PTA 連合会, 2023.2.
- 17) 新田慎一郎: インターセクショナリティ: 主題と変奏—臨床便り, 臨床心理学, 金剛出版, 東京, 2022.

#### B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Shimane T, Funada M, Tomiyama K, Matsumoto T: Increase in Abuse of Over-the-counter Drugs Including Opioids Such as Dihydrocodeine in Japan. The 2nd International Forum on Drug Policy, Shanghai, China (Online), 2022. 8.4.(Best Paper Award)
- 2) Shimane T: Current Situation and Response to Over-the-Counter Drug Abuse in Japan. International symposium on prevention and counseling of drug abuse for juveniles. National Chung Cheng University, Taiwan (Online), 2022.11.2.
- 3) Shimane T: Understanding and support for marijuana using youth in Japan. 2022 Drug Control Cross-network Innovation as Scientific and Technological Intelligence Drug Prevention Achievements Publication and International Symposium, Taiwan (Online), 2022.11.4.
- 4) 松本俊彦: 【シンポジウム】「逮捕される薬物」と「逮捕されない薬物」～規制強化の功罪. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 5) 松本俊彦: 【シンポジウム】依存症治療・回復支援におけるオンライン社会資源. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡 (オンデマンド配信), 2022.6.17.
- 6) 松本俊彦: 【教育講演】わが国における薬物乱用・依存の最近の動向. 第 44 回日本中毒学会総会・学術集会, (オンライン), 2022.7.15.
- 7) 松本俊彦: 【教育講演】子どもの自傷・ODに対する理解と対応. 第 35 回日本小児救急医学会学術集会, 東京, 2022.7.31.
- 8) 松本俊彦: 【シンポジウム】 医療用麻薬依存患者の多彩な対応法を知る—ペインクリニックシャン・精神科医・薬剤師のコラボから見える依存患者の本質—】人はなぜ依存症になるのか?, 日本ペインクリニック学会第 56 回学術集会, (オンライン), 2022.7.8.
- 9) 松本俊彦: 【特別講演】思春期の自殺・自殺予防の最前線-. 日本カウンセリング学会第 54 回 Web 大会, (オンライン), 2022.8.6.
- 10) 松本俊彦: 【特別講演】自傷・自殺, 市販薬乱用の理解と援助. 日本学校心理学会第 24 回オンライン大会, (オンデマンド配信), 2022.8.12~2022.8.23.
- 11) 松本俊彦: 【市民公開講座】薬物乱用. 日本病院薬剤師会関東ブロック第 52 回学術大会, 神奈川, 2022.8.21.
- 12) 松本俊彦: 【対談】 T1 アディクションケースにおける, トラウマからの回復支援—心理職に求められるもの】依存症専門医療機関における実践から. 2022 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.9.
- 13) 松本俊彦: 【スポンサードシンポジウム】わが国における薬物関連精神疾患の現状. 2022 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.9.
- 14) 松本俊彦: 【シンポジウム】医療現場における医療用麻薬不適切使用の実態. 2022 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.10.
- 15) 松本俊彦: 【シンポジウム】物質関連障害. 第 30 回日本精神科救急学会学術総会, 埼玉, 2022.9.30.
- 16) 松本俊彦: 【シンポジウム】society5.0 からの孤立を防ぐ為の HIV 陽性者, 薬物依存患者らへ対応～生きづらさに寄り添う薬剤師の役割～. 第 32 回日本医療薬学会年会, (動画), 2022.9.25.

- 17) 松本俊彦:【シンポジウム】あなたの担当患者、飲酒量多すぎませんか？増加するアルコール関連疾患に対して薬剤師ができることを考える. 第32回日本医療薬学会年会, (動画), 2022.9.25.
- 18) 松本俊彦:【シンポジウム】物質関連障害. 第30回日本精神科救急学会学術総会, 埼玉, 2022.9.30.
- 19) 松本俊彦:【専門医共通・救急科領域講習】薬物乱用を防ぐには. 第50回日本救急医学会総会・学術集会, (オンデマンド), 2022.10.21.
- 20) 松本俊彦:【教育講演】人はなぜ依存症になるのか～物質依存症の理解と援助. BPCNPNPPP4 学会合同年会, (オンデマンド), 2022.11.5.
- 21) 松本俊彦:【シンポジウム】人はなぜ依存症になるのか. BPCNPNPPP4 学会合同年会, 東京, 2022.11.5.
- 22) 松本俊彦:【シンポジウム】トラウマと依存症. 関西アルコール関連問題学会第28回兵庫大会, (オンライン), 2022.11.27.
- 23) 松本俊彦:【シンポジウム】国内外におけるカンナビノイド規制の現状. 第96回日本薬理学会年会 第43回日本臨床薬理学会学術総会 同時期開催, 神奈川, 2022.12.2.
- 24) 松本俊彦:【教育講演】自傷と市販薬乱用の理解と援助. 日本子ども虐待防止学会第28回学術集会ふくおか大会, 福岡, 2022.12.11.
- 25) 松本俊彦:【特別講演3】大学生における薬物乱用・依存. 全国大学メンタルヘルス学会第44回総会, 東京, 2022.12.23.
- 26) 松本俊彦:【シンポジウム】ダイバーシティ, ジェンダーフリー社会におけるメンタルヘルス. 第41回日本社会精神医学会, 兵庫, 2023.3.16.
- 27) 松本俊彦:【シンポジウム】精神科医療における情報発信の在り方と課題～いかに正確であり, 社会的啓発につなげるのか～. 第41回日本社会精神医学会, 兵庫, 2023.3.16.
- 28) 松本俊彦:【シンポジウム】近年における自傷行為の実態と新しい支援の動き. 第41回日本社会精神医学会, 兵庫, 2023.3.16.
- 29) 嶋根卓也:【シンポジウム】法務総合研究所との共同研究による支援者向けの小冊子の作成：覚醒剤事犯者の理解とサポート2021. 覚醒剤事犯者の理解とサポート(3). 2022年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城 (オンライン), 2022.9.9.
- 30) 嶋根卓也:【シンポジウム】高校生における大麻使用状況と大麻使用少年の心理社会的特徴：薬物使用と生活に関する全国高校生調査2018より. 大麻使用少年の理解とサポート(1). 2022年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城 (オンライン), 2022.9.10.
- 31) 嶋根卓也:【シンポジウム15】覚醒剤使用者における危険な性行動：覚醒剤事犯者を対象とする全国調査より. 物質使用と性感染症・性行動・セクシュアリティ(1). 2022年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城 (オンライン), 2022.9.10.
- 32) 嶋根卓也:【基調講演】市販薬の乱用・依存の現状と対策. 第6回日本臨床・分析中毒学会学術集会, 神奈川 (オンライン), 2023.3.11.
- 33) 近藤あゆみ:【シンポジウム】『物質使用障害の支援』家族支援の意義と方法—家族の人生を取り戻し, 新たな家族関係の構築を目指す—. 第11回日本精神科医学会学術大会, 静岡, 2022.10.18.
- 34) 新田慎一郎 :【シンポジウム】物質使用と性感染症・性行動・セクシュアリティ(1). 2022年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.10.

## (2) 一般演題

- 1) Ayumi Takano, Takashi Usami, Yuka Kanazawa, Yousuke Kumakura, Toshihiko Matsumoto : The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 84th Annual Scientific Meeting Risk and preventive factors associated with illicit drug use among male methamphetamine users on probation in Japanese criminal justice system: a one-year prospective cohort study, Poster session 2022.6.12 (2022.6.11-15).
- 2) 金澤由佳, 熊倉陽介, 宇佐美貴士, 堤 史織, 高野 歩, 松本俊彦:新型コロナウィルス感染症(COVI

D-19)の流行に伴う VBP および薬物依存症地域支援への影響に関するアンケート調査 vol.2.  
第 18 回日本司法精神医学会、オンライン、2022.7.9-10.

- 3) 正高佑志、杉山岳史、赤星栄志、松本俊彦：SNS を活用した市中大麻使用者における大麻関連健康被害に関する実態調査. 2022 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.9.
- 4) 引土絵未、嶋根卓也、小高真美、秋元恵一郎、大吉 努、加藤 隆、栗坪千明、山村せつ、吉野美樹、松本俊彦：薬物依存症者の就労支援のあり方に関する研究：インタビュー調査から. 2022 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.9.
- 5) 中島美鈴、児玉 臨、森 治美、嶋根卓也：身近な人のコミュニケーションスキルに焦点づけた少年用大麻再乱用防止プログラムの作成(1). 第 22 回認知療法・認知行動療法学会, 東京, 2022.11.12.

### (3) 研究報告会

- 1) 松本俊彦：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査(2022 年)。「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」令和 4 年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)研究成果報告会(オンライン), 東京, 2023.3.24.
- 2) 松本俊彦：保護観察の対象となった薬物依存症者に対する回復支援に関する研究. 厚生労働省依存症に関する調査研究事業研究成果報告会, オンライン, 2023.3.24.
- 3) 嶋根卓也：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2022 年)。「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」令和 4 年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)研究成果報告会(オンライン), 東京, 2023.3.24.

### C. 講演

- 1) 松本俊彦：自傷行為、多量服薬について. BPD 家族会主催 自分と他の人たちを傷つけてしまう人たちのためのファミリーサポートグループ講演会, 東京, 2022.5.22.
- 2) 松本俊彦：若者の自傷行為と自殺対策～若者へのメッセージ. 横浜市こころの健康相談センター主催 自殺対策出前講座, 神奈川, 2022.6.1.
- 3) 松本俊彦：Addiction の反対は Connection～薬物依存症は薬物だけの問題ではない～. 一般社団法人日本病院薬剤師会主催 令和 4 年度精神科薬物療法認定薬剤師講習会, 東京, 2022.6.5.
- 4) 松本俊彦：薬物依存症臨床におけるハームリダクション・アプローチ. 住友ファーマ株式会社主催 精神科フォーラム in 京都, 京都, 2022.6.25.
- 5) 松本俊彦：薬物依存症臨床におけるハームリダクション・アプローチ. 住友ファーマ株式会社主催 第 46 回多摩精神科臨床研究会, 東京, 2022.6.29.
- 6) 松本俊彦：少年犯罪と依存症について～神経発達症の診断と治療も含めて～. 武田薬品工業株式会社主催 第 1 回 Life Course Management Meeting, 東京, 2022.6.30.
- 7) 松本俊彦：最近の青年たちにみる自傷・依存行動の特徴と対応. 公益財団法人明治安田こころの健康財団主催 現代の思春期青年期を考える, オンライン, 2022.7.2～2022.7.6.
- 8) 松本俊彦：睡眠薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 神奈川県精神神経科診療所協会/エーザイ株式会社共済 不眠症診療 Web セミナー in 神奈川, Web, 2022.7.5.
- 9) 松本俊彦：最近の薬物関連精神障害の動向と課題. 大塚製薬株式会社主催 アディクションからの回復を考える会, (オンライン), 2022.7.9.
- 10) 松本俊彦：自己紹介・支配される関係性/自分を傷つける関係性について. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 講演会, (オンライン), 2022.7.12.
- 11) 松本俊彦：アルコールとうつ、自殺～「死のトライアングル」を防ぐために. 持田製薬株式会社主催 新都心メンタルネットワーク研究会, Web, 2022.7.22.

- 12) 松本俊彦 : アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～. 大塚製薬株式会社  
主催 精神科学術講演会, 東京, 2022.7.23.
- 13) 松本俊彦 : 依存症と ADHD. 武田薬品工業株式会社主催 ADHD Web カンファレンス, (オンライン), 2022.7.27.
- 14) 松本俊彦 : 若者の自傷. 福岡県精神保健福祉センター主催 令和 4 年度精神保健福祉講座, オンライン, 2022.8.3.
- 15) 松本俊彦 : 子どもの自傷と自殺の関係. 京都府総合教育センター主催 令和 4 年度今を生きる子どもたちのこころ講座～自分を傷つけてしまう子どもたち・自傷, 自殺を考える～, (オンライン), 2022.8.17.
- 16) 松本俊彦 : アルコールとこころの健康. 西日本鉄道株式会社主催 西鉄グループ飲酒運転撲滅大会, (オンライン), 2022.8.24.
- 17) 松本俊彦 : 依存症当事者・家族の回復について. NPO 法人横浜ひまわり家族会主催 第 6 回薬物依存症者と家族フォーラム, 神奈川, 2022.8.28.
- 18) 松本俊彦 : 助けてが言えない～SOS を出さない人に支援者は何ができるか～. 特定非営利活動法人新潟県ゲートキーパー協会, 新潟, 2022.9.4.
- 19) 渋井哲也, 松本俊彦, 二村ヒトシ, 姫野桂 : 渋井哲也「ルポ自殺生きづらさの先にあるのか」発売記念トークイベント, 東京, 2022.9.6.
- 20) 松本俊彦 : もしも「死にたい」と言われたら～心理学的剖検の経験から～. 社会福祉法人熊本いのちの電話主催 いのちの電話シンポジウム, 熊本, 2022.9.11.
- 21) 松本俊彦 : 薬物依存症治療におけるハームリダクションアプローチ. 愛知県精神科病院協会 愛知県精神科医会 田辺三菱製薬株式会社 吉富薬品株式会社 ヤンセンファーマ株式会社 共催 愛知県精神科学術講演会, (オンライン), 2022.9.15.
- 22) 松本俊彦 : 向精神薬乱用・依存と自殺予防. 新潟県病院薬剤師会 田辺三菱製薬株式会社 吉富薬品株式会社 共催 第 27 回新潟県薬剤師のための精神科ハイブリッドセミナー, オンライン, 2022.9.18.
- 23) 松本俊彦 : 思春期の市販薬乱用. 大分県高等学校教育研究会主催 令和 4 年度第 55 回大分県高等学校教育研究会養護教諭部会研究大会, 動画, 2022.9.18.
- 24) 松本俊彦 : 薬物再乱用防止プログラムと専門的援助の運用の在り方について. 法務省保護局主催 薬物処遇のあり方に関する検討会, 東京, 2022.9.20.
- 25) 松本俊彦 : 睡眠薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること. 東村山医師会 北多摩医師会 エーザイ株式会社 共催 不眠症診断勉強会, (オンライン), 2022.9.22.
- 26) 松本俊彦 : アディクションと虐待, 家族の病理. 島田療育センター主催 第 17 回島田セミナー, (オンライン), 2022.9.24.
- 27) 松本俊彦 : 薬物依存症の地域支援について. 東京更生保護施設連盟主催 補導研究会, 東京, 2022.9.30.
- 28) 松本俊彦 : 自傷・自殺の理解と援助. 京都府家庭支援総合センター主催 令和 4 年度京都府心理判定員会議, (オンライン), 2022.10.11.
- 29) 松本俊彦 : 依存症とうつ, 自殺. 一般社団法人創精会松山記念病院主催 依存症治療拠点機関における講演会, (オンライン), 2022.10.14.
- 30) 松本俊彦 : 思春期と自傷・自殺. 一般社団法人日本家族計画協会主催 思春期保健セミナーコース II (e ラーニング). 東京, 2022.10.25.
- 31) 松本俊彦 : もしも子ども・若者の自傷に気づいたら～自傷行為の対応と理解～. 公益社団法人京都市ユースサービス協会主催 令和 4 年度講演会, (オンライン), 2022.10.28.
- 32) 松本俊彦 : 「ダメ。ゼッタイ。」ではダメ. 千葉県教育庁主催 令和 4 年度学校保健講習会 (学校薬剤師) 及び令和 4 年度薬物乱用防止教室講習会, (オンライン), 2022.10.30.
- 33) 松本俊彦 : 新型コロナウィルス (COVID-19) の世界的流行後のわが国における自殺の状況・動

向をいくつかのデータおよび疫学的アプローチによって把握し、その背景要因を探索する研究の成果。大学共同利用機関法人情報・システム研究機構統計数理研究所主催 共同研究集会、東京、2022.11.4。

- 34) 松本俊彦：様々な依存、死にたい気持ちを持つ方々との関わりの中で思うコト。一般社団法人もちもちびと主催 いろんな依存と死にたい気持ち講演会、(オンライン), 2022.11.4.
- 35) 松本俊彦：世界一やさしい依存症入門。九州思春期研究会主催 九州思春期研究会第19回研究大会、(オンライン), 2022.11.5.
- 36) 松本俊彦：依存症をもつ親と暮らす子ども。特定非営利活動法人東京ソテリア主催 講演会、東京, 2022.11.6.
- 37) 松本俊彦：自傷行為とその対応について。文部科学省初等中等教育局主催 児童生徒の自殺予防に関する普及啓発協議会、愛知, 2022.11.16.
- 38) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～。大塚製薬株式会社主催 広島県病院薬剤師会精神科病院業務検討委員会学術講演会、(オンライン), 2022.11.18.
- 39) 松本俊彦：アルコールとうつ・自殺～死のトライアングルを避けるために～。大塚製薬株式会社主催 Otsuka CNS Conference, (オンライン), 2022.11.19.
- 40) 松本俊彦：自傷行為と市販薬 OD の理解と援助。ヤンセンファーマ株式会社主催 Psychiatric Seminar in 三河、(オンライン), 2022.11.29.
- 41) 松本俊彦：子どものリスクや OD に気づいたら。石川県こころの健康センター主催 令和4年度第5回子どものこころの問題に携わる関係者育成セミナー、石川, 2022.12.14.
- 42) 松本俊彦：知っていますか？身近にある薬物依存。世田谷区保健センター主催 令和4年度普及啓発事業 依存症セミナー、東京, 2022.12.16.
- 43) 松本俊彦：薬物依存症をもつ人を地域で支える。東京大学医学部附属病院精神神経科主催 東京大学職域・地域架橋型価値に基づく支援者育成Cコース、オンライン, 2022.12.18.
- 44) 松本俊彦：薬物依存症患者に対してふつうの医療者にできること～医薬品の乱用・依存を中心～。日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院主催 令和4年度八事がん診療セミナー、(オンライン), 2022.12.21.
- 45) 松本俊彦：子供の自傷、自殺念慮及び自殺企図、オーバードーズに気づいたときの対応。東京家政大学人文学部心理カウンセリング学科主催 養護教諭ゼミナールI・IIオンライン座談会、(オンライン), 2023.1.10.
- 46) 松本俊彦：子供のSOSに気づいて寄り添う～自傷、リストカットをすることもたち～。能美市健康福祉部子育て支援課主催 令和4年度児童虐待防止啓発講演会・自殺防止対策講演会、(オンライン), 2023.1.25.
- 47) 松本俊彦：依存症の回復の為に必要なこと。大阪府こころの健康総合センター主催 令和4年度OAC交流イベント つながる支援の輪～回復を信じて関わろう～。(オンライン), 2023.2.1.
- 48) 松本俊彦：生きづらさを抱える子どもたち。特定非営利活動法人いちごの会主催 講演会、大阪, 2023.2.5.
- 49) 松本俊彦：睡眠薬乱用・依存を防ぐために臨床医にできること。エーザイ株式会社主催 不眠症治療セミナー～これから睡眠薬使用を考える～、(オンライン), 2023.2.9.
- 50) 松本俊彦：SMARPPについて。成城大学治療的司法研究センター主催 懇談会、(オンライン), 2023.2.16.
- 51) 松本俊彦：思春期・青年期の声にできないSOS～となりにいる私たちができること～。鎌倉市障害福祉課主催 令和4年度精神保健福祉講演会、オンライン, 2023.2.19.
- 52) 松本俊彦：薬物依存のある保護観察対象者に対する関係機関との連携のあり方。東京保護観察所主催 令和4年度東京都薬物再乱用防止対策支援連絡協議会、(オンライン), 2023.2.21.
- 53) 松本俊彦：自分を傷つけてしまう人へのガイド。明治大学学生相談室主催 学生相談室講演会、オンライン, 2023.2.21.

- 54) 松本俊彦: コロナ禍での若者の自殺や薬物依存症について開業医が知っておくべきこと. 東京保険医協会主催 中央講習会, 東京, 2023.2.22.
- 55) 松本俊彦: 親が精神疾患(依存症を含む)をもつこどもやヤング・ケアラーのこどもたちの受け入れについて. 特定非営利活動法人東京ソテリア主催 講演会, (オンライン), 2023.3.1.
- 56) 松本俊彦: ギャンブル等依存症などの行動嗜癖について. 長崎大学病院主催 令和4年度長崎県ギャンブル等依存症診療ネットワーク構築推進事業講演会, 長崎, 2023.3.3.
- 57) 松本俊彦: 自殺予防のために医療者にできること. 世田谷保健所主催 令和4年度命をつなぐ多職種連携講座, 東京, 2023.3.7.
- 58) 松本俊彦: みんなで考えよう依存症の事. 厚生労働省主催 依存症の理解を深めるためのトーク&音楽ライブイベント, 東京, 2023.3.8.
- 59) 松本俊彦: 「妻はサバイバー」の記者, 精神科医・松本俊彦さんと語る. 朝日新聞大阪本社ネットワーク報道本部主催 記者サロン, 東京, 2023.3.21.
- 60) 松本俊彦: 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査(2022年). 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会, (オンライン), 2023.3.24.
- 61) 松本俊彦: 保護観察の対象となった薬物依存症者に対する回復支援に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部主催 合同報告会, オンライン, 2023.3.24.
- 62) 松本俊彦: コロナ禍における自傷・自殺企図その傾向と対応. 住友ファーマ株式会社主催 regional Liaison Conference in TAMA, 東京, 2023.3.28.
- 63) 松本俊彦: 警察による人権侵害, おとり捜査その後の人生. 日本弁護士連合会主催 人権擁護委員会における勉強会, オンライン, 2023.3.31.松本俊彦: オピオイド治療における諸問題とその対策. 久光製薬株式会社主催 慢性疼痛オンラインパネルディスカッション, (オンライン), 2021.4.16.
- 64) 嶋根卓也: 人はなぜ薬物にハマるのか・薬物依存症の理解と薬剤師による支援. 東京薬科大学薬学部, 東京, 2022.5.16.
- 65) 嶋根卓也: セクシャルマイノリティにおける薬物依存症. 高崎健康福祉大学 健康福祉学部健康福祉学科, 群馬 (オンライン), 2022.6.10.
- 66) 嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために. 横須賀市立衣笠中学校, 神奈川 (オンライン), 2022.6.23.
- 67) 嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために. 横須賀市立大津中学校, 神奈川 (オンライン), 2022.7.5.
- 68) 嶋根卓也: 薬物乱用防止のお話: あなたとあなたの大切な人を守るために. 横須賀市立不入斗中学校, 神奈川 (オンライン), 2022.7.12.
- 69) 嶋根卓也: 人はなぜ薬物を使うのか: 薬物問題を抱えた患者の理解と支援. 国立病院機構仙台医療センター東北HIV診療ネット主催 第5回東北ブロック中核拠点病院等HIVカウンセラーコンference, 宮城 (オンライン), 2022.7.13.
- 70) 嶋根卓也: 日本における薬物依存症の理解と支援. 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科, 岡山 (オンライン), 2022.9.05.
- 71) 嶋根卓也: 「ダメ、ゼッタイ」と言わない薬物乱用防止教育: あなたとあなたの大切な人を守るために. 東京都立世田谷泉高等学校 (事前収録), 東京, 2022.9.28.
- 72) 嶋根卓也: 薬物依存症の理解と支援 ダメ、ゼッタイからの脱却. 日本教育財団 2022年度医療スペシャルゼミ (特別講義), 東京, 2022.9.30.
- 73) 嶋根卓也: 薬物乱用の最近の傾向: 大麻使用, 市販薬乱用を中心に. 国立病院機構久里浜医療センター主催 アルコール関連問題予防研究会, 神奈川 (オンライン), 2022.10.20.
- 74) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない若者たちー市販薬乱用を例にー. 多文化・国際協力の実践(3),

津田塾大学学芸学部多文化・国際協力学科, 東京, 2022.10.31.

- 75) Shimane T: Current Status and Issues of Drug Abuse among Japanese Youth, 日本=タイ二国間学術交流（2022年共同研究及びセミナー）, 東京, 2022.11.1
- 76) 嶋根卓也: 若年者における薬物乱用の理解と課題 ダメ、ゼッタイから脱却した薬物乱用防止教育. 令和4年度全国学校保健・安全研究大会課題別研究協議会, 岩手, 2022.11.11.
- 77) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち・市販薬乱用を例に-. 東京薬科大学薬学部, 東京, 2022.11.14.
- 78) 嶋根卓也: ジョイント講義「依存症」. 昭和大学医学部, 東京, 2023.01.16.
- 79) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち: 大麻と市販薬乱用. 鹿児島県くらし保健福祉部主催令和4年度薬物乱用防止セミナー, 鹿児島, 2023.1.19.
- 80) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用を例に-. 厚生労働省依存症の理解を深めるための普及啓発事業「身近な市販薬・処方薬依存～医療・教育・支援の現場から考える～」, 東京, 2023.01.26.
- 81) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち-市販薬乱用を例に-. ライオンズクラブ国際協会330-B地区主催 薬物乱用防止教育スキルアップセミナー, 神奈川, 2023.2.14.
- 82) 嶋根卓也: リカバリーデザイン「ダルク追っかけ調査 2022」. 栃木ダルク 20周年記念フォーラム, 栃木, 2023.2.18.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 松本俊彦: 日本アルコール・アディクション医学会 理事
- 2) 松本俊彦: 日本臨床カンナビノイド学会 理事
- 3) 松本俊彦: 日本社会精神医学会 理事
- 4) 松本俊彦: 日本精神科救急学会 理事
- 5) 松本俊彦: 日本青年期精神療法学会 理事
- 6) 松本俊彦: 日本司法精神医学会 評議員
- 7) 嶋根卓也: 日本アルコール・アディクション医学会 評議員
- 8) 嶋根卓也: 日本エイズ学会 代議員
- 9) 近藤あゆみ: 日本アルコール・アディクション医学会 理事

##### (3) 座長

- 1) 成瀬暢也, 松本俊彦: 【司会】シンポジウム 46 最近の薬物関連精神障害の傾向と対策～逮捕されない薬物の時代にどう向き合うか. 第118回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 2) 松本俊彦, 植村太郎: 【司会】シンポジウム 61 複雑性 PTSD の治療—臨床現場で役立つ多彩なアプローチ技法の実際ー. 第118回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 3) 山田清文, 松本俊彦: 【座長】シンポジウム 11 医療現場における医療用麻薬不適切使用の実態. 2022年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城, 2022.9.10.
- 4) 松本俊彦: 【座長】シンポジウム 5 近年における自傷行為の実態と新しい支援の動き. 第41回日本社会精神医学会, 兵庫, 2023.3.16.
- 5) 嶋根卓也: 【座長】シンポジウム 10 「覚醒剤事犯者の理解とサポート(3)」. 2022年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城(オンライン), 2022.9.9.
- 6) 嶋根卓也: 【座長】シンポジウム 13 「大麻使用少年の理解とサポート(1)」. 2022年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城(オンライン), 2022.9.10.

- 7) 嶋根卓也 : 【座長】シンポジウム 15「物質使用と性感染症・性行動・セクシュアリティ(1)」. 2022 年度日本アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 宮城 (オンライン), 2022.9.10.
- 8) 新田慎一郎 : 【座長】シンポジウム「物質使用と性感染症・性行動・セクシュアリティ(1)」. 2022年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 2022.9.10.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦 : 日本青年期精神療法学会 編集委員
- 2) 嶋根卓也 : 日本アルコール・アディクション医学会 編集委員

**E. 研修**

(1) 研修企画

- 1) 松本俊彦 : 令和 4 年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修 (薬物), (オンライン), 2022.7.19～2022.7.20.
- 2) 松本俊彦 : 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 35 回薬物依存臨床医師研修際および第 23 回薬物依存臨床看護等研修会, (オンライン), 2022.8.31～2022.9.2.
- 3) 松本俊彦 : 国立精神・神経医療研究センター主催 第 14 回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, (オンライン), 2022.11.8～2022.11.9..
- 4) 松本俊彦 : 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院薬物依存症センター主催 令和 4 年度東京都依存症治療指導者 (薬物依存症) 養成研修, (オンライン), 2023.1.17.～2023.1.18.
- 5) 松本俊彦 : 自傷・自殺のリスク評価と対応. 2022 年度依存症対策全国拠点機関設置運営事業 依存症回復支援職員研修・薬物依存症回復施設職員研修, 東京, 2023.2.28～2023.3.1.

(2) 研修会講師

- 1) 松本俊彦 : 自傷行為と子ども～もしも死にたいと言わいたら. 公益社団法人日本小児科医会主催 子どもの心研修会, 東京, 2022.5.8.
- 2) 松本俊彦 : 故意に自分を傷つける子どもたちを支援するために. 大阪府臨床心理士会 全国家庭裁判所調査官研究協議会大阪地域共催 家庭裁判所調査官とスクールカウンセラーとの合同研修会, (オンライン), 2022.5.27.
- 3) 松本俊彦 : 思春期の自傷行為と依存性. 武藏野市教育委員会主催 武藏野市教育支援センター教育相談員内部研修会, 東京, 2022.6.15.
- 4) 松本俊彦 : 自傷行為の理解と援助について. 神戸市教育委員会主催 令和 4 年度第 2 回生徒指導担当教員等指導法研修会, (オンライン), 2022.8.9.
- 5) 松本俊彦 : 自傷行為の理解と対応. NPO 法人東京シユーレ主催 スタッフ研修, 東京, 2022.8.10.
- 6) 松本俊彦 : 自傷や OD への理解を深める. 一般社団法人 Colabo 主催 若年女性専門支援員養成研修講座, (動画配信), 2022.8.11.
- 7) 松本俊彦 : 自傷行為の理解と援助. 大阪府学校保健会養護教諭部会主催 令和 4 年度大阪府学校保健会養護教諭部会 夏季スキルアップ研修会 I, (オンライン), 2022.8.15.
- 8) 松本俊彦 : SMARPP の理念と意義. 法務省矯正局主催 薬物依存対策研修, 東京, 2022.9.6-7,
- 9) 松本俊彦 : 自殺・事故と MDT 対応. 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 福島県立矢吹病院 医療観察法病棟開棟に伴う研修, (オンライン), 2022.9.14.
- 10) 松本俊彦 : 思春期の自傷と自殺. 世田谷区児童相談所主催 2022 年世田谷区児童相談所企画研修, 東京, 2022.9.16.
- 11) 松本俊彦 : 自傷・自殺念慮の理解と対応. 公益社団法人 日本小児科医会主催 第 12 回日本小児科医会乳幼児学校保健研修会, (オンライン), 2022.9.18.
- 12) 松本俊彦 : 薬物依存症の理解と援助. 医療法人成精会刈谷病院主催 令和 4 年度愛知県依存症医

療研修（薬物依存症），愛知，2022.9.19.

- 13) 松本俊彦：産業保健スタッフが知っておきたい依存症の基礎知識～薬物依存について～. 独立行政法人労働者健康安全機構 埼玉産業保健総合支援センター主催 産業保健に関する専門研修会, オンライン, 2022.9.28.
- 14) 松本俊彦：自傷・自殺の理解と援助. 品川区教育委員会主催 品川区学校支援チーム HEARTS 研修会, 東京, 2022.10.4.
- 15) 松本俊彦：思春期の自傷行為，物質乱用・依存に悩む人の回復と支援. 鹿児島県精神保健福祉センター主催 令和4年度依存症回復支援・自殺対策関係者（若年層支援）研修会, (オンライン), 2022.10.5.
- 16) 松本俊彦：「見える傷」の背景にある「見えない傷」を考える～家族の全体像を描く～. 令和4年度依存症問題研修会, (オンライン), 2022.10.12.
- 17) 松本俊彦：思春期の生きづらさ 依存・自死・自傷. 浄土真宗本願寺派 子ども・若者ご縁づくり推進室主催 第4期思春期・若者支援コーディネーター養成研修会, オンライン, 2022.10.17.
- 18) 松本俊彦：なぜ薬物依存症になってしまうのか. 東京都立中部総合精神保健福祉センター主催 令和4年度依存症支援者研修/地域生活支援研修「薬物依存症」, 東京, 2022.10.21.
- 19) 松本俊彦：コロナ禍におけるメンタルヘルスの問題と自死予防. 鳥取県臨床心理士会主催 令和4年度第1回 WS 研修会, (オンライン), 2022.10.23.
- 20) 松本俊彦：ハームリダクションの理念と可能性. 福井県医師会主催 福井県医師会産業医研修会, オンライン, 2022.11.3.
- 21) 松本俊彦：薬物依存症の理解と支援. 群馬県健康福祉部薬務課 群馬県こころの健康センター共催 令和4年度第1回依存症回復支援者研修会, オンライン, 2022.11.25.
- 22) 松本俊彦：コロナ禍における若者の生きづらさ：自傷とOD. 沖縄県立総合精神保健福祉センター主催 かかりつけ医等心の健康対応力向上研修, (オンライン), 2022.11.25.
- 23) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助. 香川県子ども女性相談センター主催 児童虐待防止相談機能強化事業研修会, (オンライン), 2022.11.27.
- 24) 松本俊彦：自傷・アディクションの理解と援助. 静岡県公認心理師協会主催 研修会, (オンライン), 2022.12.4.
- 25) 松本俊彦：認知行動療法を用いた薬物依存症に対する集団療法の理念と意義. 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 令和4年度依存症に対する集団療法に係る研修, (オンライン), 2022.12.6.
- 26) 松本俊彦：自分を傷つけずにはいられない 自傷行為の理解と援助. 札幌市養護教員会主催 全市研修会, (動画配信), 2022.12.20～2023.1.20.
- 27) 松本俊彦：覚醒剤依存症と医療. 法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第54回研修（通信研修）, (動画配信), 2023.1.4.
- 28) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応. 法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第54回研修（通信研修）, 動画, 2023.1.4.
- 29) 松本俊彦：依存症の医学的理解. 公益社団法人日本医療ソーシャルワーカー協会主催 令和4年度依存症（アルコール・薬物・ギャンブル）治療指導者養成研修, 動画, 2023.1.10～2023.3.4.
- 30) 松本俊彦：アルコールと自殺・自傷. 独立行政法人国立病院機構久里浜医療センター主催 令和4年度アルコール依存症臨床医等研修, 動画, 2023.1.10～2023.2.17.
- 31) 松本俊彦：依存症と生きる. 東京都立多摩総合精神保健福祉センター主催 令和4年度精神保健福祉研修（後期）, (オンライン), 2023.1.11.
- 32) 松本俊彦：依存症 捕まらない薬物の乱用防止のために薬剤師にできること. 石川県病院薬剤師会主催 令和4年度第2回精神科病院委員会研修会, (オンライン), 2023.1.19.
- 33) 松本俊彦：アディクション：依存症者に正しく向き合うため予防、治療、回復を学ぶ. 一般社団法人日本精神科看護協会主催 一般研修会, (オンライン), 2023.1.21.

- 34) 松本俊彦: 薬物依存症者の治療及び支援. 法務総合研究所主催 第57回保護局関係職員高等科研修, オンライン, 2023.1.25.
- 35) 松本俊彦: 医療現場に活かす自殺への対応. 一般社団法人神奈川県臨床心理士会主催 令和4年度医療保険領域研修会, (オンライン), 2023.1.29.
- 36) 松本俊彦: 肥満症やコーチング, 認知行動療法について. 長野県民主医療機関連合会 ノボノルディスクファーマ株式会社共催 第3回長野県民医療ネットワーク糖尿病治療研修会, オンライン, 2023.2.8.
- 37) 松本俊彦: アルコールとうつ, 自殺～「死のトライアングル」を防ぐために～. 一般社団法人筑紫医師会主催 筑紫医師会アルコール依存症対応研修会, 福岡, 2023.2.14.
- 38) 松本俊彦: 子供のメンタルヘルスー自殺についてー. 公益社団法人東京都医師会主催 令和4年度学校保健学校医研修会, 東京, 2023.2.25.
- 39) 松本俊彦: 自殺・自傷の理解と対応. 法務省矯正研修所主催 令和4年度専門研修課程調査鑑別科(特別課程), 東京, 2023.3.7.
- 40) 松本俊彦: 人はなぜ依存症になるのか～その理解と支援の基本. 心の相談員ネットワーク主催 オンライン研修会, (オンライン), 2023.3.14.
- 41) 松本俊彦: アルコールとうつ, 自殺～「死のトライアングル」を防ぐために. 公益社団法人三重県医師会主催 令和4年度飲酒運転ゼロをめざす条例に係る指定医療機関研修, (オンライン), 2023.3.21.
- 42) 松本俊彦: 若者の自殺予防. 公益社団法人東京社会福祉士会主催 自殺予防ソーシャルワーク研修, 東京, 2023.3.26.
- 43) 松本俊彦: 精神科医療の現場で出会う子どもたち. 日本弁護士連合会主催 ライブ実務研修, 東京, 2023.3.29.
- 44) 嶋根卓也: ダメ、ゼッタイから脱却した薬物乱用防止教育 何が有効?何が有効ではない?熊本県教育委員会主催 令和4年度(2022年度)健康教育担当者研修会, 熊本, 2022.6.29.
- 45) 嶋根卓也: 薬物使用と感染症(HIV・肝炎). 令和4年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修(薬物)(オンライン), 東京, 2022.7.19-20.
- 46) 嶋根卓也: 薬物乱用・依存の疫学:一般住民および青少年. 2021年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修(オンライン), 東京, 2022.8.31-9.3.
- 47) 嶋根卓也: 民間回復支援施設の活動と課題. 2021年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修(オンライン), 東京, 2022.8.31-9.3.
- 48) 嶋根卓也: 薬物乱用・依存に関する疫学研究の最新情報. 厚生労働省薬物中毒対策連絡会議, 2022.10.
- 49) 嶋根卓也: ダメ、ゼッタイから脱却した薬物乱用防止教育 何が有効?何が有効ではない?神奈川県教育委員会主催 令和4年度喫煙・飲酒・薬物乱用防止教育研修講座, 神奈川, 2022.10.13.
- 50) 嶋根卓也: 薬物乱用・依存の疫学研究. 慶應義塾大学医学部公衆衛生学実習, 2022.10.14
- 51) 嶋根卓也: 矯正職員を対象とした拡大研修会における講義(1)近年の薬物使用の動向について. 法務省矯正局矯正研修所効果検証センター, 2022.10.17
- 52) 嶋根卓也: 矯正職員を対象とした拡大研修会における講義(2)近年の大麻使用の動向について. 法務省矯正局矯正研修所効果検証センター, 2022.10.17
- 53) 嶋根卓也: ダメ、ゼッタイから脱却した薬物乱用防止教育 何が有効?何が有効ではない?長野県教育委員会主催 令和4年度薬物乱用防止教育研修会, 長野(オンライン), 2022.10.20.
- 54) 嶋根卓也: 薬物乱用・依存の疫学. 国立精神・神経医療研究センター主催令和4年度認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修, (オンライン), 2022.11.8-9.
- 55) 嶋根卓也: 「助けて」が言えない子どもたち:大麻と市販薬乱用. 山梨県教育庁主催 令和4年度山梨県薬物乱用防止教育研修会, 山梨(オンライン), 2022.11.22.

- 56) 嶋根卓也 : ダメ、ゼッタイから脱却した薬物乱用防止教育 何が有効?何が有効ではない?岡山県薬剤師会主催 学校薬剤師研修会, 岡山 (オンライン), 2022.11.27.
- 57) 嶋根卓也 : ダメ、ゼッタイから脱却した薬物乱用防止教育 何が有効?何が有効ではない?横浜市薬剤師会主催 学校薬剤師研修会, 神奈川 (オンライン), 2022.11.27.
- 58) 嶋根卓也 : 若者の薬物問題の現状と支援について. 大阪府こころの健康総合センター主催 令和4年度「依存症相談対応・実践研修 (A-2)」, 大阪 (オンライン), 2022.11.30.
- 59) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない子どもたち一大麻と市販薬乱用ー. 福岡県保健医療介護部主催 令和4年度福岡県薬物乱用防止講習会講師団講師研修会, 福岡, 2022.12.5.
- 60) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない若者たち—ゲートキーパーとしての薬剤師ー. 茨城県精神保健福祉センター主催 薬剤師向けゲートキーパー養成研修会 (オンライン), 2022.12.15.
- 61) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない子どもたち一大麻と市販薬乱用ー. 長崎県福祉保健部主催 薬物乱用防止指導員研修会 (オンライン), 2022.12.19.
- 62) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない若者たち—ゲートキーパーとしての薬剤師ー. 兵庫県薬剤師会主催 (オンライン), 2023.1.15.
- 63) 嶋根卓也 : 薬物使用と感染症 (HIV・肝炎). 令和4年度東京都依存症専門医療機関および依存症治療拠点機関依存症治療指導者 (薬物依存症) 養成研修 (オンライン), 東京, 2023.1.17.
- 64) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない子どもたち一大麻と市販薬乱用ー. 仙台少年鑑別所主催 調査・鑑別等実務研究会, 宮城 (オンライン), 2023.1.31.
- 65) 嶋根卓也 : 薬物依存症の最新動向: 大麻と市販薬乱用. 日本女子大学 薬物依存症者の就労支援研修, 東京 (オンライン), 2023.2.10.
- 66) 嶋根卓也 : 薬物依存症と性的マイノリティ・HIV感染症. 令和4年度薬物依存症回復施設職員研修 (オンライン), 東京, 2023.2.28-3.1.
- 67) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない子どもたち: 薬物使用と性感染症とのつながり. 広島県薬剤師会主催 令和4年度抗HIV薬服薬指導研修会, 広島 (オンライン), 2023.3.5.
- 68) 嶋根卓也 : 「助けて」が言えない若者たち—ゲートキーパーとしての薬剤師ー. 長崎県薬剤師会主催 うつ病支援体制強化薬剤師研修事業研修会, 長崎 (オンライン), 2023.3.9.
- 69) 近藤あゆみ : 家族に対する相談支援. 令和4年度依存症治療指導者・依存症相談対応指導者・地域生活支援指導者養成研修 (薬物), (オンライン), 2022.7.19-20.
- 70) 近藤あゆみ : 薬物依存症女性の理解と支援. 2022年度薬物依存臨床医師研修・薬物依存臨床看護等研修, (オンライン), 2022.8.31-9.2..
- 71) 近藤あゆみ : 家族に対する相談支援. 令和4年度東京都薬物依存症治療指導者養成研修, (オンライン), 2023.1.17-18.

## F. その他

- 1) 松本俊彦 : 小中学生の自傷行為の増加, 低年齢化について. NHK「首都圏ネットワーク」, 2022.5.12.
- 2) 松本俊彦 : 小中学生の自傷行為の増加, 低年齢化について. NHK「おはよう日本」, 2022.5.13.
- 3) 松本俊彦 : 日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した精神科医. 毎日新聞, 2022.6.17.
- 4) 松本俊彦 : 就寝時の薬物中毒診断. ラジオ NIKKEI 第一放送「ドクターサロン」, 2022.6.21.
- 5) 松本俊彦 : ウェルビーイングとメンタルコーピング. TBSラジオ「萩上チキ・Session」, 2022.8.8.
- 6) 松本俊彦 : おかもとまりさんの生きづらさ, 壮年期の孤独. YouTube「たかまつななチャンネル」および「Yahoo!ニュース Voice」, 2022.8.8.
- 7) 松本俊彦 : スマホ日記 誰かに聞いてほしい 今日の“もやもや”. NHK 総合東北ブロック, 2022.8.28.
- 8) 仲野徹, 松本俊彦 : アディクション治療のゴール・医師と患者の関係・医師がものを書くという

- こと。日本医事新報社主催 Web 医事新報チャンネル対談, 2022.9.22.
- 9) 松本俊彦: うつ病などメンタルヘルスに効果が期待 リカバリーストーリー. NHK「サイカル」, 2022.10.16.
- 10) 松本俊彦: 医療用麻薬を自己注射... 元医師が語る”危険性と公開”. ABEMA ヒルズ, 2022.11.1.
- 11) 松本俊彦: 志の人たち. TBS ラジオ「人生百景」, 2022.12.13.
- 12) 松本俊彦: 平時からの”薬物”報道, 今後も. 公明新聞, 2022.4.2.
- 13) 松本俊彦: 「眠くて大量摂取」危険 搬送死亡例も. 読売新聞, 2022.4.20.
- 14) 松本俊彦: 「すగろくの実動画」に波紋 酒類業界団体も問題視, 専門家も警笛鳴らす「飲酒のゲーム化」. BUSINESS INSIDER, 2022.5.2.
- 15) 松本俊彦: 大麻の「使用罪」導入の方向で議論 厚労省の新たな小委員会がスタート. BuzzFeedJapan, 2022.5.27.
- 16) 松本俊彦: 「理由がない」のではなく「わからない」のが子どもの自死. VERY, 2022.7.1.
- 17) 松本俊彦, 清水康之: 自殺に関する報道どうあるべきか 支える側と議論増やせ. 北海道新聞, 2022.6.22.
- 18) 松本俊彦: 「大麻を使う事の一番の害は, 逮捕されること」松本俊彦さんが戒める「支援者の傲慢」とは?. BuzzFeedJapan, 2022.08.25.
- 19) 松本俊彦: 「死にたい感情, 尋常ではない」松本俊彦医師#こころの悩み SOS. 每日新聞, 2022.9.1.
- 20) 松本俊彦: 依存症に潜む苦痛と向き合う. 医学界新聞, 2022.9.12.
- 21) 松本俊彦: おかもとまり「死ぬことでしか理解してもらえない」思いつめた過去を乗り越えられた理由#つらいあなたへ. Yahoo ニュース Voice, 2022.9.13.
- 22) 松本俊彦: 高3で風邪薬2瓶一気に…「生き続けるためだった」若者に広がる”オーバードーズ”. 西日本新聞, 2022.9.27.
- 23) 松本俊彦: 「死にたい」と言える関係を 日本自殺予防学会総会 熊本市で開催. 熊本日日新聞, 2022.10.7.
- 24) 松本俊彦: 大麻医療活用 厳密管理下で てんかん薬治験開始. 読売新聞, 2022.11.9.
- 25) 松本俊彦: 薬物依存の二次的な害低減 ハームリダクション. 十勝毎日新聞, 2022.11.28.
- 26) 松本俊彦: 薬物依存は、生き残るために切迫な叫び. 韓国日報, 2022.12.16.
- 27) 松本俊彦: 薬物依存の二次的被害低減 ハームリダクション. 釧路新聞, 2022.12.25.
- 28) 松本俊彦: 酒依存と闘い再び音楽界に 治療が転機ラッパーUSUさん(43)患者らとつながり「光になる」. 朝日新聞, 2023.1.8.
- 29) 松本俊彦: 若者むしばむ市販薬 大量摂取の依存者が増加. 岐阜新聞, 2023.1.10.
- 30) 松本俊彦: 精神的苦痛から逃れる目的 市販薬大量摂取の若者増. 佐賀新聞, 2023.1.10.
- 31) 松本俊彦: 読書日和 ストーリーが世界を滅ぼす ジョナサン・ゴットシャル著 偽情報に溺れぬ手だて. 河北新報, 2023.1.8.
- 32) 松本俊彦: 読書日和 ジョナサン・ゴットシャル「ストーリーが世界を滅ぼす」 刺激的な偽情報に溺れないために. 信濃毎日新聞(夕刊), 2023.1.16.
- 33) 松本俊彦: 「かくれ依存症」にご用心. AERA No5, 17-19, 2023.2.6.
- 34) 松本俊彦:嗜好品が支える精神の健康 CBD, エナジードリンク, たばこをめぐって. Voice 543 : 224-231, 2023.
- 35) 松本俊彦: 薬物依存の二次的な害を低減 ハームリダクション. 苦小牧民報, 2023.1.12.
- 36) 松本俊彦: 薬物依存の二次的な害を低減 ハームリダクション. 八重山毎日新聞, 2023.1.13.
- 37) 嶋根卓也: 追悼抄近藤恒夫さん「薬物から復帰民間の支え」読売新聞夕刊, 2022.4.14.
- 38) 嶋根卓也: (アドバイザー) 効果検証業務に係る各種アセスメント, プログラムの開発・見直し等. 法務省矯正局矯正研修所効果検証センター, 2022.
- 39) 嶋根卓也: (アドバイザー)「薬物乱用防止プログラムに関するワーキンググループ」. 法務省保護監察課, 2022.

- 40) 嶋根卓也 : (監修) 少年院職員のための大麻に関する基礎知識. 法務省矯正局少年矯正課 (少年院係) 発行, 2022.6.
- 41) 嶋根卓也 : (監修) 「学校向け教材」東映株式会社 教育映像部企画, 2022.
- 42) 嶋根卓也 : (指導助言) 群馬県立高崎女子高等学校「課題研究」への指導助言. (オンライン) 2022.11.30.
- 43) 嶋根卓也 : (監修) 大麻乱用防止教育用動画「みんなで考えよう！大麻乱用防止教室」～大麻による健康影響編～. 福岡県医療介護部薬務課編, 2022.
- 44) 嶋根卓也 : (監修) 大麻乱用防止教育用動画「みんなで考えよう！大麻乱用防止教室」～大麻の誘いへの対処編～. 福岡県医療介護部薬務課編, 2022.
- 45) 嶋根卓也 : (情報提供) 福岡県医療介護部薬務課編「大麻乱用防止啓発」リーフレットに「薬物使用に関する全国住民調査」の研究成果を提供. 2022.
- 46) 嶋根卓也 : (監修) 薬物乱用防止教材映画「灰色の青空」. 東映株式会社 教育映像部編, 2022.
- 47) 嶋根卓也 : (助言) 効果検証業務（薬物依存離脱指導の充実化）に係る助言. 法務省矯正局矯正研修所効果検証センター, 2023.1.
- 48) 嶋根卓也 : (参考人) 厚生労働省第2回医薬品販売制度検討会. 厚生労働省 医薬・生活衛生局総務課, 2023.3.8.
- 49) 嶋根卓也 : (情報提供) 日本の若者に広がる市販薬の乱用 行き過ぎた服薬で死に至る恐れも. BuzzFeed News, 2023.3.27.

## 4. 行動医学研究部

### I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

成人を主な対象とした様々な精神健康上の問題、特にトラウマ性疾患、悲嘆についての病態解明、治療研究に取り組むとともに、自然災害、犯罪被害、虐待等におけるストレスを緩和し、効果的な治療と支援の研究を進め、代表的な病態である PTSD の神経科学的・遺伝学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。

また、ストレス関連疾患、特に心身症や摂食障害、生活習慣病を対象に、Biopsychosocial モデルに基づき、心身相関の観点から病因や発症のメカニズム、病態を臨床的、基礎的に研究し、効果的な治療法や予防法を開発し、摂食障害全国支援センターが当研究部内に設置されている。

臨床面では研究部のスタッフがセンター病院心療内科・精神科外来で診療・研究に携わっている。令和4年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金 吉晴（併任）。心身症研究室長：関口 敦。認知機能研究室長：堀 弘明。診断技術研究室長：小川眞太朗。ストレス研究室長：井野敬子。精神機能研究室長：成田 瑞。常勤研究員は大沼麻実、リサーチフェローは上田奈津貴、大塚豪士、伊藤（丹羽）まどか、テクニカルフェローは成田 恵、中野稚子。科研費研究員は船場美佐子、菅原彩子、高村恒人、小原千郷、河西ひとみ、横山知加。科研費研究補助員は吉田冬子、國重寛子。併任研究員は富田吉敏、岡野宏紀、春口洸希。外来研究員は佐藤 啓、横田悠季。外来研究補助員は八澤智子。研究生は赤井利奈、國弘志保、菅原まゆみ、井上朋子、荒川和香子、大友理恵子、堀江美智子、松岡 潤、今井理紗、藤内温美、大村靖子、勝沼るり、土嶺章子、大淵晶子、利重裕子、尾花高志、吉川真由、VABULNIK MARIIA。実習生は松尾侑佳、道川由佳子。客員研究員として兒玉直樹、西園マーハ文、藤井 靖、守口善也、寺澤悠理、森野百合子、加茂登志子、小西聖子、永岑光恵、井筒 節、堤 敦朗、福地 成、松本和紀、中島聰美、田中英三郎、宮本純子、覧 亮子、藤村朗子、茅野龍馬、櫻井 鼓、堀 有伸、岡崎純弥、牧田 潔、須賀楓介、袴田優子、宮本悦子、中山未知、鈴木麻佳、野間俊一、田中 聰、林 公輔、伊藤真利子、安藤哲也、林 明明、石田牧子、大滝涼子、中島 実穂、篠崎康子の各氏を迎えている。（順不同）

### II. 研究活動

#### 1) 複雑性 PTSD に関する治療法と診断評価尺度の検証

複雑性PTSDに対する認知行動療法である、STAIR Narrative Therapyの日本での実施可能性、安全性、有効性を検討するためにオープン前後比較試験を実施し、主要な研究成果をEuropean Journal of Psychotraumatology誌に発表した。また日本語版の国際トラウマ面接 (ITI) および国際トラウマ質問票 (ITQ) の妥当性研究を進め、現在までに18例のデータを収集し継続中。（金、丹羽、大滝、成田恵）

#### 2) PTSD の病態解明と治療効果予測法開発に向けた、遺伝子・バイオマーカー・心理臨床指標による多層的検討

トラウマ体験者 (PTSD 群、非発症群) と健常者を対象とし、遺伝子解析・発現解析、内分泌・免疫系マーカー測定、自律神経機能解析、脳 MRI 計測、認知機能測定、心理・臨床評価を行い、治療反応性との関連も検討する。PTSD の病因病態解明、生物学的指標に基づく客観的治療効果予測法の開発を目指す。現在までに 287 名のデータを収集し継続中。これまでに認知や炎症、その遺伝的基盤についての検討などを行い、多くの成果が得られ、国際科学誌等で発表している。（堀、関口、伊藤、林、丹羽、金、大塚、成田恵、河西、井野、吉田、中野）

#### 3) PTSD に対するメマンチンの有効性に関する臨床試験

PTSD 患者において、抗認知症薬メマンチンの有効性を検討する。初めにオープン臨床試験を行

い、本年度までに目標症例数である計 20 名を組み入れ、データ収集を完了した。顕著な症状改善効果が得られ、忍容性も良好であった。この結果を受け、メマンチンの有効性と安全性を検証する RCT を開始している。並行して、メマンチン治療前後で遺伝子発現解析や内分泌・免疫系測定、脳 MRI 計測を行い、治療効果機序の解明および治療効果サロゲートマーカーの開発を目指す。（堀、小川、井野、成田瑞、関口、伊藤、成田恵、中野、金）

#### 4) PTSDに対するメマンチンの有効性及び安全性を評価する無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験

過去のオープン試験の結果を踏まえ、PTSDに対するメマンチンの有効性について更なる実証を進めるため、中等症以上の成人 PTSD 患者 40 例を目標としての無作為化二重盲検プラセボ対照比較試験を開始した（特定臨床研究：CR21-005）。服用開始から 13 週間後の PTSD 症状に対する改善効果を主要評価項目とし、副次評価項目も併せてプラセボに対する実薬の優越性を検討する。R4 年度は実施に向けての体制を構築した。（堀、小川、井野、成田瑞、丹羽、成田恵、中野、金）

#### 5) 血液検査による統合失調症・気分障害の診断法の開発に関する研究

患者・健常者から血液を採取し、タンパク・mRNA・代謝物などを定量し、統合失調症や気分障害の診断法や分類、経過判定指標に役立つ分子の同定を目的とする。神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施し、すでに約 3,000 名の被験者のサンプルが集積されている。これらの血液サンプルを用いて上記の測定を行い、精神疾患のバイオマーカー候補を探索している。（堀、小川、吉田）

#### 6) ヒト毛髪を用いた精神疾患バイオマーカーの探索

気分障害、精神病性障害、PTSD 等の精神疾患を対象として、毛髪中のステロイドホルモンなどの濃度を測定し、バイオマーカーの同定を目的とする。神経研究所疾病研究第三部、センター病院、MGC バイオリソース部との共同研究として実施しており、被験者リクルート中である。（堀、吉田）

#### 7) 情報処理バイアスを標的とした心理治療の有効性の検証とその神経生物学的機序の解明

ストレス関連精神障害に対するリスク保有者を対象として、記憶領域にも働きかける新しい CBM の有効性およびその神経作用機序について、北里大学、労働安全総合研究所等と共同で、fMRI や遺伝子（発現を含む）、内分泌・免疫炎症系指標を用いて包括的な観点から検証している。研究成果は Psychoneuroendocrinology 誌（2 報）、Brain Behavior and Immunity、Biological Psychiatry: Cognitive Neuroscience and Neuroimaging 誌に発表されている。（袴田、堀）

#### 8) 摂食障害支援拠点病院における相談・支援事例の調査

摂食障害支援拠点病院での相談・支援事例を収集、集積し、内容を解析し、摂食障害の支援体制モデルの確立に資するための研究を実施した。令和 4 年度は、全国を対象とした相談「ほっとライン」と 5 カ所の支援拠点病院の 2022 年 4 月～2022 年 11 月末までの相談事例延べ 1765 件を解析し報告書にまとめた。（小原、中野、成田恵、井野、関口）

#### 9) 神経性過食症に対する認知行動療法の無作為比較試験

日本人の神経性過食症患者を対象に摂食障害の認知行動療法「改良版」（enhanced cognitive behavior therapy : CBT-E）の効果検証のため、東京大学、東北大学、九州大学、国立国際医療研究センター国府台病院、および当センター TMC との多施設共同無作為化比較試験を実施した。また、CBT-E の原著者によるケーススーパーヴィジョンにより介入実施者を養成した。（小川、小原、関口、菅原彩子、船場、河西、富田、安藤）

#### 10) 過敏性腸症候群に対するビデオ教材を併用した認知行動療法プログラムのランダム化比較研究

過敏性腸症候群（IBS）に対するビデオ教材を併用した CBT プログラムの効果検証のため東京大学、東北大学、国立国際医療研究センター病院、同国府台病院および当センター病院、国際医療福祉大学成田病院、TMC との多施設共同無作為化比較試験を実施し、全施設で合計 34 例の IBS 患者より研究参加への同意を取得し、研究を継続している。（船場、河西、関口、藤井、小原、富田、安藤）

#### 11) ストレス関連疾患の疾患横断的なバイオマーカー検索のための脳 MRI 研究

トラウマ歴やストレス負荷などが脳内情報処理や脳神経回路ダイナミクスに与える影響を疾患横断的に検証し、多様な表現型を有するストレス関連疾患の新たな診断法の開発を目指している。PTSD 患者、IBS 患者及び健常群、延べ 99 名のデータを収集した。（関口、上田、伊藤、林、丹羽、中野、成田恵、堀、金）

#### 12) 内受容知覚訓練の認知神経科学的效果の検証

バイオフィードバックの手法を用いた内受容感覚訓練を実施し、認知神経科学的な効果を検証している。慶應大学文学部の寺澤悠理准教授（客員研究員）との共同研究で、延べ 22 名の健常大学生を対象とした訓練介入データを収集した。内受容感覚の訓練により、不安と身体症状が軽減し前島皮質を基軸とする脳回路変化を来すことを明らかにした。（関口、菅原彩子、勝沼、寺澤）

#### 13) 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出

摂食障害への認知行動療法（CBT）前後の縦断的観察研究を実施し、CBT 前後の脳 MRI、臨床データ、遺伝子発現データを収集し、摂食障害の早期発見・早期介入に資する CBT 効果の神経科学的エビデンスを創出することを目指す。多施設共同研究としてデータ収集を開始し、延べ 226 例の新規データを収集した。また、既存データ 411 例のデータベースを構築し解析研究を実施し、複数の論文投稿中である。（関口、井野、小川、安藤、堀、菅原彩子、高村、成田恵、中野、船場、小原、守口、富田）

#### 14) 医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズに関する調査研究

病院を受診していない摂食障害患者や家族の支援ニーズを解明・整理するために、Web アンケート調査を実施し、患者・家族合わせて 379 名からデータを収集し、①患者の半数以上が通院していないこと、②未受診者は身近な医療機関の情報求めていること、③患者より家族の被援助志向性が高いことを明らかにした。成果をまとめた論文が心身医学誌に受理された。（菅原彩子、関口、小原、西園）

#### 15) 病院 気分障害センターおよびバイオバンクとの共同研究

NCNP 病院・気分障害センターおよび NCNP バイオバンクと連携した共同研究課題を実施している。うつ病など多くの精神疾患の発症リスクは幼少期トラウマ（小児期逆境体験）の経験率に伴い上昇することが報告されているが、本課題ではこれまで気分障害センター外来を受診し、バイオバンクでの研究参加登録を頂いた方々の試料と情報を対象として、小児期逆境体験とうつ病など精神症状の発現と関連する生物学的マーカーの探索を目的としている。（小川、堀、金）

#### 16) 病院 脳神経内科診療部との共同研究

NCNP 病院 脳神経内科診療部の外来／入院患者における「中枢神経系炎症性脱髓疾患またはその疑い患者」を対象に、精神症状・高次機能障害を評価し、その特徴とリスク因子の関連性について「小児期逆境体験」に着目しながら広く解析することで、脳神経内科領域および精神科領域において将来的な医療・研究につなげるための基礎的データを探索的に収集している。（小川、堀、金）

#### 17) 児童期トラウマ尺度の妥当性に関する研究

児童期トラウマ尺度の信頼性・妥当性を検証することを目的とする。健常群 752 名と臨床群 111 名のデータを分析し、当該尺度の因子構造、内的信頼性、再検査信頼性、併存的妥当性を調べ、成果を Psychiatry Research Communications 誌で発表した。（中島、堀、金）

#### 18) 摂食障害を抱える家族のピアサポーター研修プログラムの開発

摂食障害患者を抱える家族のピアサポーターを育成し、家族ピアサポーターによる家族相談会を開催する。相談会前後に質問紙調査及びインタビュー調査を行い、ピアサポーターおよび相談家族への効果を検証する。（関口、菅原彩子、森野、小原）

#### 19) 機能性精神疾患における心理的機能に関する研究

統合失調症患者、気分障害患者、健常対照者を対象に合計 2,700 名から取得した認知機能障害やパーソナリティ特性等の既存データを解析し、これらの患者における心理的特徴およびそれに寄与する要因を明らかにする。神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施している。（堀、小川）

20) 北茨城の被災地住民を対象とする精神医学的コホート研究

東日本大震災後に北茨城市の被災地住民に対するメンタルケアおよび調査・検体解析研究を実施した。その際に取得された既存資料・試料を新たに解析することで、うつ病や PTSD の発症リスクに関わる環境要因や遺伝要因を明らかにし、バイオマーカーの探索を行う。神経研究所疾病研究第三部との共同研究として実施している。（堀、小川、吉田）

21) 食行動とうつ病の関連についてのコホート研究

我が国的一般人口サンプルを対象に食行動が長期的にうつ病にどのように関連するかを解析した。結果、果物やフラボノイドの豊富な果物の摂取がうつ病に予防的な関連を持つことを示した。これらの内容を Translational Psychiatry 誌に発表した。（成田瑞、堀、金）

22) COVID-19 に関する差別とメンタルヘルスとの関連についての横断およびコホート研究

医療従事者を対象に COVID-19 関連の差別とメンタルヘルスの関連を解析した。差別を経験した群はそうでない群に比べてメンタルヘルス症状や自殺念慮が悪化していることが示された。これらの内容を Journal of Psychiatric Research 誌および International Journal of Mental Health Nursing 誌に発表した。（成田瑞、金）

23) 災害がメンタルヘルスに与える長期的影響を調査するシステムティックレビュー

種々の災害がメンタルヘルスに与える長期的影響を海外の共同研究者とともに調査した。結果、PTSD をはじめとしたメンタルヘルス領域における災害の長期的影響が示された。これらの内容を European Journal of Psychotraumatology 誌に発表した。（成田瑞、金）

24) 収監と精神病体験の関連についての横断研究

アメリカ的一般人口を対象に、収監の有無と精神病体験の横断的関連を調査した。結果、収監の経験がある人の方が、そうでない人に比べて精神病体験を有するオッズが有意に高いことが示された。これらの内容を Schizophrenia Research 誌に発表した。（成田瑞）

25) 自粛、社会的サポート、コーピングがうつと自殺念慮に与える影響についての研究

アメリカの若年者を対象に、自粛、社会的サポート、コーピングがうつと自殺にどのように関連するか調査した。結果、自粛とネガティブなコーピングはうつと自殺念慮を悪化させる方向に働き、社会的サポートとポジティブなコーピングは予防的に働くことが示された。これらの内容を International Journal of Mental Health Nursing 誌に発表した。（成田瑞）

26) 精神医学における標準化治療と評価法の実装研究

わが国の実装科学推進のための基盤を構築するために、6つのナショナルセンター（NC）で連携しているコンソーシアム（N-EQUITY）にて、国内の実装研究の支援活動を行った。また、これまで「PTSD の持続エクスポートージャー療法（PE）」研修を受講した医療従事者を対象に、PE の効果的な普及を妨げている要因を検証し、研修で学んだ成果を臨床に還元できる方法を検討するための調査について計画を進めた。（横山、金）

### III. 社会的活動に関する評価

(1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 摂食障害情報ポータルサイト（一般向け <http://www.edportal.jp/>、専門職向け <http://www.edportal.jp/pro/>）を運営し、市民および専門職への摂食障害の普及・啓発を行った。ポータルサイトには 2022 年 1 月 - 2023 年 1 月の 1 年間に 1,331,744 ページビュー、663,271 ユーザー、摂食障害全国支援センター HP に 80,954 ページビュー、30,908 ユーザー（google analytics）のアクセスがあった。（関口、井野、菅原彩子、船場、小原）

(2) 専門教育面における貢献

- ・ 全国の行政職員向け研修会・各地の医師会、大学等の依頼を受け、災害精神保健、コロナ禍の心のケア、トラウマ対応、PTSD 治療、犯罪被害者対応、被災者・遺族対応に関する最新知見を提供している。（金）
- ・ 連携大学教授：東京大学大学院医学系研究科（金）

- 特別招聘教授：慶應義塾大学環境情報学部（金）
- Adjunct professor : New York University (金)
- 客員教授：東北大学大学院医学系研究科・武藏野大学（金），東北大学大学院医学系研究科（関口）
- 非常勤講師：京都大学医学部，学習院大学（金），筑波大学大学院人間総合科学学術院（小川），名古屋市立大学医学部・愛知学院大学心身科学部(井野)，東北大学大学院医学系研究科（河西）

### (3) 精研の研修の主催と協力

- 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第1回 強迫症対策医療研修 基本コース（オンライン）. 2022.7.15. (金)
- 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修（オンライン）. 2022.9.1-2, 9.29-30. (金, 井野)
- 令和4年度精神保健に関する技術研修. STAIR Narrative Therapy ワークショップ（オンライン）. 2023.2.10, 2.17, 3.3, 3.10, 3.17. (金, 丹羽)
- 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第1回 強迫症対策医療研修 認知行動療法コース（オンライン）. 2023.3.28. (金)
- 令和4年度精神保健に関する技術研修. 摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～（オンライン）. 第4回 2022.8.28, 第5回 2022.12.4 (関口, 井野, 船場, 小原)
- 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第19回摂食障害治療研修会（オンライン）. 2022.10.5-7. (関口, 井野, 船場, 小原)

### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

#### ① 公的委員会

- 厚生労働省「健康増進総合支援システム（eヘルスネット）」情報専門委員（金）
- 厚生労働省健康局「被爆体験者精神影響等調査研究事業の拡充に関する検討会」構成員（金）

#### ② 摂食障害治療支援センター設置運営事業

平成26～令和元年度に続き NCNP が摂食障害全国基幹センターに指定され、令和3年度より摂食障害全国支援センター（全国支援センター）に改称され、事務局実施責任者（センター長）を関口が、実施担当者を井野, 船場, 中野, 小原が担当した。令和4年10月に石川県に摂食障害支援拠点病院が5年ぶりに新規指定された。全国摂食障害対策連絡協議会開催及び全国支援センターの設置運営を行い、摂食障害支援拠点病院を統括、ポータルサイトを運営および記事の更新をした。医療従事者を対象にした「摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療」を2回（2022年8月, 12月）、摂食障害入院治療研修『入院治療の留意点とコツ』を1回（2023年1月）オンライン開催し、400名を超える受講者が参加した。また、新規支援拠点病院の設置のために、「摂食障害治療拠点病院設置準備研修会」をウェブ開催し、医療施設・自治体関係者などが参加した。令和2年度に実施した調査結果をもとに、全国の摂食障害治療施設リストを作成し、ウェブ公開した。また、国立国際医療研究センター国府台病院に委託をして、全国の患者・家族・医療関係者を対象とした摂食障害の電話相談窓口『摂食障害「相談ほっとライン」』を継続している。（精神保健等国庫補助金：関口, 井野, 中野, 船場, 小原）

### (5) センター内における臨床的活動

- センター病院に併任し、外来診療を行っている。（堀, 井野）
- 摂食障害患者の認知行動療法を実施している。（井野, 成田恵, 船場, 小原）
- センター病院に併任し、心療内科で心理面接を行っている。（河西）

### (6) その他

## IV. 研究業績

### A. 刊行物

#### (1) 原著論文

- 1) Narita Z, Nozaki S, Shikimoto R, Hori H, Kim Y, Mimura M, Tsugane S, Sawada N. Association between vegetable, fruit, and flavonoid-rich fruit consumption in midlife and major depressive disorder in later life: the JPHC Saku Mental Health Study. *Transl Psychiatry*. 12(1): 412, 2022.
- 2) Niwa M, Kato T, Narita-Ohtaki R, Otomo R, Suga Y, Sugawara M, Narita Z, Hori H, Kamo T, Kim Y: Skills Training in Affective and Interpersonal Regulation Narrative Therapy for women with ICD-11 complex PTSD related to childhood abuse in Japan: A pilot study. *European Journal of Psychotraumatology* 13(1): 2080933, 2022.
- 3) Kawakami N, Kim Y, Saito M, Fujishiro S: People's worry about long-term impact of COVID-19 pandemic on mental health. *Asian Journal of Psychiatry* 75:103196, 2022.
- 4) Nakajima M, Hori H, Itoh M, Lin M, Kawanishi H, Narita M, Kim Y: Validation of childhood trauma questionnaire-short form in Japanese clinical and nonclinical adults. *Psychiatry Res Commun* 2: 100065, 2022.
- 5) Newnham E, Mergelsberg E, Chen Y, Kim Y, Gibbs L, Dzidic P, DaSilva M, Chan E, Shimomura K, Narita Z, Huang Z, Leaning J. Long Term Mental Health Trajectories after Disasters and Pandemics: A Multilingual Systematic Review of Prevalence, Risk and Protective Factors. *Clin Psychol Rev*. 97: 102203, 2022.
- 6) Kakehi R, Hori H, Yoshida F, Itoh M, Lin M, Niwa M, Narita M, Ino K, Imai R, Sasayama D, Kamo T, Kunugi H, Kim Y: Hypothalamic-pituitary-adrenal axis and renin-angiotensin-aldosterone system in adulthood PTSD and childhood maltreatment history. *Front Psychiatry* 13: 967779, 2023.
- 7) Narita Z, Okubo R, Sasaki Y, Takeda K, Takao M, Komaki H, Oi H, Mizoue T, Miyama T, Kim Y. COVID-19-related discrimination, PTSD symptoms, and psychological distress in healthcare workers. *Int J Ment Health Nurs*. 32(1): 139-146, 2023.
- 8) C Wang, Y Li, Y Tsuboshita, T Sakurai, T Goto, H Yamaguchi, Y Yamashita, A Sekiguchi, H Tachimori: A high-generalizability machine learning framework for predicting the progression of Alzheimer's disease using limited data. *NPJ digital medicine* 5(1): 43-43, 2022.
- 9) Matsuno H, Tsuchimine S, O'Hashi K, Sakai K, Hattori K, Hidese S, Nakajima S, Chiba S, Yoshimura A, Fukuzato N, Kando M, Tatsumi M, Ogawa S, Ichinohe N, Kunugi H, Sohya K: Association between vascular endothelial growth factor-mediated blood-brain barrier dysfunction and stress-induced depression. *Mol Psychiatry*. 27(9): 3822-3832, 2022.
- 10) Narita Z, Koyanagi A, Oh H, DeVylder J. Association between incarceration and psychotic experiences in a general population sample. *Schizophr Res*. 243: 112-117, 2022.
- 11) DeVylder J, Yamasaki S, Ando S, Miyashita M, Endo K., Baba K, Niimura J, Nakajima N, Yamaguchi S, Stanyon D, Narita Z, Schiffman J, Hiraiwa-Hasegawa M, Kasai K, Nishida A. Attributes of auditory hallucinations associated with self-harm: a prospective cohort study. *Schizophr Res*. 251: 30-36, 2023.
- 12) Narita Z, Okubo R, Sasaki Y, Takeda K, Ohmagari N, Yamaguchi K, Morisaki N, Sampei M, Ishitsuka K, Kojima M, Nishimura K, Inoue M, Yamamoto S, Konishi M, Miyo K, Mizoue T. Association of COVID-19-related discrimination with subsequent depression and suicidal ideation in healthcare workers. *J Psychiatr Res*. 159: 153-158, 2023.
- 13) Narita Z, Devylder J, Bessaha M, Fedina L. Associations of self-isolation, social support, and coping strategies with depression and suicidal ideation in U.S. young adults during the COVID-19 pandemic. *Int J Ment Health Nurs*. <https://doi.org/10.1111/inm.13138>

- 14) DeVylder J, Anglin D, Munson MR, Nishida A, Oh H, Marsh J, Narita Z, Bareis N, Fedina L: Ethnoracial variation in risk for psychotic experiences. *Schizophr Bull.* 49(2): 385-396, 2023.
- 15) Ohara C, Nishizono-Maher A, Sekiguchi A, Sugawara A, Morino Y, Kawakami J, Hotta M: Individualized peer support needs assessment for families with eating disorders. *Biopsychosoc Med.* 17(1): 11, 2023.
- 16) Sugaya N, Tomita Y, Funaba M, Iida H, Shirotsuki K, Chin Gardner F, Odawara T, Ando T, Inamori M: Validity and reliability of the Japanese versions of cognitive and behavioral scales for irritable bowel syndrome. *BioPsychoSocial Medicine.* 16(1): 15, 2022.
- 17) Takamatsu G, Yanagi K, Koganebuchi K, Yoshida F, Lee J-S, Toyama K, Hattori K, Katagiri C, Kondo T, Kunugi H, Kimura R, Kaname T, Matsushita M: Haplotype phasing of a bipolar disorder pedigree revealed rare multiple mutations of SPOCD1 gene in the 1p36–35 susceptibility locus. *Journal of Affective Disorders.* 310: 96, 2022.
- 18) Hidese S, Yoshida F, Ishida I, Matsuo J, Hattori K, Kunugi H: Plasma neuropeptide levels in patients with schizophrenia, bipolar disorder, or major depressive disorder and healthy controls: A multiplex immunoassay study. *Neuropsychopharmacology Reports.* 43: 57, 2022.

## (2)総説

- 1) Hakamata Y, Suzuki Y, Kobashikawa H, Hori H: Neurobiology of early life adversity: A systematic review of meta-analyses towards an integrative account of its neurobiological trajectories to mental disorders. *Front Neuroendocrinol* 65: 100994, 2022.
- 2) 金 吉晴: MemantineによるPTSD治療—オーブン試験結果より. *トラウマティック・ストレス* 20(1): 5-10, 2022.
- 3) 丹羽まどか, 金 吉晴: 複雑性PTSDの診断と特徴, および治療. *心理学ワールド* 97 : 20-21, 2022.
- 4) 金 吉晴: COVID-19とPFA. *精神療法* 48(4): 446-452, 2022.
- 5) 堀 弘明: うつ病の発症におけるストレスの役割. *日本生物学的精神医学会誌* 33(4):148-154, 2022.
- 6) 堀 弘明: PTSDの統合的理解を目指した心理学的・生物学的研究. *トラウマティック・ストレス* 20 : 11-19, 2022.
- 7) 関口 敦, 菅原彩子, 勝沼るり, 寺澤悠理: 「こころ」と「身体」と「行動」の基礎と臨床-「脳」と「身体」と「行動変容」-. *心身医学* 62(3) : 225-29, 2022.
- 8) 井野敬子: 心理療法「持続エクスポージャー療法」心的外傷およびストレス関連障害. *精神科 Resident* 3(2) : 30-32, 2022.
- 9) 井野敬子: 疾患各論 心的外傷後ストレス障害 精神科診療のピットフォール. *精神医学* 64(5), 675-680, 2022.
- 10) 丹羽まどか: 複雑性PTSD. *精神科レジデント* 3(2) : 37-38, 2022.
- 11) 安藤哲也: 摂食障害の治療支援ネットワークの指針と簡易治療プログラムの開発の背景と概要. *精神神経学雑誌* 124(12) : 849-854, 2022.

## (3)著書

- 1) 金 吉晴: 第2部 さまざまな場面で遭遇する精神疾患, II思春期から成人期によくみられる精神疾患, 心的外傷後ストレス障害(PTSD). 尾崎紀夫, 中込和幸, 村井俊哉. : 精神疾患診療, 日本医師会雑誌 151(2). 日本医師会, 東京, s209-s210, 2022.
- 2) 金 吉晴: 1章 地域精神医療 トライア・犯罪被害者支援制度 概要. 神庭重信, eds. : 講座

- 精神疾患の臨床 7. 中山書店, 東京, pp147-154, 2022.
- 3) 金吉晴: 特集にあたって, 特集 心的外傷およびストレス因関連障害: 精神科 Resident 3(2). 東京, p4, 2022.
  - 4) 金吉晴: PTSD 対策研修, Column : 精神科 Resident 3(2). 東京, p18. 2022.
  - 5) 金吉晴: PTSD への新規薬物療法 メマンチン研究, Column: 精神科 Resident 3(2). 東京, pp25-26, 2022.
  - 6) 松岡恵子, 金吉晴: JART(Japanese Adult Reading Test). 鈴木朋子, サトウタツヤ. : 心理検査マッピング 全体像をつかみ、臨床に活かす. 東京, pp176-179, 2022.
  - 7) 金吉晴: 第 2 部 さまざまな場面で遭遇する精神疾患 II 思春期から成人期によくみられる精神疾患 心的外傷後ストレス障害 (PTSD). 尾崎紀夫, 中込和幸, 村井俊哉. : 精神疾患診療 日本医師会雑誌 第 151 卷・特別号(2). 日本医師会, 東京, pps209-s210, 2022.
  - 8) 関口敦: 心療内科の基礎 4 脳画像と心療内科 心療内科学 診断から治療まで. 中井吉英, 久保千春 編集: 朝倉書店, 2022.

#### (4)研究報告書

- 1) Kim Y: Bio-genome markers of treatment responsiveness of severe-stress related mental disorders. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費実績報告書英文概要. 2023.3.
- 2) 金吉晴: ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費統括研究報告書. 2023.3.
- 3) 金吉晴: 統括, PTSD への CBT 指導. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費分担研究報告書. 2023.3.
- 4) 堀弘明: トランスクリプトーム, DNA メチローム, 炎症マーカー解析. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費分担研究報告書. 2023.3.
- 5) 関口敦: CBT 効果を予測する脳画像バイオマーカーの検証. 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費分担研究報告書. 2023.3.
- 6) 関口敦, 井野敬子, 中野稚子, 成田惠, 小原千郷, 船場美佐子, 國重寛子, 兼山桃子: 令和 4 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」報告書. 2023.

#### (5)翻訳

- 1) 関口敦: カールソン神経科学テキスト—脳と行動—原書第 13 版 第 18 章 ストレスと不安障害. 中村克樹 監訳: 丸善出版, 2022.
- 2) 船場美佐子: 認知行動療法の哲学—ストア派と哲学的治療の系譜 第 7 章 自己分析とソクラテス的論駁 第 8 章 自己暗示・予期瞑想・回顧的瞑想. 東畑開人・藤井翔太 監訳, 金剛出版, 2022.

#### (6)その他

- 1) Kim Y: A new perspective of AI study in disaster mental health. Psychiatry Clin Neurosci 76(4): 96, 2022.
- 2) 中込和幸, 加藤知子, 金吉晴, 小平雅基: DV・虐待への精神科的対応, Round Table Discussion 座談会. 精神科臨床 Legato 8(1): 4-10, 2022.
- 3) 金吉晴: Vignette1 診断と評価, 監修: 精神科 Resident 3(2). 東京, p5, 2022.
- 4) 金吉晴: Vignette2 治療の基本 (身体的治療) 監修: 精神科 Resident 3(2). 東京, p17, 2022.
- 5) 金吉晴: Vignette3 治療の基本 (心理療法) 監修: 精神科 Resident 3(2). 東京, p27, 2022.
- 6) 金吉晴: 特集にあたって, 特集 PTSD の生物学的理解と治療開発. トラウマティック・ストレス 20(1): 3, 2022.
- 7) 金吉晴, 重村淳: 対談『トラウマティック・ストレス』の過去・現在・未来. トラウマティック

- ク・ストレス 20(1):77-85, 2022.
- 8) 堀 弘明: PTSD の分子生物学. 精神科 Resident 3(2) : 39-40, 2022. (コラム)
  - 9) 堀 弘明: 幻覚剤を PTSD 治療に. 日経サイエンス 52(11) : 64-70, 2022. (監修)
  - 10) 堀 弘明: 幻覚剤を PTSD 治療に. 別冊日経サイエンス 256 : 68-73, 2022. (監修)
  - 11) 丹羽まどか : [Review of Books Abroad] Written Exposure Therapy for PTSD: A Brief Treatment Approach for Mental Health Professionals. 精神療法 49(1) : 136-137, 2022.

## B. 学会・研究会における発表

### (1)学会特別講演,教育講演,シンポジウム,ワークショップ,パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: Vision, Role and Challenges of the National Institute of Mental Health of Japan. The 2022 Institutional Conference of the Peruvian National Institute of Mental Health on its fortieth anniversary, Lima (video recording), 2022.6.6.
- 2) 金 吉晴: PTSD の理解と治療：心理仮説と分子記憶. 第 50 回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー, 東京, オンライン, 2022.5.23.
- 3) 金 吉晴: トラウマと神経発達症. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
- 4) 丹羽まどか, 加藤知子, 大滝涼子, 大友理恵子, 須賀楓介, 菅原まゆみ, 成田 瑞, 堀 弘明, 加茂登志子, 金 吉晴: 複雑性 PTSD に対する STAIR Narrative Therapy の有効性の検討. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 5) 堀 弘明, 金 吉晴: 遺伝環境相互作用に着目した PTSD の病因理解. シンポジウム 6, 恐怖記憶の分子・生理学的基盤の解明と PTSD の治療開発. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡 (オンライン), 2022.6.16-18.
- 6) 堀 弘明, 金 吉晴: メマンチンによる PTSD 治療の試み. シンポジウム S-3, PTSD に対する薬物療法：今後の展望を考える. 第 21 回日本トラウマティック・ストレス学会, オンライン, 2022.7.23-24.
- 7) 金 吉晴: PTSD の臨床と病態研究の現状. BPCNPNPPP4 学会合同年会, 東京 (オンデマンド配信), 2022.11.4-12.16.
- 8) 金 吉晴, 丹羽まどか: 複雑性 PTSD に対する心理療法：STAIR Narrative Therapy の基礎を学ぶ. ワークショップ 22, 第 22 回日本認知療法・認知行動療法学会, 東京 (オンデマンド配信), 2022.11.21～2023.1.15.
- 9) 金 吉晴: COVID-19 医療従事者に向けられたスティグマとメンタルヘルス. シンポジウム I 新型コロナウイルス(COVID-19)感染症とメンタルヘルス, 第 24 回感情・行動・認知(ABC)研究会, Web 開催, 2023.1.24.
- 10) 金 吉晴: PTSD と社会, 第 41 回日本社会精神医学会, 兵庫, 2023.3.16.
- 11) 金 吉晴: 社会を反映する複雑性 PTSD, 第 41 回日本社会精神医学会, 兵庫, 2023.3.16.
- 12) 関口 敦: 当事者, 家族とともにより良い診療を考える～摂食障害支援センター これまでの活動・これから活動～. 市民公開シンポジウム, 第 25 回日本摂食障害学会学術集会, オンライン, 2022.10.15-16.
- 13) 関口 敦: 心療内科領域における脳画像研究の最前線 教育講演 1, 第 26 回日本心療内科学会総会・学術大会, 福岡, 2022.11.19.
- 14) 井野敬子, 関口 敦: シンポジウム 4. 摂食障害拠点病院：10 代の相談, 成人期移行. 第 25 回日本摂食障害学会学術集会, 埼玉 (オンライン), 2022.10.15-16.
- 15) 藤本真紀子, 武久千夏, 武田 剛, 小原千郷 : シンポジウム「ねばならない」から「これでいい」へ—摂食障害当事者・家族に心理師としてできること—. 自主シンポジウム, 第 42 回日本心理臨床学会, オンライン, 2022.9.4.

## (2)一般演題

- 1) Ino K, Hori H, Narita M, Kim Y: Efficacy of Memantine in the treatment of Posttraumatic Stress Disorders and preliminary Exploration of Blood markers. American Psychosomatic Society 80<sup>th</sup> Annual Scientific Meeting, San Juan, Puerto Rico, 2023.3.8-11.
- 2) Chhatkuli RB, Ota J, Hamatani S, Kamashita R, Takahashi J, Numata N, Yoshida T, Kitagawa H, Shimizu, Obata T, Matsumoto K, Masuda Y, Nakazato M, Sato Y, Isobe M, Kodama N, Yoshihara K, Takamura T, Moriguchi Y, Sekiguchi A, Hirano Y: Machine learning-based classification of anorexia nervosa using multisite parcellated datasets. The 7th Annual Scientific Meeting of the ISMRM Japanese Chapter, Nagoya, 2022.9.10-11.
- 3) Wang C, Li Y, Yamaguchi H, Tachimori H, Sekiguchi A, Yamashita Y: A Multimodal Deep Learning Approach to Prediction of Cognitive Decline and its Potential Application in Clinical Trials for Alzheimer's Disease. 15TH CLINICAL TRIALS ON ALZHEIMER'S DISEASE (CTAD), California, USA, 2022.11.29-12.2.
- 4) Sekiguchi A, Tose K, Takamura T, Isobe M, Hirano Y, Sato Y, Kodama N, Yoshihara K, Noda T, Mishima R, Gondo M, Moriguchi Y, Fukudo S: Brain Atrophy In Anorexia Nervosa, but Increase With Clinical Symptoms in the Prefrontal and Posterior Insular Cortices: A Multicenter Neuroimaging Study. American Psychosomatic Society 80<sup>th</sup> Annual Scientific Meeting, San Juan, Puerto Rico, 2023.3.8-11.
- 5) Narita Z. COVID-19-related discrimination and mental health in healthcare workers. Asian Consortium of National Mental Health Institutes, Singapore, 2022.9.21.
- 6) Funaba M, Kawanishi H, Fujii Y, Tomita Y, Sekiguchi A, Ando T: Attention and anxiety about gastrointestinal symptoms and IBS symptoms: changes before and after intervention with hybrid CBT-IE for IBS. American Psychosomatic Society 80<sup>th</sup> Annual Scientific Meeting, San Juan, Puerto Rico, 2023.3.8-11.
- 7) 出水玲奈, 廣方美沙, 山本ゆりえ, 石戸淳一, 田村奈穂, 井野敬子, 関口 敦, 金 吉晴, 河合啓介: 摂食障害全国支援センター「相談ほっとライン」活動報告. 第 63 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 千葉, 2022.6.25-26.
- 8) 廣方美沙, 吉田さやか, 田村奈穂, 関口 敦, 井野敬子, 金 吉晴, 河合 啓介: 摂食障害全国支援センター「相談ほっとライン」活動報告. 第 26 回日本心療内科学会総会・学術大会, 福岡, 2022.11.19.
- 9) 成田 恵, 安藤哲也, 久保田智香, 小川眞太朗, 金 吉晴: 長期化した神経性やせ症患者に対して CBT-E が奏功した一例. 第 25 回日本摂食障害学会学術集会, オンライン, 2022.10.15-16.
- 10) 磯部昌憲, 戸瀬景茉, 高村恒人, 野田智美, 三嶋 亮, 川端美智子, 佐藤康弘, 平野好幸, 児玉直樹, 吉原一文, 権藤元治, 守口善也, 関口 敦: 神経性やせ症における脳構造と重症度の相関-摂食障害脳画像データベースを用いた多施設共同研究-. 第 63 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 千葉, 2022.6.25-26.
- 11) 高村恒人, 佐藤康弘, 平野好幸, 磯部昌憲, 戸瀬景茉, 野田智美, 児玉直樹, 吉原一文, 守口善也, 関口 敦: 多施設データにおける安静時脳機能的結合を用いた摂食障害分類. Neuro2022 (第 45 回日本神経科学大会), 沖縄, 2022.6.30-7.3.
- 12) 関口 敦, 菅原彩子, 勝沼るり, 寺澤悠理: 内受容訓練効果の神経基盤の解明. Neuro2022 (第 45 回日本神経科学大会), 沖縄, 2022.6.30-7.3.
- 13) 須藤佑輔, 大田淳子, 鎌下莉緒, Bhushal Chhatkuli Ritu, 濱谷沙世, 高橋純平, 沼田法子, 吉田斎子, 北川等美, 清水栄司, 松本浩史, 植田喜正, 中里道子, 佐藤康弘, 磯部昌憲, 児

- 玉直樹, 吉原一文, 高村恒人, 守口善也, 関口 敦, 平野好幸: 神経性やせ症における安静時脳機能の変化. 第 25 回日本摂食障害学会学術集会, 埼玉 (オンライン), 2022.10.15-16.
- 14) 安藤哲也, 関口 敦, 山内常生, 河合啓介, 竹林淳和, 立森久照, 菅原彩子, 船場美佐子, 河西ひとみ, 小原千郷: 摂食障害治療および支援の全国実態調査. 第 25 回日本摂食障害学会学術集会, 埼玉 (オンライン), 2022.10.15-16.
  - 15) 鈴木眞理, 西園マーハ文, 小原千郷, 関口 敦, 森野百合子, 菅原彩子, 宮島絵理: 摂食障害を抱える家族のピアサポート研修プログラムの開発. 第 25 回日本摂食障害学会学術集会, 埼玉 (オンライン), 2022.10.15-16.
  - 16) 船場美佐子, 小原千郷, 成田 恵, 中野稚子, 小川眞太朗, 安藤哲也, 井野敬子, 関口 敦: うつと心理社会的な課題を抱えた過食症の 2 症例に対する摂食障害の認知行動療法改良版のこころみ. 第 22 回日本認知療法・認知行動療法学会, 東京, 2022.11.11.

### (3)研究報告会

- 1) 金 吉晴: 災害・児童虐待等のトラウマ体験を有する人の心のケア支援の充実・改善に関する研究. 領域 3 新たな政策領域の開拓, 革新的自殺研究推進プログラム 自殺対策推進レール (令和 3 年度委託研究成果報告会), オンライン, 2022.5.16.
- 2) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 2022 年度 戰略的国際脳科学研究推進プログラム [国際脳] 春の分科会, 東京 (オンライン), 2022.5.30-31.
- 3) 関口 敦: 摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出. 2022 年度 戰略的国際脳科学研究推進プログラム [国際脳] 進捗報告会, オンライン, 2022.11.21.
- 4) 井野敬子: PTSD に対するオンライン遠隔認知行動療法の効果検証とオンライン遠隔認知行動療法における診療連携モデルの確立. 2022 年度 日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野) 分科会, 東京 (オンライン), 2022.07.25.

### (4)その他

- 1) 関口 敦: 令和 4 年度第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 4 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2022.7.29.
- 2) 関口 敦: 令和 4 年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 4 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2023.2.6.
- 3) 井野敬子: 令和 4 年度第 1 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 4 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2022.7.29.
- 4) 井野敬子: 令和 4 年度第 2 回全国摂食障害対策連絡協議会. 令和 4 年度精神保健対策費補助金「摂食障害治療支援センター設置運営事業」, オンライン, 2023.2.6.

## C. 講演

- 1) 金 吉晴: コロナ下のこころのケア. 中国在留邦人向けメンタルヘルスケアセミナー 在中国日本大使館, オンライン, 2022.6.9.
- 2) 金 吉晴: PTSD の病態と治療. 東京大学医学部附属病院精神神経科, 東京, 2022.6.20.
- 3) 金 吉晴: 複雑性 PTSD の診断と治療. 京都精神科治療懇話会, オンライン, 2022.7.30.
- 4) 金 吉晴: PTSD と不安の認知行動療法. 宮城 CBT 活用研究会, 宮城 (オンライン), 2022.9.5.
- 5) 金 吉晴: トラウマと神経発達症. ND Symposium, 東京, 2022.10.28.
- 6) 金 吉晴: PTSD とうつ. Psychiatry Web Seminar, 京都, 2022.11.19.
- 7) 金 吉晴: 不安やストレスに負けない気持ちの持ち方, 不安やストレスとの付き合い方. 心の体の健康講演会, 関東総合通信局, オンライン, 2023.1.13.
- 8) 金 吉晴: PTSD の理論と臨床—複雑性 PTSD との比較検討—. 帝京大学医学部精神神経科

学講座、東京、2023.3.7.

- 9) 関口 敦: 摂食障害治療・支援体制拡充への取り組み. 世界摂食障害アクションデイ 2022 摂食障害の早期発見・早期支援に向けて、オンライン、2022.6.5.

## D. 学会活動

### (1) 学会主催

- 1) 関口 敦: 第9回心身医学のニューサイエンス研究会 (2022), オンライン, 2022.12.18.

### (2) 学会役員

- 1) 金 吉晴: 日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 2) 金 吉晴: 自殺予防学会 理事
- 3) 金 吉晴: 日本不安症学会 プログラム委員
- 4) 堀 弘明: 日本生物学的精神医学会 評議員
- 5) 関口 敦: 日本心身医学会 代議員, 幹事
- 6) 関口 敦: 日本摂食障害学会 評議員, 学術交流委員会
- 7) 井野敬子: トラウマティック・ストレス学会 広報委員
- 8) 井野敬子: 日本精神神経学会 災害対策委員

### (3) 座長

- 1) 金 吉晴, 喜田 聰: シンポジウム6「恐怖記憶の分子・生理学的基盤の解明と PTSD の治療開発」. 第118回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
- 2) 金 吉晴: シンポジウム3「PTSDに対する薬物療法: 今後の展望を考える」. 第21回日本トラウマティック・ストレス学会, 東京(オンライン), 2022.7.24.
- 3) 関口 敦, 遠藤由香: ポスター2: 摂食障害1. 第63回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 香川, 2022.6.25-26.
- 4) 関口 敦, 高倉修: 一般演題7. 疫学調査・COVID-19. 第25回日本摂食障害学会学術集会, 埼玉(オンライン), 2022.10.15-16.
- 5) 関口 敦, 小坂浩隆: シンポジウム4. 摂食障害拠点病院: 10代の相談、成人期移行. 第25回日本摂食障害学会学術集会, 埼玉(オンライン), 2022.10.15-16.
- 6) 井野敬子: ケーススタディ2: 複数のトラウマを経験した PTSD 患者に対する 認知処理療法の実践報告. 第22回日本認知療法・認知行動療法学会, 東京, 2022.11.11-12.

### (4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Hori H: Frontiers in Psychiatry, review editor for Molecular Psychiatry section
- 3) Narita Z: Asian Journal of Psychiatry, early career editorial board member

## E. 研修

### (1) 研修企画

- 1) 金 吉晴: 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第1回 強迫症対策医療研修 基本コース. オンライン, 2022.7.15.
- 2) 金 吉晴: 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD 持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.1-2, 9.29-30.
- 3) 金 吉晴: PTSD の持続エクスポートージャー療法. 2022年度 PTSD の持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2023.2.2.
- 4) 金 吉晴, 丹羽まどか: STAIR Narrative Therapy ワークショップ. オンライン, 2023.2.10,

- 2.17, 3.3, 3.10, 3.17.
- 5) 金 吉晴：第1回 強迫症対策医療研修 認知行動療法コース. オンライン, 2023.3.28.
  - 6) 関口 敦, 井野敬子：第2回摂食障害支援拠点病院設置準備研修会. 令和4年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. 茨城（オンライン）, 2022.8.22.
  - 7) 関口 敦, 井野敬子, 小原千郷, 船場美佐子：摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第4回. 令和4年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン, 2022.8.28.
  - 8) 関口 敦, 井野敬子：第3回摂食障害支援拠点病院設置準備研修会. 摂食障がいへの治療支援に関する研修会. 令和4年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. 福井（オンライン）, 2022.8.29.
  - 9) 高倉 修, 北島智子, 井野敬子, 小原千郷, 関口 敦：摂食障害治療支援コーディネーター研修会. 令和4年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン, 2022.9.26.
  - 10) 関口 敦, 井野敬子, 小原千郷, 船場美佐子, 中野稚子：第19回摂食障害治療研修. オンライン, 2022.10.5-7.
  - 11) 関口 敦, 井野敬子, 小原千郷, 船場美佐子：摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療～第5回. 令和4年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. オンライン, 2022.12.4.
  - 12) 関口 敦, 井野敬子：摂食障害入院治療研修「入院治療の留意点とコツ」第1回. 令和4年度摂食障害治療支援センター設置運営事業. 金沢（オンライン）, 2023.1.17.

## (2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴：PTSDの診断と評価. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.1.
- 2) 金 吉晴：PEの治療研究. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.1.
- 3) 金 吉晴：PEの治療原理 全体像. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.1.
- 4) 金 吉晴：治療導入と治療同盟. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.2.
- 5) 金 吉晴：心理教育、呼吸法. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.2.
- 6) 金 吉晴：想像エクスポートージャー. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.29.
- 7) 金 吉晴：回避の取り扱い. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.29.
- 8) 金 吉晴：治療上の困難. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.29.
- 9) 金 吉晴：PEを実施するために. 令和4年度精神保健に関する技術研修. 第3回 PTSD持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2022.9.30.
- 10) 金 吉晴：PTSDの持続エクスポートージャー療法. 2022年度 PTSDの持続エクスポートージャー療法研修. オンライン, 2023.2.2.
- 11) 堀 弘明：PTSDの神経科学と薬物療法. 令和4年度 PTSD対策専門研修 B.専門コース1, オンライン, 2022.12.15-16.
- 12) 堀 弘明：PTSDの神経科学と薬物療法. 令和4年度 PTSD対策専門研修 B.専門コース2, オンライン, 2023.1.19-20.
- 13) 関口 敦：摂食障害全国支援センターについて. 摂食障害研修会, 茨城（オンライン）, 2022.8.22.
- 14) 関口 敦：摂食障害治療支援センター設置運営事業について. 令和4年度摂食障がいへの治

療支援に関する研修会, 福井(オンライン), 2022.8.29.

- 15) 井野敬子, 金吉晴: 現実エクスポート. ホットスポット. 症例検討. 第3回 PTSD 持続エクスポート療法研, オンライン, 2022.9.1-2, 9.29-30
- 16) 丹羽まどか, 金吉晴: 複雑性 PTSD. 令和4年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース1, オンライン, 2022.12.15-16.
- 17) 丹羽まどか, 金吉晴: 複雑性 PTSD. 令和4年度 PTSD 対策専門研修 B. 専門コース2, オンライン, 2023.1.19-20.
- 18) 丹羽まどか: 対人援助職のためのセルフケア. 令和4年度相談業務研修・相談業務上級研修, オンライン, 2022.10.13-14.
- 19) 丹羽まどか: 対人支援に役立つ感情調整. 令和4年度子供・若者育成支援のための地域連携推進事業(青年リーダー研修会), 東京, 2023.1.31-2.1.
- 20) 丹羽まどか: 複雑性 PTSD と STAIR Narrative Therapy. 令和4年度フェミニストカウンセラー協会研修会, オンライン, 2023.2.23.

#### F. その他

- 1) 金吉晴, 丹羽まどか: 複雑性 PTSD、欧米人に有効な心理療法で日本人患者も症状が改善—NCNPが報告. 医療NEWS, マイナビニュース, CBnews, 他. 2022.6.10.
- 2) 川嶋弘詔(司会)／金吉晴, 重村淳(出席者): うつ病診療のUpdateアンケート・座談会, PTSDと抑うつ. DEPRESSION JOURNAL Vol.10 No.3: pp11-15, 2022.12.
- 3) 金吉晴: コロナで長引く心の不調 医療現場, ノウハウ蓄積で実績. 日本経済新聞. 2022.12.27.
- 4) 金吉晴: PTSD(心的外傷後ストレス障害), 知っておきたいこころの病気. 厚生労働. 2023.3.
- 5) 中村誠二, 石澤洋平, 的場亮, 松原謙一, 功刀浩, 堀弘明: 特許「気分障害を検出する方法」, 特許第7084580号, 2022年6月7日登録, 日本
- 6) 関口敦, 船場美佐子: 「感情の科学 “体”とつながる心の世界」. NHKサイエンスZERO, 2022.5.1.
- 7) 関口敦, 井野敬子: 「やせたい私」が嫌い 摂食障害のリアル. 朝日新聞, 2022.7.15.
- 8) 関口敦, 井野敬子: 摂食障害の小中高生急増 コロナ禍の影響も. 共同通信, 2022.10.
- 9) 関口敦, 井野敬子: 摂食障害疑い例にどう対応? 日経メディカル, 2022.12.
- 10) 関口敦, 井野敬子: 「医療ルネサンス」<摂食障害 1~6>. 読売新聞, 2023.2.20.
- 11) 関口敦, 井野敬子: 摂食障害の子どもの患者高止まり・・・保護者や養護教諭が気づけるサイン. 朝日新聞withnews, 2023.3.9.

## 5. 児童・予防精神医学研究部

### I. 研究部の概要

児童・予防精神医学研究部は、精神疾患の早期介入および予防、児童・青年期のメンタルヘルス、ならびに関連する領域に関する調査研究および情報発信を行っている。早期介入・予防に向けた活動としては、認知機能の標準的評価法の整備や経頭蓋直流刺激を用いた新たな治療法の開発研究など、多角的に活動を展開している。児童・青年期の精神科的障害については、神経生理学的指標を用いた新たな評価法の開発やコホート研究などを継続している。

人員構成は以下のとおりである。部長：住吉太幹、精神疾患早期支援・予防研究室室長：松元まさか、児童・青年期精神保健研究室室長：白間 綾、リサーチフェロー（3名）：飯島和樹、Andrew M. Stickley、末吉一貴、科研費研究員（3名）：長谷川由美、山田理沙、廣永成人、客員研究員（19名）：神尾陽子、熊崎博一、池澤 聰、中村 亨、上野佳奈子、青木保典、石井良平、住吉チカ、樋口 悠子、川崎康弘、鈴木道雄、高橋秀俊、數井 裕、小坂浩隆、菊知 充、松本吉央、上原隆、信川創、西田圭一郎、研究生（8名）：荻野和雄、海老島 健、岡琢哉、山田悠至、稻川拓磨、齊藤 彩、原口英之、横田悠季他、科研費研究補助員1名、科研費事務助手1名、センター事務助手1名、科研費研究助手1名

### II. 研究活動

1) 部長室より：住吉が代表研究者となり、精神疾患における認知機能障害の評価や治療介入に関する研究を、NCNP 内の他部署および国内外の医療機関や企業と協働し、以下を実施している。

A) ニューロモデュレーションの精神疾患への応用に関する研究（住吉、白間、末吉、長谷川、和田、山田）経頭蓋直流刺激(tDCS)を用いた統合失調症など精神疾患の認知機能障害の治療研究を開いている。現在、統合失調症患者の日常生活技能に対する tDCS の改善効果に関する無作為化臨床試験(FEDICS)が、病院 CREP などから支援を受け進行中である。また、統合失調症患者の社会認知機能向上の tDCS の効果に関する本邦初の特定臨床研究 (SEDCS) について、研究生の山田 悠至医師（司法精神診療部）らと共に開催している。2022 年度は主解析論文を専門誌に公表した。また、これらの活動の内容を英文著書として発信した。

B) 大うつ病性障害患者を対象とした中央評価の妥当性に関する予備研究～対面評価と情報通信技術を介した遠隔評価との一致性の検討～(CENTRAD 研究)（住吉、長谷川 他）大うつ病性障害患者を対象とした、代表的なうつ症状評価尺度である MADRS について、対面による評価と中央評価者による情報通信機器を介した、評価の一貫性の確認を目的とする。日本神経精神薬理学会(JSNP)のトランスレーショナル・メディカル・サイエンス委員会の活動の一つであり、慶應大学、東京女子医科大学、杏林大学、青山学院大学、ひもろぎクリニック、病院 CREP, IBIC の支援を受けている。2022 年度は収集したデータを解析し、日本神経精神薬理学会(JSNP)年次大会で発表した。

C) 抗うつ薬の単剤治療を新たに開始する大うつ病患者を対象とした認知機能、抑うつ症状、社会機能の追跡調査に関する多施設共同前向き観察研究(PERFORM-J)（住吉）PERFORM-J とは、抗うつ薬の単剤治療を新たに開始する大うつ病患者を対象とし、認知機能、社会機能、抑うつ症状などの推移を 6 カ月追跡した多施設共同前向き観察研究である。これまで、早期（治療開始 1 あるいは 2 カ月後）に抑うつ症状が寛解に至る場合は、6 カ月後の主観的認知機能障害の残遺が少ないと、ならびに、客観的認知機能に関しても、治療前に低下を認める患者においては同様のパターンを示すことを英文専門誌上に公表してきた。令和 4 年度は PERFORM-J で用いられた主要アウトカムである主観的認知機能評価尺度 PDQ-D の短縮版の妥当性を確認し、その成果を JSNP 年次大会で発表するとともに、英文専門誌上に発信した。

## 2) 精神疾患早期支援・予防研究室（松元、飯島、廣永）

## (1) 精神疾患患者における「自己」の神経回路病態の解明

「自己」が、脳領域間のどのような相互作用によって形成され、精神疾患患者においてどのような異常を来しているのか、脳イメージング法により検討している。よい結果が得られるカードを探し出す探索課題遂行中の健常者の脳活動を MEG (magnetoencephalography) を用いて計測し、コンピューターが選択する条件よりも自らが選択する条件の方が、前頭葉内側部の賦活が強いことを見出した。

## (2) MEG 計測・解析技術の開発

MEG 環境下におけるアイトラッキングシステム、3D スキャナを用いた MRI (magnetic resonance imaging) 構造画像との高精度な重ね合わせ技術、そして MEG データ解析プログラムの開発を行った。

## (3) 非ヒト霊長類を用いた「自己」の神経回路基盤の解明

マーモセット個体が自ら発声している条件と、録音した自身の声を聴いている条件とで ECoG (Electrocorticogram) を比較し、発声時の聴覚野活動抑制を観察した。さらに、聴覚野活動抑制が側頭葉のどの領域から開始されるのか、発声の制御に関わる前頭葉の活動がどのように関与するのかについて検討した。

## (4) 自閉症モデル動物における神経回路異常の解明

自閉症個体のミスマッチ陰性電位を健常個体と比較したところ、有意な減弱が観察された。また、超高磁場 MRI により構造的な違いを比較検討したところ、主だった線維束において拡散異方性の程度が異なることが明らかになった。

## 3) 多摩コホート研究（白間、Stickley、神尾、住吉）

コミュニケーションの障害や限局的興味、反復的行動といった特徴により構成される自閉症的特性は、一般人口において連続的な分布を示す。予防部では多摩地域の子どもたちを対象とした多摩コホート調査のデータを分析し、自閉症的特性とメンタルヘルスの関連を検討している。本年度の研究では、重症の自閉症的特性だけでなく、軽症から中等度の自閉症的特性(全体のおよそ 1 割)をもつ子どもたちの間で、情緒と行動の問題が増加していることが明らかになった(Shirama et al. BMC Psychiatry).

## 4) 統合失調症における予測的推論過程（白間、信川、住吉）

予測的推論は、予測誤差情報を用いて変化し続ける環境の内部モデルを維持・更新する機能であり、その異常は妄想・幻覚や社会認知機能などに影響を及ぼす。統合失調症の予測的推論過程について、ベイジアン・モデルと瞳孔径解析を組み合わせた手法により、詳細な計算過程と神経機構を明らかにするため、収集したデータの解析を行っている。

## 5) 気分障害の認知機能障害評価バッテリーに関する研究（末吉、長谷川、住吉）

気分障害における認知機能障害を評価する簡便なテストバッテリー、Screen for Cognitive Impairment in Psychiatry (SCIP) と Brief Assessment of Cognition In Affective Disorders (BAC-A) の信頼性・妥当性を検討している。SCIP は国際双極性障害学会が推奨するスクリーニングツールであり、気分障害患者の認知機能を短時間で評価することができる。BAC-A は精神科疾患において低下があることで知られてきた認知機能に加え、情動刺激が認知機能へ与える影響を評価することができる。多施設共同でデータ収集を行っている。

### III. 社会的活動に関する評価

## (1) 市民社会に対する一般的な貢献

2022 年度気分障害センター市民公開講座（2022.10.29）を企画した(住吉)。

(2) 専門教育面における貢献

- ・研究と臨床の橋渡しを目指すカンファレンス「児童・予防精神医学研究会」を統合失調症早期診断・治療センターとの共催で1回開催（住吉）
- ・研究成果の国際的な発信力向上を目指し、医学英語のベテラン講師がセンター職員による医学英語論文に対し指導を行うセミナーを、病院CREPとの共催で開催（2023.2.9）（住吉）

(3) 精研の研修の主催と協力

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

- ・厚労省 発達障害の情報提供等事業に関する運営会議・構成員（住吉）
- ・クロザリル適正使用委員会委員（住吉）

(5) センター内における臨床的活動

- ・センター病院 統合失調症専門外来・初診（兼部長診）：毎週月曜日（住吉）
- ・センター病院 気分障害センター外来・初診：毎週月曜日（住吉）
- ・センター病院 一般再来：毎週金曜日（住吉）
- ・センター病院 こころのリスク診療枠：隔週月曜日（住吉）

(6) その他

メディア発信：「統合失調症：治療で寛解できる」；日刊ゲンダイ 2023年3月18日号（住吉）

#### IV. 研究業績

##### A. 刊行物

###### (1) 原著論文

- 1) Stickley A, Neligan A, Baburin A, Jasilionis D, Krumins J, Martikainen P, Kondo N, Sumiyoshi T, Shin JI, Oh H, Waldman K, Leinsalu M: Educational inequities in epilepsy mortality in the Baltic countries and Finland in 2000-2015. *Scientific Reports* 2022, 12:4597. <https://doi.org/10.1038/s41598-022-08456-x>
- 2) Shirama A, Stickley A, Kamio Y, Saito A, Haraguchi H, Wada A, Sueyoshi K, Sumiyoshi T: Emotional and behavioral problems in Japanese preschool children with subthreshold autistic traits: Findings from a Community-Based Sample. *BMC Psychiatry* 2022;22:499. doi: 10.1186/s12888-022-04145-1
- 3) Sumiyoshi T, Uchida H, Watanabe K, Oosawa M, Ren H, Moriguchi Y, Fujikawa K, Fernandez J: Validation and functional relevance of the short version of the perceived deficits questionnaire for depression in Japanese patients with major depressive disorder. *Neuropsychiatric Diseases and Treatment* 2022;18:2507-2517.
- 4) Yamada Y, Sueyoshi K, Yokoi Y, Inagawa T, Hirabayashi N, Oi H, Shirama A, Sumiyoshi T: Transcranial direct current stimulation on the left superior temporal sulcus improves social cognition in schizophrenia: An open-label study. *Frontiers in Psychiatry* 2022;13:862814. doi: 10.3389/fpsyg.2022.862814
- 5) Yamada Y, Okubo R, Tachimori H, Uchino T, Kubota R, Okano H, Ishikawa S, Horinouchi T, Takanobu K, Sawagashira R, Hasegawa Y, Sasaki Y, Nishiuchi M, Kawashima T, Tomo Y, Hashimoto N, Ikezawa S, Nemoto T, Watanabe N, Sumiyoshi T: Pharmacological interventions for social cognitive impairments in schizophrenia: A protocol for a systematic review and network meta-analysis. *Frontiers in Psychology* 2022;13:878829. doi:

- 10.3389/fpsyg.2022.878829.
- 6) Kubota R, Okubo R, Ikezawa S, Matsui M, Adachi L, Wada A, Fujimaki C, Yamada Y, Saeki K, Sumiyoshi C, Kikuchi A, Omachi Y, Takeda K, Hashimoto R, Sumiyoshi T, Yoshimura N. Sex differences in social cognition and association of social cognition and neurocognition in early course schizophrenia. *Frontiers in Psychology* 2 2022;13:867468.doi: 10.3389/fpsyg.2022.867468
  - 7) Stickley A, Shirama A, Inagawa T, Sumiyoshi T: Binge drinking in Japan during the COVID-19 pandemic: Prevalence, correlates and association with preventive behaviors. *Drug and Alcohol Dependence* 2022 May 1;234:109415. doi: 10.1016/j.drugalcdep.2022
  - 8) Sumiyoshi C, Ohi K, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Uno Y, Takahashi J, Morita K, Katsuki A, Yamamoto M, Okahisa Y, Sata A, Katsumoto E, Koeda M, Hirano Y, Nakataki M, Matsumoto J, Miura K, Hashimoto N, Makinodan M, Takahashi T, Nemoto K, Kishimoto T, Suzuki M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Transdiagnostic comparisons of intellectual abilities and work outcome in patients with mental disorders: A multicentre study. *BJPsych Open* 2022 Jun 3;8(4):e98. doi: 10.1192/bjo.2022.50
  - 9) Yamada Y, Inagawa T, Hirabayashi N, Sumiyoshi T: Emotion recognition deficits in psychiatric disorders as a target of non-invasive neuromodulation: a systematic review. *Clinical EEG and Neuroscience*. 2022;53:506-512.
  - 10) Shirama A, Stickley A, Kamio Y, Nakai A, Takahashi H, Saito A, Haraguchi H, Kumazaki H, Sumiyoshi T: Emotional and behavioral problems in Japanese preschool children with motor coordination difficulties: the role of autistic traits. *European Child & Adolescent Psychiatry* 2022 Jun;31(6):979-990
  - 11) Kumazaki H, Sumioka H, Muramatsu T, Yoshikawa Y, Shimaya J, Iwanaga R, Ishiguro H, Sumiyoshi T, Mumura M: The effectiveness of hugging a huggable device before having a conversation with an unfamiliar person for autism spectrum disorders. *Journal of Autism and Developmental Disorders* 2022;52:3294-3303
  - 12) Stickley A, Shirama A, Inagawa T, Ruchkin V, Koposov R, Johan I, Yosuke I, Sumiyoshi T: Attention-deficit/hyperactivity disorder symptoms, perceived stress, and suicidal ideation during the COVID-19 pandemic. *Frontiers in Psychiatry*. 2022 Nov 9;13:1008290. doi: 10.3389/fpsyg.2022.1008290.
  - 13) Stickley A, Shirama A, Kamio Y, Takahashi H, Inagawa T, Saito A, Sumiyoshi T: Association between autistic traits and binge drinking: Findings from Japan. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology* 2023;58:217-226
  - 14) Miskowiak KW, Seeberg I, Jensen MB, Balanza-Martinez V, Del Mar Bonnin C, Bowie CR, Carvalho AF, Dols A, Douglas K, Gallagher P, Hasler G, Lafer B, Lewandowski K, López-Jaramillo C, Martinez-Aran A, McIntyre RS, Porter RJ, Purdon S, Schaffer A, Stokes P, Sumiyoshi T, Torres IJ, Van Rheenen TE, Yatham LN, Young AH, Kessing LV, Burdick KE, Vieta E.: Randomised controlled cognition trials in remitted patients with mood disorders published between 2015 and 2021: A systematic review by the International Society for Bipolar Disorders Targeting Cognition Task Force. *Bipolar Disorders* 2022;24:354-374
  - 15) Sakaki M, Stefanie Meliss, Murayama K, Yomogida Y, Matsumori K, Sugiura A, Matsumoto M, Matsumoto K, "Motivated for near impossibility: How task type and reward modulate task enjoyment and the striatal activation for extremely difficult task." *Cognitive, Affective, & Behavioral Neuroscience*, 2022
  - 16) Matsumoto M, Abe H, Tanaka K, Matsumoto K, "Different types of uncertainty distinguished by monkey prefrontal neurons.", *Cerebral Cortex Communications*, 3(1) 2022

- 17) Ohnuma A, Narita Z, Tachimori H, Sumiyoshi T, Shirama A, Kan C, Kamio Y, Kim Y. Associations between media exposure and mental health among children and parents after the Great East Japan Earthquake. European Journal of Psychotraumatology, 2023; 14(1) 1-9.
- 18) Kumano H, Nobukawa S, Shirama A, Takahashi T, Takeda T, Ohta H, Kikuchi M, Iwanami A, Kato N, Toda N, Asymmetric Complexity in a Pupil Control Model with Laterally Imbalanced Neural Activity in the Locus Coeruleus: A Potential Biomarker for Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder. Neural computation, 2022; 34 (12) 2388-2407.
- 19) Yamada R, Miyashita K, Hashimoto T. M, Hironaka N, Takada K, Shigeta M, & Miyata H. Prevalence and Clinical Significance of Psychiatric Comorbidities with Gambling Disorder in 12 Clinical Settings in Japan. J Addict Med., 17(2), 140–146, 2023.
- 20) 山田理沙, 嶋根卓也, 近藤あゆみ, 米澤雅子, 松本俊彦: 薬物依存症回復支援施設の利用者を対象とした物質使用と HIV 感染リスクの高い性行動に関する研究. 日本エイズ学会誌, 24(3), 89-97, 2022.
- 21) Kino S, Stickley A, Arakawa Y, Saito M, Saito Y, Kondo N: Social isolation, loneliness, and their correlates in older Japanese adults. Psychogeriatrics 2023. <https://doi.org/10.1111/psych.12957>.
- 22) Kim JH, Kim JY, Lee S, Lee S, Stubbs B, Koyanagi A, Dragioti E, Jacob L, Carvalho AF, Radua J, Thompson T, Smith L, Oh H, Yang L, Fornaro M, Stickley A, de Pablo GS, Tizaoui K, Yon DK, Lee SW, Hwang J, Il Shin J, Fusar-Poli P. Environmental risk factors, protective factors, and biomarkers for postpartum depressive symptoms: an umbrella review. Neuroscience and Biobehavioral Reviews 2022;140:104761.
- 23) Ruchkin V, Isaksson J, Stickley A, Schwab-Stone M. Longitudinal associations between community violence exposure and mental health problems in inner-city youth: ethnicity and gender perspectives. Journal of Interpersonal Violence 2023 doi: 10.1177/08862605231158754
- 24) Do AD, Pham TTP, Nguyen CQ, Hoang DV, Fukunaga A, Stickley A, Yazawa A, Phan DC, Hachiya M, Jimba M, Huynh DV, Le HX, Do HT, Mizoue T, Inoue Y. Individual-level social capital is associated with depressive symptoms among middle-aged community dwellers in rural Vietnam: a cross-sectional study. BMJ Open 2022;12(12):e064998.
- 25) Kino S, Stickley A, Nishioka D, Ueno K, Saito M, Ojima T, Kondo N. Suicidal ideation and suicide attempts among older recipients of public welfare assistance in Japan. Journal of Epidemiology and Community Health 2022;76(10):873-879.
- 26) Saunderson JM, Stickley A, Sturidsson K, Koposov R, Sukhodolsky DG, Ruchkin V. Posttraumatic Stress and Perceived Interpersonal Provocation in Adolescents. Journal of Interpersonal Violence 2022; 38(3-4):3191-3214.
- 27) Inoue Y, Fukunaga A, Stickley A, Yazawa A, Pham TTP, Nguyen CQ, Hoang DV, Shrestha RM, Phan DC, Hachiya M, Huynh DV, Le HX, Do HT, Mizoue T. Association between parental absence during childhood and depressive symptoms in adulthood in rural Vietnam. Journal of Affective Disorders 2022;311:479-485.

## (2) 総説

- 1) 末吉一貴, 住吉太幹: 経頭蓋直流刺激と精神疾患治療: 展望と課題. 日本精神神経科診療所協会誌 48(2):131-35, 2022
- 2) 末吉一貴, 住吉太幹: 経頭蓋直電気刺激の統合失調症への応用: 認知機能の向上を目指して. 日

本生物学的精神医学会誌 33(2):82-86, 2022

- 3) 住吉太幹, 桶口悠子: 統合失調症と多価不飽和脂肪酸: 発症リスクの軽減に向けて. 医学のあゆみ 282:753-59, 2022
- 4) 白間綾: 自閉症的特性の精神病理と臨床的意義. 臨床精神医学 51(6) : 683-691, 2022.

(3) 著書

- 1) Yamada Y, Sumiyoshi T: Transcranial direct current stimulation and social cognition impairments of schizophrenia; Current knowledge and future perspectives. In Costa A., Villalba E. (Ed). Horizons in Neuroscience Research. Volume 46. Nova Science Publishers, New York, 2022, pp. 143-170
- 2) 山田悠至, 成田 瑞, 平林直次, 住吉太幹: 非侵襲的脳刺激による認知機能改善. 鬼塚俊明, 橋本亮太 編 「精神医学領域の論文を読みこなすキーワード 100!」, 新興医学出版, 東京, (p.122-23, 2022)

(4) 研究報告書

- 1) 宮田久嗣, 山田理沙: ギャンブル障害における精神科併存症の意義—治療反応性・経過におよぼす影響—. 令和元年—令和3年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「ギャンブル等依存症の治療・家族支援に関する研究：併存障害合併例の治療と支援」令和元年—令和3年度分担研究報告書. pp221-233, 2022.

(5) 翻訳

(6) その他

**B. 学会・研究会における発表**

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Higuchi Y, Sumiyoshi T, Tateno T, Nakajima S, Kaneko N, Mizukami Y, Akasaki Y, Sasabayashi D, Takahashi T, Suzuki M.: Event-related potentials as a feasible biomarker in the high-risk state for psychosis; an update. In Symposium “Mismatch negativity as a measure of synaptic plasticity and a biological marker in psychiatric disorders”, 9th Mismatch Negativity Conference, 2022, 9, 22 Fukushima (2022, 9, 21 - 23) (Invited lecture)
- 2) Sumiyoshi T, Higuchi Y.: Neurophysiology of mental diseases and early diagnosis. In symposium “Neurophysiology: Understanding the pathophysiology of mental diseases and early diagnosis”. WPA 2022 Thematic Congress on Intersectional Collaboration “New Horizons in Psychiatric Practice: Creative Ideas and Innovative Interventions” 2022, 11. 11 Malta, (2022, 11, 10 - 12) (Invited lecture)
- 3) 山田悠至, 住吉太幹: 統合失調症の社会認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の改善：シンポジウム「精神疾患患者の社会認知機能障害をどのように臨床応用するか」. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16 (6.16-6.18)
- 4) 桶口悠子, 立野貴大, 中島 英, 水上祐子, 赤崎有紀子, 住吉太幹, 高橋 努, 鈴木道雄: 早期サイコーシスにおけるミスマッチ陰性電位の特徴とアウトカムの検討. シンポジウム「統合失調症におけるミスマッチ陰性電位」. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16 (6.16-6.18)
- 5) 山田悠至, 住吉太幹: 統合失調症の認知機能障害に対する経頭蓋直流電気刺激の効果：シンポジウム「ニューロモデュレーションによる精神・神経疾患克服への領域横断的アプローチ」. BPCNPNPPP4 学会合同年会, 東京, 2022.11.4 (11.4-11.6)

- 6) 住吉太幹：気分障害における認知機能障害と治療抵抗性の相互作用：シンポジウム「治療抵抗性気分障害の本質と展望」. BPCNPNPPP4 学会合同年会, 東京, 2022.11.5 (11.4-11.6)
- 7) 山田悠至, 住吉太幹: 統合失調症の認知機能障害への経頭蓋直流刺激の応用: シンポジウム「経頭蓋直流刺激の精神疾患への応用」. 第 52 回日本臨床神経生理学会学術大会, 京都, 2022.11.25 (11.24-26)
- 8) 山田悠至, 末吉一貴, 横井優磨, 稲川拓磨, 平林直次, 白間綾, 住吉太幹: 経頭蓋直流(tDCS) の統合失調症の社会認知機能障害に対する改善効果. 第 52 回日本臨床神経生理学会学術大会, 京都, 2022.11.24 (11.24-26)
- 9) 住吉太幹: 機能的転帰の階層と測定. シンポジウム「統合失調症の認知・社会機能障害の簡易な測定法」. 第 17 回日本統合失調症学会学術大会, オンライン開催, 2023.3.26 (3.25-26)

(2) 一般演題

- 1) Sumiyoshi C, Yoshimura N, Ishisda I, Hidese S, Ohta M, Yomogida Y, Hori H, Matsui M, Reona Adachi R, Fujimaki C, Wada A, Yamada R, Kunugi H, Sumiyoshi T: Comparison of Verbal Fluency Performance in Bipolar Disorder and Schizophrenia: A Study from NCNP 22nd WPA World Congress of Psychiatry, 2022, 8, 4 (2022, 8, 3 - 6)
- 2) Yamada Y, Sueyoshi K, Yokoi Y, Inagawa T, Hirabayashi N, Shirama A, Sumiyoshi T; Transcranial direct current stimulation on the left superior temporal sulcus improves social cognition in schizophrenia: A pilot study. 32nd International Congress of Clinical Neurophysiology, 2022, 9, 6, Geneva, September (4-8).
- 3) Yamada R, Fujii T, Hattori K, Hori H, Matsumura R, Kurashimo T, Ishihara N, Yoshida, Sumiyoshi T, Kunugi H: Discrepancy between clinician-rated and self-reported depression severity is associated with adverse childhood experience, autistic-like traits, and coping styles in mood disorders. WPA 2022 Thematic Congress on Intersectional Collaboration "New Horizons in Psychiatric Practice: Creative Ideas and Innovative Interventions" 2022, 11. 10 Malta, (2022, 11, 10 - 12)
- 4) Iijima K, Komatsu M, Suzuki W, Narita Z, Yamamori T, Ichinohe N, Matsumoto M. "Cortical dynamics of efference copy revealed by large-scale cortical ECoG during marmoset vocalization." Neuroscience 2022, USA, 2022 年 11 月
- 5) Iijima K, Komatsu M, Suzuki W, Narita Z, Yamamori T, Ichinohe N, Matsumoto M. "Large-scale cortical ECoG reveals cortical dynamics of corollary discharge during spontaneous vocalization in marmosets." The 6th Japanese Meeting for Human Brain Imaging, 東京, 2022 年 9 月 17 日
- 6) Iijima K, Komatsu M, Suzuki W, Yamamori T, Ichinohe N, Matsumoto M. "Cortical dynamics of efference copy: Large-scale ECoG during marmoset vocalizations." Neuro2022, 沖縄, 2022 年 7 月 3 日
- 7) 信川 創, 熊野 開, 白間 綾, 高橋哲也, 武田俊信, 太田晴久, 菊知 充, 岩波 明, 加藤進昌, 戸田重誠 : 左右瞳孔径挙動に基づく ADHD の判別の検討と数理モデルによる神経活動推定. 日本成人期発達障害臨床医学会, 東京, 2022.10.22.
- 8) 白間 綾: 就学前児童における自閉症的特性が情緒と行動の問題に及ぼす影響. 日本心理臨床学会 第 41 回大会, オンライン, 2022.9.2-25.
- 9) Shirama A.: Predictive inference and pupil-linked arousal systems in schizophrenia. NEURO 2022, Okinawa, 2022.6.30-7.3.
- 10) Shirama A, Stickley A, Sumiyoshi T: Emotional and behavioral problems in Japanese preschool children with subthreshold autistic traits: findings from a community-based sample. ACONAMI (Asian Consortium of National Mental Health Institutes) 6th Annual

- Meeting, Singapore (Online), 2022.9.21.
- 11) Stickley A, Shirama A, Sumiyoshi T: Association between autistic traits and binge drinking: Findings from Japan. ACONAMI (Asian Consortium of National Mental Health Institutes) 6th Annual Meeting, Singapore (Online), 2022.9.21.
  - 12) 宮田久嗣, 山田理沙: ギャンブル障害における精神科併存疾患の臨床的意義. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16-18.
  - 13) Yamada R, Fuji T, Hattori K, Hori H, Matsumura R, Kurashimo T, Ishihara N, Yoshida S, Sumiyoshi T, Kunugi H.: Discrepancy between clinician-rated and self-reported depression severity is associated with adverse childhood experience, autistic-like traits, and coping styles in mood disorders. WPA 2022 Thematic Congress on Intersectional Collaboration "New Horizons in Psychiatric Practice: Creative Ideas and Innovative Interventions". Malta, 2022.11.9-11.
  - 14) 山田理沙, 和田 歩, Andrew Mark Stickley, 横井優磨, 住吉太幹: 統合失調症の精神病症状に対するセロトニン 1A 受容体部分作動薬の増強療法に関するメタ解析, 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
  - 15) 山田理沙, 和田 歩, Andrew Mark Stickley, 横井優磨, 住吉太幹: 統合失調症の精神病症状に対するセロトニン 1A 受容体部分作動薬の増強療法のメタ解析, 第 1 回 NPPR SEMINAR-The serotonin system and neuropsychopharmacology; Refinement of therapeutics, 東京, 2023.3.29.

#### (3) 研究報告会

#### (4) その他

### C. 講演

- 1) 住吉太幹: 統合失調症の日常生活機能向上と薬物療法—セロトニン伝達の役割—. 第 37 回城北臨床精神医学会. 東京, 2022.5.13
- 2) 住吉太幹: 早期精神病における認知機能障害の意義と評価:「コーヒーブレイクセミナー1」. 第 25 回日本精神保健・予防学会学術集会. 京都, 2022.11.12 (11.12-11.13)
- 3) 住吉太幹: 統合失調症の日常生活機能向上と薬物療法—セロトニン伝達の役割—. 広島県精神神経科診療所協会学術講演会. 広島市, 2023.2.2

### D. 学会活動

#### (1) 学会主催

- 1) Sumiyoshi T : The 1st Neuropsychopharmacology Reports Seminar, Tokyo, 2023.3.29
- 2) 住吉太幹 : 第 7 回 Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会・年次大会, オンライン開催, 2022.5.21
- 3) 松元まどか : 第 6 回ヒト脳イメージング研究会『The Next Wave of Neuroimaging』, ハイブリット開催, 2022.09.16-17.

#### (2) 学会役員

- 1) Sumiyoshi T : World Psychiatric Association Section on Psychoneurobiology, Chairman
- 2) Sumiyoshi T : EEG & Clinical Neuroscience Society, Councilor
- 3) Sumiyoshi T : International Society of Bipolar Disorder; Cognition Task Force, Member
- 4) 住吉太幹 : Cognitive Enhancement in Psychiatric Disorder 研究会, 理事
- 5) 住吉太幹 : 日本神経精神薬理学会 評議員, 編集委員

- 6) 住吉太幹：日本生物学的精神医学会 評議員
- 7) 住吉太幹：日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 8) 住吉太幹：日本統合失調症学会 評議員
- 9) 住吉太幹：日本うつ病学会 評議員
- 10) 住吉太幹：日本精神保健・予防学会 評議員

(3) 座長

- 1) Sumiyoshi T: Symposium “Neurophysiology: Understanding the pathophysiology of mental diseases and early diagnosis”, WPA 2022 Thematic Congress on Intersectional Collaboration, 2022, 11, 10 Malta (2022, 10, 10 - 12)
- 2) Sumiyoshi T: Free Oral Presentations Session 1, WPA 2022 Thematic Congress on Intersectional Collaboration, 2022, 11, 10 Malta (2022, 10, 10 - 12)
- 3) Sumiyoshi T: “Luncheon Seminar 2” (by Toshiaki Onitsuka), 9th Mismatch Negativity Conference, 2022, 9, 23 Fukushima (2022, 9, 21 - 23)
- 4) Sumiyoshi T: “Serotonin 5-HT1A receptor biased agonists: next generation treatments for serotonergic disorders” (by Adrian Newman-Tancredi), 1st Neuropsychopharmacology Reports Seminar, 2023 3, 29 Tokyo (2023 3, 29)
- 5) 松元まどか: 特別講演 2『Neural dynamics of the primate attention network』Sabine Kastner (Princeton University). 第6回ヒト脳イメージング研究会, ハイブリット開催, 2022.09.16-17.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) Sumiyoshi T: Clinical Psychopharmacology and Neuroscience, Section Editor
- 2) Sumiyoshi T: Neuropsychopharmacology Reports, Section Editor
- 3) Sumiyoshi T: Frontiers in Pharmacology, Associate Editor
- 4) Sumiyoshi T: Clinical EEG and Neuroscience, Editorial Board Member
- 5) Sumiyoshi T: Schizophrenia Research Cognition, Editorial Board Member

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 住吉太幹: 令和4年度第7回 NCNP国際セミナー / 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究会 / 病院 統合失調症早期診断・治療センター合同研究会, 2023.3.28
- 2) 住吉太幹: 令和4年度 Meet the Expert:「読める!医学英語論文の書き方」オンライン, 2023.2.9.

(2) 研修会講師

F. その他

- 1) 住吉太幹: 日本脳科学関連学会連合 産学連携諮問委員会 分散型臨床試験推進タスクフォース長
- 2) 松元まどか: 日米科学技術協力事業「脳研究」分野研究計画委員会委員

## 6. 精神薬理研究部

### I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、最終目標を「精神疾患の克服を目指した研究開発を行い、研究成果を目の前の医療に活かす」と定義し、当センターの事業計画における位置づけを明確化している。具体的には、わが国において重要な政策課題となっている精神疾患に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床研究を実施するとともに、非臨床ステージにおける創薬研究を中心とした精神神経疾患の治療介入法の研究開発を行っている。

精神薬理研究部には、分子精神薬理研究室と向精神薬研究開発室の2室が所属している。令和四年度常勤研究員は、部長の山田光彦、分子精神薬理研究室長の三輪秀樹、向精神薬研究開発室長の古家宏樹の3名であった。リサーチフェローは、上條諭志、中武優子の2名、科研費研究員は、山田美佐、川島友子、勝沼るり(10/1～)の3名であった。外来研究員は、國石 洋(学振PD～5/31)であった。併任研究員は、野田隆政(国立精神・神経医療研究センター病院第二精神科医長)、であった。客員研究員は、稻垣正俊(島根大学医学部精神医学講座教授)、岡 淳一郎(東京理科大学薬学部名誉教授)、川島義高(明治大学文学部心理社会学科臨床心理学専攻専任准教授)、木村英雄(9/1～山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部薬学分野教授)、木村由佳(9/1～山陽小野田市立山口東京理科大学薬学部研究員)、國石 洋(6/1～福井大学子どものこころの発達研究センター脳機能発達研究部門助教)、澤 幸祐(専修大学人間科学部心理学科教授)、白川修一郎(睡眠評価研究機構代表者)、関口正幸(東京理科大学薬学部薬学科客員研究員)、高原 円(福島大学共生システム理工学類准教授)、中嶋智史(鹿児島純心女子大学人間教育学部教育・心理学科講師)、西川 徹(昭和大学医学部薬理学講座客員教授)、吉澤一巳(東京理科大学薬学部疾患薬理学研究室教授)、米本直裕(順天堂大学医学部公衆衛生学特任准教授)であった。研究生は、大槻露華、小林桃子、後藤玲央、早田暁伸、寺尾真実、西岡玄太郎であった。科研費研究補助員は、松谷真由美、村松浩美であった。

### II. 研究活動

#### (1) 実験動物を利用した研究

國石研究員が筆頭著者として執筆した論文「Adolescent social isolation induces distinct changes in the medial and lateral OFC-BLA synapse and social and emotional alterations in adult mice」が *Neuropsychopharmacology* 誌に掲載された。この研究では、思春期マウスの社会経験の剥奪が、眼窩前頭皮質・扁桃体回路においてシナプス伝達の異常を引き起し、成熟後に社会性の低下や受動的ストレス反応の増加を引き起こす一因となることを明らかにした。この研究結果は、人間においてもネグレクトなどの不適切な成育環境が成長後に社会生活上の困難さを生じさせる仕組みの解明に役立つ。さらに、新しい予防・治療法開発を進める上で重要な知見を与えるものとして注目される。さらに、マウスの経皮的耳介迷走神経刺激(taVNS)モデルを確立し、情動行動評価を進めている。

また、当研究部では様々な共同研究をセンター内外で進めている。令和四年度には、神経研究所遺伝子疾患治療研究部(青木吉嗣部長)との共同研究の成果として、橋本泰昌先生による論文「Brain Dp140 alters glutamatergic transmission and social behaviour in the mdx52 mouse model of Duchenne muscular dystrophy」が *Progress in Neurobiology* 誌に掲載された。本研究では、恐怖応答遺伝子としても知られるDMD遺伝子の変異が、自閉症スペクトラム様の症状を起こし得ることを明らかにした。さらに、核酸医薬によるエクソン・スキップあるいはメッセンジャーRNA医薬により、脳ジストロフィンの発現を回復させることで、自閉症スペクトラム様の症状を治療できる可能性が示された。

また、東北大学(吉川雄朗先生の研究グループ)との共同研究との共同研究の成果として、大塚里奈先生による論文が *Neuropharmacology* 誌に、東京都医学総合研究所(岡戸晴生先生の研究グル

ープ）との共同研究の成果として、平井清華先生による論文が Molecular Psychiatry 誌に掲載された。また、筑波大学（船戸弘正先生の研究グループ）との共同研究の成果として、藤山知之先生による論文が Frontiers in Behavioral Neurosciences 誌に掲載された。

これらの実験動物を利用した研究の成果を臨床研究と双方向にトランスレーションすることで、これまで困難とされてきた向精神薬の創薬研究をより合理的に進めることができるものと期待される。

## (2) 臨床研究

精神薬理研究部では、実臨床の改善の基礎となる臨床研究を実施している。

### 【DEPRESSD Project】

カナダ McGill 大学の Brett D. Thombs 教授が主宰する国際共同研究である DEPRESSD Project では、システムティックレビューにより作成された大型データベースについて、参加者個人のデータ (IPD:Individual Participant Data) に基づくメタ解析を行い、うつ病スクリーニング評価指標の標準化に資する研究を進めている。現在、副次解析研究が精力に続けられている。DEPRESSD Project から得られてエビデンスが日々の診療に役立つことが期待されている。

### 【HOPE Project】

精神疾患を伴う自殺未遂者ケアに関する先行研究の再評価、精神疾患を伴う自殺未遂者に対するケース・マネジメントの効果についての検討、ケース・マネジメント手法の標準化と人材育成プログラムの事業化に関する研究を進めている。令和四年度は、コロナ禍にあってリモート開催を余儀なくされた「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会（主催：日本自殺予防学会）」の効果を確認するため、研修受講者を対象とした前後比較研究を実施した。また、「The HOPE program standards (英語版)」を当研究部のホームページにて引き続き公開している。諸外国においても、救急医療施設を起点とした自殺未遂者支援の輪が広がればと期待している。

### 【taVNS first 試験】

令和四年度は、経皮的耳介迷走神経刺激 (taVNS) 研究では、ドイツより未承認医療機器であるデバイスを輸入し、行動医学研究部の関口敦室長らとの共同研究として、特定臨床研究「健常成人を対象とした経皮的耳介迷走神経刺激の客観的評価指標の探索」(taVNS first 試験 : jRCTs032220332) を実施した。この研究は、健常成人を対象に、クロスオーバーデザインによるランダム化比較試験を行い、taVNS の客観的評価指標について探索的に検討することを目的としている。本研究の成果として、将来、患者を対象とした効果検証試験を実施するために必須となる予備的データを得ることが可能となる。

## III. 社会的活動に関する評価

### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

市民講座、保健所、地方自治団体等による講演会、マスメディア等にて普及啓発活動を行った。

### (2) 専門教育面における貢献

日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医・日本臨床薬理学会の専門医・指導医、日本薬理学会の薬理学エデュケーターとして教育活動を実施した。（山田光彦）

### (3) 保健医療行政政策に関する研究・調査、委員会等への貢献

- ・厚生労働省自殺未遂者等支援拠点医療機関整備事業評価委員会委員。（山田光彦）
- ・厚生労働省健康増進総合支援システム (e-ヘルスネット) 情報専門委員会委員。（山田光彦）
- ・診療報酬評価「自殺企図の患者に対する継続的な指導の評価」の算定要件となる研修会（日本自殺予防学会主催）運営委員。（山田光彦）

## (4) センター内における臨床的活動

日本臨床精神神経薬理学会専門医制度の研修施設である NCNP 病院において専門医・指導医として、病院レジデント等への教育及び指導を実施。（山田光彦）

## (5) その他

昭和大学医学・医療振興財団より、山田部長が、第9回昭和上條医療賞を受賞した。本顕彰は、地域保健医療の実践及び教育の分野において創造的かつ先駆的諸活動を行い、大きな成果を挙げた個人またはグループを顕彰することを目的としている。足掛け18年に及ぶ「自殺未遂者支援の社会実装プロジェクト」が評価された。

**IV. 研究業績****A. 刊行物**

## (1) 原著論文

- 1) Kuniishi H, Nakatake Y, Sekiguchi M, Yamada M: Adolescent social isolate on induces distinct changes in the medial and lateral OFC-BLA synapse and social and emotional alterations in adult mice. *Neuropsychopharmacology* 47(9):1597-1607, 2022.
- 2) Fujiyama T, Takenaka H, Asano F, Miyanishi K, Hotta-Hirashima N, Ishikawa Y, Kanno S, Seoane-Collazo P, Miwa H, Hoshino M, Yanagisawa M, Funato H: Mice lacking cerebellar cortex and related structures show a decrease in slow-wave activity with normal Non-REM Sleep amount and sleep homeostasis. *Front Behav Neurosci* 16:910461, 2022.
- 3) Otsuka R, Naganuma F, Nakamura T, Miwa H, Nakayama-Naono R, Matsuzawa T, Komatsu Y, Sato Y, Takahashi Y, Tatsuoka-Kitano H, Yanai K, Yoshikawa T: Contribution of astrocytic histamine N-methyltransferase to histamine clearance and brain function in mice. *Neuropharmacology* 212:109065, 2022.
- 4) Harel D, Levis B, Sun Y, Fischer F, Ioannidis JPA, Cuijpers P, Patten SB, Ziegelstein RC, Markham S, Benedetti A, Thombs BD; DEPRESsion Screening Data DEPRESSD PHQ Collaboration (Yamada M) : External validation of a shortened screening tool using individual participant data meta-analysis: A case study of the Patient Health Questionnaire-Dep-4. *Methods* 204:300-311, 2022.
- 5) Hashimoto Y, Kuniishi H, Sakai K, Fukushima Y, Du X, Yamashiro K, Hori K, Imamura M, Hoshino M, Yamada M, Araki T, Sakagami H, Takeda S, Itaka K, Ichinohe N, Muntoni F, Sekiguchi M, Aoki Y: Brain Dp140 alters glutamatergic transmission and social behaviour in the mdx52 mouse model of duchenne muscular dystrophy. *Prog Neurobiol* 216:102288, 2022.
- 6) Miwa H, Kobayashi K, Hirai S, Yamada M, Watanabe M, Okado H, Yanagawa Y: GAD67-mediated GABA synthesis and signaling impinges on directing basket cell axonal projections toward purkinje cells in the cerebellum. *Cerebellum* 21(6):905-919, 2022.
- 7) Kobayashi-Tanabe M, Furuie H, Yamada M, Yamada M: Characterization of a WD-repeat family protein WDR3 in the brain of WDR3 hetero knockout mice. *Brain Res* 1800:148188, 2022.
- 8) Hirai S, Miwa H, Shimbo H, Nakajima K, Kondo M, Tanaka T, Ohtaka-Maruyama C, Hirai S, Okado H: The mouse model of intellectual disability by ZBTB18/RP58 haploinsufficiency shows cognitive dysfunction with synaptic impairment. *Mol Psychiatry* 10.1038/s41380-023-01941-3, 2023. online ahead of print.
- 9) Tachikawa H, Takahashi S, Nemoto K, Yonemoto N, Oda H, Miyake Y, Hirayasu Y, Arai T, Kawanishi C : Predictive factors for recurrent suicide attempts: Evidence from the

- ACTION-J study. PCN Rep 1(2) e7, 2022.
- 10) Suematsu Y, Kuwano T, Yamashita M, Tsutsui H, Sato N, Ikeda T, Nagao K, Yonemoto N, Tahara Y, Saku K, Miura SI, (Jcs-Ress Group): Adult influenza epidemic is associated with out-of-hospital cardiac arrest: From the All-Japan Utstein Registry, a prospective, nationwide, population-based, observational registry. Medicine (Baltimore) 17;101(24):e29535, 2022.
  - 11) GBD 2019 Human Resources for Health Collaborators (Yonemoto N) : Measuring the availability of human resources for health and its relationship to universal health coverage for 204 countries and territories from 1990 to 2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet 399(10341):2129-2154, 2022.
  - 12) GBD 2020 Alcohol Collaborators (Yonemoto N) : Population-level risks of alcohol consumption by amount, geography, age, sex, and year: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2020. Lancet 400(10347):185-235, 2022.
  - 13) GBD 2019 Diabetes and Air Pollution Collaborators (Yonemoto N) : Estimates, trends, and drivers of the global burden of type 2 diabetes attributable to PM 2·5 air pollution, 1990-2019: an analysis of data from the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Planet Health 6(7):e586-e600, 2022.
  - 14) Kimura Y, Ohtsu H, Yonemoto N, Azuma N, Sase K: Endovascular versus open repair in patients with abdominal aortic aneurysm: a claims-based data analysis in Japan. BMJ Surg Interv Health Technol 4(1):e000131, 2022.
  - 15) GBD 2019 Adolescent Transport and Unintentional Injuries Collaborators (Yonemoto N) : Adolescent transport and unintentional injuries: a systematic analysis using the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Public Health 7(8):e657-e669, 2022.
  - 16) Fujioka I, Ohtsu H, Yonemoto N, Sase K, Murashima A: Association between prenatal exposure to antidepressants and neonatal morbidity: An analysis of real-world data from a nationwide claims database in Japan. J Affect Disord 310:60-67, 2022.
  - 17) GBD 2019 Cancer Risk Factors Collaborators (Yonemoto N) : The global burden of cancer attributable to risk factors, 2010-19: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet 400(10352):563-591, 2022.
  - 18) Ohtsu H, Shimomura A, Miyazaki S, Yonemoto N, Ueda S, Shimizu C, Sase K: Cardiotoxicity of adjuvant chemotherapy with trastuzumab: a Japanese claim-based data analysis. Open Heart 9(2):e002053, 2022.
  - 19) GBD 2019 Hepatitis B Collaborators (Yonemoto N) : Global, regional, and national burden of hepatitis B, 1990-2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Gastroenterol Hepatol 7(9):796-829, 2022.
  - 20) Schmidt CA, Cromwell EA, Hill E, Donkers KM, Schipp MF, Johnson KB, Pigott DM; LBD 2019 Neglected Tropical Diseases Collaborators (Yonemoto N), Hay SI: The prevalence of onchocerciasis in Africa and Yemen, 2000-2018: a geospatial analysis. BMC Med 20(1):293, 2022.
  - 21) Local Burden of Disease Household Air Pollution Collaborators (Yonemoto N) : Mapping development and health effects of cooking with solid fuels in low-income and middle-income countries, 2000-18: a geospatial modelling study. Lancet Glob Health 10(10):e1395-e1411, 2022.
  - 22) GBD 2019 LRI Collaborators (Yonemoto N) : Age-sex differences in the global burden of lower respiratory infections and risk factors, 1990-2019: results from the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Infect Dis 22(11):1626-1647, 2022.

- 23) Haeuser E, et al. Among authors: Yonemoto N: Mapping age- and sex-specific HIV prevalence in adults in sub-Saharan Africa, 2000-2018. BMC Med 20(1):488, 2022.
- 24) GBD 2019 Healthcare Access and Quality Collaborators (Yonemoto N) : Assessing performance of the Healthcare Access and Quality Index, overall and by select age groups, for 204 countries and territories, 1990-2019: a systematic analysis from the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet Glob Health 10(12):e1715-e1743, 2022.
- 25) Robert C Reiner Jr 1 2; LBD Triple Burden Collaborators (Yonemoto N) ; Simon I Hay: The overlapping burden of the three leading causes of disability and death in sub-Saharan African children. Nat Commun 13(1):7457, 2022.
- 26) GBD 2019 Antimicrobial Resistance Collaborators (Yonemoto N) : Global mortality associated with 33 bacterial pathogens in 2019: a systematic analysis for the Global Burden of Disease Study 2019. Lancet 400(10369):2221-2248. 2022.
- 27) Yonemoto N, Kawashima Y: Help-seeking behaviors for mental health problems during the COVID-19 pandemic: A systematic review. J Affect Disord 323:85-100, 2023.

(2) 総説

- 1) 山田光彦 : 情動ストレス応答から探る新規治療標的. 日薬理誌(158): 34,2023.
- 2) 中武優子, 古家宏樹, 山田光彦 : マウスの社会的敗北場面を利用した心理的ストレス負荷モデル. 日薬理誌 (158): 39-42, 2023.
- 3) 國石 洋, 山田光彦 : 思春期の社会的経験剥奪による眼窩前頭皮質・扁桃体経路の小領域特異的なシナプス機能変化. 日薬理誌(158): 47-50, 2023.

(3) その他

- 1) 山田光彦, 古家宏樹 : NMDA 受容体 NR2 サブユニットのラット新生仔期における機能阻害は空間作業記憶の発達を障害する. 精神神経学雑誌 124(4): S-540, 2022.
- 2) 中武優子, 古家宏樹, 山田光彦 : 特集 マウスの社会的敗北場面を利用した心理的ストレス負荷モデル. 日本薬理学雑誌 寄稿
- 3) 古家宏樹 : 新生仔期の NR2 含有 NMDA 受容体の機能阻害は成体ラットの空間作業記憶障害を引き起こす. Neuroscience News 1: 27-29, 2023.02.

**B. 学会・研究会における発表**

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
  - 1) Miwa H: Energising research confidence in Japan. The Campus Live Japan. Tokyo, 2022.12.13-14.
  - 2) 中武優子 : 視覚情報を利用したマウスの新規ストレスモデル. BPCNPNPPP4 学会合同年会, 東京, 2022.11.4-6.
  - 3) 國石 洋, 山田光彦, 松崎秀夫 : 思春期の社会経験剥奪による内側・外側眼窩前皮質-扁桃体投射における経路選択性なシナプス機能の変化と社会性・情動行動の制御. 第 128 回日本解剖学会総会・全国学術集会, 宮城, 2023.3.18-20.

(2) 一般演題

- 1) Inoue YU, Miwa H, Hori K, Kaneko R, Morimoto Y, Koike E, Asami J, Kamijo S, Yamada M, Hoshino M, Inoue T: Targeting neurons with functional oxytocin receptors: A novel set of simple knock-in mouse lines for oxytocin receptor visualization and manipulation. San diego, Neuroscience 2022, 2022.11.12-16.
- 2) 古家宏樹, 諸園正敏, 岡田 俊, 山田光彦 : 新生仔期 NMDA 受容体慢性遮断はラットの食餌行

動の社会的促進を障害する。: 第 40 回日本生理心理学会大会 日本感情心理学会第 30 回大会  
合同大会 2022, 兵庫, 2022.5.27-29.

- 3) 山田光彦, 古家宏樹: NMDA 受容体 NR2A サブユニットのラット新生仔期における機能阻害は空間作業記憶の発達を阻害する。第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16-18.
- 4) 中武優子, 古家宏樹, 井上・上野由紀子, 井上高良, 吉澤一巳, 山田光彦: 前部島皮質のオキシトシンシングナルは社会的ストレスの伝達を仲介する。NEURO2022 第 45 回日本神経科学大会, 第 65 回日本神経化学会大会 第 32 回日本神経回路学会大会, 沖縄, 2022.6.30-2022.7.3.
- 5) 國石 洋, 竹内絵理, 関口正幸, 山田光彦: マウス耳介迷走神経電気刺激の文脈的恐怖消去学習に対する効果。NEURO2022 第 45 回日本神経科学大会, 第 65 回日本神経化学会大会, 第 32 回日本神経回路学会大会, 沖縄, 2022.6.30-7.3.
- 6) 山田光彦, 川島義高: 診療報酬評価「救急患者精神科継続支援料」の改訂ポイントから考えるケースマネージャーによる自殺企図患者支援の重要性。第 19 回日本うつ病学会総会 第 5 回日本うつ病リワーク協会年次大会, 大分, 2022.7.14-17.
- 7) 國石 洋: 離乳後の社会経験剥奪によるマウス眼窩前頭皮質・扁桃体回路の機能的变化。第 14 回自閉症学研究会, 東京, 2022.7.24.
- 8) 三輪秀樹: 統合失調症 GABA 仮説に基づく動物モデルと妥当性評価指標—ガンマオシレーションとスピンドル波—第 73 回日本薬理学会北部会 次世代薬理学セミナー, 北海道, 2022.9.18.
- 9) 出利葉健太, 鶴飼 渉, 西村恵美, 橋本恵理, 山田美佐, 橋口華子, 廣瀬奨真, 古瀬研吾, 石井貴男, Marco A. Riva, 河西千秋: 難治性精神疾患の社会性機能回復: 幹細胞と加味帰脾湯を用いた社会性/共感性の行動・脳神経回路変動解析。第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4-6.
- 10) 古家宏樹: 精神疾患の発症リスク形成におけるグルタミン酸 NMDA 受容体の時期特異的関与。第 96 回日本薬理学会年会 第 43 回日本臨床薬理学会学術総会(同時期開催) 2022.11.30-12.3.
- 11) 國石 洋: 思春期の社会経験剥奪は眼窩前頭皮質・扁桃体シナプス機能と社会性・情動行動の異常を引き起こす。第 96 回日本薬理学会年会 第 43 回日本臨床薬理学会学術総会(同時期開催) 2022.11.30-12.3.
- 12) 國石 洋, 竹内絵理, 関口正幸, 山田光彦, 松崎秀夫: マウス耳介神経刺激による文脈的恐怖消去学習と内側前頭前野シナプス伝達への効果。第 49 回日本脳科学会, 福岡, 2022.12.3-4.

### (3) 研究報告会

- 1) 中武優子, 古家宏樹, 山田光彦: 社会的ストレスにより誘発される行動変化とその神経基盤。ゲノム編集班会議, 東京, 2022.10.8.
- 2) 山田光彦: 令和 4 年度精神・神経疾患研究開発費中間・事後評価委員会「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」, 東京, 2023.1.19.
- 3) 三輪秀樹, 平井清華, 新保裕子, 中島啓介, 近藤真啓, 田中智子, 丸山千秋, 平井志伸, 岡戸晴生: ZBTB18/RP58 ハプロ不全による知的障害モデルマウスはシナプス機能不全を伴う認知機能障害を示す。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 4 年度研究報告会(第 34 回), 東京, 2023.3.20.
- 4) 上條諭志, 山田光彦, 三輪秀樹: マウス発達期小脳プルキンエ細胞の活動抑制による自閉症スペクトラム障害様表現型の探索。国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和 4 年度研究報告会(第 34 回), 東京, 2023.3.20.

### (4) その他

- 1) ワークショップ「新規遺伝子治療法の開発: PK/PD の特徴から考える臨床試験実施の工夫」第 96 回日本薬理学会年会 第 43 回日本臨床薬理学会学術総会(同時期開催) 2022.11.30-12.3.

- 2) 上條諭志: 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 令和4年度研究報告会(第34回)  
オンライン, 2023.3.20. 青申賞受賞

**C. 講演**

- 1) 三輪秀樹: 統合失調症 GABA 仮説に基づく動物モデルと妥当性評価指標一ガンマオシレーションとスピンドル波. 計画論の精神医学研究会. 主催前田貴記先生 慶應義塾大学医学部精神・神経科学教室, 2022.4.28.

**D. 学会活動**

(1) 学会役員

- 1) 山田光彦: 日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦: 日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦: 日本神経精神薬理学会 評議員
- 4) 山田光彦: 日本神経精神薬理学会 TMS 委員会/薬事委員会 委員
- 5) 山田光彦: 日本自殺予防学会 繼続支援研修委員会 委員
- 6) 山田光彦: 躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事

(2) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦: 分子精神医学 編集同人

**E. 研修**

(1) 研修企画・講師

- 1) 救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」令和4年度第1回研修会(zoomによるオンライン研修) 2022.6.4-5.
- 2) 「救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」令和4年度第2回研修会(zoomによるオンライン研修) 2022.8.27-28.
- 3) 救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」令和4年度第3回研修会(zoomによるオンライン研修) 2022.10.15-16.
- 4) 救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」令和4年度第4回研修会(zoomによるオンライン研修) 2022.12.17-18.
- 5) 「救急患者精神科継続支援料」にかかる要件研修「自殺再企図防止のための救急患者精神科継続支援研修会」令和4年度第5回研修会(zoomによるオンライン研修) 2023.3.4-5.

**F. その他**

- 1) 山田光彦: 第9回昭和上條医療賞受賞. 公益財団法人昭和大学医学・医療振興財団, 2022.12.19.
- 2) 精神薬理研究部: 「こころの仕組みを理解したい! ~若手研究者の毎日~」世界脳週間 2022, 東京, 2023.2.18.

## 7. 精神疾患病態研究部

### I. 研究部の概要

精神疾患病態研究部では、精神疾患の克服とその障害の支援のための先駆的研究活動を展開している。精神疾患の生物学的な研究と精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動をより発展させて全国レベルで展開することを目標としている。精神疾患の生物学的な研究は、認知社会機能、脳神経画像、神経生理機能などの中間表現型及びゲノムなどの生体試料を用いて、統合失調症、気分障害、発達障害などの幅広い精神疾患について疾患横断的に検討することにより、病態を解明し、新たな診断法・治療法の開発を行っている。この研究は、当研究部においてのみ行うものではなく、国立精神・神経医療研究センターの他の研究部門および日本全国42の精神疾患関連研究機関の共同研究体制である COCORSO (Cognitive Genetics Collaborative Research Organization : 認知ゲノム共同研究機構) を運営しオールジャパン体制で遂行している。精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動は、EGUIDE プロジェクト (Effectiveness of GUIdeLine for Dissemination and Education in psychiatric treatment : 精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究) という全国45大学を含む282医療機関の共同研究組織を牽引し、全国でガイドラインの講習を行い、その効果検証を行っている。

令和4年度の人員構成は次のとおりである。部長：橋本亮太、室長：三浦健一郎、松本純弥、リサーチフェロー：長谷川尚美、科研費心理療法士：田村友里江、小池春菜、新谷茉莉果、瀧浪貴夢ガーネヴィカス、科研費研究補助員：木村哲也、北川航、山縣眞美子、伊藤颯姫、宮山未来乃、河上優稀、併任研究員：久保田智香、佐藤英樹、宮川希、柏木宏子、竹田康二、高野晴成、石川夏絵、林大祐、一戸紀孝、渡邊恵、樋口早子、五十嵐俊、西村晃萌、外来研究員15名、客員研究員58名、研究生16名。

### II. 研究活動

#### A. 精神疾患の病態解明と診断法・治療法の開発研究

##### 1) 精神疾患の脳神経画像研究（松本、三浦、橋本、高野、伊藤、宮山、宮川）

精神疾患の脳神経画像研究は、COCORSO の主なメンバーである大阪大学（藤本、山森、安田客員研究員）、生理学研究所（福永客員研究員）、筑波大学（根本客員研究員）、東京大学（岡田客員研究員）、北海道大学（橋本直樹客員研究員）、山口大学（中川客員研究員）、京都大学（宮田客員研究員）、富山大学（高橋客員研究員）、名古屋大学（尾崎客員研究員）、岐阜大学（大井客員研究員）、九州大学（鬼塚客員研究員）、昭和大学（中村客員研究員）、徳島大学（沼田客員研究員）、産業医科大学（吉村客員研究員）、奈良医科大学（牧之段客員研究員）、慈恵医科大学（小高客員研究員）、広島大学、日本医科大学などの多施設共同研究にて行っている。統合失調症を中心とした三次元脳構造画像解析、拡散テンソル画像解析、安静時機能的MRI解析などを行っている。また、脳病態統合イメージングセンター（IBIC）臨床脳画像研究部の高野部長と共に、Integrative Brain Imaging Support System (IBISS : アイビス) による脳MRI画像データの品質評価及び管理システムの構築を行っている。国際的な脳神経画像の巨大コンソーシアムである ENIGMAとの共同研究も引き続き行っている。統合失調症において健常者より体積が大きいことが知られている淡蒼球体積が統合失調症患者の陽性症状と正の相関があることを報告した（橋本、三浦、宮山、松本、Ito et al, Psychiatry Clin Neurosci, 2022）。これらの研究により、BPCNPNPPP4 学会合同年会優秀演題発表賞を松本室長が受賞し、今年度は3編の論文成果があった。

**2) 精神疾患の眼球運動研究（三浦、松本、橋本）**

精神疾患の眼球運動研究は、大阪大学（藤本、山森、安田客員研究員）、名古屋大学（尾崎客員研究員）、九州大学（鬼塚客員研究員）、東京大学、奈良医科大学（牧之段客員研究員）、北海道大学（橋本直樹、吉田、岡田客員研究員）、岐阜大学（大井客員研究員）、徳島大学（沼田客員研究員）、京都大学（宮田客員研究員）、生理学研究所（福永客員研究員）などとの多施設共同研究にて行っている。統合失調症を中心にフリービューリング課題、滑動性追跡眼球運動課題、注視課題などから得られた眼球運動の特徴、および眼球運動異常を示す眼球運動スコアの解析や、眼球運動の基礎研究などを行った。統合失調症患者の視覚的注意に健常者と異なる性質が見られること、靈長類モデルが統合失調症様の眼球運動異常を示すこと等の成果が得られた（橋本, Polyakova et al, *Front Neurosci*, 2022）。さらに、日本医療研究開発機構（AMED）医工連携・人工知能実装研究事業（研究課題：AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発）の支援のもと、眼球運動と認知機能を用いた統合失調症の診断マーカーの社会実装化を企業と、アカデミアの9医療機関の共同研究にて推進している。眼球運動と認知機能の組合せが統合失調症の良い診断マーカーなり得ること等の成果が得られた。また、医療現場で実施可能なタブレット機器にて簡便に測定できる医療機器プログラム開発を進め、タブレット実装を行い、実際に健常者や統合失調症患者で測定を行った。今後、取得したデータをもとに検査機器としての完成度を高め、特定臨床研究に進めていく予定である。

**3) 認知社会機能プロジェクト（橋本、松本、三浦、伊藤）**

広く診療で使えるような統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法を開発し、2000例程度のデータをCOCOROにて集積して解析し、普及のため各地で講習会などを行っている。認知機能障害は、簡略版WAISで測定する推定知能とJapanese Adult Reading Test（JART）で測定する推定病前知能の差にて算出したものである。2023年3月の第17回日本統合失調症学会で、統合失調症の認知社会機能障害の簡易な測定法のワークショップを児童・予防精神医学研究部の住吉部長と共に行った。統合失調症だけでなく、双極性障害、大うつ病性障害、自閉スペクトラム症をまとめて、認知機能障害と週当たりの就労時間を用いてデータ駆動型に分類すると、4つのクラスターに分類され、すべての診断がクラスター間で不均一に分布していることが示された。この結果は、精神障害者の機能回復を支援するための診断特異的な戦略の重要性を示唆している（橋本、松本、三浦, Sumiyoshi et al, *BJPsych Open*, 2022）。

**4) 精神疾患のゲノム・生体試料研究（橋本、松本、三浦）**

精神疾患のゲノム・生体試料研究は、国内においては大阪大学（藤本、山森、安田、橋本 均客員研究員）、名古屋大学（尾崎客員研究員）、東京農業大学（中澤客員研究員）、東京大学（菊地客員研究員）、徳島大学（沼田客員研究員）、岐阜大学（大井客員研究員）、奈良医科大学（牧之段客員研究員）、東京都医学研究所（新井客員研究員）、福島県立医科大学などの共同研究、そして国外においては双極性障害におけるリチウムの治療反応性の遺伝学研究のコンソーシアムであるConLiGenやENIGMAとの共同研究を中心に行っている。今年度は名古屋大学の精神疾患のコピー数多型（copy number variation: CNV）の遺伝学的研究の3編を含むゲノム研究が5編の研究成果が得られた。

**5) 精神疾患の分子メカニズム研究（橋本、松本）**

東京農業大学（中澤客員研究員）と東京大学（菊地客員研究員）との共同研究にて、引き続き日本医療研究開発機構（AMED）脳とこころの研究推進プログラム精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト（研究課題：iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究）を行っている。統合失調症に認められる3q29欠失や自閉スペクトラム症で認められるPOGZ変異のiPS細胞における機能解析を行い、徐々に成果が得ら

れている。神経研究所微細構造研究部（一戸部長：併任）と自閉スペクトラム症に関する共同研究を引き続き行っている。

#### 6) 司法精神医学領域の生物学的研究（柏木、竹田、三浦、松本、橋本）

暴力の既往のある統合失調症群、暴力の既往のない統合失調症群、健常者データ 1600 例以上を COCORS データベースから抽出し、脳画像や眼球運動との関連を検討している。

### B. 精神科医療の普及・均てん化に関する研究

#### 1) 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動：EGUIDE プロジェクト（長谷川、久保田、佐藤、柏木、三浦、松本、橋本）

EGUIDE プロジェクトは、精神科医に対してガイドラインの教育の講習を行い、ガイドラインの効果を検証する社会実証研究である。EGUIDE プロジェクトの主なメンバーである杏林大学（渡邊客員研究員）、北里大学（稻田客員研究員）、獨協医科大学（古郡客員研究員）、兵庫医科大学（山田客員研究員）、福岡大学（堀客員研究員）など、24 名の客員研究員と共に共同研究を実施している。対象とするガイドラインは、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインであり、日本神経精神薬理学会、日本うつ病学会、日本臨床精神神経薬理学会、日本精神神経学会のバックアップを受けて行っている。2016 年に開始した EGUIDE プロジェクトは、本年度 45 大学 282 医療機関が参加する巨大なプロジェクトになり、毎年 10 回以上の講習会を全国で行い、延べ 3500 名以上の精神科医が講習を受講した。EGUIDE プロジェクトにおける検証活動は、講習受講直後のガイドラインの理解度の向上、その後のガイドラインを遵守した治療行動調査における実践度の向上、処方行動を診療の質 (Quality Indicator: QI) という形で測定し、例えば統合失調症患者の退院時の抗精神病薬単剤治療率というような QI を設定し、経時的に測定することにより、講習の効果の有無についての検討を行った。たった一日の講習を受けることにより統合失調症とうつ病の両方のガイドラインに対する理解度が顕著に向かることを昨年度論文報告し、そのガイドラインの実践度も顕著に向かし、それが 2 年間持続することを示した（長谷川、松本、三浦、橋本、Yamada et al, BJPsych Open, 2022）。また、この講習を受講した受講者の満足度は非常に高いことも報告した（長谷川、松本、三浦、橋本、Ogasawara et al, Neuropsychopharmacol Rep, 2022）。更に、Corvid 感染症の影響で、対面講習からウェブ講習に切り替えたが、ウェブ講習においても対面講習と同様に理解度及び満足度が得られることを示した（長谷川、松本、三浦、橋本、Iida et al, Neuropsychopharmacol Rep, 2022）。

クロザピンは治療抵抗性統合失調症に唯一適応のある抗精神病薬であり、世界中のガイドラインでも治療抵抗性統合失調症＝クロザピン治療とされている。しかし、日本でのクロザピン治療率は諸外国の概ね 1/10 程度であり、普及が必要とされている。統合失調症の抗精神病薬単剤治療率は全国平均が約 57% であるが、クロザピンを処方されている治療抵抗性統合失調症では約 90% となっており、他の向精神薬の併用も少なく、治療抵抗性統合失調症の治療としてクロザピンを用いることがより適切な治療につながる可能性が示唆された（長谷川、松本、三浦、橋本、Ochi et al, Int J Neuropsychopharmacol, 2022）。抗精神病薬の錐体外路系副作用に用いられることがある抗コリン薬の退院時の処方率は全国で約 30% となっており諸外国より高いだけでなく、0~67% と病院によりばらつきが多く（長谷川、松本、三浦、橋本、Hori et al, Front Psychiatry, section Psychopharmacology, 2022）。入院前に抗コリン薬を処方されていて退院時に中止していた患者において、退院時に抗精神病薬単剤治療率が高く、第二世代抗精神病薬の処方割合が高いことが見いだされた（長谷川、松本、三浦、橋本、Okada et al, J Clin Psychopharmacol, 2022）。

統合失調症とうつ病両方において、電気けいれん療法を受けた患者では退院時の抗不安薬・睡眠薬の使用率が低いことなどを見出した（長谷川、松本、三浦、橋本、Tsuboi et al, Psychiatry

Clin Neurosci, 2023). また、頓用薬はしばしば臨床場面で用いられているが、有用性のエビデンスに乏しく統合失調症においてもうつ病においてもガイドラインで推奨されていない。この専用薬の実態を把握し、向精神薬の専用処方が多いこととその向精神薬の併用の多さが相関することを見出した（長谷川、松本、三浦、橋本, Kyou et al, Ann Gen Psychiatry, 2022）。このことは、専用処方から併用処方につながっていく可能性を示唆している。

うつ病治療ガイドラインでは重症度によって推奨する治療が異なるが、今までに重症度をどれぐらい判断しているかという実態調査はなかった。EGUIDE プロジェクトでは、全国の重症度の記載率が約 57% であり、病院ごとに 0~100% と大きくばらついており、均てん化が必要なことを示した（長谷川、松本、三浦、橋本, Muraoka et al, Asian Jurnal of psychiatry, 2022）。

上記のように日本の精神科診療実態調査では、全国の平均値や病院ごとの平均値を調べて、均てん化の必要性を見出した。一方で、一人一人の患者については、どれぐらいガイドラインに準拠した治療を行っているかを評価する方法ではなく、ガイドランの全ての臨床疑問を網羅して解釈をした上で、患者に説明して共同意思決定を行うこととなる。精神科医はもちろんガイドラインを踏まえた適切な解釈ができるように精進すべきであるが、患者がその全てを同じように理解することは困難である。そこで、患者がより理解しやすくなるように、処方がどれぐらいガイドラインに適合しているかという指標 (Individual fitness score: IFS) を作成した（長谷川、松本、三浦、橋本, Inada et al, Neuropsychopharmacol Rep, 2022; 長谷川、松本、三浦、橋本, Fukumoto et al, Neuropsychopharmacol Rep, 2022）。この IFS は、最もガイドラインに適合している処方を 100 点とし、ガイドラインにて勧められていない治療を行うと減点を行い、最低点を 0 点とするようにしている。この際に最も重要なことは、統合失調症においてもうつ病においても、下位診断（統合失調症：治療抵抗性、うつ病：軽症/中等症・重症/精神病性）によって推奨される治療が異なるため、最もガイドラインに適合している治療が異なるということである。例えば統合失調症においては第二世代抗精神病薬単剤治療を行うと 100 点であり、抗精神病薬や向精神薬の併用を行うと一剤あたり 15~80 点を減点される。治療抵抗性統合失調症においては、クロザピン治療を行うと 100 点となり、クロザピン治療を行っていなければ 60 点となる。このような IFS を用いた診療場面として、統合失調症患者が不眠を訴え睡眠薬の処方を希望した際に、IFS が 80 点から 65 点になることを説明し、ガイドラインでは不眠の場合にはその原因を精査することになっていることから、問診を行って、不眠の理由は幻聴の悪化とわかり、抗精神病薬の用量が不十分なので增量するという対応を行うというような流れとなる。患者にとっては、点数にて自身の処方と標準的な治療との違いが理解しやすく、標準的な治療を行うことについて説明することによって、治療に対する理解を深めやすくなると考えられる画期的な研究成果である。

このように、ガイドラインの普及活動を全国で行い、論文成果は 11 編であった。

## 2) 精神科治療ガイドラインの作成・改訂（橋本）

統合失調症薬物治療ガイドラインを当事者・家族・支援者など関連団体すべてを網羅した 80 名以上の委員と共同で改訂を行い 2022 年度 5 月に公開した。精神科領域では初めての試みであり、他の診療領域においても先進的な取り組みである。日本神経精神薬理学会と日本臨床精神神経薬理学会からプレスリリースを行い、医学系情報メディアを中心に注目を集め広くインターネット等で取り上げられた。

## III. 社会的活動に関する評価

### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 専門家向けの統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 の当事者・支援者用の統合失調症薬物治療ガイド 2022 を作成し 2023 年 2 月に公開した。

**(2) 専門教育面における貢献**

- ・ 統合失調症やうつ病などのガイドラインの作成を行い、精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証活動である EGUIDE プロジェクトも全国展開している。EGUIDE プロジェクトにおいては、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国の精神科医を対象に行い、その医療機関における治療に影響を与えるかどうかについての検討を行い、精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果を検証している。令和4年度は、統合失調症薬物治療ガイドラインとうつ病治療ガイドラインの講習を全国14か所で行い、45以上の医療機関、延べ538名の精神科医が参加した（長谷川、久保田、佐藤、柏木、橋本）。
- ・ 開発した統合失調症の認知機能障害の簡便な測定法についての講習会を統合失調症学会において行い、評価シートを配布し普及活動を行った（松本、伊藤、橋本）。
- ・ 国立大学法人 大阪大学の医学系研究科、連合小児発達学研究科においては招へい教授として、奈良県立医科大学においては非常勤講師として、精神医学研究の指導や知見の教授を行っている（橋本）。

**(3) 精研の研修の主催と協力**

- ・ 2022年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修で第1回目のうつ病の標準治療研修、統合失調症の標準治療研修を行った（柏木、長谷川、橋本）。

**(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献****(5) センター内における臨床的活動**

- ・ 外来診療において、連携新患、統合失調症外来をそれぞれ週に1回の新患枠の診察及び、再診を週に半日行っている。専門として、統合失調症及び発達障害の診療を行い、病院内外からの紹介を受け、セカンドオピニオン対応も行っている（橋本）。

**(6) その他****IV. 研究業績****A. 刊行物****(1) 原著論文**

- 1) Cearns M, Amare AT, Schubert KO, Thalamuthu A, Frank J, Streit F, Adli M, Akula N, Akiyama K, Ardau R, Arias B, Aubry JM, Backlund L, Bhattacharjee AK, Bellivier F, Benabarre A, Bengesser S, Biernacka JM, Birner A, Brichant-Petitjean C, Cervantes P, Chen HC, Chillotti C, Cichon S, Cruceanu C, Czerski PM, Dalkner N, Dayer A, Degenhardt F, Zompo MD, DePaulo JR, Etain B, Falkai P, Forstner AJ, Frisen L, Frye MA, Fullerton JM, Gard S, Garnham JS, Goes FS, Grigoriu-Serbanescu M, Grof P, Hashimoto R,(117名中43番目) Hauser J, Heilbronner U, Herms S, Hoffmann P, Hofmann A, Hou L, Hsu YH, Jamain S, Jimenez E, Kahn JP, Kassem L, Kuo PH, Kato T, Kelsoe J, Kittel-Schneider S, Kliwicki S, König B, Kusumi I, Laje G, Landén M, Lavebratt C, Leboyer M, Leckband SG, Maj M; Major Depressive Disorder Working Group of the Psychiatric Genomics Consortium, Manchia M, Martinsson L, McCarthy MJ, McElroy S, Colom F, Mitjans M, Mondimore FM, Monteleone P, Nievergelt CM, Nöthen MM, Novák T, O'Donovan C, Ozaki N, Millischer V, Papiol S, Pfennig A, Pisanu C, Potash JB, Reif A, Reininghaus E, Rouleau GA, Rybakowski JK, Schalling M, Schofield PR, Schweizer BW, Severino G, Shekhtman T, Shilling PD, Shimoda K, Simhandl C, Slaney CM, Squassina A, Stamm T, Stopkova P, Tekola-Ayele F,

- Tortorella A, Turecki G, Veeh J, Vieta E, Witt SH, Roberts G, Zandi PP, Alda M, Bauer M, McMahon FJ, Mitchell PB, Schulze TG, Rietschel M, Clark SR, Baune BT: Using polygenic scores and clinical data for bipolar disorder patient stratification and lithium response prediction: machine learning approach. *Br J Psychiatry* 220:219-228, 2022.
- 2) Yamada H, Motoyama M, Hasegawa N, Miura K, Matsumoto J, Ohi K, Yasui-Furukori N, Numata S, Takeshima M, Sugiyama N, Nagasawa T, Kubota C, Atake K, Tsuboi T, Ichihashi K, Hashimoto N, Inagaki T, Takaesu Y, Iga JI, Hori H, Onitsuka T, Komatsu H, Hishimoto A, Fukumoto K, Fujimoto M, Nakamura T, Nemoto K, Furihata R, Yamamura S, Yamagata H, Ogasawara K, Katsumoto E, Murata A, Iida H, Ochi S, Makinodan M, Kido M, Kishimoto T, Yasuda Y, Usami M, Suwa T, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: A dissemination and education programme to improve the clinical behaviours of psychiatrists in accordance with treatment guidelines for schizophrenia and major depressive disorders: the Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education in Psychiatric Treatment (EGUIDE) project. *BJPsych Open* 8(3):e83, 2022.
  - 3) Kubota R, Okubo R, Ikezawa S, Matsui M, Adachi L, Wada A, Fujimaki C, Yamada Y, Saeki K, Sumiyoshi C, Kikuchi A, Omachi Y, Takeda K, Hashimoto R, Sumiyoshi T, Yoshimura N: Sex differences in social cognition and association of social cognition and neurocognition in early course schizophrenia. *Front Psychiatry*, section *Psychopathology* 13:867468, 2022.
  - 4) Hori H, Yasui-Furukori N, Hasegawa N, Iga JI, Ochi S, Ichihashi K, Furihata R, Kyo Y, Takaesu Y, Tsuboi T, Kodaka F, Onitsuka T, Okada T, Murata A, Kashiwagi H, Iida H, Hashimoto N, Ohi K, Yamada H, Ogasawara K, Yasuda Y, Muraoka H, Usami M, Numata S, Takeshima M, Yamagata H, Nagasawa T, Tagata H, Makinodan M, Kido M, Katsumoto E, Komatsu H, Matsumoto J, Kubota C, Miura K, Hishimoto A, Watanabe K, Inada K, Kawasaki H, Hashimoto R: Prescription of anticholinergic drugs in patients with schizophrenia: analysis of antipsychotic prescription patterns and hospital characteristics. *Front Psychiatry*, section *Psychopharmacology* 13:823826, 2022.
  - 5) Takahashi T, Tsugawa S, Nakajima S, Plitman E, Chakravarty MM, Masuda F, Wada M, Kurose S, Ochi R, Matsushita K, Sasabayashi D, Nakamura M, Nishikawa Y, Takayanagi Y, Nishiyama S, Higuchi Y, Mizukami Y, Furuichi A, Kido M, Hashimoto R, Noguchi K, Fujii S, Mimura M, Noda Y, Suzuki M: Thalamic and striato-pallidal volumes in schizophrenia patients and individuals at risk for psychosis: A multi-atlas segmentation study. *Schizophr Res* 243:268-275, 2022.
  - 6) Sumiyoshi C, Ohi K, Fujino H, Yamamori H, Fujimoto M, Yasuda Y, Uno Y, Takahashi J, Morita K, Katsuki A, Yamamoto M, Okahisa Y, Sata A, Katsumoto E, Koeda M, Hirano Y, Nakataki M, Matsumoto J, Miura K, Hashimoto N, Makinodan M, Takahashi T, Nemoto K, Kishimoto T, Suzuki M, Sumiyoshi T, Hashimoto R: Transdiagnostic comparisons of intellectual abilities and work outcome in patients with mental disorders: multicentre study. *BJ Psych Open* 8(4):e98, 2022.
  - 7) Ogasawara K, Numata S, Hasegawa N, Nakataki M, Makinodan M, Ohi K, Takeshima M, Tsuboi T, Hashimoto N, Onitsuka T, Muraoka H, Hori H, Ichihashi K, Inagaki T, Yasui-Furukori N, Hishimoto A, Sugiyama N, Fukumoto K, Nagasawa T, Matsumoto J, Takaesu Y, Furihata R, Nemoto K, Nakamura T, Usami M, Miura K, Fujimoto M, Tagata H, Yamada H, Komatsu H, Ochi S, Atake K, Katsumoto E, Kido M, Kishimoto T, Suwa T, Yamamura S, Iga JI, Iida H, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Subjective assessment of participants in education programs on clinical practice guidelines in the field of psychiatry. *Neuropsychopharmacol Rep* 42(2):221-225, 2022.

- 8) Demizu Y, Matsumoto J, Yasuda Y, Ito S, Miura K, Yamamori H, Fujimoto M, Hasegawa N, Ishimaru K, Hashimoto R: Relationship between autistic traits and social functioning in healthy individuals. *Neuropsychopharmacol Rep* 42(2):226-229, 2022.
- 9) Nawa Y, Kushima I, Aleksic B, Yamamoto M, Kimura H, Banno M, Hashimoto R, Ozaki N: Treatment-resistant schizophrenia in patients with 3q29 deletion: A case series of four patients. *Psychiatry Clin Neurosci* 76(7):338-339, 2022.
- 10) Muraoka H, Kodaka F, Hasegawa N, Yasui-Furukori N, Fukumoto K, Kashiwagi H, Tagata H, Hori H, Atake K, Iida H, Ichihashi K, Furihata R, Tsuboi T, Takeshima M, Komatsu H, Kubota C, Ochi S, Takaesu Y, Usami M, Nagasawa T, Makinodan M, Nakamura T, Kido M, Ueda I, Yamagata H, Onitsuka T, Asami T, Hishimoto A, Ogasawara K, Katsumoto E, Miura K, Matsumoto J, Ohi K, Yamada H, Watanabe K, Inada K, Nishimura K, Hashimoto R: Characteristics of the treatments for each severity of major depressive disorder: A real-world multi-site study. *Asian Jurnal of Psychiatr* 74:103174, 2022.
- 11) Kushima I, Nakatouchi M, Aleksic B, Okada T, Kimura H, Kato H, Morikawa M, Inada T, Ishizuka K, Torii Y, Nakamura Y, Tanaka S, Imaeda M, Takahashi N, Yamamoto oM, Iwamoto K, Nawa Y, Ogawa N, Iritani S, Hayashi Y, Lo T, Otogonbayar G, Furuta S, Iwata N, Ikeda M, Siato T, Ninomiya K, Okochi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Miura K, Itokawa M, Arai M, MIyashita M, Toriumi K, Ohi K, ShioiriT, Kitaichi K, Someya T, Watanabe Y, Egawa J, Takahashi T, Suzuki M, Sasaki T, Tochigi M, Nishimura F, Yamasue H, Kuwabara H, Wakuda T, Kato T, Kanba S, Horikawa H, Usami M, Kodaira M, Watanabe K, Yoshikawa T, Toyota T, Yokoyama S, Munesue T, Kimura R, Funabiki Y, Kosaka H, Jung M, Kasai K, Ikegame T, Jinde S, Numata S, Kinoshita M, Kato T, Kakiuchi C, Yamakawa K, Suzuki T, Hashimoto N, Ishikawa S, Yamagata B, Nio S, Murai T, Son S, Kunii Y, Yabe H, Inagaki M, Goto Y, Okumura Y, Ito T, Arioka Y, Mori D, Ozaki N: Cross-disorder analysis of genic and regulatory copy number variations in bipolar disorder, schizophrenia, and autism spectrum disorder. *Biological Psychiatry* 92(5):362-374, 2022.
- 12) Polyakova Z, Iwase M, Hashimoto R, Yoshida M: The effect of ketamine on eye movement characteristics during free-viewing of natural images in common marmosets. *Front Neurosci, section Perception Science* 16:1012300, 2022.
- 13) Ochi S, Tagata H, Hasegawa N, Yasui-Furukori N, Iga JI, Kashiwagi H, Kodaka F, Komatsu H, Tsuboi T, Tokutani A, Numata S, Ichihashi K, Onitsuka T, Muraoka H, Iida H, Ohi K, Atake K, Kishimoto T, Hori H, Takaesu Y, Takeshima M, Usami M, Makinodan M, Hashimoto N, Fujimoto M, Furihata R, Nagasawa T, Yamada H, Matsumoto J, Miura K, Kido M, Hishimoto A, Ueno SI, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R: Clozapine Treatment Is Associated With Higher Prescription Rate of Antipsychotic Monotherapy and Lower Prescription Rate of Other Concomitant Psychotropics: A Real-World Nationwide Study. *Int J Neuropsychopharmacol* 25(10):818-826, 2022.
- 14) Ito S, Miura K, Miyayama M, Matsumoto J, Fukunaga M, Ishimaru K, Fujimoto M, Yasuda Y, Watanabe Y, Hashimoto R: Association between globus pallidus volume and positive symptoms in schizophrenia. *Psychiatry Clin Neurosci* 76(11):602-603 2022.
- 15) Okada T, Hori H, Hasegawa N, Murata A, Kyou Y, Kodaka F, Iida H, Ochi S, Takaesu Y, Tsuboi T, Iga JI, Ichihashi K, Muraoka H, Furihata R, Yasui-Furukori N, Usami M, Onitsuka T, Ogasawara K, Tagata H, Takeshima M, Ohi K, Numata S, Hashimoto N, Yamada H, Makinodan M, Komatsu H, Hishimoto A, Yamagata H, Kido M, Kubota C, Atake K, Yamada H, Nagasawa T, Matsumoto J, Miura K, Inada K, Watanabe K, Suda S, Hashimoto R: Second-Generation Antipsychotic Monotherapy Contributes to the

- Discontinuation of Anticholinergic Drugs in Hospitalized Patients With Schizophrenia. *J Clin Psychopharmacol* 42(6):591-593 2022.
- 16) *Kushima I, Aleksic B, Kimura H, Nakatouchi M, Lo T, Ikeda M, Arai M, Hashimoto R, Numata S, Okamura Y, Obara T, Inada T, Ozaki N: X chromosome aneuploidies and schizophrenia: association analysis and phenotypic characterization. Psychiatry Clin Neurosci* 76(12):667-673, 2022.
  - 17) *Kalman JL, Yoshida T, Andlauer TFM, Schulte EC, Adorjan K, Alda M, Ardau R, Aubry JM, Brosch K, Budde M, Chillotti C, Czerski PM, DePaulo RJ, Forstner A, Goes FS, Grigoroiu-Serbanescu M, Grof P, Grotegerd D, Hahn T, Heilbronner M, Hasler R, Heilbronner U, Heilmann-Heimbach S, Kapelski P, Kato T, Kohshour MO, Meinert S, Meller T, Nenadić I, Nothen MM, Novak T, Opel N, Pawlak J, Pfarr JK, Potash JB, Reich-Erkelenz D, Repple J, Richard-Lepouriel H, Rietschel M, Ringwald KG, Rouleau G, Schaupp S, Senner F, Severino G, Squassina A, Stein F, Stopkova P, Streit F, Thiel K, Thomas-Odenthal F, Turecki G, Twarowska-Hauser J, Winter A, Zandi PP, Kelsoe JR, Consortium on Lithium Genetics (ConLiGen), PsyCourse, Falkai P, Dannowski U, Kircher T, Schulze TG, Papiol S: Investigating the phenotypic and genetic associations between personality traits and suicidal behavior across major mental health diagnoses. Eur Arch Psychiatry Clin Neurosci* 272(8):1611-1620, 2022.
  - 18) *Inada K, Fukumoto K, Hasegawa N, Yasuda Y, Yamada H, Hori H, Ichihashi K, Iida H, Ohi K, Muraoka H, Kodaka F, Ide K, Hashimoto N, Iga JI, Ogasawara K, Atake K, Takaesu Y, Nagasawa T, Komatsu H, Okada T, Furihata R, Kido M, Kikuchi S, Kubota C, Makinodan M, Ochi S, Takeshima M, Yamagata H, Matsumoto J, Miura K, Usami M, Kishimoto T, Onitsuka T, Katsumoto E, Hishimoto A, Numata S, Yasui-Furukori N, Watanabe K, Hashimoto R: Development of individual fitness score for conformity of prescriptions to the "Guidelines For Pharmacological Therapy of Schizophrenia". Neuropsychopharmacol Rep* 42(4):502-509, 2022.
  - 19) *Kyou Y, Yasui-Furukori N, Hasegawa N, Ide K, Ichihashi K, Hashimoto N, Hori H, Shimizu Y, Imamura Y, Muraoka H, Iida H, Ohi K, Yasuda Y, Ogasawara K, Numata S, Iga JI, Tsuboi T, Ochi S, Kodaka F, Furihata R, Onitsuka T, Makinodan M, Komatsu H, Takeshima M, Kubota C, Hishimoto A, Atake K, Yamagata H, Kido M, Nagasawa T, Usami M, Kishimoto T, Kikuchi S, Matsumoto J, Miura K, Yamada H, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R: The characteristics of discharge prescriptions including pro re nata psychotropic medications for patients with schizophrenia and major depressive disorder from the survey of the "Effectiveness of guidelines for dissemination and education in psychiatric treatment (EGUIDE)" project. Ann Gen Psychiatry* 21(1):52, 2022.
  - 20) *Tsuboi T, Takaesu Y, Hasegawa N, Ochi S, Fukumoto K, Ohi K, Muraoka H, Okada T, Kodaka F, Igarashi S, Iida H, Kashiwagi H, Hori H, Ichihashi K, Ogasawara K, Hashimoto N, Iga JI, Nakamura T, Usami M, Nagasawa T, Kido M, Komatsu H, Yamagata H, Atake K, Furihata R, Kikuchi S, Horai T, Takeshima M, Hirano Y, Makinodan M, Matsumoto J, Miura K, Hishimoto A, Numata S, Yamada H, Yasui-Furukori N, Inada K, Watanabe K, Hashimoto R: Effects of electroconvulsive therapy on the use of anxiolytics and sleep medications: a propensity score-matched analysis. Psychiatry Clin Neurosci* 77(1):30-37, 2023.
  - 21) *Yamagata H, Tsunedomi R, Kamishikiryo T, Kobayashi A, Seki T, Kobayashi M, Hagiwara K, Yamada N, Chen C, Uchida S, Ogihara H, Hamamoto Y, Okada G, Fuchikami M, Iga JI, Numata S, Kinoshita M, Kato TA, Hashimoto R, Nagano H, Ueno S, Okamoto Y, Ohmori T,*

- Nakagawa S: Interferon signaling and hypercytokinemia-related gene expression in the blood of antidepressant non-responders. *Heliyon* 9(1):e13059, 2023.
- 22) Fukumoto K, Kodaka F, Hasegawa N, Muraoka H, Hori H, Ichihashi K, Yasuda Y, Iida H, Ohi K, Ochi S, Ide K, Hashimoto N, Usami M, Nakamura T, Komatsu H, Okada T, Nagasawa T, Furihata R, Atake K, Kido M, Kikuchi S, Yamagata H, Kishimoto T, Makinodan M, Horai T, Takeshima M, Kubota C, Asami T, Katsumoto E, Hishimoto A, Onitsuka T, Matsumoto J, Miura K, Yamada H, Yasui-Furukori N, Watanabe K, Inada K, Otsuka K, Hashimoto R: Development of an individual fitness score (IFS) based on the depression treatment guidelines of in the Japanese Society of Mood Disorders. *Neuropsychopharmacol Rep* 43(1):33-39, 2023.
- 23) Iida H, Okada T, Nemoto K, Hasegawa N, Numata S, Ogasawara K, Miura K, Matsumoto J, Hori H, Iga JI, Ichihashi K, Hashimoto N, Yamada H, Ohi K, Yasui-Furukori N, Fukumoto K, Tsuboi T, Usami M, Furihata R, Takaesu Y, Hishimoto A, Muraoka H, Katsumoto E, Nagasawa T, Ochi S, Komatsu H, Kikuchi S, Takeshima M, Onitsuka T, Tamai S, Kubota C, Inada K, Watanabe K, Kawasaki H, Hashimoto R: Satisfaction with web-based courses on clinical practice guidelines for psychiatrists: Findings from the "Effectiveness of Guidelines for Dissemination and Education in Psychiatric Treatment (EGUIDE)" project. *Neuropsychopharmacol Rep* 43(1):23-32, 2023.
- 24) Korai Y, Miura K: A dynamical model of visual motion processing for arbitrary stimuli including type II plaids. *Neural Netw* 162:46-68, 2023.
- 25) Ohnishi T, Toda W, Itagaki S, Sato A, Matsumoto J, Ito H, Ishii S, Miura I, Yabe H: Disrupted structural connectivity and less efficient network system in patients with the treatment naïve adult attention-deficit/hyperactivity disorder. *Frontiers in Psychiatry, section ADHD* 14:1093522 2023.
- 26) 田中陽子, 宮田聖子, 岩本邦弘, 山本真江里, 三浦健一郎, 橋本亮太, 尾崎紀夫: ドライビングシミュレーターによる健常者の運転技術と視線特性との関係性. 日本安全運転医療学会誌(電子版) 2(1):46-53, 2022.

## (2) 総説

- 1) Hashimoto R: Is it possible to reconstruct the diagnostic system for psychiatric disorders based on neuroimaging findings? *Psychiatry Clin Neurosci* 76(5):139, 2022.
- 2) Onitsuka T, Hirano Y, Nakazawa T, Ichihashi K, Miura K, Inada K, Mitoma R, Yasui-Furukori N, Hashimoto R: Toward recovery in schizophrenia: Current concepts, findings, and future research directions. *Psychiatry Clin Neurosci* 76(7):282-291, 2022.
- 3) Yasuda Y, Matsumoto J, Miura K, Hasegawa N, Hashimoto R: Genetics of autism spectrum disorders and future direction. *J Hum Genet* 68(3):193-197, 2023.
- 4) 橋本亮太: 精神科領域における多施設共同研究の実際と研究倫理. *精神神経学雑誌* 124 (7): 472-478, 2022.
- 5) 橋本亮太: 更年期女性のうつ病の診断のポイントと治療のコツ. *日本女性医学学会雑誌* 29(4):628-630, 2022.
- 6) 橋本亮太, 市橋香代: 家族・当事者も一緒につくった統合失調症薬物治療ガイドライン 2022. *月刊みんなねっと* 185:6-9, 2022.
- 7) 橋本亮太, 松本純弥, 長谷川尚美, 三浦健一郎: 統合失調症のバイオタイプ研究. *日本生物学的精神医学会誌* 33(4):194-200, 2022.
- 8) 橋本亮太: ビッグデータ解析から精神疾患に迫る. ブルーバックス「心の病」の脳科学 なせ生じるのか, どうすれば治る 2224:53-56, 2023.

- 9) 三浦健一郎, 松本純弥, 根本清貴, 橋本亮太: 統合失調症の中間表現型を用いた診断と個別化医療. 臨床精神薬理 26(3):271-277, 2023.
- 10) 小池進介, 笠井清登, 柳下 祥, 國井尚人, 松崎政紀, 田中謙二, 宇賀貴紀, 吉田正俊, 山本真江里, 鬼塚俊明, 三浦健一郎, 小松三佐子: 双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発. 生体の科学 73(5):458-459, 2022.
- 11) 三浦健一郎: 視覚情報が自己移動感覚に及ぼす影響. 体育の科学 72 (11), 708-772, 2022.

(3) 著書

- 1) 鬼塚俊明, 橋本亮太: 編著 精神医学領域の論文をよみこなすキーワード 100!. 新興医学出版社, 東京, pp1-280, 2022.
- 2) 稲場直子, 三浦健一郎: 眼球運動の種類. 日本視覚学会編集: 図説 視覚の事典. 朝倉書店, pp180-183, 2022.

(4) 研究報告書

- 1) 橋本亮太, 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美: 多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築. 2022年度科学研究費助成事業基盤研究(B)研究実績報告書. 2023.
- 2) 橋本亮太: 発達障害のリスク遺伝子の同定. 2022年度科学研究費助成事業特別推進研究「発達障害に関わる神経生物学的機構の靈長類的基盤の解明(代表:高田昌彦)」2022年度研究実績報告書. 2023.
- 3) 橋本亮太: クロザピンモニタリングシステムの国際比較調査. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業(精神障害分野)「治療抵抗性統合失調症薬の安全性の検証による望ましい普及と体制構築に向けた研究(代表:上野雄文)」分担研究報告書. 2023.
- 4) 橋本亮太, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華: 精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究. 2022年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野) 2022年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 5) 橋本亮太, 三浦健一郎, 松本純弥, 安田由華: AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究. 2022年度日本医療研究開発機構 医工連携・人工知能実装研究事業 2022年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 6) 橋本亮太, 三浦健一郎, 松本純弥: iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究. 2022年度日本医療研究開発機構 脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト) 2022年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 7) 橋本亮太: 気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究. 2022年度日本医療研究開発機構 戰略的国際脳科学研究推進プログラム「縦断的MRIデータに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明(研究開発代表者:岡本泰昌)」2022年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 8) 橋本亮太: 脳神経画像の解析と縦断データに基づく、精神疾患の治療効果及び予後に関する層別化. 2022年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)「精神疾患レジストリの利活用による治療効果、転帰予測、新たな層別化に関する研究(研究開発代表者:中込和幸)」2022年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 9) 橋本亮太: COVID-19 精神症状のレジストリにおける脳画像収集システムの構築と解析. 2022年度日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)「COVID-19 感染後の精神症状を有する患者レジストリの構築と病態解明及び新規治療法の開発に資する研究(研究開発代表者:鬼頭伸輔)」2022年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 10) 橋本亮太: 解析対象 ASD/SCZ 家系の選定と臨床情報の収集. 2022年度日本医療研究開発機

構 ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム:B-Cure ゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業「精神疾患の個別化医療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究（研究開発代表者：徳永勝士）」2022 年度 委託研究開発成果報告書. 2023.

- 11) 三浦健一郎: 眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解. 2022 年度日本医療研究開発機構 革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発（研究開発代表者：小池進介）」2022 年度 委託研究開発成果報告書. 2023.
- 12) 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美: 精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究. 2022 年度科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 研究実施状況報告書. 2023.
- 13) 長谷川尚美: 精神疾患の処方行動における治療ガイドラインの普及と教育の効果検証. 2022 年度科学研究費助成事業 若手研究実施状況報告書. 2023.

#### (5) 翻訳

#### (6) その他

- 1) 橋本亮太 (統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 作成メンバー) : 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022(2022 年 5 月 20 日公開). 医学書院, 2022.
- 2) 橋本亮太 (統合失調症薬物治療ガイド 2022 ワーキンググループメンバー) : 統合失調症薬物治療ガイド 2022-患者と支援者のために-(2023 年 2 月 15 日公開). 2022.
- 3) 中込和幸, 橋本亮太: 精神科専門医のための模擬テスト 6. 月刊精神科 40 (4) : 553-554, 2022.
- 4) 中込和幸, 橋本亮太: 精神科専門医のための模擬テスト 6-回答と解説-. 月刊精神科 40 (5) : 728-732, 2022.
- 5) 橋本亮太: 再構成座談会 新学術領域「マルチスケール精神病態の構成的理解」次世代脳・冬のシンポジウム 2021 「基礎神経科学と臨床精神が融合したブレークスルー研究の育て方」. MULTISCAL BRAIN News letter 5·7·12, 2023.
- 6) 松本純弥: わたしの研究 精神疾患の病態解明研究. 日本生物学的精神医学会誌 33(2):87-89, 2022.

### B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
  - 1) 岡本泰昌, 橋本亮太, 清水栄司, 徳田智磯: 縦断的 MRI データに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
  - 2) 橋本亮太: 精神科医に対する講習によるガイドの普及とその理解の向上. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
  - 3) EGUIDE プロジェクト (代表 橋本亮太) : 精神医療奨励賞受賞講演, 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
  - 4) 橋本亮太: 精神科治療ガイドラインの教育・普及・検証によって臨床現場の何が変わらるのか?. (公社) 大阪精神科診療所協会 R4 年度総会・学術研究集会, 大阪 (オンライン), 2022.6.25.
  - 5) 橋本亮太: ヒト・精神疾患脳関連データベースの例 : COCORO とマイレジストリ. 脳関連データベース機関連携キックオフシンポジウム, オンライン, 2022.7.27.
  - 6) 橋本亮太, 松本純弥, 長谷川尚美, 三浦健一郎: 生物学的分類を取り入れた精神疾患診断の将来像. 第 41 回日本精神科診断学会, オンライン, 2022.9.9.
  - 7) 橋本亮太, 松本純弥, 長谷川尚美, 三浦健一郎: 精神疾患の診断法の開発はどのように行うのか?. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会

(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.5.

- 8) 橋本亮太 : 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 の作成の経緯と概要. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 9) 松本純弥, 三浦健一郎, 橋本亮太: 大脳皮質構造画像の大規模データによる精神疾患横断解析. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 10) 橋本亮太 : 精神科医療の世界を変えるための研究とは : 病態研究から社会実装研究まで. 第 41 回日本社会精神医学会, 神戸, 2023.3.17.
- 11) 橋本亮太 : 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 のポイントと普及. 第 41 回日本社会精神医学会, 神戸, 2023.3.17.
- 12) 三浦健一郎 : 臨床現場で使えるタブレットを用いた統合失調症の補助診断法の開発. 第 41 回日本精神科診断学会, オンライン, 2022.9.9.

## (2) 一般演題

- 1) Ohi K, Nishizawa D, Sugiyama S, Takai K, Kuramitsu A, Hasegawa J, Soda M, Kitaichi K, Hashimoto R, Ikeda K, Shioiri T. Polygenic risk scores differentiating schizophrenia from bipolar disorder are associated with premorbid intelligence in schizophrenia patients and healthy subjects. 2022 Congress of the Schizophrenia International Research Society, Online, 2022.4.6.
- 2) Ohi K, Nishizawa D, Sugiyama S, Takai K, Fujikane D, Kuramitsu A, Hasegawa J, Soda M, Kitaichi K, Hashimoto R, Ikeda K, Shioiri T. Cognitive Performances across Individuals at High Genetic Risk for Schizophrenia, High Genetic Risk for Bipolar Disorder, and Low Genetic Risks: A Combined Polygenic Risk Score Approach. CINP (33rd Committee of the International College of Neuropsychopharmacology), Taipei, 2022.6.13.
- 3) Ochi S, Tagata H, Hasegawa N, Yasui-Furukori N, Iga JI, Kashiwagi H, Kodaka F, Komatsu H, Tsuboi T, Tokutani A, Numata S, Ichihashi K, Onitsuka T, Muraoka H, Iida H, Ohi K, Atake K, Kishimoto T, Hori H, Takaesu Y, Takeshima M, Usami M, Makinodan M, Hashimoto N, Fujimoto M, Furuhata R, Nagasawa T, Yamada H, Matsumoto J, Miura K, Kido M, Hishimoto A, Ueno S, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R : Clozapine treatment is associated with higher prescription rate of antipsychotic monotherapy and lower prescription rate of other concomitant psychotropics: A real-world nationwide study. CINP (33rd Committee of the International College of Neuropsychopharmacology), Taipei, 2022.6.12.
- 4) Schijven D, Postema MC, ENIGMA-Schizophrenia Working Group, Fisher SE, Franke B, Glahn DC, Gur RC, Hashimoto R, Jahanshad N, Luders E, Medland SE, Thompson PM, Turner JA, van Erp TGM, Francks C : Large-scale analysis of brain structural asymmetries in schizophrenia via the ENIGMA consortium. 2022 OHBM Annual Meeting, Scotland, 2022.6.20.
- 5) 田中將貴, 柳澤琢史, 福間良平, 谷 直樹, 押野 悟, 三原雅史, 服部憲明, 梶山裕太, 橋本亮太, 池田 学, 望月秀樹, 貴島晴彦 : 脳磁図を用いたパーキンソン病の位相振幅カップリングの評価. 第 45 回日本脳神経 CI 学会, オンライン, 2022.4.8.
- 6) 中村敏範, 降旗隆二, 長谷川尚美, 大槻 怜, 古郡規雄, 坪井貴嗣, 越智紳一郎, 市橋香代, 山田 恒, 三浦健一郎, 松本純弥, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 鷺塚伸介, 橋本亮太 : 統合失調症患者

- の入院治療における睡眠薬増減の関連要因：全国調査の分析. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 7) 五十嵐 俊, 坪井貴嗣, 長谷川尚美, 古郡規雄, 越智紳一郎, 飯田仁志, 村岡寛之, 高江洲義和, 岡田剛史, 柏木宏子, 小高文聰, 福本健太郎, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太：入院うつ病患者における ECT 後の炭酸リチウムの処方実態について. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
  - 8) 大槻 怜, 降旗隆二, 長谷川尚美, 中村敏範, 古郡規雄, 小高文聰, 堀 輝, 坪井貴嗣, 沼田周助, 柏木宏子, 松本純弥, 三浦健一郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 鈴木正泰, 橋本亮太：日本のうつ病入院治療における睡眠薬処方率の施設間の違いとその関連要因. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
  - 9) 山形弘隆, 藤井優子, 關 友恵, 長谷川尚美, 橋本亮太, 中川 伸 : EGUIDE プロジェクトによる統合失調症患者・うつ病患者に対する外来処方の変化. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
  - 10) 山本哲也, 三浦健一郎, 松田圭司, 松本純弥, 橋本亮太, 小野誠司, 定藤規弘, 福永雅喜 : ヒトの滑動性追跡眼球運動に関する脳領域と高齢化領域の対応. Neuro2022 第 45 回日本神経科学大会／第 65 回日本神経化学会大会／第 32 回日本神経回路学会大会, 沖縄, 2022.6.30.
  - 11) 本山美久仁, 山田 恒, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太 : 精神科レジデントに対するうつ病治療ガイドライン講習の効果の検討-ガイドラインに沿った臨床行動実践度の変化-. 第 19 回日本うつ病学会総会／第 5 回日本うつ病リワーク協会年次大会【合同開催】, 大分, 2022.7.14.
  - 12) 山田 恒, 本山美久仁, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太 : うつ病治療ガイドライン講習受講効果の検討-ガイドライン講習前と受講後 5 年間のガイドラインに沿った臨床行動実践度の変化-. 第 19 回日本うつ病学会総会／第 5 回日本うつ病リワーク協会年次大会【合同開催】, 大分, 2022.7.14.
  - 13) 岡田剛史, 福本健太郎, 坪井貴嗣, 長谷川尚美, 村岡寛之, 柏木宏子, 越智紳一郎, 五十嵐 俊, 飯田仁志, 小高文聰, 大井一高, 高江洲義和, 古郡規雄, 三浦健一郎, 松本純弥, 須田史朗, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太 : うつ病に対する維持 ECT 患者に併用する薬物療法の実態. 第 19 回日本うつ病学会総会／第 5 回日本うつ病リワーク協会年次大会【合同開催】, 大分, 2022.7.14.
  - 14) 村岡寛之, 長谷川尚美, 古郡規雄, 小高文聰, 福本健太郎, 柏木宏子, 大井一高, 松本純弥, 三浦健一郎, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 西村勝治, 橋本亮太 : うつ病の治療に対する EGUIDE 講習の効果と重症度の付記の影響. 第 19 回日本うつ病学会総会／第 5 回日本うつ病リワーク協会年次大会【合同開催】, 大分, 2022.7.14.
  - 15) 橋本直樹, 古郡規雄, 沼田周助, 飯田仁志, 市橋香代, 稲田 健, 降旗隆二, 堀 輝, 小高文聰, 長谷川尚美, 橋本亮太 : 入退院時処方の比較からみた, 抗うつ薬単剤治療の実態調査-EGUIDE プロジェクトデータより-. 第 19 回日本うつ病学会総会／第 5 回日本うつ病リワーク協会年次大会【合同開催】, 大分, 2022.7.14.
  - 16) Kitagawa K, Baba M, Takemoto T, Nagayasu K, Kasai A, Takuma K, Hashimoto R, Hashimoto H, Ago Y, Nakazawa T : Impaired neurodevelopment in iPS cell-derived neural stem cells from psychiatric patients with 7q36.3 microduplication. VPAC-ISBAP2022 (The 15th International Symposium on VIP, PACAP and Related Peptides The 1st International Society for BioactivePeptides Meeting) , Osaka, 2022.10.30.
  - 17) 橋本直樹, 古郡規雄, 沼田周助, 飯田仁志, 市橋香代, 降旗隆二, 堀 輝, 小高文聰, 長谷川尚美, 松本純弥, 三浦健一郎, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太 : 入退院時処方の比較からみた抗精神病薬単剤治療の実態調査 -EGUIDE プロジェクトデータより-. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本精神精神薬理学会年会,

- 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会（BPCNPNPPP4 学会合同年会），東京，2022.11.5.
- 18) 長谷川尚美, 安田由華, 古郡規雄, 市橋香代, 小高文聰, 堀 輝, 飯田仁志, 村岡寛之, 高江洲義和, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 統合失調症とうつ病の治療に対するEGUIDEプロジェクトの効果：4年間の経年的変化に着目して. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.5.
- 19) 伊藤颯姫, 三浦健一郎, 宮山未来乃, 松本純弥, 福永雅喜, 石丸径一郎, 藤本美智子, 安田由華, 渡邊嘉之, 橋本亮太: 統合失調症における淡蒼球の肥大化と陽性症状の重症度の関連. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.5.
- 20) 山崎龍一, 松本純弥, 根本清貴, 福永雅喜, 橋本直樹, 小高文聰, 高野晴成, 伊藤颯姫, 長谷川尚美, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 渡邊嘉之, 三浦健一郎, 橋本亮太: 統合失調症に特徴的な脳体積減少パターンの経時変化. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.5.
- 21) 岡崎康輔, 三浦健一郎, 松本純弥, 長谷川尚美, 藤本美智子, 山森英長, 安田由華, 牧之段 学, 橋本亮太: 眼球運動と認知機能を組み合わせによる統合失調症の補助診断法の開発：機械学習法による検討. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.5.
- 22) 宮山未来乃, 三浦健一郎, 伊藤颯姫, 松本純弥, 福永雅喜, 石丸径一郎, 藤本美智子, 安田由華, 山森英長, 渡邊嘉之, 橋本亮太: 統合失調症における労働時間と脳構造の関連及び認知機能障害の媒介効果の検討. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 23) 酒井佳永, 伊藤颯姫, 松本純弥, 安田由華, 山森英長, 藤本美智子, 長谷川尚美, 石丸径一郎, 三浦健一郎, 橋本亮太: 統合失調症患者における病識の経時的変化のパターンと関連する臨床的要因. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 24) 越智紳一郎, 田形弘実, 長谷川尚美, 古郡規雄, 伊賀淳一, 柏木宏子, 小高文聰, 小松 浩, 坪井貴嗣, 徳谷 晃, 沼田周助, 岸本泰士郎, 堀 輝, 菅原明豊, 松本純弥, 三浦健一郎, 上野修一, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: クロザピン治療は抗精神病薬の高い単剤率および他の向精神薬の低い併用率に関連する. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 25) 高田智弘, 橋本 均, 橋本亮太, 中澤敬信: 2p16.3領域欠失を有する精神疾患患者のiPS細胞由来神経系細胞の機能解析. 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 26) 松本純弥, 福永雅喜, 三浦健一郎, 根本清貴, 岡田直大, 橋本直樹, 森田健太郎, 越山太輔, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 長谷川尚美, 伊藤颯姫, 成田 尚, 横山仁史, 三嶋 亮, 河島孝彦, 小林祐子, 笹林大樹, 原田健一郎, 山本真江里, 平野

- 羊嗣, 板橋貴史, 中瀧理仁, 橋本龍一郎, タ キンキン, 小池進介, 松原敏郎, 岡田 剛, 吉村玲児, 阿部 修, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 松尾幸治, 山末英典, 岡本泰昌, 鈴木道雄, 尾崎紀夫, 笠井清登, 橋本亮太: 統合失調症・双極性障害・うつ病・自閉スペクトラム症の多施設大規模データによる疾患横断的な大脳皮質構造の類似度の解析. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 27) 本山美久仁, 山田 恒, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 精神科レジデントに対する統合失調症薬物治療ガイドライン講習の効果の検討-ガイドラインに沿った臨床行動実践度の比較-. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 28) 山田 恒, 本山美久仁, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: ガイドライン講習受講前と受講後 5 年間の統合失調症薬物治療ガイドラインに沿った臨床行動実践度の変化-治療ガイドライン教育プロジェクト (EGUIDE プロジェクト) の効果検討. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.4.
- 29) 住吉チカ, 伊藤颯姫, 松本純弥, 藤野陽生, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 三浦健一郎, 住吉太幹, 橋本亮太: 精神症状・社会機能に基づく統合失調症患者の労働状態の推定・予測. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25.
- 30) 橋本直樹, 根本清貴, 福永雅喜, 松本純弥, 三浦健一郎, 岡田直大, 森田健太郎, 越山太輔, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 長谷川尚美, 伊藤颯姫, 成田 尚, 横山仁史, 三嶋 亮, 河島孝彦, 小林祐子, 笹林大樹, 原田健一郎, 山本真江里, 平野羊嗣, 板橋貴史, 中瀧理仁, 橋本龍一郎, タ キンキン, 小池進介, 松原敏郎, 岡田 剛, 吉村玲児, 阿部 修, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 松尾幸治, 山末英典, 岡本泰昌, 鈴木道雄, 尾崎紀夫, 笠井清登, 橋本亮太: 脳構造画像を用いた統合失調症らしさのメガアナライシス. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 31) 鬼塚俊明, 岡田剛史, 長谷川尚美, 坪井貴嗣, 伊賀淳一, 古郡規雄, 山田直輝, 堀 輝, 村岡寛之, 大井一高, 小笠原一能, 越智紳一郎, 竹島正浩, 市橋香代, 福本健太郎, 飯田仁志, 山田恒, 降幡隆二, 牧之段 学, 高江洲義和, 沼田周助, 小松 浩, 菱本明豊, 木戸幹雄, 阿竹聖和, 山形弘隆, 菊地紗耶, 橋本直樹, 宇佐美政英, 勝元榮一, 浅見 剛, 久保田智香, 松本純弥, 三浦健一郎, 平野羊嗣, 渡邊衡一郎, 稲田 健, 橋本亮太: 持続性抗精神病注射薬剤 (LAI) と経口抗精神病薬の併用薬の状況: 日本における実態調査. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 32) 山崎龍一, 松本純弥, 伊藤颯姫, 根本清貴, 福永雅喜, 橋本直樹, 小高文聰, 高野晴成, 長谷川尚美, 安田由華, 藤本美智子, 山森英長, 渡邊嘉之, 三浦健一郎, 橋本亮太: 脳構造画像上の「統合失調症らしさ」の縦断変化. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 33) 伊藤颯姫, 三浦健一郎, 宮山未来乃, 松本純弥, 福永雅喜, 石丸径一郎, 藤本美智子, 安田由華, 渡邊嘉之, 橋本亮太: 統合失調症における淡蒼球体積と精神症状の重症度の関連. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 34) 宮山未来乃, 三浦健一郎, 伊藤颯姫, 松本純弥, 福永雅喜, 石丸径一郎, 藤本美智子, 安田由華, 山森英長, 渡邊嘉之, 橋本亮太: 媒介分析による統合失調症患者の労働時間, 認知機能障害及び脳構造の関連検討. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 35) 松本純弥, 山崎龍一, 根本清貴, 福永雅喜, 小高文聰, 高野晴成, 伊藤颯姫, 長谷川尚美, 三浦健一郎, 橋本亮太: SARS-CoV-2 感染前後の脳 MRI 所見検討: 統合失調症症例報告. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.

- 36) 福本健太郎, 稲田 健, 長谷川尚美, 安田由華, 堀 輝, 市橋香代, 飯田仁志, 大井一高, 村岡 寛之, 小高文聰, 松本純弥, 三浦健一郎, 古郡規雄, 渡邊衡一郎, 橋本亮太: 統合失調症薬物治療ガイドに基づいた治療適合度 (individual fitness score)の開発. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 37) 竹本智哉, 竹本智哉, 馬場優志, 北川航平, 永安一樹, 勢力 薫, 早田敦子, 笠井淳司, 吾郷由希夫, 田熊一敞, 橋本亮太, 橋本 均, 中澤敬信: ヒト染色体 3q29 領域欠失を導入した自閉スペクトラム症モデルマウスの社会行動異常はオキシトシンの投与により回復する. 日本薬学会第 143 年会, 札幌, 2023.3.26.
- 38) 秋本祐弥, 馬場優志, 福島穂高, 三浦大樹, 橋本 均, 橋本亮太, 中澤敬信: 環境エンリッチメントによる 3q29 領域欠失導入マウスの精神疾患様行動の回復. 日本薬学会第 143 年会, 札幌, 2023.3.27.
- 39) 高田智弘, 河野翔太郎, 鮎澤有希子, 三浦大樹, 福島穂高, 橋本亮太, 橋本 均, 中澤敬信: 患者 iPS 細胞由来分化神経系細胞を用いた 2p16.3 領域欠失変異の分子病態解析. 日本薬学会第 143 年会, 札幌, 2023.3.27.
- 40) 河野翔太郎, 高田智弘, 鮎澤有希子, 三浦大樹, 福島穂高, 橋本亮太, 橋本 均, 中澤敬信: 患者 iPS 細胞由来分化神経系細胞を用いた 3q29 領域欠失変異の分子病態解析. 日本薬学会第 143 年会, 札幌, 2023.3.27.
- 41) 竹村 文, 三浦健一郎: サル大脳皮質 MTS 野の神経活動は仮現運動の刺激間隔による反転を説明する. Neuro2022 第 45 回日本神経科学大会／第 65 回日本神経化学会大会／第 32 回日本神経回路学会大会, 沖縄, 2022.6.30.
- 42) 山本哲也, 福永雅喜, 三浦健一郎, 定藤規弘: 短時間安静時 fMRI データを用いた Multimodal Surface Matching の非 HCP 課題 fMRI 解析への適用. 第 50 回日本磁気共鳴医学会大会, 名古屋, 2022.9.11.
- 43) 塩谷佳介, 林 和子, 松本有央, 松田圭司, 三浦健一郎, 山根 茂, Eldridge M.A.G, Saunders R.C, Richmond B.J, 永井裕司, 宮川尚久, 南本敬史, 片上 舜, 岡田真人, 河野憲二, 菅生・宮本康子: サル側頭皮質における顔情報と顔質感情情報の時間的表現. 東京理科大学パラレル脳センシング研究部門第 2 回公開シンポジウム「Think Synch Brain Dynamics ~理工が挑む脳科学~」, 東京, 2022.12.17.
- 44) 清水将海, 片上 舜, 岡田真人, 菅生・宮本康子, 林 和子, 松田圭司, 三浦健一郎, Eldridge M.A.G, Saunders R.C, Richmond B.J, 松本有央: カテゴリー分類における TE 野と TEO 野のニューロン特性比較. 東京理科大学パラレル脳センシング研究部門第 2 回公開シンポジウム「Think Synch Brain Dynamics ~理工が挑む脳科学~」, 東京, 2022.12.17.
- 45) 高麗雄介, 三浦健一郎: 運動視覚の動の方程式—残像効果を考慮した拡張一. 第 18 回空間認知と運動制御研究会, 京都, 2023.3.11.
- 46) 竹村 文, 三浦健一郎: ケタミンによるマカクザルの眼球運動特性への影響. 日本生理学会第 100 回記念大会, 京都, 2023.3.14.
- 47) Hayashi K, Matsumoto N, Matsuda K, Miura K, Yamane S, Eldridge M.A.G, Saunders R.C, Richmond B.J, Nagai Y, Miyakawa N, Minamimoto T, Okada M, Kawano K, Sugase-Miyamoto Y: Neural and behavioral correlates of discriminating facial expressions with different skin textures in macaque monkeys. The 100th Anniversary Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, Kyoto, 2023.3.14.
- 48) Kawano K, Hayashi K, Matsumoto M, Matsuda K, Miura K, Eldridge M, Saunders R, Richmond B, Sugase-Miyamoto Y: Effects of saccadic eye movements on face-responsive neurons in the inferior temporal cortex of macaque monkeys. The 100th Anniversary Annual Meeting of The Physiological Society of Japan, Kyoto, 2023.3.14.
- 49) 塩谷佳介, 林 和子, 松本有央, 松田圭司, 三浦健一郎, 山根 茂, Eldridge M.A.G, Saunders

- R.C, Richmond B.J, 永井裕司, 宮川尚久, 南本敬史, 片上 舜, 岡田真人, 河野憲二, 菅生-宮本康子 : マカクザル側頭葉 TE 野ニューロンの顔表面特性の表現. 日本物理学会 2023 年春季大会, オンライン, 2023.3.25.
- 50) 松本純弥 : 4 大精神疾患における大脳皮質構造画像の疾患横断解析. 国際学会発表奨励賞受賞者セッション, 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25.
- 51) 長谷川尚美 : 統合失調症とうつ病の治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果 : 2016~2019 年の処方調査結果より. 国際学会発表奨励賞受賞者セッション, 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25.

### (3) 研究報告会

- 1) 橋本亮太 : JART10000 プロジェクト. 第 18 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.6.5.
- 2) 橋本亮太 : COCORO の概要. 第 18 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.6.5.
- 3) 三浦健一郎 : 精神疾患横断的サリエンシー解析 (眼球運動). オンライン, 2022.6.5.
- 4) 松本純弥 : ENIGMA\_CDJ\_Cortical, 第 18 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.6.5.
- 5) 伊藤颯姫 : 統合失調症における淡蒼球と陽性症状の関連解析. 第 18 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.6.5.
- 6) 宮山未来乃 : 統合失調症における労働時間と脳構造の関連解析. 第 18 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.6.5.
- 7) 橋本亮太 : 精神疾患の巨大データベースの利活用データに基づく臨床知による基礎臨床連携研究とは. 令和 4 年度 AMED 脳とこころの研究推進プログラム 精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト分科会, オンライン, 2022.8.19.
- 8) 橋本亮太 : COCORO の概要. 第 19 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.12.4.
- 9) 三浦健一郎 : 精神疾患横断的サリエンシー解析 (眼球運動). 第 19 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.12.4.
- 10) 松本純弥 : ENIGMA\_CDJ\_Cortical. 第 19 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.12.4.
- 11) 松本純弥 : JART10000 プロジェクト. 第 19 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.12.4.
- 12) 長谷川尚美, 安田由華, 古郡規雄, 市橋香代, 小高文聰, 堀 輝, 飯田仁志, 村岡寛之, 高江洲義和, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田 健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太 : 統合失調症とうつ病の治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所令和 4 年度研究報告会, オンライン, 2023.3.20.
- 13) 松本純弥, 福永雅喜, 三浦健一郎, 根本清貴, 岡田直大, 橋本直樹, 森田健太郎, 越山太輔, 大井一高, 高橋 努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 伊藤颯姫, 山崎龍一, 長谷川尚美, 成田 尚, 横山仁史, 三嶋 亮, 宮田 淳, 小林祐子, 笹林大樹, 原田健一郎, 山本真江里, 平野羊嗣, 板橋貴史, 中瀧理仁, 橋本龍一郎, タ キンキン, 小池進介, 松原敏郎, 岡田 剛, 吉村玲児, 阿部 修, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 松尾幸治, 山末英典, 岡本泰昌, 鈴木道雄, 尾崎紀夫, 笠井清登, 橋本亮太 : 4 大精神疾患の大脳構造の類似度の解析 : 大脳皮質厚と大脳皮質表面積の多施設共同疾患横断解析. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所令和 4 年度研究報告会, オンライン, 2023.3.20.

### (4) その他

- 1) 橋本亮太 : 試料・情報の臨床的意義を共有して行う産学連携共同研究とは. 文部科学省 研究振興局ライフサイエンス課主催 ライフサイエンス科学製薬協との意見交換会, 2022.11.7.

### C. 講演

- 1) 橋本亮太 : リアルワールドの精神医療の問題を解決するための研究とは?. 第 49 回 NCNP 精神保健研究所ランチョンセミナー, 東京, 2022.4.25.

- 2) 橋本亮太：統合失調症の認知機能障害の評価と治療に関する将来展望. 住友ファーマ(株)メディカルアフェアーズ部社内研修会, オンライン, 2022.9.20,
- 3) 橋本亮太：精神疾患の克服とその障害支援のために臨床現場の精神科医が行う研究とは. 徳島大学精神科医局セミナー, 徳島, 2022.11.16.
- 4) 橋本亮太：精神疾患の克服とその障害支援のための研究とは. 慶應義塾大学医学部精神科セミナー, オンライン, 2022.11.30.
- 5) 橋本亮太：抗精神病薬の適正使用 ~統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 をふまえて~. Tardive Dyskinesia WEB seminar, オンライン, 2022.12.14.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 橋本亮太：日本神経精神薬理学会 理事, 評議員, 広報委員会委員, 統合失調症薬物治療ガイドラインタスクフォース, 國際学術委員会委員, 執行委員会委員, クロザピン TF 委員会委員長, トランスレーショナル・メディカルサイエンス (TMS) 委員会イノベーションサイエンス部会委員, 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称: EGUIDE 委員会), 統合失調症診療ガイドライン委員長, 診療ガイドライン委員会委員長, 薬事委員会委員, 統合失調症薬物治療ガイド 2022 作成ワーキンググループ
- 2) 橋本亮太：日本精神神経学会 PCN 編集委員会委員, 薬事委員会委員, 精神医学研究推進委員会委員, PCN Reports 編集委員会, ガイドライン検討委員会委員, 提言作成ワーキンググループ, 着床前診断に関するワーキンググループ 2022 年度委員
- 3) 橋本亮太：日本神経化学会 評議員, 脳研究推進委員会委員, 連合大会・多分野交流委員会委員
- 4) 橋本亮太：日本統合失調症学会 評議員
- 5) 橋本亮太：日本臨床精神神経薬理学会 評議員, 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称: EGUIDE 委員会)
- 6) 橋本亮太：日本うつ病学会 評議員, 気分障害の治療ガイドライン検討委員会委員, 精神科治療ガイドラインの普及・教育・検証委員会委員長 (通称: EGUIDE 委員会)
- 7) 橋本亮太：日本生物学的精神医学会 理事, 将来計画委員会委員 (顧問), 広報委員会委員, 関連学会対応委員会副委員長, 評議員
- 8) 橋本亮太：日本神経科学学会 臨床・関連学会連携委員会委員
- 9) 橋本亮太：国際神経精神薬理学会 理事, フェローシップ表彰委員会委員, 教育委員会委員, 評議員

##### (3) 座長

- 1) 橋本亮太：統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 の概説. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 2) 橋本亮太：精神科で本当に必要な薬は何か?-精神科における合意形成を目指して-. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 3) 橋本亮太：精神科診断に一石を投じる生物学的精神医学の現状と課題. 第 41 回日本精神科診断学会, オンライン, 2022.9.9.
- 4) 橋本亮太：双極性障害における診断, 治療の普及啓発. 第 35 回日本総合病院精神医学会総会 ランチョンセミナー, 東京, 2022.10.29.
- 5) 橋本亮太：最先端の精神医学研究は精神疾患の診断法の開発にどこまで迫れるか?. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会

合同年会), 東京, 2022.11.5.

- 6) 橋本亮太: 精神科ガイドラインを臨床にいかに生かすか~各疾患ガイドラインのポイントと活用. 第41回日本社会精神医学会, 神戸, 2023.3.17.
- 7) 橋本亮太: 診療ガイドラインからみた薬物治療最前線. 第17回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25.

#### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 橋本亮太: 日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neuroscience」編集委員会委員
- 2) 橋本亮太: 日本精神神経学会機関誌「Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports」編集委員会委員
- 3) 橋本亮太: 日本神経精神薬理学会機関誌「Neuropsychopharmacology Reports」「日本神経精神薬理学雑誌」編集委員会委員

### E. 研修

#### (1) 研修企画

- 1) 橋本亮太: 第118回日本精神神経学会学術総会ワークショップ, WS:診療技術向上ワークショップ～統合失調症患者への治療介入を学ぶ～. 福岡, 2022.6.16.
- 2) 橋本亮太: 大阪精神科診療所協会, うつ病治療ガイドライン講習会. オンライン, 2022.7.9.
- 3) 橋本亮太: 琵琶湖病院, EGUIDE クリニカルプラクティス講習会. 大津, 2022.8.6.
- 4) 橋本亮太: 2022年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修, 第1回統合失調症の標準治療研修. オンライン, 2022.8.28.
- 5) 橋本亮太: 2022年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修, 第1回うつ病の標準治療研修. オンライン, 2022.9.4.
- 6) 橋本亮太: 大阪精神科診療所協会, 統合失調症薬物治療ガイドライン2022講習会. オンライン, 2022.9.10.
- 7) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習, 統合失調症のガイドライン講習. 東京, 2022.10.2.
- 8) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習, うつ病のガイドライン講習. 東京, 2022.10.16.
- 9) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト北海道/北陸/中部/中国講習, 統合失調症のガイドライン講習. オンライン, 2022.10.29.
- 10) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト北海道/北陸/中部/中国講習, うつ病のガイドライン講習. オンライン, 2022.10.30.
- 11) 橋本亮太: 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCPNPPP4学会合同年会)ワークショップ, 薬剤師のためのEGUIDEプロジェクトワークショップ. 東京, 2022.11.5.
- 12) 橋本亮太: 第44回日本生物学的精神医学会年会, 第32回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第52回日本神経精神薬理学会年会, 第6回日本精神薬学会総会・学術集会の4学会合同年会(BPCPNPPP4学会合同年会)ワークショップ, 統合失調症薬物治療ガイドライン講習会(EGUIDEプロジェクト). 東京, 2022.11.6.
- 13) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト近畿/九州/東北講習1, 統合失調症のガイドライン講習. オンライン, 2022.11.19.
- 14) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト近畿/九州/東北講習1, うつ病のガイドライン講習. オンライン, 2022.11.20.
- 15) 橋本亮太: EGUIDE プロジェクト近畿/九州/東北講習2, 統合失調症のガイドライン講習. オンライン, 2022.11.21.

ンライン, 2022.11.19.

- 16) 橋本亮太 : EGUIDE プロジェクト近畿/九州/東北講習 2, うつ病のガイドライン講習. オンライン, 2022.11.20.
- 17) 橋本亮太 : EGUIDE プロジェクト関東/四国講習, 統合失調症のガイドライン講習. オンライン, 2022.11.26.
- 18) 橋本亮太 : EGUIDE プロジェクト関東/四国講習, うつ病のガイドライン講習. オンライン, 2022.11.27.
- 19) 橋本亮太 : 第 17 回日本統合失調症学会サテライト企画, 当事者・家族むけワークショップ「上手な診察の受け方のコツ（うけコツ）」～統合失調症薬物治療ガイド 2022 より. オンライン, 2023.3.25.
- 20) 橋本亮太 : 第 17 回日本統合失調症学会サテライト企画, 統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一. オンライン, 2023.3.26.

(2) 研修会講師

- 1) 橋本亮太 : WS:引用される精神医学論文の書き方～Editor の経験紹介と個別相談. 第 118 回日本精神神経学会学術総会ワークショップ, 福岡, 2022.6.17.
- 2) 橋本亮太 : 軽症. 大阪精神科診療所協会, うつ病治療ガイドライン講習会, オンライン, 2022.7.9.
- 3) 橋本亮太 : 精神病性. 大阪精神科診療所協会, うつ病治療ガイドライン講習会, オンライン, 2022.7.9.
- 4) 橋本亮太 : ワークショップの目的, 概説. 琵琶湖病院, EGUIDE クリニカルプラクティス講習会, 大津, 2022.8.6.
- 5) 橋本亮太 : 治療抵抗性統合失調症. 2022 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 1 回統合失調症の標準治療研修, オンライン, 2022.8.28.
- 6) 橋本亮太 : 統合失調症の標準治療研修とは. 2022 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 1 回統合失調症の標準治療研修, オンライン, 2022.8.28.
- 7) 橋本亮太 : 児童思春期. 2022 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 1 回うつ病の標準治療研修, オンライン, 2022.9.4.
- 8) 橋本亮太 : うつ病の標準治療研修とは. 2022 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 1 回うつ病の標準治療研修, オンライン, 2022.9.4.
- 9) 橋本亮太 : 治療抵抗性. 大阪精神科診療所協会, 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 講習会, ウェブオンライン開催, オンライン, 2022.9.10.
- 10) 橋本亮太 : 趣旨説明及び理解度記入. 統合失調症のガイドライン講習, EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習, 東京, 2022.10.2.
- 11) 橋本亮太 : 趣旨説明及び理解度記入. うつ病のガイドライン講習, EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習, 東京, 2022.10.16.
- 12) 橋本亮太 : 治療抵抗性統合失調症. 統合失調症薬物治療ガイドライン講習会 (EGUIDE プロジェクト), 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.6.
- 13) 橋本亮太 : 認知社会機能障害検査の意義と概要. 第 17 回日本統合失調症学会 サテライト企画 : WS 統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一, オンライン, 2023.3.26.
- 14) 橋本亮太 : 認知社会機能障害検査の今後と質疑応答. 第 17 回日本統合失調症学会 サテライト企画 : WS 統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一, オンライン, 2023.3.26.
- 15) 松本純弥 : 認知機能障害の解説と活用例. 第 17 回日本統合失調症学会 サテライト企画 : WS

統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一, オンライン, 2023.3.26.

- 16) 伊藤颯姫: 社会活動評価と病前推定 IQ の測定. 第 17 回日本統合失調症学会 サテライト企画: WS 統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一. オンライン, 2023.3.26.
- 17) 小池春菜: 現在の推定 IQ の測定 (類似). 第 17 回日本統合失調症学会 サテライト企画: WS 統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一, オンライン, 2023.3.26.
- 18) 新谷茉莉果: 現在の推定 IQ の測定 (記号探し). 第 17 回日本統合失調症学会 サテライト企画: WS 統合失調症の認知社会機能障害の測定一短時間で実施する簡易な認知社会機能測定の実際一, オンライン, 2023.3.26.

## F. その他

### 【受賞】

- 1) 山形弘隆, 藤井優子, 關 友恵, 長谷川尚美, 橋本亮太, 中川 伸: 第 118 回日本精神神経学会学術総会優秀発表賞, EGUIDE プロジェクトによる統合失調症患者・うつ病患者に対する外来処方の変化, 2022.6.17.
- 2) 越智紳一郎, 橋本亮太ほか: JSNP Excellent Presentation Award for CINP, 日本神経精神薬理学会 2022 年最優秀演題賞 (鍋島賞), 2022.6. 受賞論文: Ochi S, Tagata H, Hasegawa N, Yasui-Furukori N, Iga JI, Kashiwagi H, Kodaka F, Komatsu H, Tsuboi T, Tokutani A, Numata S, Ichihashi K, Onitsuka T, Muraoka H, Iida H, Ohi K, Atake K, Kishimoto T, Hori H, Takaesu Y, Takeshima M, Usami M, Makinodan M, Hashimoto N, Fujimoto M, Furihata R, Nagasawa T, Yamada H, Matsumoto J, Miura K, Kido M, Hishimoto A, Ueno SI, Watanabe K, Inada K, Hashimoto R: Clozapine Treatment Is Associated With Higher Prescription Rate of Antipsychotic Monotherapy and Lower Prescription Rate of Other Concomitant Psychotropics: A Real-World Nationwide Study. Int J Neuropsychopharmacol, 25(10):818-826, 2022.
- 3) 松本純弥: 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神経精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会) 優秀演題発表賞, 統合失調症・双極性障害・うつ病・自閉スペクトラム症の多施設大規模データによる疾患横断的な大脳皮質構造の類似度の解析, 2022.11.

### 【その他】

- 1) 橋本亮太: プレスリリース. 統合失調症薬物治療ガイドライン 2022 年版公開 (日本神経精神薬理学会), 2022.5.11.
- 2) 橋本亮太: 研究会主宰. 第 18 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.6.5.
- 3) 橋本亮太: 総合司会. 2022 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 1 回統合失調症の標準治療研修, オンライン, 2022.8.28.
- 4) 橋本亮太: 総合司会. 2022 年度国立精神・神経医療研究センター精神保健に関する技術研修 第 1 回うつ病の標準治療研修, オンライン, 2022.9.4.
- 5) 橋本亮太: 総合司会. 統合失調症のガイドライン講習. EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習, 東京, 2022.10.2.
- 6) 橋本亮太: 総合司会. うつ病のガイドライン講習, EGUIDE プロジェクト関東 NCNP 講習, 東京, 2022.10.16.
- 7) 橋本亮太: 総合司会. 統合失調症薬物治療ガイドライン講習会 (EGUIDE プロジェクト), 第 44 回日本生物学的精神医学会年会, 第 32 回日本臨床精神神経薬理学会年会, 第 52 回日本神

精神薬理学会年会, 第 6 回日本精神薬学会総会・学術集会の 4 学会合同年会 (BPCNPNPPP4 学会合同年会), 東京, 2022.11.6.

- 8) 橋本亮太: 研究会主宰. 第 19 回 COCORO 合同会議, オンライン, 2022.12.4.
- 9) 橋本亮太: ファシリテーター. 第 17 回日本統合失調症学会サテライト企画, 当事者・家族むけワークショップ「上手な診察の受け方のコツ（うけコツ）」～統合失調症薬物治療ガイド 2022 より. オンライン, 2023.3.25.

## 8. 睡眠・覚醒障害研究部

### I. 研究部の概要

#### 研究部および研究室の研究目的

睡眠・覚醒障害研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、不安障害、認知症性障害、神経・発達障害などの病態および治療法を解明することを目的としている。このため、精神生理学、時間生物学、神経薬理学、分子生物学、神経内分泌学、脳画像解析学などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長1名、室長2名に加え、リサーチフェロー2名、科研費研究員2名、研究補助員2名、事務助手3名、国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

#### 研究部の構成

部長：栗山健一、精神生理機能研究室長：吉池卓也、臨床病態生理研究室長：北村真吾、リサーチフェロー：河村葵、伏見もも、併任研究員：松井健太郎（センター病院）、都留あゆみ（センター病院）、羽澄恵（公共精神健康医療研究部）、客員研究員：内山 真（日本大学）、兼板佳孝（日本大学）、大川匡子（睡眠総合ケアクリニック代々木）、井上雄一（医療法人社団絹和会）、樋口重和（九州大学）、本多 真（東京都医学総合研究所）、上田泰己（東京大学）、池田正明（埼玉医科大学）、山寺 亘（東京慈恵会医科大学）、守口善也（ルンドベックジャパン）、阿部高志（筑波大学）、福水道郎（瀬川記念小児神経学クリニック）、榎本みのり（東京工科大学）、有竹清夏（埼玉県立大学）、亀井雄一（上諏訪病院）、渡辺和人（明治大学）、三島和夫（秋田大学）、西村勝治（東京女子医科大学）、梶達彦（あいせいかいココロのクリニック）、阿部又一郎（伊敷病院）、岡島義（東京家政大学）、高橋英彦（東京医科歯科大学）、肥田昌子（HKG合同会社）、玉置應子（国立研究開発法人理化学研究所）、鈴木正泰（日本大学）、村上裕樹（大分大学）、吉村道孝（愛知東邦大学）、太田英伸（秋田大学）、綾部直子（秋田大学）、駒田陽子（明治薬科大学）、田中克俊（北里大学）、志村哲祥（東京医科大学）、大橋由基（洛和会音羽リハビリテーション病院）、尾崎章子（東北大学）、金子宜之（日本大学）、坂口昌徳（筑波大学）、橋本英樹（プロアシスト）。そのほか科研費研究員2名、科研費研究補助員1名、センター研究補助員1名、科研費事務助手2名、センター事務助手1名、外来研究員2名、外来研究補助員4名、研究生14名、実習生7名。

### II. 研究活動

#### 1) 適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備 (21FA1002)

厚生労働科学研究費補助金循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業（代表研究者：栗山健一、研究分担者：吉池卓也 他、研究協力者：北村真吾、綾部直子、河村葵、岡郷しおぶ、篠崎未生、松井健太郎、都留あゆみ、大槻怜、長尾賢太朗、羽澄恵、伏見もも 他）

本研究では主に、前研究事業「健康づくりのための睡眠指針2014」のブラッシュアップ・アップデートを目指した「睡眠の質」の評価及び向上手法確立のための研究(19FA1009)」の成果として見出した、「睡眠の質」を反映し健康を維持するために目標となる「睡眠休養感」指標を社会実装するための準備を行う。「睡眠休養感」指標は、「睡眠時間」指標と相補的な関係を有し、国民の健康寿命延伸を測るための調査項目として組み込まれるとともに、各個人が日常生活の中で、健康維持・促進に役立てられるような指標とすべく、これに資するプラットフォームを開発する。さらに、「睡眠休養感」を向上・改善に寄与する日常生活行動・習慣を調査し、生活・睡眠習慣に組み込むべき目標として具体に提示することも目標とする。さらに、国

民の睡眠健康増進に寄与しうる、睡眠健診の有用性および実装可能性を検討するとともに、ウェアラブルデバイス等を用いた簡易睡眠測定の有用性も検証し、前述のプラットフォームに組み込み有用性を高める試みも検討する。本研究の成果は、次世代の健康指針アップデートに直ちに活用可能であるとともに、健康づくりに寄与する、睡眠健康の社会基盤を整備・発展させることに寄与する。

## 2) 睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究

精神・神経疾患研究開発費研究事業「睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究（課題番号 2-1）」（主任研究者：栗山健一、研究協力者：吉池卓也、北村真吾、松井健太郎、河村葵、伏見もも、木村綾乃、岡部しのぶ、篠崎未生）

本研究事業の目的は、わが国初にして最大の睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンクを構築することである。日本国内の主要な睡眠ポリグラフ実施機関と連携し、2013 年 1 月以降に睡眠ポリグラフを受検した患者の睡眠ポリグラフデータと、これに紐づいた患者背景情報・関連生体データを集約することで、睡眠障害および併存精神・神経疾患における新規バイオマーカーの探索、病態解明促進や新たな健康指標の定義を見越した生理学的検討を行う基盤とする。このために、厚生労働省や経済産業省、総務省が発行する医療情報システムに関する安全管理ガイドライン（3省 2 ガイドライン）に準拠したセキュアなクラウドシステムを構築し、多施設で個別に保管されるデータを本事業用の統一データ集計フォーマットを用いてクラウドストレージ上に集約・管理することでデータバンク化を実現した。各共同研究施設にて本データバンクを活用した個別研究課題が進行中である（NCNP 研究課題名：閉塞性睡眠時無呼吸における睡眠関連病態指標と併存疾患との関連性の検討）。

## 3) 睡眠時間の主観－客観乖離と健康不安が不眠症診断・健康転機に及ぼす影響の包括的検討

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：栗山健一）

不眠症は「不眠に対する恐怖」と「生理的過覚醒」が病態の中核をなす症候群であるが、一部の患者は自身の睡眠に対して、眠れているにもかかわらず「全く眠れてない」という誤認を示す。睡眠障害国際分類（The International Classification of Sleep Disorders: ICSD）第 2 版では、「睡眠状態誤認」は逆説性不眠症（Paradoxical Insomnia: PI）という下位診断分類の特徴とされていたが、近年は多くの不眠症患者が共有する病態特性（スペクトラム）と考えられるようになった。「睡眠状態誤認」は、「摸とした健康障害への不安」を基に生じる認知構造として、身体症状症（疼痛性障害含む）と共に特徴を示し、加齢に伴い増強する疾患共通の治療抵抗因子であると推測される。特に、大脳灰白皮質の萎縮性病変および脳微小血管障害を背景とした大脳白質病変が、この認知構造に関与している可能性が推測されるが、系統的に検討した研究はない。本研究は、上記病態関連性を検討するとともに、身体愁訴、疼痛症状との関連も検討項目に加え、不眠症と身体症状症等の精神疾患病態との関連性を検討することを目的とし行われた。

## 4) 個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究 C（研究代表者：北村真吾）

朝型夜型の個人差はクロノタイプとも呼ばれ、連続的なスペクトラムである。概日リズム位相や周期と密接な関連を示すことから視交叉上核を中心とした生物時計機構の表現型のひとつと考えられている。双生児研究からクロノタイプの遺伝率は約 50% と見積もられ、複数の大規模なゲノムワイド関連研究（GWAS）でも共通した遺伝的多型が報告されるなど、生得的な側面がある。一方、クロノタイプを規定する環境要因に関する知見は乏しい。また、睡眠・覚醒スケジュールや深部体温やメラトニンといった概日リズムの主要なマーカーでは 6～12 週齢ごろに概日リズムが確立するが、確立時期に個人差がみられ、その要因も不明である。本研

究では、概日リズム機能と密接な授乳形態と光環境に着目し、出生後1年間の縦断的評価を行い、クロノタイプ及び概日リズム確立時期に寄与する出生後要因を明らかにする目的で実施される。

#### 5) 脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 若手研究（研究代表者：吉池卓也）

双極性障害やうつ病を有する患者において、朝に増悪するうつ症状の日内変動が特徴的に出現するのみならず、体温調節、ホルモン分泌、時計遺伝子発現といった様々な生理指標の概日パターンが健常者と比べ変化することが知られている。近年、ヒトの灰白質及び白質の容積が同日内で変化することが明らかにされ、脳の粗大な構造変化（構造的可塑性）の生理学的意義が議論されるようになった。しかし、構造的可塑性が精神疾患においていかなる変化を示し、病態及び治療といかに関係するかは明らかにされていない。本研究は、磁気共鳴画像（MRI）の解析手法のうち、脳表面形態計測法や白質微細構造解析法を用い、気分障害患者の臨床症状、治療反応性、高次認知機能との関連を検討することにより、特定の脳部位における構造変化を描出し、新たな病態指標を開発することを目的として行われる。

#### 6) 急性期治療後の高齢患者のリハビリテーション効果促進のための心理的支援に関する研究

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究C（研究代表者：篠崎未生）

高齢者の入院治療では、2週間程度の安静臥床であってもフレイル（虚弱）が急激に進行する。フレイルは要介護の前段階であり、適切な介入を行うことで健康な状態に回復しうるという可逆性が特徴とされるが、入院患者では介入効果が限定的であり、介入効果の阻害・促進要因の解明が課題となっている。本研究は、急性期治療後の高齢入院患者のフレイルの進行を予防し、身体的回復を促進するための心理的支援に関する知見を得ることを企図して行われた。急性期治療直後の高齢の入院患者723名（平均年齢 $82.4 \pm 7.7$ 歳、男性243名）から客観的身体機能、主観的身体機能、認知機能、抑うつ、心理的レジリエンス、活動意欲、体組成、ライフスタイル、平均生存期間、死因に関するデータ収集を行った。認知機能の低さは、入院中の介入効果を減弱させること、また、年齢と性別で調整後も、退院時の客観的身体機能の低さと抑うつの高さが、退院後の死亡リスクと関連することが明らかとなった。また、加齢は、虚弱高齢者の客観的身体機能の低下に対する抑うつを緩和する可能性が示唆された。

#### 7) 概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム

文部科学省科学研究費助成事業 基盤研究C（研究代表者：肥田昌子）

概日リズム睡眠-覚醒障害のサブタイプの一つである非24時間睡眠-覚醒リズム障害と関連する遺伝要因を調べるために、概日リズム・睡眠関連遺伝子76個に対して次世代シーケンシングによる配列解析を行い、*APOE*, *CLOCK*, *NR1D2*, *PER1*の4遺伝子に新規バリアントが存在することを明らかにした。最近になり、*APOE*と*CLOCK*のバリアントは非常に希なバリアントとして観察された。*APOE*ならびに*Per1*欠損マウスは野生型マウスと変わらない行動リズムを示すが、*CLOCK*と*NR1D2*変異体動物は活動リズムの概日性や睡眠調節と関連する一方ことが報告されている。そこで、*CLOCK*と*NR1D2*遺伝子について、非24時間睡眠-覚醒リズム障害患者合計64人を対象にサンガーシーケンスを実施した。*CLOCK*遺伝子には2つの新規バリアントと3つの既知バリアントが見い出され、クロマチンリモデリングを阻害するドメインや転写活性化ドメインに位置するバリアントが存在した。また、*NR1D2*遺伝子には1つの新規バリアントと8つの既知バリアントが検出され、標的とする遺伝子の転写抑制に関わるドメインに位置するバリアントが認められた。また、*NR1D2*新規バリアントと*PER1*新規バリアントは同一個体に存在していた。さらなる解析が必要であるが、これらのバリアントは概日リズムや睡眠-覚醒の調節に関連する可能性がある。

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK および民放テレビ、ラジオ、オンラインサイト、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

#### (2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。栗山健一は東京農工大学（客員教授）、滋賀医科大学（客員教授）、東京慈恵会医科大学（客員教授）、早稲田大学など教育機関において学生教育の援助を行った。北村真吾は、京都大学（非常勤講師）、神奈川大学（非常勤講師）、埼玉県立大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。綾部直子は帝京大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。吉池卓也は武藏野大学（非常勤講師）において学生教育の援助を行った。

また、研究員は日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、日本公衆衛生学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会、関東脳核医学研究会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。

#### (3) 精研の研修の主催と協力

#### (4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

全ての研究員は、厚生労働科学研究（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備（研究代表者：栗山健一）に参画し、厚生労働省健康日本21（第2次）による「健康づくりのための睡眠指針」アップデートの際に活用される新たな睡眠健康指標の普及・活用基盤開発・整備に貢献した。

栗山健一は、厚生労働行政推進調査事業費（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究（研究代表者：辻一郎）に参加し、健康日本21（第三次）における国民の健康づくりのための休養（睡眠）プラン策定に貢献した。

栗山健一は、厚生労働科学研究（障害者政策総合研究事業）睡眠薬・抗不安薬の処方実態調査ならびに共同意思決定による適正使用・出口戦略のための研修プログラムの開発と効果検証研究（研究代表者：高江洲義和）に参加し、主に共同意思決定方針策定に貢献した。

栗山健一は、厚生労働省 国民健康・栄養調査企画解析検討会に委員として参加了。

栗山健一は、独立行政法人 医薬品医療機器総合機構専門委員として専門協議に参加了。

#### (5) センター内における臨床的活動

栗山健一、吉池卓也、河村葵は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来での診療および臨床研究を行った。

栗山健一は、7つの睡眠薬および覚醒維持薬開発治験の施設責任者を務め、吉池卓也、河村葵はこれの分担医師として治験に参加了。

#### (6) その他

栗山健一は、精神保健判定医として複数の医療観察法裁判に参加し、同法の有機的・機能的運用に貢献した。

## IV. 研究業績

### A. 刊行物

#### (1) 原著論文

- 1) Otsuka Y, Kaneita Y, Tanaka K, Itani O, Kaneko Y, Suzuki M, Matsumoto Y, Kuriyama K. Nonrestorative sleep is a risk factor for metabolic syndrome in the general Japanese population. *Diabetol Metab Syndr.* 15(1):26, 2023. doi: 10.1186/s13098-023-00999-x
- 2) Kitajima T, Kuriyama K. Editorial: Circadian rhythm sleep-wake disorders: Pathophysiology, comorbidity, and management. *Front Psychiatry.* 14:1134798, 2023. doi: 10.3389/fpsyg.2023.1134798
- 3) Takaesu Y, Suzuki M, Moline M, Pinner K, Inabe K, Nishi Y, Kuriyama K. Effect of discontinuation of lemborexant following long-term treatment of insomnia disorder: Secondary analysis of a randomized clinical trial. *Clin Transl Sci.* 2022. doi: 10.1111/cts.13470
- 4) Kuriyama K. The association between work burnout and insomnia: how to prevent workers' insomnia. *Sleep and Biological Rhythms* 21(1):3-4, 2023. doi: 10.1007/s41105-022-00431-3
- 5) Otsuka Y, Kaneita Y, Tanaka K, Itani O, Matsumoto Y, Kuriyama K. Longitudinal assessment of lifestyle factors associated with nonrestorative sleep in Japan. *Sleep Med* 101:99-105, 2023. doi: 10.1016/j.sleep.2022.10.025
- 6) Yoshiike T, Utsumi T, Matsui K, Nagao K, Saitoh K, Otsuki R, Aritake-Okada S, Suzuki M, Kuriyama K. Mortality associated with nonrestorative short sleep or nonrestorative long time-in-bed in middle-aged and older adults. *Sci Rep* 12(1): 189, 2022. Doi: 10.1038/s41598-021-03997-z
- 7) Enomoto M, Kitamura S, Nakazaki K. Validity of an algorithm for determining sleep/wake states using FS-760 in school-aged children. *Journal of Physiological Anthropology*, 41(1), 29. <https://doi.org/10.1186/s40101-022-00303-2>, 2022
- 8) Eto T, Kitamura S, Nishimura K, Takeoka K, Nishimura Y, Lee S, Ohashi M, Shikano A, Noi S, Higuchi S. Circadian phase advances in children during camping life according to the natural light-dark cycle. *Journal of Physiological Anthropology*, 41(1), 42. <https://doi.org/10.1186/s40101-022-00316-x>, 2022
- 9) Yoshimura M, Kitamura S, Eto N, Hida A, Katsunuma R, Ayabe N, Motomura Y, Nishiwaki Y, Negishi K, Tsubota K, Mishima K. Relationship between Indoor Daytime Light Exposure and Circadian Phase Response under Laboratory Free-Living Conditions. *Biological Rhythm Research*, 53(5), 765–785. <https://doi.org/10.1080/09291016.2020.1782691>, 2022
- 10) Hazumi M, Matsui K, Tsuru A, Otsuki R, Nagao K, Ayabe N, Utsumi T, Fukumizu M, Kawamura A, Izuhara M, Yoshiike T, Kuriyama K. Relationship between COVID-19-specific occupational stressors and mental distress in frontline and non-frontline staff. *Heliyon* 8, e10310, 2022. doi: 10.1016/j.heliyon.2022.e10310
- 11) Utsumi T, Yoshiike T, Kaneita Y, Aritake-Okada S, Matsui K, Nagao K, Saitoh K, Otsuki R, Shigeta M, Suzuki M, Kuriyama K. The association between subjective-objective discrepancies in sleep duration and mortality in older men. *Sci Rep* 12, 18650, 2022. doi: 10.1038/s41598-022-22065-8
- 12) Otsuki R, Matsui K, Yoshiike T, Nagao K, Utsumi T, Tsuru A, Ayabe N, Hazumi M, Fukumizu M, Kuriyama K. Decrease in Social Zeitgebers Is Associated With Worsened Delayed Sleep-Wake Phase Disorder: Findings During the Pandemic in Japan. *Front Psychiatry* 13, 1–8, 2022. doi: 10.3389/fpsyg.2022.898600
- 13) Matsuno S, Yoshimura A, Yoshiike T, Morita S, Fujii Y, Honma M, Ozeki Y, Kuriyama K. Toe grip force of the dominant foot is associated with fall risk in community-dwelling older adults: a

- cross-sectional study. *J Foot Ankle Res* 15, 42, 2022. doi: 10.1186/s13047-022-00548-1
- 14) Yoshiike T, Melloni EMT, Dallaspezia S, Yamada N, Kuriyama K, Benedetti F. Depressive cognitive style relates to an individual trait of time perception in bipolar depression: A preliminary study. *J Affect Disord Rep* 9, 100363, 2022. doi: 10.1016/j.jadr.2022.100363
  - 15) Tsuru A, Matsui K, Kimura A, Yoshiike T, Otsuki R, Nagao K, Hazumi M, Utsumi T, Fukumizu M, Mukai Y, Takahashi Y, Sakamoto T, Kuriyama K. Sleep disturbance and health-related quality of life in Parkinson's disease: A clear correlation between health-related quality of life and subjective sleep quality. *Parkinsonism Relat Disord* 98, 86–91, 2022. doi: 10.1016/j.parkreldis.2022.04.014
  - 16) Ichiba T, Kawamura A, Nagao K, Kurumai Y, Fujii A, Yoshimura A, Yoshiike T, Kuriyama K. Periocular Skin Warming Promotes Sleep Onset Through Heat Dissipation From Distal Skin in Patients With Insomnia Disorder. *Front Psychiatry* 13, 2022. doi: 10.3389/fpsyg.2022.844958
  - 17) Saitoh K, Yoshiike T, Kaneko Y, Utsumi T, Matsui K, Nagao K, Otsuki R, Aritake-Okada S, Kadotani H, Kuriyama K, Suzuki M. Associations of nonrestorative sleep and insomnia symptoms with incident depressive symptoms over 1–2 years: Longitudinal results from the Hispanic Community Health Study/Study of Latinos and Sueño Ancillary Study. *Depress. Anxiety* 39, 419–428, 2022. doi: 10.1002/da.23258, 2022
  - 18) Kawamura A, Yoshiike T, Matsuo M, Kadotani H, Oike Y, Kawasaki M, Kurumai Y, Nagao K, Takami M, Yamada N, Kuriyama K. Comparison of the usability of an automatic sleep staging program via portable 1-channel electroencephalograph and manual sleep staging with traditional polysomnography. *Sleep Biol. Rhythms*. 26 August. Doi.org/10.1007/s41105-022-00425-1, 2022
  - 19) Hida A, Iida A, Ukai M, Kadotani H, Uchiyama M, Ebisawa T, Inoue Y, Kitamura S, Mishima K. Novel *CLOCK* and *NR1D2* variants in 64 sighted Japanese individuals with non-24-hour sleep-wake rhythm disorder. *Sleep*, zsad063. doi: 10.1093/sleep/zsad063, 2023

## (2) 総説

- 1) 栗山健一: 特集にあたって. (企画) 特集 精神・神経疾患に併存する過眠の背景病態と治療マネジメント. *精神医学* 64(10) : 1307, 2022.
- 2) 内海智博, 栗山健一: 5 記憶の固定と情報処理における睡眠の役割. 特集「認知症と睡眠」. *Progress in Medicine* 42(10): 33-39, 2022.
- 3) 栗山健一: 寄稿 睡眠の量と質の不足がもたらす健康被害—わが国の現状と必要な対策—. *人事院月報* 2022年10月号 878(10): 7-11, 2022.
- 4) 栗山健一: 6 夜型生活/昼夜逆転にどう対処するか. 特集 睡眠—覚醒障害～レジデントが知っておきたい診断や治療のコツ～ *精神科 Resident* 3(3): 40-43, 2022.
- 5) 松井健太郎, 都留あゆみ, 栗山健一: 睡眠関連運動障害. 特集/睡眠障害へのアプローチ最前線. *月刊「臨床と研究」* 99(9): 43-48, 2022.
- 6) 栗山健一: COVID-19 と睡眠障害. *日本女性医学学会ニュースレター* 27(2): 2, 2022.
- 7) 栗山健一: はじめに. 特集「不眠症」研究・診療の最前線 *週刊医学のあゆみ* 281(10): 931, 2022.
- 8) 河村葵, 栗山健一: 不眠症と加齢・性差. 特集「不眠症」研究・診療の最前線. *週刊医学のあゆみ* 281(10): 941-947, 2022.6.4.
- 9) 伊豆原宗人, 栗山健一: 薬剤性不眠とその周辺. 特集「不眠症」研究・診療の最前線. *週刊医学のあゆみ* 281(10): 979-985, 2022.
- 10) 内海智博, 栗山健一: 自殺と不眠. 特集「不眠症」研究・診療の最前線. *週刊医学のあゆみ* 281(10): 1007-1013, 2022.
- 11) 栗山健一: 在宅睡眠脳機能評価のウェアラブルシステムと将来像. 特集 ウェアラブル診断シ

- ステムとしての簡易睡眠検査を再考する. 睡眠医療 16(1): 37-43, 2022.
- 12) 栗山健一: 特集にあたって. (企画) 特集 精神神経疾患の治療と QOL 精神医学 64(3) : 253, 2022.
  - 13) 栗山健一: 良質な睡眠とは: 睡眠の量と質. 特集 皮膚科医が学ぶ睡眠医学. Visual Dermatology 21(3) : 242-244, 2022.
  - 14) 吉池卓也, 栗山健一: 死別のニューロサイエンス. 精神医学 64(12): 1605-1611, 2022.
  - 15) 吉池卓也: これだけは知っておきたい睡眠・覚醒の生理学, レジデントノート 24(10): 1665-1673, 2022.
  - 16) 吉池卓也: 不安関連疾患と不眠. 医学のあゆみ 281(10): 23158-23162, 2022.
  - 17) 吉池卓也: 睡眠障害 (不眠症) 疾患各論 増大号特集 精神科診療のピットフォール. 精神医学 64(5): 762-767, 2022.
  - 18) 有竹清夏, 伏見もも: 反復睡眠潜時検査の実際と対象となる患者とは? 特集睡眠-覚醒障害. 精神科 Resident 3(3): 174-176, 2022.
  - 19) 都留あゆみ, 河村葵, 松井健太郎: 不眠症およびその他の睡眠・覚醒障害の性差と薬物療法. 臨床精神薬理 25(7), 781-789, 2022.

#### (3) 著書

- 1) 栗山健一: アスク セレクション3 『依存症・トラウマ・発達障害・うつ 「眠り」とのただならぬ関係』 特定非営利活動法人 ASK 事業部アスク・ヒューマンケア pp36-45, 2023.3.10.
- 2) 栗山健一: レム睡眠行動障害・概日リズム睡眠-覚醒障害. 今日の治療指針 2023 年版 医学書院 pp1056-1057, 2023.1.1.

#### (4) 研究報告書

- 1) 栗山健一: 適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業) (研究代表者: 栗山健一) 総括・分担研究報告書. pp 1-9.2023.3.
- 2) 栗山健一: 休養に関する数値目標と施策の提案. 令和4年度厚生労働行政推進調査事業費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)「次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究 (研究代表者: 辻 一郎)」分担研究報告書. 2023.3.
- 3) 栗山健一: 睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究. 令和4年度精神・神経疾患研究開発費 (主任研究者: 栗山健一) 研究事業実績報告書. 2023.3.

#### (5) 翻訳

#### (6) その他

- 1) 栗山健一: 3つの快眠スイッチ・いびき・悪夢ほか 健康長寿の睡眠対策. NHK テキスト きょうの健康, pp46-53, 2023年1月号.
- 2) 栗山健一: 心身を健康に保つ睡眠「冬季うつとは」 高校保健ニュース 第773号, 少年写真新聞社, 2023年1月8日号.
- 3) 栗山健一: 「睡眠の質を上げて健やかに生きる」 vol.2 生活の質を低下させる睡眠中の異常行動 メディカル虎の巻. 大樹生命 月刊情報誌「繁栄」 vol.513, 2023年2月号.
- 4) 栗山健一: 「睡眠の質を上げて健やかに生きる」 vol.1 睡眠休養感と睡眠時間・床上時間の関係 メディカル虎の巻. 大樹生命 月刊情報誌「繁栄」 vol.512, 2023年1月号.
- 5) 栗山健一, 柳沢正史: 2. 睡眠の科学知識 理想的な1日のサイクル 新・健康の科学知識. 科学雑誌 Newton 別冊, pp34-35, 2023年1月5日号.

- 6) 栗山健一, 柳沢正史: 2. 睡眠の科学知識 寝室の環境 新・健康の科学知識. 科学雑誌 Newton 別冊, pp38-39, 2023年1月5日号.
- 7) 赤柴恒人, 栗山健一: 2. 睡眠の科学知識 いびき 新・健康の科学知識. 科学雑誌 Newton 別冊, pp43-45, 2023年1月5日号.
- 8) 栗山健一: 2. 睡眠の科学知識 睡眠の Q&A 新・健康の科学知識. 科学雑誌 Newton 別冊, pp46-47, 2023年1月5日号.
- 9) 栗山健一:「寝言といびきのシャレになる話, ならない話」. 集英社 éclat エクラ 17(1), pp170-173, 2023年1月号.
- 10) 栗山健一:「不眠を打破する5つのポイント」. 週刊文春 医者が教える「75歳の壁」丸ごと攻略ガイド 文春ムック, pp26-29, 2022年12月29日発行.
- 11) 栗山健一:新型コロナウイルス感染症と睡眠障害 ~エキスパートが語る~精神疾患と「不眠」. MSD 資材, 2022年.
- 12) 栗山健一: 15分が人生を変える. AERA 32, p10-15, 7月18-25日 合併特大号, 2022.7.11.
- 13) 栗山健一:「睡眠時異常行動」. ドクターサロン 66(8), pp18-21, 2022年8月号.
- 14) 栗山健一: 3つの快眠スイッチ・いびき・悪夢ほか 健康長寿の睡眠対策. NHK テキスト きょうの健康, pp24-39, 2022年7月号.
- 15) 吉池卓也, 栗山健一:「眠りの質向上」で「ヤクルト1000」爆発的ヒット でも高齢者は「睡眠時間が長い」と死亡リスク1.57倍!. 特集. 週刊新潮 25, pp129-134, 2022年6月30日号.
- 16) 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵 お年寄りの長寝に注意. 47NEWS, デジタル, 2022.5.31.
- 17) 栗山健一: 充足感のある睡眠をとる 「中高年のための医療最前線」. 月刊ことぶき.
- 18) 吉池卓也: 睡眠休養感が大切 特集「睡眠と生活のリズム」. こころの元気+ 3月号, 2023.3.15.
- 19) 吉池卓也:「睡眠休養感」の意義とは?. Medical Tribune, 2022.8.23.
- 20) 吉池卓也: 疲れがとれたかどうかが大事 お年寄りは悩んでいる. 週刊新潮, 2022.6.30.
- 21) 吉池卓也: 最低6~7時間再徹底を「休養感」にも注目. 輸送経済新聞, 2022.6.14.
- 22) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵 お年寄りの長寝に注意. 47NEWS, 2022.5.31.
- 23) 吉池卓也, 栗山健一: 夜の睡眠「休養感」が鍵 死亡リスク影響の可能性. 神戸新聞, 2022.5.23.
- 24) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は休養感が鍵 お年寄り, 長寝に注意. 徳島新聞, 2022.5.19.
- 25) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵 高齢者は長寝に注意. 中部経済新聞, 2022.5.19.
- 26) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵 お年寄りの長寝に注意. 山陰中央新報, 2022.5.19.
- 27) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵 高齢者は長寝に注意. 北海道新聞, 2022.5.18.
- 28) 吉池卓也, 栗山健一: 65歳以上, 必要以上の長寝はリスク 鍵は休養感. 山陽新聞, 2022.5.17.
- 29) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠の「休養感」 健康維持の鍵. 静岡新聞, 2022.5.17.
- 30) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵. 東奥日報, 2022.5.16.
- 31) 吉池卓也, 栗山健一: 休養感ある睡眠で健康維持. 大分合同新聞, 2022.5.12.
- 32) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠時の休養感 健康の鍵に. 信濃毎日新聞, 2022.5.12.
- 33) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵. 佐賀新聞, 2022.5.11.
- 34) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵. 長崎新聞, 2022.5.10.
- 35) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵. 北日本新聞, 2022.5.10.
- 36) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠「休養感」が鍵. 国内機関研究 高齢者は長寝注意. 福井新聞 D刊, 2022.5.10.
- 37) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵. 高齢者, 長寝は悪影響も. 秋田さきがけ, 2022.5.7.
- 38) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵に. 千葉日報, 2022.5.6.
- 39) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠で重要なことは「休養感」 高齢者で死亡リスク左右. 京都新聞, 2022.5.5.
- 40) 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠は「休養感」が鍵 お年寄りの長寝に注意. デーリー東北, 2022.5.2.

## B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、パネルディスカッション等
- 1) 栗山健一：睡眠医療から見た不眠症患者が抱える課題. 第31回日本睡眠環境学会学術大会（特別講演），オンライン，2023.3.4.
- 2) 栗山健一：うつ病診療における身体科医との連携促進を目指した診断補助システムの開発. 第35回総合病院精神医学会総会，シンポジスト，かつしかシンフォニーヒルズ，2022.10.28-29.
- 3) 栗山健一：睡眠中の恐怖記憶強化過程への介入に基づくPTSD新規治療法の開発. 恐怖記憶の分子・生理学的基盤の解明とPTSDの治療開発. 第118回日本精神神経学会学術総会，福岡国際会議場，シンポジスト，2022.6.16.
- 4) 栗山健一，中込和幸：委員会シンポジウム「COVID-19パンデミックがもたらしたもの—感染拡大最前線および長期的展望」. 第118回日本精神神経学会学術総会，コーディネーター・座長，福岡サンパレス，2022.6.17.
- 5) 栗山健一，鈴木正泰：睡眠医学が切り開くうつ病の新たな診断・治療戦略. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，コーディネーター・座長，ウェスティン都ホテル京都，2022.6.30.
- 6) 栗山健一：ヒト時間認知の背景生理機構. 時間認知と健康・疾患のかかわり. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，シンポジスト，ウェスティン都ホテル京都，2022.6.30.
- 7) 栗山健一，兼板佳孝：睡眠休養感と関連する睡眠障害，環境・行動要因. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，コーディネーター・座長，ウェスティン都ホテル京都，2022.7.1.
- 8) 栗山健一，間中健介：経済損失を考慮した睡眠健康診査の必要性. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，コーディネーター・ワークショップ座長，ウェスティン都ホテル京都，2022.6.30.
- 9) 北村真吾：新型コロナ流行は6NCの診療にどう影響したのか～6NC統合電子カルテデータベース6NC-EHRsから見える非感染性疾患への影響～. JH Symposium 2022—コロナで変わるコロナを変える—，オンライン，2022.11.2.
- 10) 吉池卓也：睡眠・概日リズムとせん妄. シンポジウム：せん妄の病態機序仮説 update 第35回日本総合病院精神医学会総会，かつしかシンフォニーヒルズ，シンポジスト，2022.10.28-29.
- 11) 吉池卓也，栗山健一：遷延性悲嘆症の生物学的理解：接近と回避に着目して. シンポジウム：遷延性悲嘆症の概念と治療の動向～DSM5-TRとICD-11を受けて～. 日本トラウマティックストレス学会，シンポジスト，八王子市芸術文化会館，2022.7.23-24.
- 12) 吉池卓也：睡眠・生体リズムの制御機構と気分障害. ワークショップ：睡眠・生体リズムをターゲットとした気分障害治療—時間生物学的治療の日常臨床での実践—. 第19回日本うつ病学会総会，第5回日本うつ病リワーク協会年次大会，座長・シンポジスト，J:COMホルトホール大分，2022.7.14-17.
- 13) 吉池卓也：不眠に対する光療法の有用性. シンポジウム：外来不眠症治療における非薬物的アプローチの今. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，シンポジストウェスティン都ホテル京都，2022.6.30-7.1.
- 14) 吉池卓也：不眠症と睡眠休養感. シンポジウム：睡眠休養感と関連する睡眠障害，環境・行動要因. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，シンポジスト，ウェスティン都ホテル京都，2022.6.30-7.1.
- 15) 吉池卓也：気分障害と時間認知. シンポジウム：時間認知と健康・疾患のかかわり. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，オーガナイザー・座長・シンポジスト，ウェスティン都ホテル京都，2022.6.30-7.1.
- 16) 吉池卓也：不安・ストレス関連疾患における不眠・過眠の病態と治療. シンポジウム：精神疾患の睡眠研究の最前線—最近のトピックと臨床への展開—. 日本睡眠学会第47回定期学術集会，シンポジスト，ウェスティン都ホテル京都，2022.6.30-7.1.
- 17) 河村葵，栗山健一：女性ホルモンと睡眠問題. シンポジウム：性ホルモンと睡眠・健康. 日本

睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.30.

- 18) 河村葵, 羽澄恵, 篠崎未生, 岡郵しのぶ, 伏見もも, 吉池卓也, 栗山健一: 睡眠衛生指導による一次予防効果. ワークショップ: 経済損失を考慮した睡眠健康診査の必要性. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.30.

## (2) 一般演題

- 1) 熊谷千尋, 櫻井理紗, 北村真吾, 渡辺浩, 星本弘之, 波多野賢二, 平松治彦, 美代賢吾: データの利活用に向けたナショナルセンターの 電子カルテ情報統合データベース構築におけるデータ整備の試み. 第 42 回医療情報学連合大会・第 23 回日本医療情報学会学術大会, 札幌コンベンションセンター, 2022.11.17-20.
- 2) 榎本みのり, 國枝泰希, 東風谷祐子, 北村真吾: 夕食のタイミングの違いによる夜間睡眠構築の変化. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.31-7.1.
- 3) 松井健太郎, 綾部直子, 吉村道孝, 北村真吾, 都留あゆみ, 三島和夫, 亀井雄一, 井上雄一, 内村直尚, 内山真, 吉村篤, 稲田健, 高江洲義和, 住吉太幹, 栗山健一: 中枢性過眠症患者における社会機能障害の実態調査: 多施設共同症例対照研究. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.31-7.1.
- 4) 内海智博, 吉池卓也, 有竹(岡田)清夏, 松井健太郎, 河村葵, 長尾賢太朗, 都留あゆみ, 大槻怜, 伊豆原宗人, 篠崎未生, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一: The association between sleep sufficiency and circadian activity rhythms in older men. 第 29 回日本時間生物学会学術大会, 宇都宮大学, 2022.12.3-4.
- 5) 吉池卓也, Elisa Melloni, Sara Dallaspezia, Francesco Benedetti, 山田尚登, 栗山健一: Cognitive features of depression relate to an individual trait of time perception in bipolar disorder. 第 29 回日本時間生物学会学術大会, 宇都宮大学, 2022.12.3-4.
- 6) 長尾賢太朗, 吉池卓也, 河村葵, 松井健太郎, 岡郵しのぶ, 内海智博, 都留あゆみ, 大槻怜, 伊豆原宗人, 篠崎未生, 羽澄恵, 栗山健一: 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野県松本文化会館, 2022.11.10-12.
- 7) 内海智博, 吉池卓也, 有竹清夏, 松井健太郎, 河村葵, 長尾賢太朗, 都留あゆみ, 大槻怜, 伊豆原宗人, 篠崎未生, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一: 地域高齢男性における概日活動リズムと睡眠充足度の関連. 第 44 回日本生物学的精神医学会年会(BPCNPNPPP4 学会合同年会), 都市センターホテル, 2022.11.4-6.
- 8) 吉池卓也, 守口善也, 濱野敬子, 中島聰美, 栗山健一: 死別に対する悲嘆反応と社会行動基盤の関連: 悲嘆の回避成分の役割. 第 35 回日本総合病院精神医学会総会, かつしかシンフォニーヒルズ, 2022.10.28-29.
- 9) 内海智博, 吉池卓也, 有竹(岡田)清夏, 松井健太郎, 長尾賢太朗, 都留あゆみ, 大槻怜, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一: 高齢男性における睡眠時間の主観-客観乖離と総死亡の関連解析. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.30-7.1.
- 10) 長尾賢太朗, 吉池卓也, 河村葵, 松井健太郎, 岡郵しのぶ, 内海智博, 都留あゆみ, 大槻怜, 伊豆原宗人, 篠崎未生, 羽澄恵, 栗山健一: 睡眠・覚醒相後退障害の入院治療と寛解維持の関連因子. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.30-7.1.
- 11) 綾部直子, 羽澄恵, 高島智昭, 立山和久, 須賀裕輔, 今泉チエ美, 亀澤光一, 森田三佳子, 松井健太郎, 都留あゆみ, 吉池卓也, 吉田寿美子, 栗山健一: 不眠を合併する精神疾患患者に対する集団睡眠改善プログラムの効果. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウェスティン都ホテル京都, 2022.6.30-7.1.
- 12) 大槻怜, 松井健太郎, 都留あゆみ, 長尾賢太朗, 内海智博, 羽澄恵, 綾部直子, 福水道郎, 吉池卓也, 鈴木正泰, 栗山健一: COVID-19 感染拡大下における医療従事者の希死念慮と関連す

- る睡眠習慣. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウエスティン都ホテル京都, 2022.6.30-7.1.
- 13) 内海智博, 吉池卓也, 有竹清夏, 松井健太郎, 河村葵, 長尾賢太朗, 都留あゆみ, 大槻怜, 綾部直子, 羽澄恵, 斎藤かおり, 鈴木正泰, 栗山健一: ピッツバーグ睡眠質問票の基本構造と構成要因の同定. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡国際会議場, 2022.6.16-18.
  - 14) 長尾賢太朗, 吉池卓也, 松井健太郎, 河村葵, 都留あゆみ, 内海智博, 大槻怜, 伊豆原宗人, 大久保亮, 栗山健一: COVID-19 パンデミック下における健康不安と感染予防行動の関連. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡国際会議場, 2022.6.16-18.
  - 15) 伏見もも, 飯島竜星, 木山水月, 久保川媛加, 菅原このみ, 高倉麻里子, 有竹清夏: レジスタンストレーニングが女性の熱放散と夜間睡眠に与える効果. 第 3 回日本睡眠検査学会学術集会, オンライン, 2022.11.12-12.4.
  - 16) 伏見もも, 飯島竜星, 木山水月, 久保川媛加, 菅原このみ, 高倉麻里子, 野口史織, 金野倫子, 有竹清夏: 卵胞期・黄体期におけるレジスタンス運動と脳波的睡眠構造の変化. 第 52 回日本臨床神経学会学術大会, 国立京都国際会館, オンライン, 2022.11.24-26.
  - 17) 伏見もも, 飯島竜星, 木山水月, 久保川媛加, 菅原このみ, 高倉麻里子, 有竹清夏: 身体運動が若年成人女性の熱放散と睡眠に与える効果. 第 50 回日本女性心身医学会学術集会, オンライン, 2022.8.27-28.
  - 18) 伏見もも, 飯島竜星, 木山水月, 久保川媛加, 菅原このみ, 高倉麻里子, 有竹清夏: 卵胞期及び黄体期における運動介入が夜間睡眠と遠位・近位皮膚温に与える効果. 第 16 回日本臨床検査学教育学会学術大会, 埼玉医科大学日高キャンパス, 2022.8.18-19.
  - 19) 伏見もも, 飯島竜星, 木山水月, 久保川媛加, 菅原このみ, 高倉麻里子, 野口史織, 金野倫子, 有竹清夏: 身体運動が若年成人女性の皮膚温変動と睡眠に与える効果. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会(ベストプレゼンテーション賞受賞), ウエスティン都ホテル京都, 2022.6.31-7.1
  - 20) 飯島竜星, 門岡あかり, 菅原海莉, 伏見もも, 細江みづき, 大木昇, 有竹清夏: 主観的入眠潜時と放熱および睡眠構造の関連性. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウエスティン都ホテル京都, 2022.6.31-7.1.
  - 21) Ryusei Iijima, Akari Kadooka, Kairi Sugawara, Momo Fushima, Mizuki Hosoe, Sayaka Aritake-Okada. Subjective sleep onset latency is influenced by the sleep structure and body heat loss in human subjects. SLEEP2022, Charlotte Convention Center, 2022.6.4-8.
  - 22) 篠崎未生, 綾部直子, 三島和夫, 吉村道孝, 北村真吾, 都留あゆみ, 亀井雄一, 井上雄一, 内村直尚, 内山真, 吉村篤, 稲田健, 高江洲義和, 住吉太幹, 栗山健一: 精神疾患有する睡眠障害患者と原発性睡眠障害患者における睡眠時間と認知機能の関連性の差異. 日本睡眠学会第 47 回定期学術集会, ウエスティン都ホテル京都, 2022.7.1.
  - 23) Mikako Yasuoka, Mio Shinozaki, Kaori Kinoshita, Jiaqi Li, Marie Takemura, Akiko Yamaoka, Yutaka Arahata, Izumi Kondo, Hidenori Arai, Shosuke Satake: Association between the use of home-visit or daycare services and acute illness or mental stress in patients discharged from a community-based integrated care ward. The 8th Asian Conference for Frailty and Sarcopenia (ACFS), Nagoya, Japan, 2022.10.27.
  - 24) 安岡実佳子, 篠崎未生, 木下かほり, 李嘉琦, 竹村真里枝, 山岡朗子, 新畠豊, 近藤和泉, 荒井秀典, 佐竹昭介: 地域包括ケア病棟から自宅退院 3 か月後の介護サービス利用と急性疾患及び精神的ストレスとの関連. 日本サルコペニア・フレイル学会第 9 回学会大会, 立命館大学びわこ・くさつキャンパス, 2022.10.29.

### (3) 研究報告会

#### (4) その他

- 1) 栗山健一: 日本人の睡眠時間・睡眠の季節性変化. 日テレ. NewsEvery, 2023.3.8.

- 2) 栗山健一: NHK ラジオ「健康ライフ」. NHK ラジオ第一放送, (「睡眠休養感」, 「睡眠の誤解」, 「3つのポイントで不眠改善」, 「眠れない夜はどうする」, 「シニアの不眠対策」) 再放送, 2023.3.6-10.
- 3) 栗山健一: 「なぜ寝言は出るの?…大人の場合, 頻度が増えてきたら要注意」. yomiDr, 読売新聞, 2023.3.4.
- 4) 栗山健一: “睡眠休養感”アップで健康長寿. アンコール放送, NHK きょうの健康, 2023.1.23-26.
- 5) 栗山健一: NHK ラジオ「健康ライフ」. NHK ラジオ第一放送, (「睡眠休養感」, 「睡眠の誤解」, 「3つのポイントで不眠改善」, 「眠れない夜はどうする」, 「シニアの不眠対策」) 放送, 2022.11.21-25.
- 6) 栗山健一: 正しく学ぼう正しい睡眠. 睡眠教室ムービー, 特設 Web コンテンツ スマートライフプロジェクト (厚生労働省), [https://www.smartlife.mhlw.go.jp/event/correct\\_sleep/](https://www.smartlife.mhlw.go.jp/event/correct_sleep/) 小学館, 2022.9.30.
- 7) 栗山健一: “睡眠休養感”アップで健康長寿「3つの快眠スイッチ」. NHK きょうの健康, 2022.7.11-14.

#### C. 講演

- 1) 栗山健一: 「健康増進のための睡眠習慣」. 日本橋保健センター精神保健講習会, 日本橋保健センター, 2023.1.19.
- 2) 栗山健一: 「質の良い睡眠をとるために」. 学校訪問型睡眠講座 (公益財団法人 神経研究所 睡眠健康推進機構), 知多市立中部中学校, 2022.12.16.
- 3) 栗山健一: 「概日リズム睡眠・覚醒障害とストレス関連疾患」. 国分寺市医師会学術講演会 (北多摩医師会/エーザイ共催), いづみプラザ, ハイブリッド開催 (Web 配信), 2022.12.14.
- 4) 栗山健一: 「睡眠とこころ・からだの健康」. 小平市役所メンタルヘルス研修会 (小平市役所主催), 2022.11.30.
- 5) 栗山健一: 「プライマリーケアにおける不眠～うつと不眠と不定愁訴～」. Tokyo Insomnia Symposium (MSD 主催), オンライン, 2022.10.13.
- 6) 栗山健一: 特別講演「“良い”睡眠とは～疫学調査・生理研究から見えてきたこと」. 第3回精神科睡眠障害 WEB セミナー (住友ファーマ主催), オンライン, 2022.9.21.
- 7) 栗山健一: 「精神疾患に併存する不眠の理解と対策」. 名古屋精神科 不眠症 WEB セミナー (MSD 主催), オンライン, 2022.7.28.
- 8) 栗山健一: 「概日リズム睡眠・覚醒障害とストレス関連疾患」. 第3回多摩精神科睡眠障害を考える会 (杏林大学) (エーザイ主催), オンライン, 2022.7.13.
- 9) 栗山健一: 「眠りの重要性」. 学校訪問型睡眠講座 (公益財団法人 神経研究所 睡眠健康推進機構), 小山市立網戸小学校, 2022.6.10.
- 10) 栗山健一: 「高齢者の不眠症へのアプローチー出口を見据えた不眠症治療とはー」. 高齢者医療 WEB セミナー (MSD 主催), オンライン, 2022.4.25.
- 11) 北村真吾: 「めざせ! 睡眠博士! ~睡眠の質を高めるために大切なこと, 賢い睡眠のポイント~」. 神戸市立大池中学校, オンライン, 2022.6.23.
- 12) 吉池卓也: 「高齢者の睡眠の特徴～認知症 OVERVIEW」. 睡眠を学んで診療に役立てる会 (MSD 主催), オンライン, 2023.2.10.
- 13) 吉池卓也: 「健康を規定する睡眠の量と質」. 睡眠からうつ病を考える (ヴィアトリス主催), オンライン, 2023.1.24.
- 14) 河村葵: 「月経前症候群/月経前不快気分障害(PMS/PMDD)の病態と治療」. 武田薬品医学教育会, オンライン, 2022.10.13.
- 15) 河村葵: 「睡眠と女性ホルモンの関係について」. 府中市健康教育講演会「睡眠から生活を整え

よう」、オンライン、2023.1.14.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 栗山健一：日本睡眠学会 理事・評議員
- 2) 栗山健一：日本時間生物学会 評議員
- 3) 栗山健一：日本生物学的精神医学会：評議員
- 4) 肥田昌子：日本時間生物学会 評議員
- 5) 肥田昌子：日本睡眠学会 評議員
- 6) 北村真吾：日本時間生物学会 評議員
- 7) 北村真吾：日本生理人類学会 理事
- 8) 北村真吾：日本睡眠学会 評議員
- 9) 吉池卓也：日本時間生物学会 評議員
- 10) 吉池卓也：日本睡眠学会 評議員
- 11) 吉池卓也：日本生物学的精神医学会 評議員

##### (3) 座長

##### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 栗山健一：日本睡眠学会 倫理委員会 委員長
- 2) 栗山健一：日本睡眠学会 利益相反委員会 副委員長
- 3) 栗山健一：日本睡眠学会 用語委員会 副委員長
- 4) 栗山健一：日本睡眠学会 睡眠研究支援委員
- 5) 栗山健一：日本睡眠学会 将来構想委員
- 6) 栗山健一：日本睡眠学会 機関誌編集委員
- 7) 栗山健一：日本睡眠学会 SBR Associate Editor
- 8) 栗山健一：日本時間生物学会 学会誌編集委員
- 9) 栗山健一：日本精神神経学会 精神医学研究推進委員
- 10) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会誌 編集委員
- 11) 吉池卓也：日本総合病院精神医学会 治療戦略検討委員
- 12) 吉池卓也：日本睡眠学会 認定試験委員会試験問題作成委員

#### E. 研修

##### (1) 研修企画

##### (2) 研修会講師

#### F. その他

## 9. 知的・発達障害研究部

### I. 研究部の概要

知的・発達障害研究部は、知的障害研究室、発達機能研究室の二室体制で構成され、知的障害、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、限局性学習症、トウレット症などの神経発達症の病態解明、治療・支援に関する研究を幅広く実施している。研究においては、部局内だけではなく、国立精神・神経医療研究センター内、ならびに、国立国際医療研究センター国府台病院とのナショナルセンター間の連携、東京大学、京都大学、名古屋大学、名古屋市立大学などの中核的研究機関との連携を幅広く構築している。加えて研究者のキャリア・パス形成を基本方針の一つに掲げており、競争的研究資金の確保、研究計画の立案と遂行、論文執筆まで、共同性と相互研鑽を通して研究者としての成長を図り、知的・発達障害ならびに関連領域における次世代のリーダーシップを国内外で発揮できる人材育成を強く意識している。また、厚生労働省から委託された国研修として発達障害者支援研修を実施し、各地でかかりつけ医対応力向上研修を実施する高度な知識と技能を有する医師の育成を行っているほか、注意欠如・多動症のペアレントトレーニング実施者養成研修を実施し、各地で心理社会的治療を普及させるリーダーシップを発揮する人材の育成を行うなど、知的・発達障害の支援を拡充するための人材育成の拠点として機能できるよう努めている。

部長の岡田 俊（児童精神医学）は、自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症、トウレット症とその精神医学的併存症に関して、臨床知見を基盤として、ゲノム（自閉スペクトラム症、統合失調症の発症に関するゲノムコピー数変異）、新規介入手法の開発（自閉スペクトラム症に対するオキシトシン、難治性トウレット症に対する脳深部刺激療法）、操作的診断技術開発（K-SADS, CAT: 名古屋市立大学との共同〔日本医療研究開発機構（AMED）〕、ABIT: 中京大学との共同〔厚生労働科学研究〕）、ガイドライン作成（注意欠如・多動症）、周産期メンタルヘルスと養育が子どもの発達に及ぼす影響の調査研究、22q11.2 欠失症候群のコホート研究、請園正敏リサーチフェロー（行動科学、生物統計学）や高田美希科研費研究員（臨床心理学）とともに新型コロナウィルス感染症（COVID-19）感染拡大下における神経発達症の子どもと親のメンタルヘルスに関する前向き調査研究、トランスレーショナル・メディカルセンターの竹田和良 TMC 室長とともに思春期児童を対象にしたオンラインメンタルヘルスプラットフォームの開発などに取り組んできた〔科学技術振興機構（JST）〕。また、NCNP 病院の児童精神科外来において診療を提供するとともに、診断・評価を実施してきた。また、厚生労働科学研究への参画や協力だけではなく、環境省（エコチル）や文部科学省（生徒指導提要）の委員会に関与し、知的・発達障害に関連する国の施策に寄与してきた。

魚野翔太室長（認知神経科学、実験心理学）は、自閉スペクトラム症を中心とする神経発達症の表情、視線、バイオロジカルモーションの知覚などの社会認知機能の障害とその神経基盤について認知科学的手法を用いた病態解明を試み、当研究部においても岡田部長、江頭優佳リサーチフェロー（神経生理学、実験心理学）、林小百合リサーチフェロー（神経生理学、実験心理学）、高田美希科研費研究員（臨床心理学）との共同のもと、定型発達ならびに神経発達症当事者のデータサンプリングを精力的に進めてきた。江頭は、神経発達症における多様な時間知覚に着目し、その神経基盤の同定と神経発達症における障害の解明に取り組んでいる。また、林は、注意欠如・多動症等において見いだされる実行機能障害、特に抑制機能の障害に対して社会的報酬が促進的な影響を及ぼすことによる着目し、年齢層ごとの両機能の連関や神経発達症における障害の解明を進めている。さらに、請園は、高野裕治客員研究員との共同のもと、バルプロ酸自閉症モデルマウスを用いて、社会性を反映する新規行動指標としてのリーチング課題を作成し、その妥当性を検証し、介入技法の検討へと独自性のある研究を展開している。また、高田は、行動上の問題のある児童の養育を変容する行動的介入である親子相互交流療法(PCIT)に焦点を当て、システムティックレビューを実施して、治療継続を阻害する要因を明確化し、さらに個別的要因に依拠したプロトコール開発を目指して前向き研究を開始している。さらに、高田は AMED 研究（中込班）のメンタルヘルスプラットフォ

ーム KOKOROBO のオンライン相談員として研究に参加している。

今年度はさらに脳統合イメージングセンター (IBIC) との連携をはかり、バイオマーカーを取り入れて、臨床表現型や神経心理学的機能の背後にある神経学的病態を明らかにする研究への展開を図っているほか、国立国際医療研究センター国府台病院子どもこころ総合診療センターの宇佐美政英センター長らと共同して、児童症例の前方視的追跡を開始し、併存障害との関係を明らかにする研究へと開始している。

また、石井室長は、注意欠如・多動症のペアレントトレーニングの有効性について、ランダム化比較試験を継続するとともに、その有効性を行動特性だけではなく、親子の愛着や脳画像からも検討を進めている。また、厚生労働科学研究としてペアレントトレーニング実施者養成研修プログラムを作成し、岡田部長とともに 2 回の実施者養成研修を実施するほか、NCNP が主催した日本 ADHD 学会第 14 回総会（大会長 岡田俊）のサテライトプログラムとしても実施者養成研修を実施した。さらに、石井は、岡田とともに、国立がんセンター島津太一らとの共同でペアレントトレーニングの普及を阻害している要因を明確化し、その実装を図る取り組みを継続している。

上述のように、岡田部長、魚野室長、石井室長に加え、リサーチフェローとして、江頭優佳、林小百合、請園正敏、科研費研究員として高田美希が研究に参加したことに加え、科研費研究補助員の鈴木茜音、研究生の熊澤 綾、草間千絵、上田 翠、中島直美、廣瀬愛希子、眞神花帆、奥貫奈津恵、崎原ことえ、中村雅子、田中美歩、白川由佳、石橋佳奈が研究を支えた。また、併任研究員の中川栄二、客員研究員として、會田千重、稻垣真澄、稻田尚子、岩垂喜貴、宇佐美政英、小川しおり、小沢 浩、加我牧子、加賀佳美、金生由紀子、久島 周、黒田美保、軍司敦子、小平雅基、佐藤 弥、鈴木 太、高野裕治、高橋長秀、竹市博臣、趙 朔、辻井農亜、堀内史枝、安村 明、山内 彩、吉川 徹、義村さや香が研究に参加している。また、秋月由紀子、井上さゆり、鈴木道久が、研究、研修活動を支えた。

## II. 研究活動

### 1) 認知神経科学的手法を用いた神経発達症と併存精神疾患の病態研究

注意欠如・多動症ならびに自閉スペクトラム症の臨床表現型（神経発達症特性、適応行動、不安・抑うつなどの精神病理学的評価）と神経心理学的機能（表情認知、視線認知、実行機能、報酬系、時間知覚）との関係についてデータを蓄積している。科学研究費（岡田、魚野、江頭、林）ならびに精神・神経疾患研究開発費（分担：岡田）に基づいて研究を遂行しており、その成果の一部を International Congress of Physiological Anthropology(江頭、林), Society for Neuroscience (江頭、林), 日本 ADHD 学会（江頭、林、岡田）、日本心理学会（魚野、林）、日本児童青年精神医学会（岡田、魚野、江頭、林）、Frontiers in Psychology に発表した。さらに、江頭と林は、それぞれ国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部横断的研究推進費若手研究助成を得て、国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科宇佐美政英（客員研究員）らとともに神経発達症児・者および定型発達児・者を対象としたデータサンプリングできる体制を構築した。江頭は JH Symposium 2022 での若手研究課題の発表において最多得票を獲得し、林は精神保健研究所研究報告会において若手奨励賞を獲得した。また、魚野室長は理化学研究所の佐藤 弥（当部、客員研究員）及び京都大学の義村さや香（当部、客員研究員）との他機関連携、また深圳大学（中国）の趙朔との国際共同研究において自閉スペクトラム症ならびに社会認知の基盤となる病態研究を推進し、その成果を Frontiers in Psychology に発表した。

### 2) 注意欠如・多動症のペアレントトレーニングに関する実装研究

注意欠如・多動症の心理社会的治療として、ペアレントトレーニングはその有効性が実証され、第一選択治療とされているにもかかわらず、本邦におけるエビデンス構築は不十分であり、その普及が十分ではない。石井室長は、東京大学との連携のもと、ペアレントトレーニングのランダム化比較試験を遂行するとともに、行動特性のみならず愛着形成、MRI 撮像を行い、多様なアウトカム

を用いてそのエビデンス構築を進めている。また、石井は、ペアレントトレーニング実施者養成研修テキストを作成し、岡田とともにペアレントトレーニング実施者養成研修を実施した。また、NCNP が主催した日本 ADHD 学会第 14 回総会（大会長 岡田俊）のサテライトプログラムとしても実施者養成研修を実施するとともに、日本 ADHD 学会シンポジウムでの成果を発表した。石井は、国立がんセンター島津太一、齊藤順子との連携のもと、ペアレントトレーニング普及の促進要因、阻害要因を明確化した上で実装化を図る研究を推進している。

### 3) 自閉スペクトラム症の齧歯類モデルの確立と動物モデルを用いた治療法開発

自閉スペクトラム症の治療法開発の支障となっているのは、齧歯類モデルが数多く存在し、どのモデルを対象に検討すればいいか不明瞭なことである。齧歯類モデルが多数存在する理由の一つとして、一側面の社会性の行動指標のみで、自閉症モデルか否かの判断をしていることがあげられる。さらに重要な点として、治療法開発の障害はモデルが定められないことだけでなく、効果判定の指標となる行動が同定されていないことである。請園正敏リサーチフェローは、高野裕治客員研究員（人間環境大学教授）と共同して、ラットのリーチング行動を用いた、齧歯類の社会性検討のための新規行動指標を確立し、国際誌にも発表した。これは、リーチング行動を学習した個体同士であれば、以下 2 つの社会的な行動が生じる指標である。1 つは、リーチング行動を行っている他個体へ注視する行動が生じる。リーチング行動を学習している観察個体は、他個体が行っているリーチング行動に対して接近行動だけでなく、注視行動が頻繁に生じることを示した。もう一つは、他個体から注視されると、リーチング行動の速度が促進されることである。すなわち、リーチング行動を実施している個体は、他個体から見られていることを知覚することが可能であることが示された。この現象は、リーチング行動を学習した個体同士でしかみられず、未学習個体では他個体への注視行動が頻繁には生じず、速度の促進の強度も減少する。加えて、リーチング行動をする個体がケージメイトか否かも影響しており、未学習個体でかつ他個体がケージメイトではない場合は、ほとんどその行動を注視しなかった。この新規行動指標を、胎児期にバルプロ酸を投与されたマウスを対象に検討したところ、バルプロ酸モデルでは、リーチングを行っている他個体へ注視することがなく、また他個体から注視されても、リーチング行動の促進が生じなかった。興味深いことに、バルプロ酸モデル動物がリーチング行動を行っていても、健常個体は注視する頻度が減少していることがみられた。今後、炎症モデルでも同様の結果がみられるかどうかの検討を展開していく。現在は、バルプロ酸モデルを対象にこの行動指標を用いた治療法開発研究を遂行している（科研費：請園、開発費：岡田）。

### 4) 神経発達症の中間表現型と候補となる認知基盤の認知神経科学研究

江頭優佳リサーチフェローは漢字認識時の脳活動を調べ、その成果を *Frontiers in Human Neuroscience* 誌に公表した。限局性学習症については、言語の差異があることから本邦におけるエビデンス構築が求められるが、いまなおそのエビデンスは不足している。本邦での読み書き障害は漢字学習開始後に症状が顕在化することが多いため漢字認知時の脳機能不全が認められる可能性がある。限局性学習症では従来から報告があった紡錘状回（漢字の形態認知を担う）のみならず、より低次の視覚処理を行う後頭極での機能不全がある可能性が示された。従って漢字認知以前の視知覚の弱さが限局性学習症の症状をもたらす要因の一つである可能性がある。一方で限局性学習症の症状を呈する背景には自閉スペクトラム症や注意欠如・多動症といった他の発達障害の併存がある場合が多く、今後は背景因子を考慮した症状個別の検討が必要である。

更に、発達障害においては社会的情報に対する認知のゆがみを持つことが多く報告されていることに関連し、林小百合リサーチフェローは他者動作から社会的情報を取得する神経心理学的メカニズムを、バイオロジカルモーションを用いて検討している。これまでに、特定の脳波成分が他者情報（動作者の性別・動作の美しさ）によって変化することを明らかにし、*Neuropsychologia* 誌に公表した。また、林は、注意欠如・多動症の成人において、実行機能課題の成績に、笑顔のフィード

バックの効果が減弱していることを報告し、精研報告会において若手奨励賞を獲得した。

#### 5) 養育困難を抱える児童のペアレンティング・スキル向上を目指した介入の有効性検証

神経発達症の児童は、親の養育困難と結びつきがちであり、親の不安や抑うつ、虐待リスクとも関連する。ペアレンティング・スキル向上と子どもの行動上の問題の減少に PCIT の有効性が示されているが、その一方で、中断率が高く、十分に効果が出るまで治療が継続できない、などの課題も存在する。高田美希科研員は岡田部長と共同して、システムティックレビューを実施し、中断に関与する要因を特定した。この成果は、日本児童青年精神医学会で発表するとともに、国際誌に投稿中である。

また、COVID-19 感染拡大下で、発達障害の子どもや養育者のメンタルヘルス悪化が懸念されたことから、2020 年 5 月の緊急事態宣言発令中に日本心身障害児協会島田療育センターはちおうじ小沢浩所長（当部、客員研究員）と共同し、発達障害がある子どもとその養育者を対象にして、生活の質に関する精神症状、心理社会的状況、日常生活状況との関連を調べ、1 年おきの継続的フォローアップを実施している（岡田、請園、高田）。

#### 6) 難治性トウレット症に対する脳深部刺激療法の有効性・安全性とレジストリ構築

トウレット症の一部は、成人期にも症状が強く残存し、身体損傷を伴ったり、社会生活が著しく困難な病状を呈することがある。脳深部刺激療法は、そのような患者の有効な治療となり得てはいるものの、その有効性と安全性の検証が不十分であり、本邦におけるレジストリ構築が望まれる。岡田部長は、NCNP 病院脳神経外科の岩崎真樹部長（兼 手術・材料部長）、木村唯子医師のレジストリ構築を目指す研究（開発費、分担：岩崎部長）に参加している。

#### 7) 自閉スペクトラム症の中核症状に対するオキシトシンの有効性・安全性の検討

自閉スペクトラム症の中核症状に有効な薬物療法は確立していない。オキシトシンは、対人関係障害を改善する治療薬候補であるが、その有効性、安全性は未確立であり、特に耐性の出現が問題となっていた。岡田部長は、浜松医科大学の山末英典教授がリーダーを務める AMED 融合脳の開発分担者として参加した。その結果、オキシトシン新規製剤が自閉スペクトラム症の対人関係障害の改善に有効であることが示され、その成果を Brain 誌に公表した。また、自閉スペクトラム症発症やオキシトシン反応性に関連するゲノムのコピー数変異については久島周名古屋大学講師（当部、客員研究員）らと進め、その成果の一部は Biological Psychiatry 誌に公表した（Kushima et al.）。

臨床試験では、知的能力障害のある自閉スペクトラム症についての知見は含まれていない。そのため、知的能力障害のある自閉スペクトラム症への介入効果を検証した會田千重国立病院機構肥前精神医療センター療育指導科長（当部、客員研究員）と共同して検討を進めているほか、請園は齧歯類における検討を進めている。

#### 8) 注意欠如・多動症の薬物療法の継続・中止に関するガイドライン作成

注意欠如・多動症の薬物療法の有効性・安全性は確認されているものの、その継続・中止の基準は明確でない。岡田は、客員研究員である辻井農畠富山大客員教授、宇佐美政英國際医療研究センター国府台病院児童精神科科長らとともに実施したメタ解析をもとにデシジョン・エイドを作成し、患者の意思決定に資する資材作成を行い、その成果を Psychiatry and Clinical Neuroscience Reports に公表した。さらに、2022 年秋に公表された注意欠如・多動症の診断、治療に関する本邦ガイドラインを執筆した。

#### 9) 22q11.2 欠失症候群の精神障害発生に関するフォローアップ研究

22q11.2 欠失症候群は、先天性心疾患、精神発達遅延、特徴的顔貌を主徴とする症候群で、胸腺低形成・無形成による免疫低下、口蓋裂・軟口蓋閉鎖不全、鼻声、低カルシウム血症などを合併す

ることの多い遺伝子疾患であるが、成人期までに統合失調症などの精神疾患を高率に発症することが知られているが、その実態は明確でない。岡田部長は、名古屋大学（尾崎紀夫教授）、愛知学院（夏目長門教授、早川統子准教授）の構築するコホートにおいて、山内彩心理士（当部、客員研究員）、久島周（名古屋大学講師）（当部、客員研究員）とともに経時的評価を実施している。その成果は日本児童青年精神医学会で発表した。

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

当研究部では、NCNP および部のホームページに神経発達症に関する支援情報を含めた医学的情報を掲示したほか、知ることから始めようこころの情報サイトの執筆に関与した。NHK きょうの健康、市民公開講座（オンライン）や書籍等で市民向けの情報発信に努めた。

#### (2) 専門教育面における貢献

岡田部長は、奈良女子大学において心理職を目指す博士課程大学院生、高知県立大学において精神科専門看護師を目指す博士課程大学院生の教育に関与するほか、国立リハビリテーションセンターの研修において、発達障害の専門的支援を目指す児童指導員、保健師、看護師、臨床心理士などへの教育を実施した。また、岡田は日本精神神経学会専門医の試験委員を担当し、専門医教育に貢献した。

また、魚野室長は同志社大学、武庫川女子大学、石井室長は東京大学医学部、江頭リサーチフェローは九州大学、立教大学、東海大学、請園正敏リサーチフェローは神奈川大学において、心理職の大学教育に関与し、魚野室長は、京都大学における文部科学省事業（神経発達症の介入を専門とする高度医療人材養成プログラム）にも参画している。

#### (3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援法に示されている専門家養成のため、全国で開始された、かかりつけ医等発達障害対応力向上研修の基盤研修として、発達障害支援者研修パート1（2022年6月29日～30日、59人）、パート2（2022年9月28日～29日、56人）、パート3（2022年11月16日～17日、84人）、および、行政実務研修（2023年1月18日～19日、31人）を実施した（課程主任：岡田、課程副主任：石井、魚野）。COVID-19 の感染拡大下にあることから、オンライン実施とした。岡田は「併存する精神疾患とその治療」、石井は「ペアレントトレーニング」の講演を行った。また、石井と岡田は医療におけるペアレントトレーニング実施者養成研修（2022年7月5日、30人）を実施した。

#### (4) 保健医療行政政策に関する研究・調査、委員会等への貢献

岡田部長が、環境省エコチル調査企画評価委員会委員、国立障害者リハビリテーションセンター情報分析会議委員、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員、文部科学省生徒指導提要の改訂に関する協力者会議委員として参加し、生徒指導提要の作成に携わるなど、国あるいは関連機関の施策への協力を行った。また、小平市教育委員会いじめ問題対策委員会委員、小平市特別支援教育専門家委員会委員、江戸川区児童相談所協力医として、知的・発達障害の支援情報の発信、特別支援教育の研究・実践、小平市の特別支援教育に関する貢献活動を行っている。

#### (5) センター内における臨床的活動

岡田部長が NCNP 病院児童精神科外来を開設し、年度内に 115 人の新患（うちコンサルテーション 21 人、セカンドオピニオン 4 人）、また、これらの患者に対する再診診療を提供した。

#### (6) その他

岡田は一般社団法人日本児童青年精神医学会の代表理事、日本 ADHD 学会理事、日本精神神経学会小児精神医療委員会副委員長、日本神経性新薬理学会児童春期精神薬理タスクフォース委員として学術活動に貢献した。また、魚野は日本心理学会代議員、日本発達心理学会編集委員、石井は小児精神神経学会認定委員会委員、日本児童青年精神医学会医療経済に関する委員会、江頭は日本生理人類学会代議員、総務幹事、若手の会顧問、日本生理人類学会誌編集委員、ヒューマンインターフェース学会誌編集委員、林は日本生理人類学会代議員、若手の会副会長として学術活動に貢献し

ている。また、発達障害と創造性についての芸術展示「SAISAISAI～差異才彩」を東京芸術大学の Diversity on the Arts Project(DOOR)の協力のもと石井が企画し、ユニバーサルホールで3月4, 5日と開催し、一般の方、また日本ADHD学会への参加者に鑑賞していただいた。

#### IV. 研究業績

##### A. 刊行物

###### (1) 原著論文

- 1) Uono S, Egashira Y, Hayashi S, Takada M, Ukezono M, Okada T: No influence of emotional faces or autistic traits on gaze-cueing in general population. *Frontiers in Psychology* 13: 864116. 2022.4.26. DOI: 10.3389/fpsyg.2022.864116
- 2) Hayashi S, Nishimura Y, Ikeda Y, Nakashima H, Egashira Y, Ukezono M, Uono S, Okada T, Higuchi S: Beauty in everyday motion: electrophysiological correlates of aesthetic preference for human walking. *Neuropsychologia* 170(2022)108232, 2022.6.6. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.neuropsychologia.2022.108232>
- 3) Suzuki A, Yamaguchi R, Kim L, Kawahara T, Ishii-Takahashi A: Effectiveness of mock scanners and preparation programs for successful magnetic resonance imaging: a systematic review and meta-analysis. *Pediatr Radiol*, 2022.6.14. DOI: 10.1007/s00247-022-05394-8
- 4) Kimura H, Alecsic B, Kimura H, Nakatomi M, Guevara J, Toyama M, Hayashi Y, Kato H, Kushima I, Morikawa M, Ishizuka K, Okada T, Tsurusaki Y, Fujita A, Miyake N, Ogi T, Takata A, Matsumoto N, Buxbaum J, Ozaki N, Sbat J: Exome sequencing analysis of Japanese autism spectrum disorder case-control sample supports an increased burden of synaptic function-related genes. *Translational Psychiatry* 12: 265,2022. 2022.7.11. DOI: <https://doi.org/10.1038/s41398-022-02033-6>
- 5) Egashira Y, Kaga Y, Gunji A, Kita Y, Kimura M, Hironaga N, Takeichi H, Hayashi S, Kaneko Y, Takahashi H, Hanakawa T, Okada T, Inagaki M: Detection of deviance in Japanese kanji compound words. *Frontiers in Human Neuroscience* 16 913945, 2022.8.15. DOI: <https://doi.org/10.3389/fnhum.2022.913945>
- 6) Kushima I, Nakatomi M, Alecsic B, Okada T, Kimura H, Kato H, Morikawa M, Inada T, Ishizuka K, Torii Y, Nakamura Y, Tanaka S, Imaeda M, Takahashi N, Yamamoto M, Iwamoto k, Nawa Y, Ogawa N, Iritani S, Hayashi Y, Lo T, Otgonbayar G, Furuta S, Iwata N, Ikeda M, Saito T, Ninomiya K, Okochi T, Hashimoto R, Yamamori H, Yasuda Y, Fujimoto M, Miura K, Itokawa M, Arai M, Miyasita M, Toriumi K, Ohi K, Shioiri T, Kitaichi K, Someya T, Watanabe Y, Egawa J, Takahashi T, Suzuki M, Sasaki T, Tochigi M, Nishimura F, Yamasue H, Kuwabara H, Wakuda T, Kato A. T, Kanba S, Horikawa H, Usami M, Kodaira M, Watanabe K, Yoshikawa T, Toyota T, Yokoyama S, Munesue T, Kimura R, Funabiki Y, Kosaka H, Jung M, Kasai K, Ikegame T, Jinde S, Numata S, Kinoshita M, Kato T, Kakiuchi C, Yamakawa K, Suzuki T, Hashimoto N, Ishikawa S, Yamagata B, Nio S, Murai T, Son S, Kunii Y, Yabe H, Inagaki M, Goto Y, Okumura Y, Ito T, Arioka Y, Mori D, Ozaki N: Cross-disorder analysis of genic and regulatory copy number variations in bipolar disorder, schizophrenia, and autism spectrum disorder. *Biological Psychiatry* 92(5): 362-374, 2022.9.1. DOI: <https://doi.org/10.1016/j.biopsych.2022.04.003>
- 7) Tujii N, Okada T, Usami M, Kuwabara H, Fujita J, Negoro H, Iida J, Aoki Y, Takaesu Y, Saito T: Decision aid development and its acceptability among adults with attention-

- deficit/hyperactivity disorders regarding treatment discontinuation after remission. PCN Report 1(4), 2022.12. DOI: <https://doi.org/10.1002/pcn5.57>
- 8) Zhao S, Uono S, Hu R Q, Yoshimura S, Toichi M: Self-referential and social salient information influences memory following attention orienting. Frontiers in Psychology 14: 1092512. 2023.3.23. DOI: 10.3389/fpsyg.2023.1092512
  - 9) Miyake N, Tsurusaki Y, Fukai R, Kushima I, Okamoto N, Ohashi K, Nakamura K, Hashimoto R, Hiraki Y, Son S, Kato M, Sakai Y, Osaka H, Deguchi K, Matsuishi T, Takeshita S, Valevski F A, Ekhilevitch N, Tohyama J, Yap P, Keng W T, Kobayashi H, Takubo K, Okada T, Saitoh S, Yasuda Y, Murai T, Nakamura K, Ohga S, Matsumoto A, Inoue K, Saikusa T, Hershkovitz T, Kobayashi Y, Morikawa M, Ito A, Hara T, Uno Y, Seiwa C, Ishizuka K, Shirahata E, Fujita A, Koshimizu E, Miyatake S, Takata A, Mizuguchi T, Ozaki N, Matsumoto N: Molecular diagnosis of 405 individuals with autism spectrum disorder. European Journal of Human Genetics 2023.3.27. DOI: 10.1038/s41431-023-01335-7

## (2) 総説

- 1) 岡田 俊: うつ病、双極性障害の児童生徒への気づきと対応. LD. ADHD&ASD 81(4): 46-47, 2022.4.
- 2) 岡田 俊: 精神科診療のピットフォール—自閉スペクトラム症（成人）. 精神医学 64(5): 719-723, 2022.5.15.
- 3) 林 小百合, 江頭優佳, 岡田 俊: 報酬はヒトの行動抑制機能を高めるか？神経心理学的アプローチによる報酬効果の検討と展望. 日本生理人類学会誌 27(2): 38-45, 2022.5.25.
- 4) 江頭優佳, 岡田俊: ADHD の機能的結合. Clinical Neuroscience 40(6): 769-771, 2022.6.1.
- 5) 岡田 俊: 注意欠如・多動症 (ADHD) がある児童・成人の治療ゴールにつながる評価法. 臨床精神医学 51(6): 659-662, 2022.6.28.
- 6) 岡田 俊: 摂食障害のある子への気づきと対応. LD, ADHD & ASD 30(7): 46-47, 2022.7.
- 7) 魚野翔太, 佐藤弥: 自閉スペクトラム症の表情認知の障害と表情表出の特異性. 脳神経内科 97(1): 31-37, 2022.7.25.
- 8) 岡田 俊: 思春期以降の支援. 小児内科 54(7): 1144-1147, 2022.7.
- 9) 岡田 俊: 自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害 (ASD). 週刊日本医事新報 5133: 49, 2022.9.10.
- 10) 岡田 俊: 統合失調症のある子への気づきと対応. LD, ADHD & ASD 31(10): 46-47, 2022.10.1.
- 11) 岡田 俊: 注意欠如・多動症. 日本医師会雑誌 151(特別号(2)): 169-171, 2022.10.15.
- 12) 小川しおり, 岡田 俊: ICD-11 における神経発達症群の診断について—知的発達症、発達性発話又は言語症群、発達性学習症などー. 精神神経学雑誌 124(10): 732-739, 2022.10.25.
- 13) 岡田 俊, 江頭優佳: 運動が苦手・不器用—「走るのが遅い」「よく転ぶ」「はさみを使うのが苦手」など. 小児科 63(11): 1267-1271, 2022.11.
- 14) 林 小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 岡田 俊: 注意欠如・多動症における社会的報酬の報酬頻度が実行機能に与える影響の検討. 公益社団法人明治安田こころの健康財団研究助成論文集 57: 40-46, 2022.11.
- 15) 岡田 俊: 自閉スペクトラム症と併存症の位置づけと二次障害の成り立ち. 日本社会精神医学会雑誌 31: 357-361, 2022.12.
- 16) 岡田 俊: 不安症や脅迫症のある子への気づきと対応. LD, ADHD&ASD 21(1): 50-51, 2023.1.
- 17) 岡田 俊: チック症・トウレット症. NHK テキスト きょうの健康 420(3): 38-41, 2023.2.

- 18) 岸田 文, 江頭優佳: レジリエンス研究とストレスの客観的計測法. 日本生理人類学会誌 28(1): 10-16, 2023.2.25.

### (3) 著書

- 1) 岡田 俊: 発達障害のある子と家族によりそう安心サポート BOOK 小学生編. ナツメ社, 東京, pp1-208, 2022.4.1.
- 2) 岡田 俊: 発達障害のある子と家族によりそう安心サポート BOOK 幼児編. ナツメ社, 東京, pp1-208, 2022.4.1.
- 3) 岡田 俊: 親の疑問に答える 子どものこころの薬ガイド. 日本評論社, 東京, pp1-192, 2022.9.13.
- 4) 岡田 俊: わが国で使用可能な ADHD 治療薬 4 剤の特性および効果に関するエビデンス, ADHD の薬物療法について. 齊藤万比古, 飯田順三 編: 注意欠如・多動症-ADHD-の診断・治療ガイドライン第5版. じほう, 東京, pp338-351, 495-596, 2022.10.
- 5) 石井礼花: ペアレント・トレーニング. 齊藤万比古, 飯田順三 編: 注意欠如・多動症-ADHD-の診断・治療ガイドライン第5版. じほう, 東京, pp276-283, 2022.10.
- 6) 岡田 俊: 発達障害のある子を育てるには (解説) (In シンママのはじめて育児は自閉症の子でした) まる著. KADOKAWA, 東京, ISBN: 9784046817587, 2022.11.
- 7) 岡田 俊: 脳研究から見えてきた注意欠如・多動症(ADHD)の病態-最新知見から発達障害としての本態を捉える. 林 朗子, 加藤忠史 編: 「心の病」の脳科学. 講談社ブルーバックス, 東京, pp133-157, 2023.2.
- 8) 岡田 俊: 人口動態と子ども. 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会 愛育研究所 編: 日本子ども資料年間 2023. KTC 中央出版, 東京, pp33-66, 2023.2.

### (4) 研究報告書

- 1) 石井礼花: ADHD または慢性疾患を持つ児への成育環境の影響を測定するマルチモーダル MRI 神経ネットワーク指標の開発-Child Attachment Interview による愛着分類を用いて, AMED2021-2022 年度成育疾患領域 2 事業「成育・女性」合同成果報告書 P13
- 2) 石井礼花: ペアレントトレーニングの効果測定のための日本語版児童愛着面接/親子社会サポート評価面接/MRI 信号評価の実用化と実施者養成研修カリキュラムの開発・オンライン提供を含めて 厚労科研事業実績報告書 2022.

### (5) 翻訳

- 1) 江田香織, 岡田 俊, 小黒早紀, 小塙靖崇, 金 吉晴, 栗山健一, 住吉太幹, 土屋裕睦, 土肥美智子, 西 大輔, 橋本亮太, 藤井千代, 松本俊彦, 山田光彦, 日本オリンピック委員会: IOC エリートアスリート用メンタルヘルツールキット. 国際オリンピック委員会 (IOC), 東京, 2022.

### (6) その他

- 1) 岡田 俊: 注意欠如・多動(ADHD)と気分障害の併存と鑑別. アンケート・座談会 DEPRESSION JOURNAL 10(1): 4-19, 2022.4.1.
- 2) 岡田 俊: 国立精神・神経医療研究センターにおける取り組み. 独立行政法人 国立重度知的障害者総合施設 のぞみの園 ニュースレター 72: 13, 2022.4.1.

- 3) 請園正敏：行動経済学と心理学で円滑に業務を遂行。ユニバーサル・シェル・プログラミング  
研究所 シェルスクリプトマガジン 82, 2023.1.25.

## B. 学会・研究会における発表

### (1) 学会特別講演、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、パネルディスカッション等

- 1) 岡田 俊：ADHD の心理教育と親ガイダンス。共催シンポジウム 1 小児期 ADHD の心理社会的治療 第 64 回日本小児神経学会学術集会, 群馬, 2022.6.3.
- 2) 石井礼花：ADHD 児の親へのペアレントトレーニング—研究から実装まで。共催シンポジウム 1 小児期 ADHD の心理社会的治療 第 64 回日本小児神経学会学術集会, 群馬, 2022.6.3.
- 3) 石井礼花：注意欠如・多動症の児童の長期追跡 MRI 研究のシステムティックレビュー。委員会シンポジウム 4 精神医学の到達点と展望 第 118 回日本精神神経学会学術集会, 福岡, 2022.6.16.
- 4) 岡田 俊：「チーム学校」における虐待が疑われる児童生徒の気づきと支援。シンポジウム 67 児童虐待に取り組む精神科医療の現在 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 5) 岡田 俊：妄想形成・不安と神経発達症特性。シンポジウム 78 臨床的に重要な状態の背後にある神経発達症特性をいかに見立て、治療に活かすか 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 6) 岡田 俊：注意欠如・多動症における心理社会的治療の有用性と課題。シンポジウム 100 精神療法が必須な精神障害にガイドラインはどこまで有効か 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 7) 請園正敏：Long-Term Effects of COVID-19（コロナ後遺症）の患者が抱える心理的苦痛と支援オンラインでのグループセラピーからみえてきたことー。自主シンポジウム 104 日本心理臨床学会第 41 回大会, オンライン, 2022.9.25.
- 8) 岡田 俊：注意欠如・多動症治療の臨床エビデンスと本邦ガイドライン BPCNPNPPP4 学会合同年会 シンポジウム, 東京, 2022.10.5.
- 9) 岡田 俊：ADHD の病態と臨床 BPCNPNPPP4 学会合同年会 シンポジウム, 東京, 2022.10.6.
- 10) 林 小百合：母と子の多様性：母性を支える脳活動と子どもの発達障害を切り口として。ヒトの多様性の理解に向けて—実験↔フィールド縦横無尽—、新進気鋭の 4 名の若手研究者からの話題提供。日本生理人類学会第 83 回大会, 京都, 2022.10.30.
- 11) 岡田 俊：自閉スペクトラム症とトラウマ反応。シンポジウム 5 神経発達症の子どもとトラウマ 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.11.
- 12) 岡田 俊：アジア児童青年精神医学会 ASCAPAP2023 in Kyoto の企画にあたって。国際学会連絡・国際交流基金運営委員会セミナー 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.11.
- 13) 岡田 俊：コロナ禍における子どものメンタルヘルス—神経発達症の子どもを中心に。教育講演 12 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.12.
- 14) 岡田 俊：神経発達症に対する抗精神病薬のエビデンスと薬物療法の適正化。薬事委員会セミナー 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.12.
- 15) 岡田 俊：ADHD の中核と輪郭。基調講演 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.4.
- 16) 石井礼花：ADHD 児の親への行動療法的ペアレントトレーニング。シンポジウム 3 ADHD の心理社会的理解と治療の本質 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.5.
- 17) 江頭優佳：ADHD 病態の多様性を神経心理学的観点から解明する。シンポジウム 2 生物学的視点から規定される ADHD の全貌 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.5.

- 18) 林 小百合：精神生理学の視点からみた ADHD の病態—動機付けと実行機能の関連—. シンポジウム 2 生物学的視点から規定される ADHD の全貌 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.5.

## (2) 一般演題

- 1) Egashira Y, Hayashi S, Uono S, Ukezono M, Takada M, Okada T: Possible different cognitive processing in time perception tasks. The 15th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA), Oregon, 2022.9.17.
- 2) Hayashi S, Uono S, Egashira Y, Ukezono M, Takada M, Okada T: Does seeing others' smiles improve executive function in adults with Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder (ADHD)? An experimental psychology study. The 15th International Congress of Physiological Anthropology (ICPA), Oregon, 2022.9.17.
- 3) Takada M, Okada T: Parent-Child Interaction Therapy (PCIT) - Clinical Interventions in Japan and Challenges of Managing Attrition. Asian Consortium of National Mental Health Institutes. Online, 2022.9.21.
- 4) Egashira Y, Hayashi S, Uono S, Takada M, Ukezono M, Okada T: Time perception deficits in individuals with comorbidity of attention-deficit/hyperactivity disorder and autism spectrum disorder. Neuroscience 2022, Online, 2022.11.14.
- 5) Hayashi S, Egashira Y, Uono S, Ukezono M, Takada M, Okada T: Does feedback of a happy face improve response inhibition in adults with attention-deficit/hyperactivity disorder? Neuroscience 2022, Online, 2022.11.14.
- 6) 元村祐貴, 鬼丸雅史, 林 小百合, 吉田大樹, 黒瀬亮成, 今井友裕, キムヨンキュ, 大草孝介, 樋口重和 : 情動誘発刺激呈示時における脳活動 : EEG-Microstate 解析を用いた研究. 第 40 回日本生心理学会大会 日本感情心理学会第 30 回大会 合同大会 2022, オンライン, 2022.5.28.
- 7) 請園正敏 : バルプロ酸自閉症モデルマウスにおける高次社会的行動指標の確立に向けて. 第 14 回自閉症学研究会, 東京, 2022.7.24.
- 8) 魚野翔太, 江頭優佳, 林 小百合, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊 : 視線手がかり効果は自閉症特性の個人差を反映するか. 日本心理学会第 86 回大会, 東京, 2022.9.11.
- 9) 林 小百合, 西村悠貴, 池田悠稀, 中島弘貴, 江頭優佳, 請園正敏, 魚野翔太, 岡田 俊, 樋口重和 : 歩容の美しさと身体動作の認知プロセス—バイオロジカルモーション動画視聴時の美的評価と脳波事象関連電位の関連—. 日本心理学会第 86 回大会, 東京, 2022.9.11.
- 10) 須藤竜之介, 請園正敏, 高野裕治 : 非常に助けられることへの許容度は都市と里山で違うのか? 災害場面における援助要請行動と援助行動の地域差の検討. 日本心理学会第 86 回大会, 東京, 2022.9.11.
- 11) 三上克央, 宮島 祐, 西野 良, 福寿宏樹, 河添有宏, 落合俊充, 岡田 俊 : 児童青年期注意欠如・多動症 (ADHD) 患者に対するデジタル治療 SDT-001 の探索的臨床試験. 第 35 回日本総合病院精神医学会総会, オンライン, 2022.10.28-29.
- 12) 西村悠貴, 大橋路弘, 江藤太亮, 林 小百合, 元村祐貴, 樋口重和, 高橋正也 : 模擬的夜勤時のセルフモニタリングとクロノタイプとの関連について. 日本生理人類学会第 83 回大会, 京都, 2022.10.30.
- 13) 魚野翔太, 江頭優佳, 林小百合, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊 : 注意欠如・多動症における他者への視線方向への注意シフト. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.10.
- 14) 高田美希, 岡田 俊 : 心理社会的プロフィールからみる親子相互交流療法 (PCIT) の中断率への影響—システムティックレビューに基づく検討. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.11.

- 15) 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 注意欠如・多動症と自閉スペクトラム症を併存する成人における時間知覚不全に関する検討. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.11.
- 16) 林 小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 笑顔のフィードバックとその不確実性は注意欠如・多動症 (ADHD) の実行機能に影響するか? 成人期 ADHD を対象とした検討. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.11.
- 17) 鬼頭ゆか, 石井直子, 伊藤玲子, 小川真紀, 藤田容子, 岡田 俊: 発達障害のある成人に働きやすい職場づくりの試みー住まい造りへの相談活動への展開を目指して. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.11.
- 18) 山内 彩, 岡田 俊: 22q11.2 欠失症候群児童の親子関係に関する検討ー母子の情緒的側面を踏まえた親子支援を目指して. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.12.
- 19) 請園正敏, 江頭優佳, 林 小百合, 魚野翔太, 高田美希, 岡田 俊: バルプロ酸自閉症モデルマウスにおける新規社会性の検討. 第 63 回日本児童青年精神医学会総会, 長野, 2022.11.12.
- 20) 木村唯子, 飯島圭哉, 吉富宗健, 浮城一司, 金子 裕, 大森まゆ, 岡田 俊, 岩崎真樹: トウレット症候群に対する社会障害度を考慮した脳深部刺激療法の適応. 第 29 回トウレット研究会, 東京, 2022.11.20.

### (3) 研究報告会

- 1) 石井礼花: ADHD または慢性疾患を持つ児への成育環境の影響を測定するマルチモーダル MRI 神経ネットワーク指標の開発—Child Attachment Interview による愛着分類を用いて. 成育疾患克服等総合研究事業 令和 3 年度事後・令和 4 年度中間評価委員会,, オンライン, 2022.8.21.
- 2) 岡田 俊: 発達障害の認知神経科学的アプローチに基づく病態解明. 国立精神・神経医療研究センター 精神・神経疾患研究開発費 2-7 「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」令和 4 年度班会議, オンライン, 2022.12.8.
- 3) 石井礼花: 日本の医療機関における ADHD 児の親に対する行動療法的ペアレントトレーニング 実装の阻害促進要因の特定に関する研究. N-EQUITY 研究進捗報告会, オンライン, 2023.2.8.
- 4) 岡田 俊: 【報告 2】知的・発達障害研究部 座長 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所令和 4 年度研究報告会 (第 34 回), オンライン, 2023.3.20.
- 5) 魚野翔太, 江頭優佳, 林 小百合, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 注意欠如・多動症のある成人において他社の視線方向への反射的な注意シフトが生じるか. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所令和 4 年度研究報告会 (第 34 回), オンライン, 2023.3.20.
- 6) 林 小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 社会的報酬は注意欠如・多動症の成人における実行機能を改善するか. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所令和 4 年度研究報告会 (第 34 回), オンライン, 2023.3.20.

### (4) その他

- 1) 岡田 俊: サブコーディネーター シンポジウム 21 日々の臨床で子供のうつ病に気づく～限られた時間の中で～. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
- 2) 岡田 俊: メインコーディネーター シンポジウム 38 強度行動障害を伴う知的・発達障害児 (者) への医療の役割. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
- 3) 岡田 俊: メインコーディネーター 妄想形成・不安と神経発達症特性 シンポジウム 78 臨床的に重要な状態の背後にある神経発達症特性をいかに見立て, 治療に活かすか. 第 118 回日

本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.

- 4) 岡田 俊: メインコーディネーター COVID-19 感染拡大化における子どものメンタルヘルス シンポジウム 92 新型コロナウイルス感染症拡大下における子どもと家族—精神医学に何ができるか. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 5) 岡田 俊: 助言者 症例検討① 入院治療後に外来で食事摂取が進まず治療に難渋した摂食障害の女子中学生の 1 例. 第 16 回日本精神神経学会 小児精神医療研修会～症例検討～, 愛知, 2022.10.9.
- 6) 岡田 俊: 助言者 症例検討② 盜みを繰り返す ASD/ADHD 合併の 10 代男児. 第 16 回日本精神神経学会 小児精神医療研修会～症例検討～, 愛知, 2022.10.9.

### C. 講演

- 1) 岡田 俊: 精神科・児童でのトウレット症治療・支援の実際. NPO 法人日本トウレット協会・医療講演会 2022～トウレット症のより良い治療・支援を目指して～, 東京, 2022.5.15.
- 2) 岡田 俊: 発達障害と生物学的背景. 社会福祉法人 正夢の会 令和 4 年度「東京都発達障害者支援体制整備推進事業」～医療従事者向け講習会～, オンライン, 2022.10.16.
- 3) 岡田 俊: 発達障害の理解と支援. 杉並区難聴・言語障害学級研究協議会 担任研修会, オンライン, 2023.3.16.
- 4) 石井礼花: ペアレントトレーニングとは. 第 47 回ハイリスク児フォローアップ研究会, 東京, 2022.09.10.

### D. 学会活動

#### (1) 学会主催

- 1) 岡田 俊: 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 2023.3.4-5.

#### (2) 学会役員

- 1) 岡田 俊: 一般社団法人日本児童青年精神医学会 代表理事 (11 月より)
- 2) 岡田 俊: 日本児童青年精神医学会 事務局運営委員会 委員長 (11 月まで)
- 3) 岡田 俊: 日本児童青年精神医学会 ICD-11 に関する委員会 委員 (11 月まで)
- 4) 岡田 俊: 日本児童青年精神医学会薬事委員会 担当理事 (11 月まで)
- 5) 岡田 俊: 日本精神神経学会 小児精神医療委員会 副委員長
- 6) 岡田 俊: 日本神経精神薬理学会 児童思春期神経精神薬理タスクフォース委員
- 7) 岡田 俊: 第 63 回日本児童青年精神医学会総会 プログラム委員
- 8) 岡田 俊: 日本 ADHD 学会理事, 第 14 回総会 会長
- 9) 石井礼花: 日本 ADHD 学会第 14 回総会 副会長
- 10) 石井礼花: 日本小児精神神経学会 認定医委員会 委員
- 11) 石井礼花: 日本児童青年精神医学会 医療経済に関する委員会 委員
- 12) 魚野翔太: 日本心理学会 代議員
- 13) 江頭優佳: 日本生理人類学会 代議員, 総務幹事, 若手の会顧問
- 14) 林小百合: 日本生理人類学会 代議員, 若手の会副会長 (関東地区)

#### (3) 座長

- 1) Okada T: Tourette Syndrome: Understanding Sensory Phenomenon, Associated OCD and Treatment of Comorbidities. (Prof.Kano Y) 10<sup>th</sup> IACAPAP Lunch & Learn Webinar, Online, 2023.3.15.
- 2) 岡田 俊: 共催シンポジウム 1 小児期 ADHD の心理社会的治療 第 64 回日本小児神経学会学術集会, 群馬, 2022.6.3.
- 3) 岡田 俊: シンポジウム 21 日々の臨床で子供のうつ病に気づく～限られた時間の中で～. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
- 4) 岡田 俊: シンポジウム 38 強度行動障害を伴う知的・発達障害児（者）への医療の役割. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.16.
- 5) 岡田 俊: ワークショップ 10 小児精神医療入門：新シリーズ（5）子供の精神医学における治療論－技法・その 1（小児精神医療委員会）. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.17.
- 6) 岡田 俊: COVID-19 感染拡大化における子どものメンタルヘルス シンポジウム 92 新型コロナウイルス感染症拡大下における子どもと家族—精神医学に何ができるか. 第 118 回日本精神神経学会学術総会, 福岡, 2022.6.18.
- 7) 石井礼花: 一般演題 F 「支援と評価（2）」第 127 回日本小児精神神経学会, 福島, 2022.6.26.
- 8) 岡田 俊: セッション 2 第 29 回トゥレット研究会, 東京, 2022.11.20.
- 9) 岡田 俊: 第 16 回日本精神神経学会 小児精神医療研修会～症例検討～, 愛知, 2022.10.9.
- 10) 岡田 俊: 小児精神医療研修会～症例検討～ 第 16 回日本精神神経学会, 愛知, 2022.10.9.
- 11) 江頭優佳: FM3 時間栄養学—響きあう食・代謝・睡眠—. (健康栄養科学研究部会×睡眠研究部会×和文誌編集委員会 合同公演会) 日本生理人類学会第 83 回大会フロンティアミーティング, 京都, 2022.10.28.
- 12) 岡田 俊: 一般演題 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.4.
- 13) 岡田 俊: 特別講演 2 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.4.
- 14) 岡田 俊: 特別講演 5 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.5.
- 15) 小野和哉, 岡田 俊: シンポジウム 3 ADHD の心理社会的理解と治療の本質 日本 ADHD 学会第 14 回総会, 東京, 2023.3.5.

#### (4) 学会誌編集委員等

- 1) 岡田 俊: Psychiatry and Clinical Neurosciences, Editorial Committee Psychiatry and Clinical Neurosciences, Field Editor
- 2) 岡田 俊: 日本発達障害学会 「発達障害研究」常任編集委員
- 3) 岡田 俊: Depression Journal 編集委員
- 4) 岡田 俊: 臨床精神薬理編集委員
- 5) 魚野翔太: Frontiers in Psychology, Associate Editor
- 6) 魚野翔太: 日本発達心理学会「発達心理学研究」編集委員
- 7) 江頭優佳: 日本生理人類学会「日本生理人類学会誌」編集委員
- 8) 江頭優佳: ヒューマンインターフェース学会「ヒューマンインターフェース学会論文誌」編集委員

#### E. 教育

- 1) 岡田 俊: 児童精神. 国立精神・神経医療研究センター 2022 年度レジデントクルーズ, オンライン, 2022.5.25.
- 2) 岡田 俊: 小児・児童精神医学. 奈良女子大学「精神疾患とその治療」奈良, 2022.7.5.
- 3) 岡田 俊: 発達障害. 令和 4 年度国立障害者リハビリテーションセンター学院児童指導員科講

- 義, オンライン, 2022. 7.15.
- 4) 岡田 俊: 千葉大学大学院医学薬学府精神神経科学(連携大学院)客員教授 指導生 1名
  - 5) 岡田 俊: 早稲田大学人間科学学術院(連携大学院) 指導生 2名
  - 6) 石井礼花: 東京大学医学部 非常勤講師 M2 小児科学系統講義
  - 7) 魚野翔太: ASD の精神生理とエビデンス. 文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「発達症への介入による国民的健康課題の解決」講義, 2022.6.19.
  - 8) 魚野翔太: 認知機能評価実習. 文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「発達症への介入による国民的健康課題の解決」講義, 2022.7.3.
  - 9) 魚野翔太: 臨床研究方法論, 文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム「発達症への介入による国民的健康課題の解決」講義, 2022.8.7.
  - 10) 魚野翔太: 自閉スペクトラム症の社会認知機能, 同志社大学「赤ちゃん学応用」オンデマンド, 2022.12.19.
  - 11) 江頭優佳: 立教大学現代心理学部 兼任講師 (神経心理学(神経・生理心理学))
  - 12) 江頭優佳: 東海大学情報理工学部情報科学科 学外講師 (情報技術論「発達障害に関する神経行動学的基礎と病態」, 2022.11.5)
  - 13) 江頭優佳: 九州大学大学院統合新領域学府 非常勤講師 (感覚生理心理学)
  - 14) 林 小百合: 東京工科大学医療保健学部臨床検査学科 生理検査学実習Ⅱ演習講師 (脳波・誘発脳波検査)
  - 15) 請園正敏: 神奈川大学人間学部 人間学科 非常勤講師 (心理学実験実習)
  - 16) 請園正敏: 神奈川大学大学院 人間科学研究科 非常勤講師 (データサイエンス)
  - 17) 請園正敏: データサイエンス研究所 非常勤講師 (データ解析実践)

## F. 研修

### (1) 研修企画

- 1) 岡田 俊: 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第3回発達障害者支援研修:指導者養成研修パートI. オンライン, 2022.6.29-30.
- 2) 岡田 俊, 石井礼花: 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第1回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修. オンライン, 2022.7.5.
- 3) 岡田 俊: 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第3回発達障害者支援研修:指導者養成研修パートII. オンライン, 2022.9.28-29.
- 4) 岡田 俊: 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第3回発達障害者支援研修:指導者養成研修パートIII. オンライン, 2022.11.16-17.
- 5) 岡田 俊: 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第3回発達障害者支援研修:行政実務研修. オンライン, 2023.1.18-19.

### (2) 研修会講師

- 1) 石井礼花: ペアレント・トレーニング. 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第3回発達障害者支援研修:指導者養成研修パートI, オンライン, 2022.6.29.
- 2) 岡田 俊, 石井礼花: 注意欠如・多動症(ADHD)とペアレント・トレーニング. 令和4年度 精神保健に関する技術研修課程, 第1回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修. オンライン, 2022.7.5.
- 3) 石井礼花: ペアレント・トレーニングの実践に向けて. 令和4年度 精神保健に関する技術研

修課程、第1回医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修。オンライン、2022.7.5.

- 4) 岡田俊:併存する精神疾患とその治療。令和4年度 精神保健に関する技術研修課程、第3回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡ。オンライン、2022.9.28.
- 5) 岡田俊:発達障害の診断と医療的支援。国立障害者リハビリテーションセンター発達障害情報・支援センター主催 発達障害者地域支援マネジャー研修会（基礎）、オンライン、2022.7.5.
- 6) 岡田俊:発達障害と精神疾患の合併。令和4年度発達障害者地域支援マネジャー研修会（応用研修），オンライン、2022.12.1.
- 7) 岡田俊:発達障害と精神疾患－併存のなりたちとみたて。日本精神科診療所協会児童青少年問題研修会、オンライン、2023.1.29
- 8) 岡田俊:発達障害のある子どもの心と養育～コロナ禍のいま、求められること発達障害のある子どもの心と養育～コロナ禍のいま、求められること。令和4年度発達障害者支援センター全国連絡協議会 九州・沖縄ブロック合同企画研修会、オンライン、2023.2.3.
- 9) 石井礼花, 岡田俊:医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修。日本ADHD学会第14回総会サテライトプログラム、オンライン、2023.3.3.

#### G. 取材・報道

- 1) 請園正敏: カフェで作業するとはかどるのはなぜ？ 朝生ワイド す・またん！& ZIP, 読売テレビ、2022.7.11. <https://youtu.be/9364mopPiEY>
- 2) 岡田俊: 孫がアスペルガー症候群。朝日新聞朝刊医療面 どうしました、朝日新聞社、2022.9.1.
- 3) 岡田俊: つい言いがちな「どうして？ちゃんとして」子どもの目線に立つと…。医療サイト朝日新聞アピタル、朝日新聞 DIGITAL, 2022.9.17. [https://www.asahi.com/articles/ASQ9F7KFXQ95UTFL00F.html?iref=pc\\_ss\\_date\\_article](https://www.asahi.com/articles/ASQ9F7KFXQ95UTFL00F.html?iref=pc_ss_date_article)
- 4) 岡田俊: ADHD. シューアイチ「中山のイチバン」、日本テレビ、2022.12.17.
- 5) 岡田俊: “日常生活が困難”なADHDはどの程度？当事者・医師と考える「ADHDとの上手な付き合い方」。新R25市民公開講座、2023.1.30.
- 6) 岡田俊: チック症・トウレット症。「きょうの健康」日本放送協会、2023.3.13.

#### H. その他の活動

- 1) 岡田俊: 文部科学省生徒指導提要の改訂に関する協力者会議委員
- 2) 岡田俊: 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター病院児童精神科 併任
- 3) 岡田俊: 国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部知財・法務課 課長
- 4) 岡田俊: 小平市教育委員会 小平市特別支援教育専門家委員会委員
- 5) 岡田俊: 小平市教育委員会 いじめ問題対策委員会委員
- 6) 岡田俊: 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 運営委員
- 7) 岡田俊: 国立障害者リハビリテーションセンター 情報分析会議委員
- 8) 石井礼花: JDDネット事業委員会「ペアレント・トレーニング実施における評価ツールの作成と活用」に関する厚労推進事業 委員
- 9) 林小百合: 国立環境研究所 人を対象とする研究（生命科学・医学を除く）に関する倫理審査委員会 所外委員

## I. 受賞

- 1) 江頭優佳: 公益財団法人発達科学的研究教育センター 令和4年度発達科学的研究教育奨励賞 対象課題: 江頭優佳, 魚野翔太, 林 小百合, 高田美希: ADHD児における時間知覚機能不全と不適応行動との関連の解明—介入方略の開発を目指して—. 2022.9.2.
- 2) 林 小百合: 日本心理学会第86回大会 優秀発表賞 対象課題: 林 小百合, 西村悠貴, 池田悠稀, 中島弘貴, 江頭優佳, 請園正敏, 魚野翔太, 岡田 俊, 樋口重和: 歩容の美しさと身体動作の認知プロセス—バイオロジカルモーション動画視聴時の美的評価と脳波事象関連電位の関連—. 2022.9.11.
- 3) 江頭優佳: 国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 JH Symposium 2022 最優秀演題賞 対象課題: 江頭優佳, 箱島有輝, 宇佐美政英, 岡田 俊, 魚野翔太, 林 小百合, 請園正敏, 高田美希: 発達障害の二次障害発症リスクを形成する心理社会的要因と認知神経機能の解明. 2022.11.2.
- 4) 林 小百合: 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 令和4年度研究報告会(第34回) 若手奨励賞 対象課題: 林 小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田 俊: 社会的報酬は注意欠如・多動症の成人における実行機能を改善するか. 2023.3.20.

## 10. 地域精神保健・法制度研究部

### I. 研究部の概要

当研究部は、生物・心理・社会的観点から精神障害を多面的に捉え、地域に暮らす精神障害者とその家族が主体的な生活を送るための支援技法やシステムの開発、その効果に関する実証的研究を当事者のリカバリー支援の観点から実施することを活動の中心としている。また、精神保健福祉法、障害者総合支援法等の精神科保健医療福祉に関する法律に基づく保健医療福祉体制のあり方についての検討、医療観察法に基づく医療の検証や一般精神科医療への適用に関する検討を行うことも重要な柱のひとつである。研究活動を通じて政策としても取り入れることが可能な支援モデルを提示し、自治体や専門職、市民への教育研修等を実施してそれらの普及を図ることにより、研究成果の社会への還元を行っている。

研究の実施にあたっては、以下の人員構成で活動を行うとともに、センター病院専門疾病センターの「こころのリカバリー地域支援センター」のデイケア、訪問看護ステーションPORT、所沢市アウトリーチ支援チーム、医療観察法病棟との協働、研究所内の他部との連携および外部機関とのネットワークの構築についても重視している。

令和4年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：藤井千代、精神保健サービス評価研究室長：山口創生、臨床援助技術研究室長：佐藤さやか、司法精神保健研究室長：小池純子（6.1～）、制度運用研究室長：黒田直明（R5.1.1～）、常勤研究員：小塩靖崇、リサーチフェロー：松長麻美（～4.30）、小池純子（～5.31）、塩澤拓亮、川口敬之、岩永麻衣（6.1～）、臼井 香（8.1～）科研費研究員：阿部真貴子、岡野茉莉子、五十嵐百花、岩永麻衣（～5.31）、羽田彩子、高嶋里枝（R5.3.10～）科研費研究補助員：藤本 悠（～8.31）、石塚公太、併任研究員：平林直次、坂田増弘、竹田康二、柏木宏子、客員研究員：伊藤順一郎、瀬戸屋雄太郎、吉田光爾、橘（北村） 薫子、杉山直也、美濃由紀子、三澤孝夫、河野稔明、松本桂子、柑本美和、横山恵子、稻垣 中、堀口雅則、北村俊則、野口正行、鈴木浩太、菊池安希子、曾雌崇弘、松長麻美（5.1～）下平美智代（R5.1.1～）研究生：安間尚徳、松本衣美、田村早織、小黒早紀、山田裕貴、小川 亮、上嶋大樹（R5.1.1～）、所沢市アウトリーチ支援チームについては、統括管理責任者：中西清晃、副看護師長：下平美智代（～12.31）、看護師：榎本美智子（R5.1.1～）、医療社会事業専門員：西内絵里沙、作業療法士：大迫直樹、科研費シニアテクニカルフェロー：真行寺伸江（～11.30）、科研費テクニカルフェロー山崎さおり（R5.1.1～）科研費心理療法士：曹 由寛、糸織朝美、山崎さおり（～12.31）、河原崎容佳。

### II. 研究活動

- 1) 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究（藤井、杉山、山口、小池、塩澤、岩永、阿部、羽田、松長）

市町村の包括ケアシステム構築状況、精神科医療機関の市町村・保健所への協力状況、措置入院関連ガイドラインの実施状況、危機介入の実態、包括的支援マネジメント及び精神科訪問診療に係る診療報酬改定の影響、地域包括ケアシステムにおける総合病院精神科の役割、精神科救急体制 整備状況、精神障害者の権利擁護に関する精神科医療機関の取組等を明らかにするとともに、権利擁護のための個別支援の効果検証を行う。研究結果を精神保健医療福祉関係諸団体、当事者団体等と共有したうえで上記の課題につき検討し、包括ケアシステム構築のための政策提言を行う。本研究は、以下の分担班で実施している。

- A. 精神障害者の権利擁護に関する研究
- B. 自治体における包括的ケアの推進に関する研究
- C. 地域における精神科医療の役割に関する研究
- D. 地域における危機介入のあり方に関する研究
- E. 総合病院精神科の機能に関する研究

## F. 精神科救急医療体制に関する研究

- 2) 包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 (藤井, 山口, 小池, 塩澤, 川口, 岡野, 五十嵐, 安間, 竹田)  
 「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」の構築に資する包括的精神保健サービス（医療・福祉を含む）を実現するにあたって、当事者や家族、医療機関、地域の福祉事業所、行政など、さまざまな立場の人々の協働のあり方について検討するとともに、包括的支援体制の実装のための人材育成のための研修方法を開発するため、以下4つの分担班により研究を実施している。
- A. 地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究
  - B. 精神障害当事者との協働に基づく災害時の精神保健福祉体制に関わるガイドンスの開発
  - C. 地域精神保健医療福祉に関わる支援者、行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究
  - D. PPI の視点を取り入れた地域司法精神医療制度の開発
- 3) 精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関わるサービスの提供体制構築に資する研究 (山口, 佐藤, 川口, 阿部, 安間, 藤井)  
 A. 障害者福祉サービス事業所調査・当事者調査 B. 包括的支援マネジメントの効果検証 C. ウェブサイトの開発および検証 D. 精神科医療機関ニーズの調査と包括的支援マネジメントの患者特定調査.
- 4) 個別援助付き雇用に関する研究 (山口, 佐藤, 小池, 松長, 小塩, 塩澤, 五十嵐, 臼井, 岩永)  
 精神障害者に対する就労支援として最も効果的とされる individual placement and support (IPS)に準ずる個別型援助付き雇用の均てん化と質の評価に関する調査に取り組んだ。具体的には実践者とネットワークを構築し、日本版個別型援助付き雇用フィデリティ調査を実施した。また、個別型援助付き雇用事業所における包括的なアウトカムを検証し、論文化として発表した。
- 5) 障害福祉人材の確保・養成のための研究 (山口)  
 大学生や障害福祉サービス事業所を対象として、障害福祉サービス分野への就職状況や離職状況などを調査中である。ピアソポーターについて、研修を担当する講師やファシリテーターを要請する研修を構築し、その評価検証を実施中である。
- 6) 精神障害者に対するステigmaに関する研究 (山口, 小塩, 松長, 藤井)  
 東京大学および Institute of Psychiatry, Psychology & Neuroscience (IoPPN)の研究者と共に、精神障害者のステigma是正を図るために全般的かつ学術的な研究を推し進めた。2018年度は、メディアを用いた介入の効果を検証する長期無作為比較試験を論文化した。また、INDOG READ という医学生に向けた教育プログラムの効果検証の日本サイトとして、データ種集を完了した。現在、IoPPN の研究者を中心に国際的なデータ分析の途中・論文投稿の途中である。
- 7) 医療観察法入院データベースを活用した研究 (河野, 曽雌, 小池, 平林, 藤井)  
 厚生労働省の重度精神疾患標準的治療法確立事業では、医療観察法指定入院医療機関が実施主体となり、同法入院対象者の診療情報をデータベース化して分析・共有することにより、医療を向上させ対象者の社会復帰を促進することを目指している。本研究では、医療観察法対象者を類型化し、それぞれに応じた処遇のあり方を検討する。そのために本年度は、法施行から

2021年6月までの入院対象者（約4,000名）の類型化を行うデータの利用の申請手続きおよび必要な準備を行った。データの提供を受け次第、分析を開始する予定である。

- 8) 地域精神保健研究における患者・市民参画（山口、佐藤、塩澤、川口、阿部、安間）  
近年の対人サービス評価に関する研究では、研究者や実践者だけでなく、患者や一般市民を含めて実施することが期待されている。国際的には広まりつつある、研究への患者・市民の参画（patient-public involvement: PPI）であるが、日本の地域精神保健の文脈ではまだその言葉さえしられていない。本研究は、多職種研修、当事者主導の研究、デルファイ調査の継続調査などに取り組み、それぞれでPPIを取り入れている。
- 9) 重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発（佐藤、山口、藤井、菊池）  
本研究は、重症精神障害者への地域生活支援においても効果的な支援技法と考えられるCBTについて、アウトリーチ等に従事する心理職以外の精神保健福祉スタッフを対象に、研修やスキルトレーニングを遠隔会議形式で行うシステム（=遠隔トレーニングシステム）を開発し、その実施可能性および効果に関する予備的検討を行うことを目的とする。本年度は遠隔会議のためのオンラインシステムについて株式会社アクセライトと意見交換を行った。
- 10) 処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究（小池、藤井、岡野、菊池）  
共生社会の実現を目指す中で、処遇が難しいとされている者への治療戦略や、社会復帰支援策の強化を検討するため、処遇困難となる要因の本質を明らかにし、処遇困難例への効果的な治療及び支援体制の構築に寄与することを目的とする。本年度は、「重度かつ慢性」の精神障害者と医療観察法対象者の特性と臨床経過に関わるデータをカルテから収集した。現在分析中である。
- 11) アスリートのメンタルヘルスケアシステム開発に関する研究（小塩、松長、山口、塩澤、藤井）  
日本ラグビーフットボール選手会のアスリートと共に、日本スポーツ界におけるメンタルヘルスケアシステム開発のための研究を推進した。2022年度は、ラグビー選手を対象とした実態調査を継続実施し、複数の学術論文を発表した。「よわいはつよいプロジェクト」というアスリートが情報発信の担い手となり、メンタルヘルスに関する経験や情報を一般市民向けに届けるwebサイトを通じて、メンタルヘルス普及啓発に取り組んだ。また、厚生労働省による世界メンタルヘルスデー2022の実施に協力した。アスリートのメンタルヘルスケアに関する国際標準ツールであるIOC Mental health toolkitの日本語翻訳版を作成、公開した。
- 12) 共同意思決定の基盤となる関係構築プロセスに関する研究（川口）  
地域精神保健福祉サービスにおける共同意思決定（shared decision making: SDM）の普及のために、円滑なSDMの基盤となる当事者と専門職の間の関係構築プロセスに焦点をあてた研究を進めている。2022年度は、当事者やピアスタッフ、専門職を対象とした関係構築をはかるために必要な関わりやコミュニケーションに関するインタビュー調査の分析が完了した。今後は、合意形成調査の実施に向けて準備を進めている。

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・地域の保健センターにおける思春期精神保健相談およびアウトリーチによる相談支援を定期的に実施した。（藤井）

- ・地域における講演会などに講師として可能な限り参加した。（藤井）
- ・特定非営利活動法人 地域精神保健福祉機構・コンボ 理事（山口）
- ・一般社団法人ルンアルン 理事（山口）
- ・つくば市保健部顧問（黒田）
- ・内閣府児童手当システム標準化検討会座長（黒田）
- ・東京都多摩地域依存症関連期間地域連携会議委員（小塩）
- ・文京区子ども・子育て会議委員（岩永）
- ・文京区地域福祉推進協議会子ども部会員（岩永）

**(2) 専門教育面における貢献**

- ・愛媛大学 医学部 非常勤講師（藤井）
- ・愛媛大学大学院 医農融合公衆衛生学環 非常勤講師（藤井）
- ・文教大学 人間科学部 非常勤講師（山口）
- ・法政大学 現代社会学部 非常勤講師（山口）
- ・東洋大学 福祉社会システム専攻 非常勤講師（山口）
- ・神戸大学大学院 保健学研究科 非常勤講師（山口）
- ・大正大学 社会福祉調査論 非常勤講師（山口）
- ・早稲田大学 人間科学部 非常勤講師（佐藤）
- ・立教大学 現代心理学部 非常勤講師（佐藤）
- ・目白大学 心理学部 非常勤講師（佐藤）
- ・筑波大学 人間総合科学 非常勤講師（黒田）
- ・筑波大学 医学群 非常勤講師（黒田）
- ・立教大学 現代心理学部 非常勤講師（下平）
- ・日本赤十字看護大学 精神保健看護学 非常勤講師（下平）
- ・法政大学 キャリアデザイン学部 非常勤講師（小塩）
- ・東京都立大学人文社会学部人間社会学科 非常勤講師（岩永）
- ・東海大学 教養学部芸術学科音楽学課程 非常勤講師（阿部）
- ・東京都立産業技術大学院大学 非常勤講師（阿部）

**(3) 精研の研修の主催と協力**

- ・第2回精神科救急医療体制整備研修の主任（藤井）

**(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献**

- ・厚生労働省 社会保障審議会障害者部会 委員（藤井）厚生労働省 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けた検討会構成員（藤井）
- ・厚生労働省 精神障害にも対応した地域包括ケアシステム構築支援事業広域アドバイザー（藤井）
- ・厚生労働省 市町村における精神保健に係る相談支援体制整備の推進に関する検討チーム 座長（藤井）
- ・厚生労働省令和4年度推進事業 精神科医療における行動制限最小化に関する調査研究委員（藤井）
- ・厚生労働省 診療報酬改定結果検証委員会 委員（藤井）
- ・東京都措置入院者退院後支援ガイドライン検証委員会 委員長（藤井）
- ・東京都精神科救急医療体制整備検討委員会 委員長（藤井）
- ・World Health Organization 西太平洋地域事務局 Temporary Advisor（藤井）
- ・日本学校保健会「精神疾患に関する指導参考資料作成委員会」委員（小塩）

## (5) センター内における臨床的活動

- ・こちらのリカバリー地域支援センターの訪問看護ステーション、および精神科デイケアと連携し、センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している（藤井、佐藤、山口）
- ・国立精神・神経医療研究センター訪問看護ステーションにて週に 0.5 度程、訪問時を中心利用者本人および家族に認知行動療法を提供した（佐藤）

## (6) その他

**IV. 研究業績****A. 刊行物**

## (1) 原著論文

- 1) Yamaguchi S, Sato S, Shiozawa T, Matsunaga A, Ojio Y, Fujii C: Predictive association of low- and high-fidelity supported employment programs with multiple outcomes in a real-world setting: A prospective longitudinal multi-site study. *Administration and Policy in Mental Health and Mental Health Services Research* 49(2):255–266, 2022.
- 2) Potts LC, Bakolis I, Deb T, Lempp H, Vince T, Benbow Y, Waugh W, Kim S, Raza S, Henderson C, Thornicroft G, Ando S, Kondo S, Ichihashi K, Kasai K, Yamaguchi S, Matsunaga A, Ojio Y, Ogawa M, Fujii C, Candelas A, Martín L, Jiménez A, Castañeda C, Hernández C, de la Higuera J, Muñoz-Negro JE, Sola M, García R, Gota JM, Mula JF, López A, Oria A, Cervilla JA, Bono A, Franco D, Gómez J, Jiménez C, Dorado R, Ingunza E, Márquez I, de la Vega D, Gª-Cubillana P, Ouali U, Jouini L, Zgueb Y, Nacef F, Campbell M, Stein D, Harangozo J, Acs A, Bulyáki T, Szabó G, Ojo TM, Ogunwale A, Sowunmi AO, Awhangansi SS, Ogundapo D, Sodiya OT, Fadipe B, Olagunju AT, Erinfolami AR, Ogunnubi PO, Tomás CC, Janoušková M, Krupchanka D, Bacle SV, Colliez A, Sebbane D, Mengin AC, Vidailhet P, Cazals C, Fiorillo A, Sampogna G, Savorani M, Del Vecchio V, Luciano M, Borriello G, Pocai B, Guimaraes PN, Caldeira AP, de Avelar PPN: Anti-stigma training and positive changes in mental illness stigma outcomes in medical students in ten countries: a mediation analysis on pathways via empathy development and anxiety reduction. *Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology*, 57: 1861–1873, 2022.
- 3) Yamaguchi S, Abe M, Kawaguchi T, Igarashi M, Shiozawa T, Ogawa M, Yasuma N, Sato S, Miyamoto Y, Fujii C: Multiple stakeholders' perspectives on patient and public involvement in community mental health services research: A qualitative analysis. *Health Expectations* 25(4): 1844-1860, 2022.
- 4) Tamon H, Itahashi T, Yamaguchi S, Tachibana Y, Fujino J, Igarashi M, Kawashima M, Takahashi R, Shinohara NA, Noda Y, Nakajima S, Hirota T, Aoki YY: Autistic children and adolescents with frequent restricted interest and repetitive behavior showed more difficulty in social cognition during mask-wearing during the COVID-19 pandemic: a multisite survey. *BMC Psychiatry* 22(1): 608, 2022.
- 5) Watanabe Y, Kanata S, Suga M, Inagaki A, Sato S, Hayashi N, Kunugi H, Ikebuchi E: Characteristic association of symbol coding test score with occupational function in Japanese patients with schizophrenia. *Neuropsychopharmacol Rep*, 2023 Mar;43(1):141-145.

- 6) Koike J, Ikeda T, Kuroda O, Koike O, Tsuneoka T, Harima H, Inamoto A, Nakatani Y: Characteristics of patients with violent recidivism in the forensic mental health system in Japan. *Journal Of Forensic Psychiatry & Psychology*, 33, 508-527, 2022.
- 7) Sun Y, Masao Iwagami M, Sakata N, Ito T, Inokuchi R, Komiyama J, Kuroda N, Tamiya N: Evaluation of enhanced home care support clinics regarding emergency home visits, hospitalization, and end-of-life care: a retrospective cohort study in a city of Japan, *BMC Health Serv Res* 23:115, 2023.
- 8) Watanabe A, Kawaguchi T, Sakimoto M, Oikawa Y, Furuya K, Matsuoka T: Occupational dysfunction as a mediator between recovery process and difficulties in daily life in severe and persistent mental illness: a Bayesian structural equation modeling approach. *Occupational Therapy International*, 2022: 2661585, 2022.
- 9) Kawaguchi T, Okumura N, Takahashi K, Shinozaki M, Watanabe A: Effect of Home-Visiting Support Combining the Canadian Occupational Performance Measure with a Behavioral Reinforcement-based Checklist to Enable Occupation in a Client with Schizophrenia: A Case Study. *Asian Journal of Occupational Therapy* 18(1):127-131, 2022.
- 10) Nishimura A, Hidaka S, Kawaguchi T, Watanabe A, Mochida Y, Ishioka K, Mwanantanbwe M, Otake T, Kobayashi S: Relationship between lower extremity peripheral arterial disease and mild cognitive impairment in hemodialysis patients. *Journal of Clinical Medicine*, 2023; 12(6): 2145, 2023.
- 11) Nozawa K, Ishii A, Asaoka H, Iwanaga M, Kumakura Y, Oyabu Y, Shinozaki T, Imamura K, Kawakami N, Miyamoto Y: Effectiveness of an Online Peer Gatekeeper Training Program for Postsecondary Students on Suicide Prevention in Japan: Protocol for a Randomized Controlled Trial. *JMIR Research Protocols*. 11(4), e34832, 2022.
- 12) Sasaki N, Imamura K, Watanabe K, Hidaka Y, Ando E, Eguchi H, Inoue A, Tsuno K, Komase Y, Iida M, Otsuka Y, Sakuraya A, Asai Y, Iwanaga M, Kobayashi Y, Inoue R, Shimazu A, Tsutsumi A and Kawakami N: The impact of workplace psychosocial factors on menstrual disorders and infertility: a protocol for a systematic review and meta-analysis. *Systematic Reviews*. 2022; 11:195.
- 13) Watanabe K, Imamura K, Eguchi H, Hidaka Y, Komase Y, Sakuraya A, Inoue A, Kobayashi Y, Sasaki N, Tsuno K, Ando E, Arima H, Asaoka H, Hino A, Iida M, Iwanaga M, Inoue R, Otsuka Y, Shimazu A, Kawakami N, Tsutsumi A: Usage of the Brief Job Stress Questionnaire: A Systematic Review of a Comprehensive Job Stress Questionnaire in Japan from 2003 to 2021. *International Journal of Environmental Research and Public Health*. 2023; 20(3): 1814.
- 14) Iwanaga M, Nishi D, Obikane E, Kawakami N: Age of victimization and moderating role of social support for the relationship between school-age bullying and life satisfaction in middle-age. *Scandinavian Journal of Public Health*. 2023.
- 15) Sakuraya A, Iida M, Imamura K, Ando E, Arima H, Asaoka H, Eguchi H, Hidaka Y, Hino A, Inoue A, Inoue R, Iwanaga M, Kobayashi Y, Komase Y, Otsuka Y, Sasaki N, Shimazu A, Tsuno K, Watanabe K, Kawakami N, Tsutsumi A: A proposed definition of participatory organizational interventions. *Journal of Occupational Health*. 2023; 65: e12386.
- 16) Kanehara A, Morishima R, Takahashi Y, Koike H, Usui K, Sato S, Uno A, Sawai Y, Kumakura Y, Yagishita S, Usami S, Morita M, Morita K, Kanata S, Okada N, Yamasaki S, Nishida A, Ando S, Koike S, Shibuya T, Joseph S, Kasai K: Young carers in Japan: Reliability and validity testing of the BBC/University of Nottingham young carers survey questionnaire and prevalence estimation in 5000 adolescents. *Psychiatry Clin Neurosci Rep*

- 1: e46, 2022.
- 17) Tabei KI, Saji N, Ogama N, Abe M, Omura S, Sakurai T, Tomimoto H: Quantitative analysis of white matter hyperintensity: Comparison of magnetic resonance imaging image analysis software. *J Stroke Cerebrovasc Dis* 31(8) 2022: 106555. Online ahead of print.
- 18) Satoh M, Tabei K, Abe M, Kamikawa C, Fujita S, Ota Y: Shorter Version of the Brain Assessment Is Suitable for Longitudinal Public Cognitive Evaluations. 2022. Dec 1; 1-7.
- 19) Yamada F, Kataoka Y, Minatani M, Hada A, Wakamatsu M, & Kitamura T: The NVP QOL Questionnaire: Psychometric properties of the self - report measure of health - related quality of life for nausea and vomiting during pregnancy. *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports*, 1(3), e21, 2022.
- 20) Hada A, Imura M & Kitamura T: Development of a scale for parent-to-baby emotions: Concepts, design, and factor structure. *Psychiatry and Clinical Neurosciences Reports*, 1(3), e30, 2022.
- 21) Kitamura T, Matsunaga A, Hada A, Ohashi Y & Takeda S: Development of a Scale for COVID-19 Stigma and Its Psychometric Properties: A Study among Pregnant Japanese Women. *Behavioral Sciences*, 12(8), 257, 2022.
- 22) Hada A, Minatani M, Wakamatsu M, Kitamura T: Disability during Early Pregnancy: Using the Sheehan Disability Scale during the First Trimester in Japan. *Healthcare*. 10(12): 2514, 2022.
- 23) Nishi D, Imamura K, Watanabe K, Obikane E, Sasaki N, Yasuma N, Sekiya Y, Matsuyama Y & Kawakami N : The preventive effect of internet-based cognitive behavioral therapy for prevention of depression during pregnancy and in the postpartum period (iPDP): a large scale randomized controlled trial. *Psychiatry and clinical neurosciences* 76(11): 570-578, 2022.
- 24) Yasuma N, Shiozawa T, Ogawa M, Abe M, Igarashi M, Kawaguchi T, Sato S, Nishi D, Kawakami N, Yamaguchi S & Fujii C: What outcomes in community mental health research are important to caregivers of people with schizophrenia? An exploratory qualitative analysis of an online survey. *Neuropsychopharmacology reports* 42(4): 526-531, 2022.
- 25) Yasuma N, Imamura K, Watanabe K, Iida M & Takano A: Adolescent cannabis use and the later onset of bipolar disorder: protocol for a systematic review and meta-analysis of prospective cohort studies. *Neuropsychopharmacology reports* 42(4): 538-542, 2022.
- 26) Iida M, Watanabe K., Yeo. S.A, Yasuma N, Nishi D, and Kawakami N: Association of Personal Values in Adolescence with Subjective Health Status, Meaning in Life, and Life Satisfaction in Adulthood: A Cross-sectional Study with Retrospective Recall1. *Jpn Psychol Res*.2022.
- 27) 米倉裕希子, 山口創生 : 知的障害福祉従事者のスティグマティゼーション是正を目的とした研修の効果. *精神障害とリハビリテーション* 26(2) : 183-191, 2022.
- 28) 厨子健一, 岩山絵理, 山口創生 : スクールソーシャルワーカーの配置と関連する教育現場における変化:国内文献における検討. *社会福祉学* 63(3) : 1-13, 2022.
- 29) 佐藤さやか, 五十嵐百花, 川口敬之, 藤本 悠, 田村早織, 小川 亮, 佐々木奈都記, 板垣貴志, 山口創生, 藤井千代 : 精神障害当事者の地域生活にかかるエビデンス紹介サイトの開発とその意義. *臨床精神医学* 51(6) : 693-700, 2022.
- 30) 松隈誠也, 山口智史, 西田明日香, 日下桜子, 小塩靖崇, 東郷史治, 佐々木 司 : 教員実施の短時間型精神保健リテラシープログラムを1学年357人に一斉実施した時の効果の検証. *学校保健研究* 64(4) : 233-242, 2022.
- 31) 佐野邦典, 渡邊愛記, 川口敬之, 坂本安令, 福田倫也 : 心臓血管外科術後のせん妄発症予防の

ための効果的な作業療法実践の検討：せん妄発症事例から得られた示唆. 神奈川作業療法研究 12 : 1-7, 2022.

- 32) 葛岡 哲, 松岡太一, 川口敬之: 作業機能障害に焦点を当てた介入が統合失調症者のリカバリーに与えた影響. 作業療法 41(3) : 340-347, 2022.
- 33) 松岡耕史, 渡邊愛記, 川口敬之: 脳卒中患者の麻痺側上肢で行う生活動作における目標設定支援システム (e-ASUHS) の開発. 作業療法の実践と科学 5(1) : 1-5, 2023.
- 34) 中原睦美, 多田真理子, 臼井 香, 長谷川智恵, 森田健太郎, 笠井清登: 母親の語りから見た DUP をめぐる葛藤とその支援. 心理臨床学研究 40 (5) : 403 - 414, 2023.
- 35) 五十嵐百花, 山口創生, 佐藤さやか, 塩澤拓亮, 松長麻美, 小塩靖崇, 藤井千代: IPS型就労支援を利用した精神障害をもつ人における就職・就労週数の予測要因. 精神神経学雑誌 125(3) : 1-11, 2023.

## (2) 総説

- 1) 藤井千代: 誰にとっても大切な精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築. 作業療法ジャーナル 56(13) : 1308-1314, 2022.
- 2) 藤井千代: 地域で安心して暮らせる精神保健医療福祉体制の実現に向けて 研究者の立場から. 日本精神科病院協会雑誌 41(9) : 901-906, 2022.
- 3) 藤井千代: 地域住民に対する普及啓発 心のサポーター養成事業. 最新精神医学 27(5) : 345-351, 2022.
- 4) 藤井千代: 「病みつつ働く」支援と工夫 統合失調症をめぐって. こころの科学 225 : 20-25, 2022.
- 5) 藤井千代: 地域共生社会と精神医療. 心と社会 53(2) : 76-82, 2022.
- 6) 藤井千代: 精神疾患患者における意思決定支援. 精神科臨床 Legato 8(1) : 16-20, 2022.
- 7) 根本隆洋, 清水徹男, 田中邦明, 藤井千代, 辻野尚久, 内野 敬, 今村晴彦: 精神疾患の早期介入・早期支援・予防の現在 精神科早期相談・支援の社会実装 MEICIS プロジェクト. 日本社会精神医学会雑誌 31(3) : 272-277, 2022.
- 8) 山口創生: 研究と実践がつながるためへの第一歩：研究を専門とする者の立場からの一見解. 精神障害とリハビリテーション 26(1) : 29-31, 2022.
- 9) 佐藤さやか: 精神科リハビリテーション. 精神医学, 64(5)特大号, 551-555, 2022.
- 10) 佐藤さやか: SOS を出さない, 出せない人に対してできること. こころの元気+ 16(6), 22-23, 2022.
- 11) 佐藤さやか: アウトリーチを含むコミュニティメンタルヘルス支援. 岩壁 茂他 編: 臨床心理学スタンダートテキスト 653-660, 2023.
- 12) 小塩靖崇: 精神疾患の予防早期発見, 介入, 予防に対するアプローチ～学校授業における精神疾患の教育～. 日精診ジャーナル 48(4) : 131-136, 2022.
- 13) 小塩靖崇: 高校における精神疾患授業のあり方 : 日本学校保健会による精神疾患に関する指導参考資料の紹介, 精神医学 64 (9), 1207-1214, 2022.
- 14) 川村 慎, 堀口雅則, 小沼健太郎, 山下慎一, 小塩靖崇: 日本ラグビーフットボール選手会による Player Development Program の実践報告, スポーツ産業学研究 32 (4), 481-491, 2022.
- 15) 塩澤拓亮, 安間尚徳: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) が精神疾患当事者の家族に与える影響とこれからの家族支援のあり方. 日本社会精神医学会雑誌 31(2), 178-185, 2022.
- 16) 川口敬之, 山口創生: 精神保健福祉サービスにおけるピアサポートの研究動向と課題. 精神障害とリハビリテーション 26(2) : 148-153, 2022.
- 17) 羽田彩子, 山田蕗子, 竹田 省, 北村俊則: 感染症蔓延下での妊婦の心理的メカニズムは適応的か?—COVID-19 感染に対する脅威をめぐって. 周産期医学 52 (6) : 825-828, 2022.

- 18) 山口創生: こころの病気に対するスティグマと精神科医療. こころの科学 228 : 16-23, 2023.

(3) 著書

- 1) 山口創生: 就労支援. 斎藤正彦, 神庭重信 編: 地域精神医療・リエゾン精神医療・精神科救急医療. 中山書店, 東京, pp130-139, 2022.
- 2) 山口創生: 就労支援において使用可能なアセスメントツール. 芳賀大輔, 金川善衛, 稲富宏之 編: ゼロから始める就労支援ガイドブック, メジカルビュー社, 東京, pp117-126, 2022.
- 3) 佐藤さやか: 「就労支援の研究」(実践例). 稲富宏之, 金川善衛, 芳賀大輔 編: ゼロから始める就労支援ガイドブック メジカルビュー社, 東京, pp273-278, 2022.
- 4) 下平美智代: 包括型地域生活支援プログラム. 野島一彦 監修: 臨床心理学中事典, 遠見書房, 東京, pp408-409, 2022.
- 5) 安藤俊太郎, 森田正哉, 八木智子, 小塩靖崇, 金原明子, 熊倉陽介, 藤川慎也, 佐々木 司: 世界の若者の精神保健. 井筒 節, 堀 敦朗 編: 国際精神保健・ウェルビーイング ガイドブック, 東京, pp55-67, 2022.
- 6) 小塩靖崇: 精神疾患の特徴, 精神疾患の予防, 精神疾患からの回復, ストレスや不安に対処しよう, うつ病からの回復をたどってみよう. 大修館書店編集部 編: 「現代高等保健体育・指導ノート」保健編, 東京, pp176-217, 2022.

(4) 研究報告書

- 1) 藤井千代, 野口正行, 川副泰成, 椎名明大, 濱戸秀文, 松田ひろし, 佐竹直子: 地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究(19GC2003). 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)令和3年度総括・分担研究報告書(研究代表者: 藤井千代), 2022.
- 2) 藤井千代: 地域精神保健医療福祉体制の機能強化を推進する政策研究(19GC2003). 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)令和3年度総合研究報告書(研究代表者: 藤井千代), 2022.
- 3) 佐藤さやか: 精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究(19GC1010). 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)令和3年度総合研究報告書(研究代表者: 佐藤さやか), 2022.
- 4) 佐藤さやか: 重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発 文部科研 R2-R4 年度 基盤研究(C)(研究代表者: 佐藤さやか) 令和4年度 研究報告書, 2022.
- 5) 杉山直也, 平田豊明, 橋本 聰: 精神科救急医療体制整備の均てん化に資する研究(21GC1010). 厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)令和3年度総括・分担研究報告書(研究代表者: 杉山直也), 2022.
- 6) 濱戸秀文, 朝倉為豪, 稻垣 中, 岩永英之, 牛島一成, 太田順一郎, 大塚達以, 小口芳世, 奥野栄太, 木崎英介, 来住由樹, 小池純子, 佐藤智絵, 椎名明大, 島田達洋, 鈴木 亮, 酒野 貢, 竹澤 翔, 田崎仁美, 戸高 聰, 富田真幸, 中西清晃, 中濱裕二, 中村 仁, 平林直次, 松尾 寛子, 宮崎大輔, 山田直哉, 横島孝至, 吉川 輝, 吉住 昭, 芳野昭文, 渡辺純一: 措置通報および措置入院の実態に関する研究. 厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)令和3年度総括・分担研究報告書(研究代表者: 藤井千代), 2022.
- 7) 臼井 香: 精神的不調を抱える思春期・青年期のリカバリー促進に注目した早期支援法の開発. 日本学術振興会特別研究員(研究代表者: 臼井 香) 令和4年度 研究報告書, 2022.

(5) 翻訳

- 1) 江田香織, 岡田 俊, 小黒早紀, 小塩靖崇, 金 吉晴, 栗山健一, 住吉太幹, 土屋裕睦, 土肥 美智子, 西 大輔, 橋本亮太, 藤井千代, 松本俊彦, 山田光彦: 日本語翻訳版「IOC エリートアスリート用メンタルヘルスツールキット」, 原版タイトル「IOC MENTAL HEALTH IN ELITE ATHLETES TOOLKIT」
- (6) その他
- 1) Ojio Y, Mori R, Matsumoto K, Nemoto T, Sumiyoshi T, Fujita H, Morimoto T, Nishizono-Maher A, Fujii C, Mizuno M. Innovative approach to adolescent mental health in Japan: School-based education about mental health literacy. Early Interv Psychiatry. [Top Cited Article 2021-2022.]
  - 2) Sasaki N, Imamura K, Watanabe K, Hidaka Y, Sakuraya A, Ando E, Eguchi H, Inoue A, Tsuno K, Komase Y, Iida M, Otsuka Y, Iwanaga M, Kobayashi Y, Inoue R, Shimazu A, Tsutsumi A, Kawakami N: Psychosocial factors at work and fertility and menstrual disorders: a systematic review. medRxiv. 2022.(Preprint)
  - 3) 須田史朗, 渡邊衡一郎, 西園マーハ文, 新村秀人, 松本俊彦, 藤井千代, 山口創生: 日本社会精神医学会のこれから. 日本社会精神医学会雑誌 32(1) : 33-50, 2023.
  - 4) 山口創生: 精神医学における「社会」への再注目. 日本社会精神医学会雑誌 31(2) : 99-100, 2022.
  - 5) 山口創生: 図書紹介: 障害者福祉の政策学: 評価とマネジメント. 精神障害とリハビリテーション 26(2) : 101, 2022.
  - 6) Deegan P: 監修・翻訳・編集: 坂本明子, 久永文恵, 宮本有紀, 栄 セツコ, 山口創生: 私のリカバリーストーリー/メディケイション・エンパワメント. 精神障害とリハビリテーション 26(2) : 199-207, 2022.
  - 7) 佐藤さやか: 「オープンダイアローグ実践システムと精神医療」書評. こころの科学 225 : 103, 2022.
  - 8) 中西清晃; 「所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業 -自治体における多職種アウトリーチ支援-」, 精神障害とリハビリテーション 26(2) : 208-212, 2022.
  - 9) 小塩靖崇: メンタルヘルスリテラシーの高め方. 子どもの心の健康を育むためのスキル&サポート, 東山書房 : 44-47, 2022.
  - 10) 川村 慎, 堀口雅則, 小沼健太郎, 山下慎一, 小塩靖崇: 日本ラグビーフットボール選手会による Player Development Program の実践報告. 産業学研究 32(4) : 481-491, 2022. [学会賞奨励賞] [https://doi.org/10.5997/sposun.32.4\\_481](https://doi.org/10.5997/sposun.32.4_481).
  - 11) 塩澤拓亮, 内野 敬, 小辻有美, 田中邦明, 根本隆洋: 地域で若者を支えるワンストップ相談センターSODA 足立. 月刊社会教育 66(8) : 81, 2022.
  - 12) 羽田彩子, 大橋優紀子, 馬場香里, 佐藤昌司, 北村俊則: ボンディング障害を知る 手を差し伸べ, 児童虐待を未然に防ぐために. 週刊医学界新聞 3487 号, 2022.
  - 13) 阿部真貴子: 今改めて音楽療法のエビデンスを問う・認知症. 音楽医療研究 15 : 6-8, 2023.

## B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Ojio Y: Innovative approach to psychological safety in an elite sport setting in Japan: Athlete-led research and practice about mental health support. Global Alliance for Mental Health and Sport (GAMeS) 2022 Conference Program 23 – 25 November 2022, Wollongong, Australia.
- 2) 藤井千代: 治療同意を得られない患者への支援と倫理的課題 同意が得られない治療と医療倫理. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.

- 3) 藤井千代: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおける精神保健の重要性. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 4) 藤井千代: 精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおけるアウトリーチ支援. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.16.
- 5) 西 大輔, 羽澄 恵, 臼田謙太郎, 岡崎絵美, 小倉加奈子, 片岡真由美, 小塩靖崇, 松長麻美, 梅本育恵, 久我弘典, 藤井千代: 心のサポートー養成事業 Nippon COCORO Action. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.16.
- 6) 藤井千代, 宇田川健, 中西清晃, 内野 敬, 富沢明美, 下里誠二, 安藤和葉, 大羽更明: シンポジウム 5 「地域における統合失調症の理想と現実 - 未治療ケースにおけるサービス利用の促進 -」. 第 17 回日本統合失調症学会 Online. 2023.3.25.
- 7) 山口創生, 小川 亮, 安藤俊太郎, 松長麻美, 小塩靖崇, 近藤伸介, 市橋香代, 藤井千代, 笠井 清登: 医学生に対するアンチ・スティグマ介入の効果: 日本サイトの結果から. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.16.
- 8) 山口創生: Individual placement and support 援助付き雇用モデルのエビデンスと現在地. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 9) 山口創生: 精神科以外における医療現場における精神疾患に関するスティグマ: 系統的レビューのミニレビュー. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 10) 佐藤さやか: 会員アンケートの実施と中間報告. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 29 回オンライン大会, オンライン, 2022.12.10.
- 11) 下平美智代, 中西清晃, 西内絵里沙, 大迫直樹, 小野寺 健, 倉光洋平, 岡本秀行, 岩谷 潤: 地域精神保健におけるひきこもり支援—所沢市の支援事例をもとに考える—. 第 29 回精神障害者リハビリテーション学会群馬大会 自主プログラム, 群馬, Online, 2022.12.11.
- 12) 小池純子: 「和文雑誌編集委員会ワークショップ」論文執筆, 投稿, 改訂, 受理, 掲載までの経験について「川崎市の精神保健福祉法第 23 条通報における複数回通報事例の特性と地域生活支援の必要性」についての論文執筆経験から. 第 118 回日本精神神経学会学術会 福岡大会, 福岡, 2022.6.18.
- 13) 中西清晃: 「精神科アウトリーチ - 行政・医療・福祉の連携 -」. 石川県立こころの病院 第 34 回こころの臨床学会特別講演, 石川, 2023.3.11.
- 14) 西内絵里沙: シンポジウム 79 措置入院制度を見直すー主に予後の視点から「所沢市精神障害者アウトーリーチ支援事業における措置入院者への支援」. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.18.
- 15) 西内絵里沙: JNPF シンポジウム これから心理教育の効果的な実践について考える—エビデンスからの示唆をふまえてー「アウトーリーチ支援における家族心理教育の活用」. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 29 回群馬オンライン大会, 2022.12.11.
- 16) 小塩靖崇: 日本のラグビー選手におけるメンタルヘルス対処行動の特徴～よわいはつよいプロジェクト～ 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.16.
- 17) 小塩靖崇: 日本スポーツ界におけるメンタルヘルスケアシステムの開発と実装に向けて. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 18) 小塩靖崇: 日本スポーツ界におけるメンタルヘルスケアのあり方を考える～アスリートのメンタルヘルス実態調査から～. 第 20 回 日本スポーツ精神医学会総会・学術集会, 千葉, 2022.8.27.
- 19) 小塩靖崇: アスリートと共に考えるメンタルヘルス研究と実践～よわいはつよいプロジェクト～ 第 22 回日本認知療法・認知行動療法学会, 東京, 2022.11.11.

- 20) 小塩靖崇：アスリートのメンタルヘルスを考える-ラグビー選手会との実態調査から-「アスリートのメンタルヘルスおよびウェルビーイングの課題にスポーツ心理学はどのように貢献できるか」. 日本スポーツ心理学会第49回大会, 東京, 2022.9.30.
- 21) 小塩靖崇：学校での精神疾患教育について. 「これだけは知っておきたい 学校でのメンタルヘルス支援」公認心理師の会 2022年度年次総会, 2022.9.24.
- 22) 小塩靖崇：アスリートのメンタルヘルスケアのあり方を考える. 第11回日本行動医学会ウェビナー, オンライン, 2023.2.10.
- 23) 小塩靖崇：アスリートと若者のメンタルヘルス, トヨタ財団シンポジウム「みんなと考えるメンタルヘルスーアスリートという生き方を事例に一」, 東京, 2023.2.22.
- 24) 小塩靖崇, 川村 慎, 吉谷吾郎：よわいはつよいプロジェクトの紹介. トヨタ財団シンポジウム「みんなと考えるメンタルヘルスーアスリートという生き方を事例に一」, 東京, 2023.2.22.
- 25) 田中ウルヴェ京, 小塩靖崇, 山下慎一, 川村 慎, 松田丈志：アスリートと一緒に考えるみんなのメンタルヘルス. トヨタ財団シンポジウム「みんなと考えるメンタルヘルスーアスリートという生き方を事例に一」, 東京, 2023.2.22.
- 26) 小塩靖崇：アスリートのメンタルヘルスケア～今, 求められるものとは? Keio Sports SDGsシンポジウム 2023, 2023.2.26.
- 27) 小塩靖崇：市民講座「学校の精神保健教育：－市民として, 学校教育で教わるべきことは？」研究者から見た教育：何が期待できるか?. 第17回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
- 28) 塩澤拓亮：シンポジウム1「研究テーマ再考」研究で扱うべき項目は何か－多様な立場からの調査－. 第17回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
- 29) 増川ねてる, 植田俊幸, 安保寛明, 栄セツコ, 中山ちはる, 川口敬之：「リカバリーモデル」の実装～語り合おう！体験・気づき・学び～. 日本精神障害者リハビリテーション学会第29回群馬, オンライン大会, 2022.12.10.
- 30) 川口敬之, 山田悠平：シンポジウム1「研究テーマ再考」生活の関心事についての当事者調査－オンライン調査の質的分析. 第1回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
- 31) 白井 香：AYA世代のこころの不調に寄り添う. 日本精神障害者リハビリテーション学会第29回群馬オンライン大会, 2022.12.10-11.
- 32) 白井 香：シンポジウム6「主体性の再考」心理学からみた主体性が意味するもの. 第17回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
- 33) 羽田彩子：シンポジウム2「両親のメンタルヘルスと新生児虐待」新生児虐待のある新生児ボンディング障害事例の支援方法. 第58回日本周産期・新生児医学会学術集会, オンライン, 2022.7.10.
- 34) 羽田彩子：シンポジウム4「周産期メンタルヘルスにおける精神科診断を考える」周産期精神疾患の次元性. 日本精神科診断学会, 2022.10.4.

## (2) 一般演題

- 1) Kawaguchi T, Watanabe A, Tsuruta H, Kato S, Oikawa Y, Furuya K, Sakimoto M, Matsuoka T: Service Provider Involvement in Building Partnerships between Persons with Severe Mental Illness and Service Providers: A Thematic Analysis Based on Users' Experiences in Mental Health Services. 18th World Federation of Occupational Therapists Congress. Paris and online. 2022.8.28-31.
- 2) Watanabe A, Kawaguchi T, Kaneko M, Sano K, Nobematsu A, Kobayashi T: Factor structure of quality of life in patients with breast cancer as determined using structural equation modeling. 18th World Federation of Occupational Therapists Congress. Paris and online. 2022.8.28-31.

- 3) Matsuoka K, Watanabe A, Kawaguchi T, Misawa K, Fukuda M: Investigation of predictions regarding the performance of eating in the affected arm of stroke inpatients using the Activities Specific Upper-extremity Hemiparesis Scale (ASUHS). 18th World Federation of Occupational Therapists Congress. Paris and online. 2022.8.28-31.
- 4) Morita M, Watanabe A, Kawaguchi T, Ohkubo T, Fukuda M: Factors affecting the quality of life of patients with Parkinson's disease: Exploratory research focusing on occupational dysfunction. 18th World Federation of Occupational Therapists Congress. Paris and online. 2022.8.28-31.
- 5) Iwanaga M, Nishi D, Obikane E, Kawakami N: The moderating effect of social support on the association between school-age bullying and life satisfaction in middle-age: a prospective cohort. The 25th East Asian Forum of Nursing Scholars 2022. EC-127. Taiwan (online). 2022.4.21-22.
- 6) Nozawa K, Ishii A, Asaoka H, Akiyama H, Iwanaga M, Kida T, Kumakura Y, Oyabu Y, Shinozaki T, Imamura K, Kawakami N, Miyamoto Y: The process evaluation about online peer gatekeeper training program for post-secondary students. The 25th East Asian Forum of Nursing Scholars 2022. EC-232. Taiwan (online). 2022.4.21-22.
- 7) Iwanaga M, Sasaki N, Iida M, Kotake R, Morita Y, Iwanaga H, Nozawa K, Kawakami N: Association between work-related subjective wellbeing and school bullying experience; a systematic review. 22nd WPA World Congress of Psychiatry. 1025. Bangkok and online. 2022.8.3-6.
- 8) Nozawa K, Ishii A, Asaoka H, Akiyama H, Iwanaga M, Kida T, Kumakura Y, Oyabu Y, Shinozaki T, Imamura K, Kawakami N, Miyamoto Y: The effectiveness of an online peer gatekeeper training program for postsecondary students on suicide prevention in Japan. 22nd WPA World Congress of Psychiatry. 1912. Bangkok and online. 2022.8.3-6.
- 9) Iwanaga M, Yamaguchi S, Sato S, Nakanishi K, Nishiuchi E, Shimodaira M, Fujii C. Use of community mental health outreach services for untreated people with mental health problems in Japan: a retrospective cohort. The 26th East Asian Forum of Nursing Scholars 2023. B-7-779.Tokyo, Japan. March 10-11, 2023.
- 10) Usui K, Kiriha K, Araki T, Tada M, Koshyama D, Fujioka M, Nishimura R, Ando S, Koike S, Kasai K. Longitudinal relations between mismatch negativity and psychological difficulties in mid-adolescence. BESETO International Psychiatry Conference, Tokyo, Japan, Dec 2022.11.9.
- 11) 岩田 遼, 熊崎 博一, 茅野 分, 藤井千代, 吉川雄一郎, 三村 將: ナイト・ケアでロボットが与える心理的安心感. 第 118 回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 12) 稻垣 中, 濑戸秀文, 島田達洋, 大塚達以, 岩永英之, 富田真幸, 渡辺純一, 佐藤智絵, 藤井千代, 吉住昭: 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究(その 1) 社会機能から見た措置入院患者の類型化の試み. 第 18 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2022.7.9.
- 13) 稻垣 中, 濑戸秀文, 島田達洋, 大塚達以, 木崎英介, 中西清晃, 奥野栄太, 横島孝至, 藤井千代, 吉住 昭: 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究(その 2) 社会機能の改善度から見た措置入院患者入院後経過の類型化の試み. 第 18 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2022.7.9.
- 14) 山口創生: 就労継続支援 B 型事業所を利用する精神障害当事者における一般就労への関心に関連する要因. 第 10 回日本精神保健福祉学会, オンライン大会, 2022.6.26.

- 15) 小池純子, 村井千賀, 竹澤 翔, 山口創生, 川副泰成, 藤井千代: 精神科急性期病棟における包括支援マネジメント導入の1年後効果について. 第118回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 16) 竹澤 翔, 酒野 貢, 山本秀実, 村井千賀, 小池純子: 精神科急性期病棟における包括的支援マネジメント体制導入前後の対象特性と転帰の比較. 第42回 日本看護科学学会, 広島, 2022.12.4-5.
- 17) 小池純子, 中西清晃, 竹澤 翔, 遠田大輔, 椎名明大, 島田達洋, 稻垣 中, 太田順一郎, 藤井千代, 濱戸秀文: 措置入院後の訪問看護利用者に関わるうえでの訪問看護支援上の困難. 第41回社会精神医学会大会, 神戸, 2023.3.16-17.
- 18) 下平美智代, 志賀滋之, 早瀬大介, 斎藤文花, 山田裕貴: 所沢市の経験専門家活動についての報告. 第29回精神障害者リハビリテーション学会群馬大会, online, 2022.12.10.
- 19) 中西清晃, 竹澤 翔, 小池純子, 稻垣 中, 島田達洋, 椎名明大, 太田順一郎, 藤井千代, 濱戸秀文: 措置入院退院後に訪問看護を実施している機関における多職種・多機関連携の実態—訪問看護機関へのグループインタビュー調査ー. 第30回日本精神科救急学会, 埼玉, 2022.9.30-10.1.
- 20) 中西清晃, 西内絵里沙, 山口創生: 第10分科会精神保健福祉 P-10-1 所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業における支援の実態, 第81回日本公衆衛生学会総会, 山梨, 2022.10.7-9.
- 21) 中西清晃, 竹澤 翔, 小池純子, 稻垣 中, 島田達洋, 椎名明大, 太田順一郎, 藤井千代, 濱戸秀文: 「措置入院退院後に訪問看護を実施している機関における多職種・他機関連携の実態—訪問看護機関へのグループインタビュー調査ー」. 第30回日本精神科救急学会, 埼玉, 2022.9.30-10.1.
- 22) 濱戸秀文, 稻垣 中, 島田達洋, 大塚達以, 岩永英之, 中西清晃, 中村 仁, 渡辺純一, 横島孝至, 奥野栄太: 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 患者登録および転帰の状況. 一般演題 e-Poster, 第118回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 23) 濱戸秀文, 稻垣 中, 島田達洋, 大塚達以, 岩永英之, 中西清晃, 中村 仁, 渡辺純一, 横島孝至, 奥野栄太: 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 退院1年後の治療状況. 一般演題 e-Poster, 第118回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 24) 濱戸秀文, 稻垣 中, 島田達洋, 大塚達以, 岩永英之, 中西清晃, 中村 仁, 渡辺純一, 横島孝至, 奥野栄太: 措置入院となった精神障害者の前向きコホート研究 措置解除時と退院時の処方. 一般演題 e-Poster, 第118回日本精神神経学会学術総会 福岡大会, 福岡, 2022.6.17.
- 25) 西内絵里沙, 中西清晃, 山口創生: 第10分科会精神保健福祉 P-10-2 所沢市精神障害者アウトリーチ支援事業における支援効果. 第81回日本公衆衛生学会総会, 山梨, 2022.10.7-9.
- 26) 小塙靖崇, 藤井千代: アスリートによる児童へのメンタルヘルス啓発ワークショップの実践報告. 第20回日本スポーツ精神医学会総会・学術集会, 千葉, 2022.8.27.
- 27) 小黒早紀, 小塙靖崇, 松長麻美, 川村 慎, 吉谷吾郎, 堀口雅則, 藤井千代: 日本のラグビー選手におけるメンタルヘルスに関する援助希求先の選択傾向. 第20回日本スポーツ精神医学会総会・学術集会, 千葉, 2022.8.27.
- 28) 渡邊愛記, 川口敬之, 陳松歩実, 嘉成 望, 丸 達也, 小林 肇: ベイジアン共分散構造分析に基づく乳がんサバイバーの精神的健康における要因構造の推定. 第7回日本がんサポートイズケア学会学術集会, 2022.6.18-19.
- 29) 松岡耕史, 渡邊愛記, 川口敬之, 三沢幸史, 福田倫也: 回復期リハビリテーション病棟退院時の脳卒中後麻痺側上肢における整容動作遂行可否の事後確率に基づく予測精度の検証. 第56回日本作業療法学会, 京都, 2022.9.16-18.
- 30) 村田雄一, 山元直道, 須賀裕輔, 亀澤光一, 川口敬之, 森田三佳子: 入院医療の短期化に伴う作業療法実践—第2報—. 第76回国立病院総合医学会, 熊本, 2022.10.7-8.

- 31) 山元直道, 村田雄一, 天野英浩, 須賀裕輔, 亀澤光一, 川口敬之, 森田三佳子: 精神科急性期病棟における個人作業療法の実践報告—病状悪化の振り返りと作業療法の体験を通じたセルフモニタリングへの介入—. 第 76 回国立病院総合医学会, 熊本, 2022.10.7-8.
- 32) 増川ねてる, 植田俊幸, 安保寛明, 川口敬之, 栄 セツコ, 中山ちはる: 「リカバリー」を実装する—「リカバリーモデル」の Cultivation 実践報告—(第 2 報:「2 重接続モデル」の提案). 日本精神障障害者リハビリテーション学会 第 29 回群馬大会, オンライン, 2022.12.10-11.
- 33) 岩永麻衣: 学校でのいじめ経験が日本の労働者の心理的苦痛とワーク・エンゲイジメントに与える影響. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島, 2022.12.3-4.
- 34) 飯田真子, 岩永麻衣, 浅岡紘季: チーム・ジョブ・クラフティングとワーク・エンゲイジメントおよびパフォーマンスとの関連: 系統的レビュー. 第 42 回日本看護科学学会学術集会, 広島, 2022.12.3-4.
- 35) 岩永麻衣, 山口創生, 佐藤さやか, 中西清晃, 西内絵里沙, 下平美智代, 藤井千代: 精神的問題を抱えながら未治療であった人々における地域精神保健アウトリーチ支援の利用状況: 後ろ向きコホート研究. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
- 36) 臼井 香, 切原賢治, 荒木 剛, 多田真理子, 越山太輔, 藤岡真生, 西村亮一, 安藤俊太郎, 小池進介, 笠井清登: 思春期におけるミスマッチ陰性電位の発達と心理的困難さの関連の検討. 第 44 回日本生物学的精神医学会, 東京, 2022.11.5.
- 37) 森島 遼, 小池春奈, 金原明子, 臼井 香, 岡田直大, 安藤俊太郎, 笠井清登: 新型コロナウイルス感染症対策としての全国一斉臨時休校期間中のオンライン授業実施と思春期メンタルヘルス: 5000 名の中学生・高校生対象の横断調査. 第 25 回日本精神保健・予防学会学術集会, 京都, 2022.11.12-13.
- 38) 臼井 香, 長谷川智恵, 多田真理子, 市橋香代, 森田健太郎, 金原明子, 大路友惇, 金生由紀子, 山口創生, 笠井清登: AYA 世代のこころの不調に対応する早期・簡易心理支援: CAYAC プログラムの予備的効果検証. 日本精神障害者リハビリテーション学会 第 29 回群馬大会, オンライン, 2022.12.10-11.
- 39) 長谷川智恵, 臼井 香, 市橋香代, 森田健太郎, 金生由紀子, 金原明子, 大路友惇, 里村嘉弘, 山口創生, 笠井清登, 多田真理子: AYA 世代のこころの不調に対する早期・簡易心理支援: CAYAC プログラムの質的分析による予備的効果検証. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.
- 40) 佐藤正之, 田部井賢一, 阿部真貴子, 神川ちあき, 藤田彩子, 太田芳徳: 認知機能検査(脳検)の短縮版と原典版との相関. 第 41 回日本認知症学会学術集会・第 37 回日本老年精神医学会合同開催, オンライン, 2022.11.25.
- 41) 神川ちあき, 田部井賢一, 阿部真貴子, 藤田彩子, 太田芳徳, 佐藤正之: システムを用いた神経心理学的検査における使用デバイスの影響. 第 41 回日本認知症学会学術集会・第 37 回日本老年精神医学会合同開催, web.会議, 2022.11.25.
- 42) 田部井賢一, 小川純一, 神川ちあき, 阿部真貴子, 太田芳徳, 佐藤正之: 音楽体操オンライン版はワーキングメモリを向上させる. 第 41 回日本認知症学会学術集会・第 37 回日本老年精神医学会合同開催, オンライン, 2022.11.25.
- 43) 五十嵐百花, 山口創生, 佐藤さやか, 塩澤拓亮, 松長麻美, 小塩靖崇, 藤井千代: IPS 型就労支援利用者における就労条件の希望マッチ度と就労期間の関連. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.26.
- 44) 安間尚徳, 高野 歩: 思春期における大麻使用とその後の双極性感情障害の発症: 系統的レビューとメタ分析プロトコル. 第 57 回日本アルコール・アディクション医学会学術総会, 2022.9.9.

### (3) 研究報告会

- 1) 佐藤さやか, 岩永麻衣, 山口創生, 中西清晃, 西内絵里沙, 下平美智代, 曽由寛, 臼井 香,

藤井千代：自治体によるアウトリーチ支援 所沢市における未治療ケースへの支援実態を中心に. 国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 4 年度 研究報告会（第 34 回）  
2023.3.20.

- 2) 川口敬之, 山田悠平, 相良真央, 山口創生, 小池純子, 塩澤拓亮, 岩永麻衣, 五十嵐百花, 臼井香, 安間尚徳, 山田裕貴, 佐藤さやか, 藤井千代：災害関連調査を通じた当事者主導型研究プロトコル作成および記録—DIARY プロジェクトの実践に基づく検討—. 国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 4 年度 研究報告会（第 34 回）2023.3.20.
- 3) 高嶋里枝：精神保健福祉法の改正について—精神医療の課題と今後—. いほうの会, 2023.3.26.

#### (4) その他

- 1) 川口敬之：国立精神・精神医療研究センター精神保健研究所 令和 4 年度 研究報告会（第 34 回）若手奨励賞受賞. 2023.3.31.

### C. 講演

- 1) 藤井千代：「精神科医療における満足度の向上および治療の改善に資する治療方針決定のあり方とは」. 大塚製薬株式会社広島支店, 第 4 回 SDM Seminar Series, 所沢, 2022.7.8.
- 2) 藤井千代：「地域共生社会のために精神医療ができること」. ヴィアトリス製薬株式会社共催：住友ファーマ株式会社, 山梨県精神疾患地域連携の会, (Web 開催), 2022.7.22.
- 3) 藤井千代：「職域・地域架橋型-価値に基づく支援者育成について」. 東京大学医学部付属病院精神神経科 職域・地域架橋型-価値に基づく支援者育成について C コース, 2022.7.24.
- 4) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムについて」. 大塚製薬株式会社大宮支店, 埼玉精神神経科診療所協会イブニングセミナー, 所沢, 2022.8.6.
- 5) 藤井千代：「地域共生化社会と精神医療」. 東京大学医学部 2022 年度基礎統合講義・基礎臨床社会医学統合講義, 東京, 2022.8.25.
- 6) 藤井千代：「改正精神保健福祉法への期待」. 大塚製薬株式会社医薬営業本部 改正障害者総合支援法・改正精神保健福祉法 みんなで希望の笛を育てよう!, 東京, 2022.9.10.
- 7) 藤井千代：「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムの構築について」大塚製薬株式会社広島支店, 精神障害者にも対応した地域包括ケアシステムを考える, 竹原市保健センター, (Web 開催), 2022.9.29.
- 8) 藤井千代：「リカバリーを支える就労支援と精神科医療」. 精神保健福祉普及啓発講演会, 福井 (Web 開催), 2022.10.7.
- 9) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムと医療計画について」. 多様な精神疾患等に対応できる医療連携体制の構築支援研修, 東京, 2022.10.25.
- 10) 藤井千代：「地域特性を活かして精神科救急医療体制を構築するために—研究者の立場から」. 日本精神科救急学会 2022 年度 教育研修会 in 山口, 山口 (Web 開催), 2022.11.12.
- 11) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムと アウトリーチ支援の実践」. 令和 4 (2022) 年度精神保健アウトリーチ事業研修会, 栃木 (Web 開催), 2022.11.29.
- 12) 藤井千代：「精神保健福祉法改正で入院医療はどう変わるか」. 第 8 回静岡県西部精神医学懇話会, 浜松 (Web 開催), 2022.12.5.
- 13) 藤井千代：「リカバリー支援のための精神科医療」. これから的精神科医療を考える会, 北海道 (Web 開催), 2022.12.6.
- 14) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築について」. 医療法人財団青渓会講演会, 東京, 2022.12.12.
- 15) 藤井千代：「いよいよ法改正!どうする市町村-今こそ知りたい!タイプ別精神保健支援体制構築の進め方-」. 第 163 回市町村セミナー, 東京 (Web 開催), 2023.1.20.

- 16) 藤井千代：「精神科病院及び精神科クリニックにおける退院支援について」. 令和 4 年度 静岡県精神保健指定医会議, 静岡, 2023.2.11.
- 17) 藤井千代：「精神保健福祉法改正における市町村の精神保健相談と保健所, 精神保健福祉センターの市町村支援に期待すること」. 令和 4 年度精神保健福祉専門研修, 京都 (Web 開催), 2023.2.28.
- 18) 藤井千代：「精神保健福祉法改正と精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」. 令和 4 年度 大津市保健所実務者研修, 滋賀, 2023.3.10.
- 19) 山口創生：IPS 援助付き雇用モデル. 第 79 回こんばん亭働くことをあきらめない! IPS 援助付き雇用モデルから考える役立つ就労支援, オンライン, 2022.4.30.
- 20) 山口創生：地域精神保健福祉医療における多職種・他機関連携. 第 1 回上尾市スキルアップセミナー：医療・保健・福祉連携の会, 埼玉, 2022.7.11.
- 21) 山口創生：精神疾患患者の就労を再考する. 第 2 回就労支援オンラインセミナー, 島根, 2022.7.29.
- 22) 山口創生：精神保健の Organizational Change に向けた研究の方法論. 東京大学, 2021 年度 課題解決型高度医療人材養成プログラム「職域・地域架橋型一価値に基づく支援者育成」(2018-2022 年), 東京, 2022.7.24.
- 23) 山口創生：Individual placement and support (IPS) の理念とエビデンス. 第 7 回多職種で リカバリーを学ぶ会 オンラインセミナー, 福岡, 2022.10.7.
- 24) 山口創生：精神障害のある人の「働く」をあきらめない! : IPS 援助付き雇用モデルから考 える. 三田市まちづくり協働センター, 東京, 2023.1.28.
- 25) 山口創生：精神障害に関する偏見解消のための啓発プログラム. 日本福祉大学大谷研究室勉強会, 愛知, 2023.2.16.
- 26) 山口創生：精神障害に関するスティグマとその減少に向けた取り組み. 医学の D&I 人材育成 プログラム, 東京, 2023.2.17.
- 27) 山口創生：地域における統合失調症の早期介入：機関連携とワンストップ型の視点. 統合失調症の介入と地域連携フォーラム, 東京, 2023.3.1.
- 28) 小池純子：触法精神障害者処遇制度研究の立場から. 第 2 回法務省処遇指針検討会, 千葉, 2022.7.28.
- 29) 下平美智代：地域精神保健におけるひきこもり支援. 東洋大学吉田ゼミ講義, 東京, 2022.7.27.
- 30) 中西清晃, 西内絵里沙：所沢アートリーチ事業の実践と評価について. 令和 4 年度第 2 回川口市精神障害者訪問支援強化事業委員会, 埼玉, 2023.2.28.
- 31) 西内絵里沙：第 8 回精神障がいのある親とその子どもの支援に関する学習会. メリデン版訪問 家族支援の概要と実践「実践例を含む取り組み」, 親&子どものサポートを考える会 (オンライン開催), 2022.5.29.
- 32) 西内絵里沙：令和 4 年度統合失調症講座「家族支援について考える」. 所沢市健康推進部保健セ ンター健康管理課こころの健康支援室. 埼玉, 2023.2.1.
- 33) 西内絵里沙：新潟県アートリーチ支援事業. 第 3 回精神科アートリーチ推進セミナー. 支援が必 要な人のもとへ～地域包括ケアの時代を見据えて～. 「所沢市アートリーチ支援チームによる 実践」, 医療法人崇徳会アートリーチ推進事業部 (Web 開催) 2023.3.7.
- 34) 小塩靖崇：学校でのメンタルヘルス教育改革ーその先へ. 子どもたちのメンタルヘルスと自殺 予防～ゲートキーパーができること～. 第 13 回 TikTok セーフティパートナー・カウンシル, 2022.7.12.
- 35) 小塩靖崇：学校と地域で支える児童生徒の心の健康. 岐阜県教育委員会 児童生徒理解講座, 岐 阜, 2022.7.15.
- 36) 小塩靖崇：スポーツ界に求められるメンタルヘルス支援策を考える～ラグビー選手会との実態 調査から～, J リーグチームドクターカンファレンス, 2022.7.18.

- 37) 小塩靖崇, 川村 慎: 子どものメンタルフィットネスを育てよう「よわいはつよいプロジェクト」, もりや学びリレーション(守谷市家庭教育講座), 2022.7.19.
- 38) 小塩靖崇: こころの健康を守る力を育てる ~メンタルヘルスリテラシー教育のすすめ~令和4年度 精神障がい福祉研修会, 鳥取, 2022.11.5.
- 39) 小塩靖崇: こんなときどうする?思春期の「こころ」の支え方令和4年(2022年)度「思春期メンタルヘルスオンライン市民講演会」, 大阪, 2022.11.14.
- 40) 小塩靖崇: Mental well-being を目指す社会の実現に向けて. Creator for Impact (Google/YouTube), オンライン, 2022.12.2.
- 41) 小塩靖崇: 高等学校学習指導要領の改定のポイント. 令和4年度 多摩地域依存症関連機関連携会議, 東京, 2022.12.9.
- 42) 小塩靖崇・吉谷吾郎・川村 慎: 久留米市こころの健康づくり講演会 2022 「よわいはつよい」~こころ支え合うまち くるめを目指して~. 精神保健福祉に関する普及啓発事業:一般市民を対象とする講演会, 福岡, 2022.12.10.
- 43) 小塩靖崇: 学校教育におけるメンタルヘルスとスポーツ部活動指導, グッドコーチ養成セミナー2022, 大阪, 2022.12.19.
- 44) 川口敬之: 最近の精神科リハビリテーション研究の動向から考える作業療法の実践・研究. 2022年度札幌医科大学保健医療学部作業療法学科 卒後教育講習会, 北海道, 2023.1.28.
- 45) 塩澤拓亮: 児童思春期におけるメンタルヘルスの課題と対応. 令和4年度第2回精神保健福祉事例検討会, 埼玉, 2023.2.22.
- 46) 羽田彩子: 「地域母子保健」. 姫路大学, オンライン, 2022.10.24.

#### D. 学会活動

##### (1) 学会主催

##### (2) 学会役員

- 1) 藤井千代: 日本精神神経学会 代議員
- 2) 藤井千代: 日本精神神経学会 医療倫理委員会委員長
- 3) 藤井千代: 日本精神神経学会 地域ケアにおける自立支援のあり方検討委員会委員長
- 4) 藤井千代: 日本社会精神医学会 副理事長
- 5) 藤井千代: 日本精神科救急学会 理事
- 6) 藤井千代: 日本精神保健福祉政策学会 理事
- 7) 藤井千代: 日本司法精神医学会 評議員
- 8) 藤井千代: 日本精神保健・予防学会 評議員
- 9) 山口創生: 日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
- 10) 山口創生: 日本社会精神医学会 理事
- 11) 山口創生: 日本統合失調症学会 評議員・理事
- 12) 山口創生: こころのバリアフリー研究会 評議員
- 13) 山口創生: 日本精神保健・予防学会 評議員
- 14) 佐藤さやか: 日本精神障害者リハビリテーション学会 理事
- 15) 佐藤さやか: 公認心理師の会 医療部会委員
- 16) 佐藤さやか: VCAT-J 研究会 理事
- 17) 佐藤さやか: 日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 18) 西内絵里沙: 日本精神障害者リハビリテーション学会 実践賞委員
- 19) 西内絵里沙: 一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアットリーチ協会 研修委員
- 20) 小塩靖崇: 日本精神保健・予防学会 評議員
- 21) 小塩靖崇: 日本スポーツ精神医学会 研究推進委員

(3) 座長

- 1) 藤井千代：「精神科地域医療への貢献」. Otduks CNS Conference@ Event In (座長), Web 開催, 2022.7.28.
- 2) 山口創生：演題発表座長. 第 25 回日本精神保健・予防学会学術集会, 京都, 2022.11.12.
- 3) 山口創生：ピアサポート・リカバリー支援演題発表座長. 第 25 回日本精神保健・予防学会学術集会, 京都, 2022.12.10.
- 4) 佐藤さやか：シンポジウム 7 「家族支援の現在地」座長. 第 17 回日本統合失調症学会, オンライン, 2023.3.25-26.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 藤井千代：日本社会精神医学会雑誌 編集委員長
- 2) 藤井千代：日本精神神経学会雑誌 編集委員
- 3) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 4) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 英文監修者
- 5) 山口創生：日本精神障害者リハビリテーション学会 学会誌編集委員
- 6) 山口創生：学会誌投稿論文等査読小委員会及び査読制度の在り方検討小委員会
- 7) 山口創生：BMC Psychiatry Editorial board member
- 8) 小塩靖崇：IACAPAP テキストブック翻訳委員会委員
- 9) 小塩靖崇：予防精神医学 編集委員
- 10) 小塩靖崇：日本社会精神医学会雑誌 編集委員
- 11) 川口敬之：日本臨床作業療法研究 査読委員
- 12) 川口敬之：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 藤井千代, 山口創生：精神科外来におけるケースマネジメント「療養生活継続支援加算」を使いこなす！国立精神神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部×日本多機能型精神科診療所研究会×(一社) コミュニティ・メンタルヘルス・アウトリーチ協会, オンライン, 2022.9.2.
- 2) 西内絵里沙：2022 年度アウトリーチネット研修委員会企画「8050 問題」. 一般社団法人コミュニティメンタルヘルスアウトリーチ協会, オンライン, 2023.3.5

(2) 研修会講師

- 1) 藤井千代：「精神障害にも対応した地域包括ケアシステムについて」. 令和 4 年度「精神障害者にも対応した地域包括ケアシステム構築研修会（市町村編）」, 講義及びグループワークの助言, 新潟県精神保健福祉センター, (Web 開催), 2022.7.5.
- 2) 藤井千代：精神科外来におけるケースマネジメントが目指すこと. 精神科外来におけるケースマネジメント「療養生活継続支援加算」を使いこなす!, オンライン, 2022.9.2.
- 3) 藤井千代：「アウトリーチ事業の理念と実施主体の役割及び連携の在り方」栃木県精神保健福祉センター 令和 4 年度精神保健アウトリーチ事業研修会, (Web 開催), 2022.9.5.
- 4) 藤井千代, 松長麻美, 小塩靖崇：メンタルヘルス講習. 日本プロ野球選手会, 2022.12.23.
- 5) 山口創生：リカバリーの再整理：前編. 訪問看護ステーション PORT 勉強会, 東京, 2022.6.7.
- 6) 山口創生：リカバリーの再整理：後半. 訪問看護ステーション PORT 勉強会, 東京, 2022.6.14.
- 7) 山口創生：ストレングスモデル. 訪問看護ステーション PORT 勉強会, 東京, 2022.6.21.
- 8) 山口創生：ストレングスモデル. ACT-J 研修会, オンライン, 2022.07.26.
- 9) 山口創生：援助付き雇用 IPS モデル. 就労支援センターそらいろ研修, オンライン, 2022.6.24.

- 10) 山口創生 : Individual placement and support (IPS) の理念とエビデンス. 第7回多職種でリカバリーを学ぶ会 オンラインセミナー, 福岡, 2022.10.7.
- 11) 山口創生 : Individual placement and support (IPS) の理念とエビデンスおよびフィデリティとは?. ヴィストキャリア金沢駅前職員研修, 石川, 2022.11.16.
- 12) 山口創生 : Individual placement and support (IPS) の理念とエビデンスおよびフィデリティとは?. ヴィストキャリア武蔵ヶ辻職員研修, 石川, 2022.11.17.
- 13) 山口創生 : リカバリーの再整理. 就労支援センターそらいろ研修, オンライン, 2022.12.9.
- 14) 山口創生 : ストレングスモデル. 就労支援センターそらいろ研修, オンライン, 2023.2.22.
- 15) 佐藤さやか : VCAT-J 研究会中級研修会. 司会およびスーパーバイズ, 2022.7.30.
- 16) 佐藤さやか : 医療で働く公認心理師のエッセンシャルスキルズ ファシリテーター, 2022.7.31.
- 17) 小池純子 : 生きづらさの背景と支援～医療観察法から見えてきたもの～. 横浜市青葉区役所精神保健福祉普及啓発講演会, 神奈川, 2022.10.21.
- 18) 黒田直明 : 「怒りの感情の理解と対処」. つくば市福祉支援センター職員専門研修会, 茨城, 2022.1.23.
- 19) 下平美智代 : 第3期ところざわ経験専門家養成講座(TEBET). 講師. 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.6.9, 16, 23,30, 7.7, 14, 21,28.
- 20) 下平美智代, 早瀬大介, 斎藤文花, 山田裕貴 : 第4回経験専門家の集い (After TEBET). 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.8.25.
- 21) 下平美智代, 早瀬大介, 斎藤文花, 山田裕貴 : 第5回経験専門家の集い (After TEBET). 所沢市保健センター. 埼玉, 2022.9.22.
- 22) 下平美智代, 斎藤文花, 志賀滋之, 早瀬大介, 山田裕貴 : 第4期ところざわ経験専門家養成講座 (TEBET) 講師. 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.10.13, 10.20, 10.27.11.10, 11.17, 11.24. 12.1, 8, 15, 22.
- 23) 下平美智代 : アウトリーチ支援事業の先進事例. 精神障がい者の地域移行に関わる支援者向け研修, オンライン, 2023.11.15.
- 24) 中西清晃 : 「利用者を再発させない取り組み Part2 - 状態変化のアセスメントについて -」. 所沢市自立支援協議会こころ部会講師, 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.12.8.
- 25) 中西清晃 : 「ひとり暮らしを支える～所沢市アウトリーチ支援の実践から～」. 所沢市自立支援協議会こころ部会講師. 所沢市保健センター. 埼玉, 2023.02.16.
- 26) 西内絵里沙 : メリデン版訪問家族支援. 関東甲信越基礎研修講師, オンライン, 2022.9.18,23.
- 27) 小塩靖崇 : メンタルヘルスを自分事にできる社会へ. TikTok クリエイター向けメンタルヘルス講習会, 2022.10.7.
- 28) 川口敬之 : 精神障がいの概説及びスポーツへの取り組み. 令和4年度神奈川県初級障がい者スポーツ指導者養成講習会, 神奈川, 2022.11.27.
- 29) 羽田彩子 : 産後ケアに活かそう:メンタルヘルスのアセスメント. 厚木市産後ケア事業研修, 神奈川, 2023.2.6.
- 30) 羽田彩子 : 産後ケアに活かそう:心理支援の技法. 厚木市産後ケア事業研修, 神奈川, 2023.2.13.
- 31) 北村俊則, 大橋優紀子, 羽田彩子 : EPDS で周産期うつを早期にスクリーニングーその先の支援へーできているつもりの周産期ケア. 第37回東京母性衛生学会学術セミナー, オンライン, 2023.2.23.
- 32) 羽田彩子 : 助産師だからできる妊産婦の精神的ケア. 東京都委託助産師指導講習会, オンライン, 2022.9.19.

## F. その他

- 2) 下平美智代, 大迫直樹, 真行寺伸江, 中西清晃, 西内絵里沙, 山崎さおり: 経験専門家講話. 所沢市アットリーチ支援チームスタッフ研修. 講師; 内野陽平, 三塚雄介, 細井愛子. 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.9.29.
- 3) 下平美智代, 糸繰朝美, 大迫直樹, 中西清晃, 西内絵里沙, 山崎さおり: 経験専門家講話. 所沢市アットリーチ支援チームスタッフ研修, 講師: 久保陽子, 本橋直人, 和田真吾. 所沢市保健センター, 埼玉, 2022.11.16.
- 4) 中西清晃, 西内絵里沙, 下平美智代, 大迫直樹, 真行寺伸江, 山崎さおり: チーム研修プログラム「当事者研究実践者によるスタッフトレーニング」. 講師: 宮内勝子, 三上郁雄, 2022.6.2.
- 5) 中西清晃: 精神看護動画「アットリーチ」解説撮影協力. 看護学テキスト「ナーシング・グラフィカ」, 動画テキスト, 2022.10.
- 6) 小塩靖崇・益子直美: 「スポーツ指導者必読! 益子直美さんが「監督が怒ってはいけない大会」を始めた理由(前編)」パラサポ web, 2022.4.3.
- 7) 小塩靖崇・益子直美: 「スポーツ指導者必読! 益子直美さんが「監督が怒ってはいけない大会」を始めた理由(後編)」パラサポ web, 2022.4.3.
- 8) 小塩靖崇: 学校のメンタルヘルス教育. メンタルヘルスマガジンこころの元気プラス, 16(4): 63, 2022.4.
- 9) 羽根田卓也, 伊藤華英, 小塩靖崇: 【Z世代必見!】オリンピックアスリート × こころの専門家～人生に役立つ自分のこころとの向き合い方～, チューリッヒ生命主催 特別オンラインセミナー, 2022.5.14.
- 10) 小塩靖崇ら: 「精神疾患」40年ぶり教科書に「無関係」だった教師は認識変えた」朝日新聞, 2022.5.18.
- 11) 小塩靖崇: アスリートも一人の人間である-Player Development Program-とは, 日本ラグビーフットボール選手会, 2022.6.10.
- 12) 小塩靖崇: 「いつもと様子が違う」に気づけてますか? 子どもの心の病気について知ろう JFN / TOKYO FM ONE MORNING, 2022.6.21.
- 13) 小塩靖崇ら: 「選手の心の悩み「チーム関係者には特に話しづらい」「第三者」が支える PDP とは? ラグビー選手会が試験導入」HUFFPOST, 2022.7.25.
- 14) 小塩靖崇: 「打席で嘔吐, パニック障害と診断…経験伝えるオリックス・小谷野コーチ「恥じることではない」」読売新聞, 2022.8.4.
- 15) 羽根田卓也, 高木菜那, 小塩靖崇: 【中高大生必見! これで新学期も怖くない!】～若者が抱える「悩み」に全力でお答えします～, チューリッヒ生命主催 特別オンラインセミナー, 2022.8.24.
- 16) 小塩靖崇ら: 「心の相談役は元アスリート ラグビー選手会が試み」共同通信社 (2022.7.30), 佐賀新聞, 山陽新聞 (2022.7.31), 新潟日報 (2022.8.1), 神戸新聞 (2022.8.15)
- 17) 小塩靖崇・川村 慎: 心の状態を正しく認識することが, パフォーマンスの向上につながる. ~メンタルフィットネスで選手のこころを守る~, 競技力向上 テクニカルサポート事業 WEBマガジン, 東京都スポーツ文化事業団, 2022.9.2.
- 18) 小塩靖崇: なぜ今, レジリエンスが注目されるのか スポーツと心と, そしてレジリエンスの関係. Sport Japan, 2022.
- 19) 小塩靖崇: 『有害なポジティブ思考』を防ぐには. 読売新聞, 2022.9.6.
- 20) 小塩靖崇: ひと スポーツ界のメンタルヘルスに取り組む. 共同通信社 (2022.7.15), 岐阜新聞, 東京新聞, 京都新聞 他.
- 21) 小塩靖崇: 第一部 アスリートなどによる対談. 世界メンタルヘルスデー2022 つながる, どこでも, だれにでも. 厚生労働省, 2022.10.10.
- 22) 小塩靖崇: ひと アスリートの心の悩みに向き合う研究者, 每日新聞, 2022.10.27.

- 23) 小塩靖崇：アスリートのココロ <番外編> 専門家が目指す変革は. 中日新聞, 2023.1.7.
- 24) 川村 慎, 吉谷吾郎, 小塩靖崇：ラグビー選手会 3 代目会長が向き合った アスリートの「よわさ」と「孤独」, Forbes Japan 3 月号 2023.1.25.
- 25) 小塩靖崇：学校教育×メンタルヘルス よわいはつよいプロジェクト in 岐阜, 2023.2.4.

## 11. ストレス・災害時こころの情報支援センター

### I. 研究部の概要

平成 23 年東日本大震災の被災者に対する継続的な対応、及び今後発生が予想されるその他の災害の発生に備えた体制づくりのための研究や調査を行うことを目的として、災害時こころの情報支援センターが平成 23 年 12 月に国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所に設置され、平成 30 年 4 月に「ストレス・災害時こころの情報支援センター」に改称された。災害及び事故・事件後の精神保健医療に係る助言・技術的支援、情報発信・連携に取り組んでいる。

令和 4 年度の当センターの構成は以下の通りである。センター長（併任）：金 吉晴、併任研究員：関口 敦、小川眞太朗、大沼麻実、成田 瑞、井野敬子、客員研究員：宮本有紀、種市康太郎、前田正治、高橋 晶、秋山 剛、富田博秋、本橋 豊、木津喜雅。

### II. 研究活動

- 1) WHO 版の心理的応急処置 (PFA) の普及活動と e-learning 普及研究
- 2) 災害後の心理的リカバリースキルの研究
- 3) 「コロナ心の支援情報」の発信

### III. 社会的活動に関する評価

#### (1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 1) 国立精神・神経医療研究センターHP上の「コロナ心の支援情報」に「コロナ心の支援情報 不安との付き合い方」の掲載を継続 (<https://www.ncnp.go.jp/nimh/behavior/anxiety/index.html>)。感情調整、セルフケア、コミュニケーション、呼吸法スキルを掲示した。令和4年4月から令和5年3月のあいだに115,914のページビューのアクセスがあった。(金、大沼)
- 2) 下記(3)の研修会を通じて研究成果の社会還元を行った。

#### (2) 専門教育面における貢献

- 1) WHO 版 PFA を日本に導入し、WHO との契約の下で、一般研修および講演を継続し、1,169 名が参加した。
- 2) 各種学術団体で、心のマネジメントや災害時の精神的健康について講演を行った。
- 3) 専門家向けに PTSD や災害精神医療等についての講演を行った。
- 4) メディア取材を通じて専門知識の社会普及を行った。
- 5) PFA の e-learning を作成し、自治体保健師向け 144 名、歯科医師・歯科衛生士向け 169 名が視聴した。

#### (3) 精研の研修の主催と協力

- 1) 令和 4 年度精神保健に関する技術研修。第 9 回および第 10 回災害時 PFA と心理対応研修を開催した（オンライン）。2022.7.21（73 名受講）、2022.12.1（62 名受講）。（金、大沼）
- 2) 令和 4 年度「こころの健康づくり対策事業」補助金による PTSD 対策専門研修事業  
災害・事故・犯罪・児童虐待などのトラウマ的体験をされた方々に対して、基本的な精神保健医療対応（こころのケア）を提供する人材を確保するため、精神保健医療福祉業務従事者等に対し、下記 3 コースをオンラインで実施した。  
・心理的トラウマに関する理解を深め、初期対応、PTSD 等の治療の知識を得、基本的対応スキルを習得する通常コース（617 名受講）  
A.通常コース 1 令和 4 年 10 月 25 日  
B.通常コース 2 令和 4 年 11 月 25 日

- ・認知行動療法（持続エクスピージャー療法）による実際の治療事例を呈示し、患者の回復の可能性と経路を学習し、高度な専門支援のあり方を学ぶ専門コース（387名受講）
  - B.専門コース1 令和4年12月15日～16日
  - B.専門コース2 令和5年1月19日～20日
- ・犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する犯罪・性犯罪被害者コース（347名受講）
  - C.犯罪・性犯罪被害者コース 令和5年2月16日～17日

(4) 保健医療行政政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

1) 公的委員会

- ・ふくしま心のケアセンター 顧問（金）
- ・みやぎ心のケアセンター 顧問（金）

2) 研究成果の行政貢献

- ・厚生労働省「新型コロナウイルス感染症に係るメンタルヘルスとその影響に関する調査」及び「COVID-19の精神保健福祉センターにおける相談対応調査」検討会委員（金）
- ・在中国日本大使館主催「中国在留邦人向けメンタルヘルスケアセミナー」にて講演（金）

(5) センター内における臨床的活動

(6) その他

- 1) ストレス・災害時こころの情報支援センターのホームページのリニューアル作業を進めた。

#### IV. 研究業績

##### A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ohnuma A, Narita Z, Tachimori H, Sumiyoshi T, Shirama A, Kan C, Kamio Y, Kim Y. Associations between media exposure and mental health among children and parents after the Great East Japan Earthquake. European Journal of Psychotraumatology, 14(1), 2163127, 2023.

(2) 総説

- 1) 金 吉晴, 大沼麻実：災害時の心理的応急処置（psychological first aid : PFA）。災害精神医学－自然災害、人為災害、感染症パンデミックとこころのケア、精神医学、医学書院, 65(3) : 279-284, 2023.
- 2) 大沼麻実：災害時心理的応急処置（Psychological first aid : PFA）。精神科 Resident, 先端医学社, 3(2), 64-65, 2022.

(3) 著書

- 1) 大沼麻実：第4章 災害被災者の社会的支援・災害等危機的出来事における被災者・被害者への心理社会的支援、第III部 コミュニティへのアプローチ、現代の臨床心理学5 臨床心理学と心の健康、シリーズ「現代の臨床心理学」[全5巻]。金沢吉展、沢宮容子編、東京大学出版会、東京, 223-236, 2023.3.14.

(4) 研究報告書

(5)翻訳

(6)その他

- 1) 大沼麻実: 災害歯科保健医療体制研修会 e ラーニング「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「令和4年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」, 公益社団法人日本歯科医師会, 東京, 2022.8.1.

B. 学会・研究会における発表

(1)学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショッピング, パネルディスカッション等

- 1) 大沼麻実, 鈴木満, 金吉晴: 官民学の協働支援事例紹介: 海外邦人を対象とした心理的応急処置（PFA）研修. 在留邦人支援委員会企画シンポジウム「官民産学協働による海外邦人メンタルヘルス支援」, 多文化精神医学会, 滋賀, 2023.1.17.

(2)一般演題

(3)研究報告会

(4)その他

C. 講演

- 1) 大沼麻実: 災害時の心理的応急処置（Psychological First Aid: PFA）について. 令和4年度専門課程Ⅰ保健福祉行政管理分野及び専門課程Ⅲ地域保健福祉専攻科, 国立保健医療科学院, オンライン, 2022.5.26.
- 2) 大沼麻実: 災害時のこころのケア PFA（サイコロジカル・ファーストエイド）概論. 令和4年度なごや子ども応援委員会 職員研修, 名古屋市教育委員会, オンライン, 2022.6.13.
- 3) 大沼麻実: 「至誠と愛」の実践学修「Psychological First Aid(1), (2), (3)」. 医学教養, 東京女子医科大学, オンライン, 2022.10.6.
- 4) 大沼麻実: 災害支援の心理的支援～サイコロジカル・ファーストエイドについて～. 防災に関する研修会（令和4年度災害・事故時のこころのケア対策事業関係職員研修）, 北九州市保健福祉局精神保健福祉センター, オンライン, 2022.10.27.
- 5) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2022年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 東日本ブロック, 公益社団法人日本歯科医師会, 東京, 2022.11.19.
- 6) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2022年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 中日本ブロック, 公益社団法人日本歯科医師会, 東京, 2022.12.17.
- 7) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）. 厚生労働省 医療関係者研修費等補助金 災害医療チーム等養成支援事業「2022年度災害歯科保健医療チーム養成支援事業」災害歯科保健医療体制研修会 西日本ブロック, 公益社団法人日本歯科医師会, 東京, 2023.1.21.
- 8) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修. 誘拐被害者家族支援研修, 外務省, オンライン, 2023.3.9.
- 9) 大沼麻実: サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修会. 金沢少年鑑別所, オンライン,

2023.3.10.

- 10) 大沼麻実：サイコロジカル・ファーストエイド（PFA）研修. 誘拐被害者家族支援研修, 外務省, オンライン, 2023.3.16.

#### D. 学会活動

- (1) 学会主催

- (2) 学会役員

- 1) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会 理事
- 2) 金 吉晴：自殺予防学会 理事
- 3) 金 吉晴：日本不安症学会 プログラム委員
- 4) 関口 敦：日本心身医学会 幹事, 代議員
- 5) 関口 敦：日本摂食障害学会 評議員, 学術交流委員会
- 6) 井野敬子：日本精神神経学会 災害支援委員会
- 7) 井野敬子：日本トラウマティック・ストレス学会 広報委員会

- (3) 座長

- (4) 学会誌編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board member
- 2) Narita Z: Asian Journal of Psychiatry, early career editorial board member

#### E. 研修

- (1) 研修企画

- 1) 金 吉晴, 大沼麻実：2022 年度精神保健に関する技術研修. 第 9 回災害時 PFA と心理対応研修. オンライン, 2022.7.21.
- 2) 金 吉晴：令和 4 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 1. オンライン, 2022.10.25.
- 3) 金 吉晴：令和 4 年度 PTSD 対策専門研修 A.通常コース 2. オンライン, 2022.11.25.
- 4) 金 吉晴, 大沼麻実：2022 年度精神保健に関する技術研修. 第 10 回災害時 PFA と心理対応研修. オンライン, 2022.12.1.
- 5) 金 吉晴：令和 4 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 1. オンライン, 2022.12.15-16.
- 6) 金 吉晴：令和 4 年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース 2. オンライン, 2023.1.19-20.
- 7) 金 吉晴：令和 4 年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース. オンライン, 2023.2.16-17.

- (2) 研修会講師

- 1) 金 吉晴：地域における健康危機管理～災害時の心のケア～. 令和 4 年度専門課程 I 保健福祉行政管理分野分割前期, オンライン, 2022.5.26.
- 2) 金 吉晴：PTSD・PFA を学ぶ「心的外傷を受けた方に寄り添う支援をするために」. 令和 4 年度精神保健福祉研修（前期）, 東京／オンライン開催, 2022.7.1
- 3) 金 吉晴：災害時のこころのケアー総論. 2022 年度精神保健に関する技術研修 第 9 回災害時 PFA と心理対応研修, オンライン, 2022.7.21.
- 4) 金 吉晴：トラウマの概念と PTSD 診断. 令和 4 年度心の健康づくり対策事業 PTSD 対策専門研修. A. 通常コース 1. オンライン, 2022.10.25.
- 5) 金 吉晴：トラウマの概念と PTSD 診断. 令和 4 年度心の健康づくり対策事業 PTSD 対策専門研修. A. 通常コース 2. オンライン, 2022.11.25.

- 6) 金吉晴: 災害時のこころのケア総論. 2022年度精神保健に関する技術研修 第10回災害時PFAと心理対応研修, オンライン, 2022.12.1.
- 7) 伊藤正哉, 井野敬子, 金吉晴: PTSDの心理療法各論1. 令和4年度PTSD対策専門研修B. 専門コース1, オンライン, 2022.12.15-16.
- 8) 井野敬子, 伊藤正哉, 金吉晴: PTSDの心理療法各論2. 令和4年度PTSD対策専門研修B. 専門コース1, オンライン, 2022.12.15-16.
- 9) 丹羽まどか, 金吉晴: 複雑性PTSD. 令和4年度PTSD対策専門研修B. 専門コース1, オンライン, 2022.12.15-16.
- 10) 伊藤正哉, 井野敬子, 金吉晴: PTSDの心理療法各論1. 令和4年度PTSD対策専門研修B. 専門コース2, オンライン, 2023.1.19-20.
- 11) 井野敬子, 伊藤正哉, 金吉晴: PTSDの心理療法各論2. 令和4年度PTSD対策専門研修B. 専門コース2, オンライン, 2023.1.19-20.
- 12) 丹羽まどか, 金吉晴: 複雑性PTSD. 令和4年度PTSD対策専門研修B. 専門コース2, オンライン, 2023.1.19-20.
- 13) 井野敬子: PTSD治療. 令和4年度PTSD対策専門研修A. 通常コース1, オンライン, 2022.10.25.
- 14) 井野敬子: PTSD治療. 令和4年度PTSD対策専門研修A. 通常コース2, オンライン, 2022.11.25.
- 15) 大沼麻実: WHO版PFAファシリテーターブースター研修. みやぎ心のケアセンター, 宮城, 2022.6.8.
- 16) 大沼麻実, 宮本有紀, 猿渡英代子, WHO版心理的応急処置(サイコロジカル・ファーストエイド:PFA), 第2回災害保健研修会, 公益財団法人 地域社会振興財団, 自治医科大学, 2022.10.30.
- 17) 大沼麻実: PFA概論(1)(2). 2022年度精神保健に関する技術研修 第9回災害時PFAと心理対応研修, オンライン, 2022.7.21.
- 18) 大沼麻実: PFA概論(1)(2). 2022年度精神保健に関する技術研修 第10回災害時PFAと心理対応研修, オンライン, 2022.12.1.
- 19) 大沼麻実, 臼倉瞳: 令和4年度サイコロジカル・ファーストエイド(PFA)研修, 静岡県精神保健福祉センター, 静岡, 2023.2.16.

#### F. その他

- 1) 金吉晴: 熱海土石流あす1年 被災者に「記念日反応」. 中日新聞. 2022.7.2.
- 2) 金吉晴: 子ども避難民 心に不調 ウクライナから日本 344人. 東京読売新聞. 2022.7.14.

### III. 研修実績

#### 令和4年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体精神保健福祉法第19条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。令和4年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響に伴い対面形式での研修実施が困難なためオンライン開催とし、発達障害者支援研修（4回）、医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修、強迫症対策医療研修（基本コース）、災害時PFAと心理対応研修（2回）、摂食障害治療研修～初心者が知つておくべき外来治療（2回）、統合失調症の標準治療研修、うつ病の標準治療研修、PTSD持続エクスポージャー療法研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存症臨看護等研修、摂食障害治療研修、認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修、精神科救急医療体制整備研修、PTSD対策専門研修（5回）、STAIR Narrative Therapyワークショップ、強迫症対策医療研修認知行動療法コースの計25回の研修を合計2,597名に対して実施した。

**《発達障害者支援研修》**

令和4年6月29日から6月30日まで、第3回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートIを実施し、「ライフステージごとの発達障害児・者の課題と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員60名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花・魚野 翔太

**6月29日（水）**

発達障害児・者に対する行政施策	加藤 永歳
発達障害のある子と養育者の支援	小平 雅基
ペアレント・トレーニング	石井 礼花
発達障害と身体疾患－その病態と診療時の対応	田中 恭子

**6月30日（木）**

成人期の日常生活、就労への支援	本田 秀夫
発達障害のある子への療育	吉川 徹
学童期・思春期の課題とその支援	小野 和哉
特別支援教育の現状と課題	笹森 洋樹

**講師名簿**

岡田 俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井 礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
魚野 翔太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
小平 雅基	恩賜財団母子愛育会総合母子保健センター愛育クリニック小児精神保健科部長
田中 恭子	国立成育医療研究センターこころの診療部児童・思春期リエゾン診療科診療部長
本田 秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授 信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部長
吉川 徹	愛知県医療療育総合センター中央病院子どものこころ科部長
小野 和哉	聖マリアンナ医科大学神経精神医学教室特任教授
笹森 洋樹	国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員 国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センター長

《医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親への  
ペアレント・トレーニング実施者養成研修》

令和4年7月5日、第1回医療機関における注意欠如・多動症（ADHD）児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修を実施し、「医療機関における注意欠如・多動症児の親へのペアレント・トレーニング実施のための養成研修である。ペアレント・トレーニングについての講義を受け、ワークやロールプレイを実際に体験する」を主題に、注意欠如・多動症と診断される児童の診療に関わる医療機関の専門家（医師・公認心理師等の臨床心理技術者・看護師・精神保健福祉士・作業療法士・言語聴覚士）28名に対してオンライン研修を行った。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花

7月5日（火）

注意欠如・多動症（ADHD）とペアレント・トレーニング 岡田 俊・石井 礼花

導入／プログラムの進め方 濱田 純子

行動を3種類に分ける  
してほしい行動に注目する／ほめることを習慣にする  
してほしくない行動への注目を取り去る

指示の出し方・ほめほめ表・限界設定のルールを提示する・ 草間 千絵

環境調整／学校との連携・まとめ

ペアレント・トレーニングの実践に向けて／質疑応答 石井 礼花

**講師名簿**

岡田 俊 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長  
石井 礼花 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長

濱田 純子 東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

草間 千絵 東京大学医学部附属病院こころの発達診療部

《強迫症対策医療研修 基本コース》

令和4年7月15日、第1回強迫症対策医療研修 基本コースを実施し、「OCDの患者に対応できる人材を育てるため、精神医療従事者に対して、診断、評価、治療方針のために必要な知識を系統的に習得する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方161名に対して研修を行った。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

7月15日（金）

OCD の診断と評価 松永 寿人

OCD の標準治療 I 久我 弘典

OCD の標準治療 II 中尾 智博

事例検討 亀井 士郎・松尾 陽  
中尾 智博・松永 寿人

**講師名簿**

金 吉晴 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部部長  
久我 弘典 国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センターセンター長

松永 寿人 兵庫医科大学精神科神経科学主任教授  
中尾 智博 九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授  
亀井 士郎 京都大学精神医学教室客員研究員  
松尾 陽 九州大学大学院医学研究院

### 《災害時 PFA と心理対応研修》

令和4年7月21日、第9回災害時PFAと心理対応研修を実施し、「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等73名に対して研修を行った。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、研修期間を2日間から1日に変更した。研修は演習を実施せず概論のみとなり、リカバリースキル研修は行われなかった。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 大沼 麻実

### 7月21日（水）

災害時のこころのケア・総論	金 吉晴
PFA概論（1）	大沼 麻実
PFA概論（2）・リラクゼーション実習	大沼 麻実・大滝 涼子
災害時の子どものトラウマと反応	福地 成

### 講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部部長
大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部研究員
大滝 涼子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部客員研究員
福地 成	東北医科大学精神科学教室病院准教授

**《摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療》**

令和4年8月5日から8月28日まで、第4回摂食障害治療研修～初心者が知っておくべき外来治療を実施し、「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に、病院、診療所、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等174名に対して研修を行った。8月5日（金）～8月27日（土）はオンデマンド配信、8月28日はライブ配信を実施した。

課程主任 関口 敦

**8月5日（金）～27日（土）**

摂食障害の今	安藤 哲也
一般医でもできる初期治療修	高倉 修
摂食障害の理解 患者、家族にどう伝えるか	佐藤 康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内 一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	山内 常生
小児科医が診る摂食障害	作田 亮一
産婦人科領域における摂食障害診療への対応	小川 真里子

**8月28日（日）**

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ 質疑応答	河合 啓介 (全講師)
-----------------------------	----------------

**講師名簿**

関口 敦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

安藤 哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科講師
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内 一浩	東京大学医学部附属病院心療内科准教授
山内 常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
小川 真里子	東京歯科大学市川総合病院産婦人科准教授
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長

**《統合失調症の標準治療研修》**

令和4年8月28日、第1回統合失調症の標準治療研修を実施し、「統合失調症の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に、統合失調症の診療に従事する医師または薬剤師またはその医師と同伴で受講する看護師、保健師、精神保健福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方など20名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 橋本 亮太

**8月28日（日）**

統合失調症の標準治療研修とは	橋本 亮太
治療計画の策定	市橋 香代
急性期	山田 恒
安定・維持期	橋本 直樹
薬剤性錐体外路系副作用	山田 恒
その他の副作用	山田 浩樹
治療抵抗性統合失調症	橋本 亮太
その他の臨床的諸問題1	柏木 宏子
その他の臨床的諸問題2	山田 浩樹

**症例①グループディスカッション**

症例②グループディスカッション 橋本 亮太・岡田 剛史・市橋 香代・橋本 直樹  
山田 浩樹・山田 恒・柏木 宏子・松島 章晃  
座間味 優

まとめ・質疑応答 橋本 亮太

**講師名簿**

橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長  
柏木 宏子 国立精神・神経医療研究病院 司法精神診療部第三司法精神科医長

市橋 香代	東京大学医学部附属病院精神神経科特任講師
山田 恒	兵庫医科大学病院精神科神経科講師
橋本 直樹	北海道大学大学院医学研究科精神医学分野講師
岡田 剛史	自治医科大学精神医学講座講師
山田 浩樹	昭和大学医学部精神医学講座准教授
松島 章晃	医療法人杏和会阪南病院副院長
座間味 優	琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座助教

**《PTSD 持続エクスポージャー療法研修》**

令和4年9月1日から9月2日、9月29日から9月30日まで、第3回 PTSD 持続エクスポージャー療法研修を実施し、「PTSD の持続エクスポージャー療法を実施できる人材を育てるため治療原理、手続、スキルを系統的に習得する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方 29名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

**9月1日（木）**

PTSD の診断と評価	金 吉晴
PTSD の病理	金 吉晴
PE の治療研究	金 吉晴
PE の治療原理全体像	金 吉晴

**9月2日（金）**

治療導入と治療同盟	金 吉晴
心理教育、呼吸法	金 吉晴
現実エクスポージャー	井野 敬子

**9月29日（木）**

想像エクスポージャー	金 吉晴
ホットスポット	井野 敬子
回避の取り扱い	金 吉晴
治療上の困難	金 吉晴

**9月30日（金）**

症例検討 1	加藤 知子
症例検討 2	濱家 由美子
PE の意義と課題	井野 敬子・金 吉晴
PE を実施するために	井野 敬子・金 吉晴

**講師名簿**

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部 ストレス研究室長
加藤 知子	医療法人社団 かとうメンタルクリニック副院長
濱家 由美子	東北大学災害科学国際研究所災害医学研究部門災害精神医学分野助教

**《うつ病の標準治療研修》**

令和4年9月4日、第1回うつ病の標準治療研修を実施し、「うつ病の標準的治療の基本的な知識及び治療技術の習得」を主題に、うつ病の診療に従事する医師または薬剤師またはその医師と同伴で受講する看護師、保健師、精神保健福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方など35名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 橋本 亮太

**9月4日（日）**

うつ病の標準治療研修とは	橋本 亮太
治療計画の策定	根本 清貴
軽症	渡邊 衡一郎
中等症・重症	福本 健太郎
精神病性	堀 輝
児童思春期	山田 浩樹
睡眠障害とその対応	村岡 寛之
その他の臨床的諸問題	柏木 宏子

**症例①グループディスカッション**

症例②グループディスカッション	橋本 亮太・渡邊 衡一郎・根本 清貴・福本 健太郎 木本 啓太郎・堀 載・村岡 寛之・小松 浩 柏木 宏子・座間味 優・中川 敦夫
-----------------	---

**まとめ・質疑応答**

橋本 亮太

**講師名簿**

橋本 亮太 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部部長

柏木 宏子 国立精神・神経医療研究病院司法精神診療部第三司法精神科医長

根本 清貴	筑波大学医学医療系精神医学准教授
渡邊 衡一郎	杏林大学医学部精神神経科学教室教授
福本 健太郎	岩手医科大学神経精神科学講座講師
堀 載	福岡大学医学部精神医学教室講師
木本 啓太郎	東海大学医学部付属病院総合診療学系精神科学講師
村岡 寛之	北里大学医学部精神科学講師
小松 浩	東北大学病院精神科病院講師
座間味 優	琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座助教
中川 敦夫	聖マリアンナ医科大学 精神科学教室教授

## 《薬物依存臨床医師研修》 《薬物依存臨床看護等研修》

令和4年8月31日から9月2日まで、第35回薬物依存臨床医師研修ならびに第23回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師12名、看護師等28名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 嶋根 卓也・富山 健一

8月31日(水)

薬物依存症臨床総論	松本 俊彦
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存、身体依存）	船田 正彦
大麻成分の医療用途と海外の状況	富山 健一
ドパミンモデルで捉える薬物依存症：生物学的理解のために	沖田 恭治

9月1日(木)

薬物乱用・依存の疫学：一般住民および青少年	嶋根 卓也
精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	藤城 聰
民間回復支援施設の活動と課題	嶋根 卓也・栗坪 千明
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一

9月2日(金)

薬物依存症女性の理解と支援	近藤 あゆみ
薬物依存症者家族の支援について	吉田 精次
回復と自助活動（当事者による体験談）	当事者・家族
ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	稻田 健

**講師名簿**

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
近藤 あゆみ	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
富山 健一	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
沖田 恭治	国立精神・神経医療研究センター病院精神診療部第二精神科医長

船田 正彦	湘南医療大学薬学部教授
藤城 聰	愛知県精神保健福祉センター所長
栗坪 千明	栃木ダルク代表
三島 健一	福岡大学薬学部生体機能制御学研究室教授
吉田 精次	藍里病院副院長 あいざと依存症研究所所長
稻田 健	北里大学医学部精神科学教授

**《発達障害者支援研修》**

令和4年9月28日から9月29日まで、第3回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅡを実施し、「発達障害児・者の多様な支援ニードと当事者・家族の視点」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員56名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花・魚野 翔太

**9月28日（水）**

高齢期の生活実態と支援	日詰 正文
併存する精神疾患とその治療	岡田 俊
発達障害のある人の権利擁護	安保 千秋
発達障害支援における機関連携と支援情報	西牧 謙吾

**9月29日（木）**

発達障害と司法的問題	熊上 崇
発達障害の支援ニードにおける当事者の視点	綾屋 紗月
発達障害の支援ニードにおける家族の視点	岡田 ひろみ
女性の発達障害	砂川 芽吹

**講師名簿**

岡田 俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井 礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
魚野 翔太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長

日詰 正文	独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園総務企画局研究部部長
安保 千秋	都大路法律事務所
西牧 謙吾	国立障害者リハビリテーションセンター病院長／発達障害情報・支援センター長
熊上 崇	和光大学現代人間学部心理教育学科教授
綾屋 紗月	東京大学先端科学技術研究センター特任講師
岡田 ひろみ	特定非営利活動法人愛知県自閉症協会・つぼみの会副理事長
砂川 芽吹	お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系助教

**《摂食障害治療研修》**

令和4年10月5日から10月7日まで、第19回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医療従事者（精神科、心療内科、一般内科、小児科で臨床に従事している医師、臨床心理業務等に従事する者、看護師および保健師、作業療法士、精神保健福祉士、栄養士等）83名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催とした。

課程主任 関口 敦

**10月5日（水）**

摂食障害の疫学・病態・治療概論	安藤 哲也
初期対応と外来診療	高倉 修
入院治療	山内 常生
心理教育	小原 千郷

**10月6日（木）**

身体合併症・身体的管理	鈴木 真理
精神障害・パーソナリティー障害を合併する摂食障害	西園 マ一ハ文
小児例の初期対応と診療	宇佐美 政英
過食症に対するガイドッド・セルフヘルプ認知行動療法	中里 道子

**10月7日（金）**

摂食障害患者の家族支援	森野 百合子
当事者の話を聞く	武田 綾
症例検討	佐藤 康弘
質疑応答	佐藤 康弘・関口 敦・井野 敬子

**講師名簿**

関口 敦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

安藤 哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科講師
山内 常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
小原 千郷	文教大学人間学部臨床心理学科特任専任講師
鈴木 真理	跡見学園女子大学心理学部臨床心理学科特任教授
西園 マ一ハ文	明治学院大学心理学部心理学科教授
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院 子どものこころ総合診療センター センター長 国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長

中里 道子 国際医療福祉大学医学部精神医学主任教授  
森野 百合子 医療法人社団翠会成増厚生病院成増子どもの心ケアセンターセンター長  
武田 綾 NPO 法人のびの会心理療法士  
佐藤 康弘 東北大学病院心療内科講師

《令和4年度 PTSD 対策専門研修》

令和4年10月25日、令和4年度PTSD対策専門研修 A.通常コース1を実施し、「災害被災者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等、トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため、精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方174名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

10月25日(火)

トラウマの基本対応	西 大輔
トラウマの概念と PTSD 診断	金 吉晴
子どものトラウマ	福地 成
PTSD 治療	井野 敬子

**講師名簿**

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
西 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
福地 成	東北医科大学精神科学教室病院准教授

**《認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修》**

令和4年11月8日から11月9日まで、第14回認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修を実施し、「薬物依存症者の臨床的特徴と治療に関するエビデンスを理解し、直面化を避けた動機づけ面接の重要性を理解し、薬物依存症に対する集団認知行動療法のファシリテーションの実際を学ぶとともに、家族支援への理解を深める」を主題に、医療機関、行政機関、司法機関、民間回復施設等で薬物依存症者の援助に従事している者102名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 松本 俊彦 課程副主任 今村 扶美

**11月8日（火）**

薬物依存症患者への対応の基本	成瀬 暢也
SMARPPの理念と意義	松本 俊彦
SMARPPの実際	松本 俊彦
入院病棟における薬物依存症治療	船田 大輔
SMARPPビデオ学習	松本 俊彦
グループワーク（1）	今村 扶美

**11月9日（水）**

薬物乱用・依存の疫学	嶋根 卓也
社会資源（1）～精神保健福祉センターにおける支援～	山田 俊隆
社会資源（2）～民間リハビリ施設と自助グループ～	加藤 隆
薬物依存症臨床における司法的問題への対応	松本 俊彦
デモセッション	今村 扶美
グループワーク（2）	今村 扶美
まとめとディスカッション	松本 俊彦

**講師名簿**

松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
嶋根 卓也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室室長
船田 大輔	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理部臨床心理室

成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長
山田 俊隆	東京都立多摩総合精神保健福祉センター広報援助課相談担当
加藤 隆	NPO法人八王子ダルク代表理事

《摂食障害治療研修～初心者が知つておくべき外来治療》

令和4年11月11日から12月4日まで、第5回摂食障害治療研修～初心者が知つておくべき外来治療を実施し、「摂食障害患者への初期対応、外来診療、医療連携」を主題に、病院、診療所、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害診療・支援に従事する医療従事者（原則有資格者とする）等103名に対して研修を行った。11月11日（金）～12月3日（土）はオンデマンド配信、12月4日はライブ配信を実施した。

課程主任 関口 敦

11月11日（金）～12月3日（土）

摂食障害の今	安藤 哲也
一般医でもできる初期治療修	高倉 修
摂食障害の理解 患者、家族にどう伝えるか	佐藤 康弘
一般医で行うべき検査・身体管理・専門家との連携	吉内 一浩
摂食障害の専門的治療と紹介の方法	山内 常生
小児科医が診る摂食障害	作田 亮一
産婦人科領域における摂食障害診療への対応	小川 真里子

12月4日（日）

症例からみる摂食障害の治療の流れとコツ	河合 啓介
質疑応答	(全講師)

**講師名簿**

関口 敦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

安藤 哲也	国際医療福祉大学成田病院心療内科教授
高倉 修	九州大学病院心療内科診療講師
佐藤 康弘	東北大学病院心療内科講師
吉内 一浩	東京大学医学部附属病院心療内科准教授
山内 常生	大阪公立大学大学院医学研究科神経精神医学講師
作田 亮一	獨協医科大学埼玉医療センター子どものこころ診療センター長
小川 真里子	東京歯科大学市川総合病院産婦人科准教授
河合 啓介	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科診療科長

**《発達障害者支援研修》**

令和4年11月16日から11月17日まで、第3回発達障害者支援研修：指導者養成研修パートⅢを実施し、「発達障害児・者に併存する課題とその治療・支援」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師（特に指導について責任的立場にある者）、自治体（都道府県、政令指定都市）において、行政的な立場で地域の研修実施に携わる者もしくは発達障害者支援センター職員83名に対して研修を行った。また新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花・魚野 翔太

**11月16日（木）**

発達障害と不登校・ひきこもり	宇佐美 政英
発達障害とジェンダー	館農 勝
発達障害と遺伝	中川 栄二
当事者や家族のネットワークと支援	田中 尚樹

**11月17日（金）**

外国にルーツを持つ児童の支援	小川 しおり
発達障害と被虐待	山下 浩
重度心身障害児・者への医療と支援	小沢 浩
強度行動障害	會田 千重

**講師名簿**

岡田 俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井 礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
魚野 翔太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
中川 栄二	国立精神・神経医療研究センター病院特命副院長／外来部長

宇佐美 政英 国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科診療科長  
国立国際医療研究センター国府台病院子どもこころ総合診療センター  
センター長

館野 勝 特定医療法人さっぽろ悠心の郷ときわ病院理事長  
田中 尚樹 青森県立保健大学健康科学部社会福祉学科講師  
小川 しおり 日本福祉大学 教育・心理学部准教授  
山下 浩 医療法人慶仁会天神病院非常勤医師  
小沢 浩 島田療育センターはちおうじ所長  
會田 千重 肥前精神医療センター療育指導科長

《令和4年度 PTSD 対策専門研修》

令和4年11月25日、令和4年度PTSD対策専門研修 A.通常コース2を実施し、「災害被災者、犯罪・事故被害者、災害遺族、被虐待児童等、トラウマに対するこころのケアが必要な方に対応できる人材を確保するため、精神保健医療従事者等に対しトラウマに対するこころのケアにおいて必要な知識を系統的に習得する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方443名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

11月25日（金）

トラウマの基本対応	西 大輔
トラウマの概念とPTSD診断	金 吉晴
PTSD治療	井野 敬子
子どものトラウマ	小平 かやの

**講師名簿**

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
西 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所公共精神健康医療研究部部長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長

小平 かやの 東京都児童相談センター治療指導課課長

### 《災害時 PFA と心理対応研修》

令和 4 年 12 月 1, 第 10 回災害時 PFA と心理対応研修を実施し、「「サイコロジカル・ファーストエイド（心理的応急処置：PFA）」に関する基本技能を習得する。また悲嘆、子どもの反応について理解し、不安軽減のためのスキルを習得する。」を主題に、自然災害、甚大事故、犯罪、テロ等のトラウマ的出来事に際して、実際に被災者、被害者へのこころのケア対応にあたる可能性のある、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、臨床心理技術者、行政職員、教育関係者等 63 名に対して研修を行った。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、研修期間を 2 日間から 1 日に変更した。研修は演習を実施せず概論のみとなり、リカバリースキル研修は行われなかった。

課程主任 金 吉晴 課程副主任 大沼 麻実

#### 12月1日（木）

災害時のこころのケア・総論	金 吉晴
PFA 概論（1）	大沼 麻実
PFA 概論（2）・リラクゼーション実習	大沼 麻実・大滝 涼子
災害時の子どものトラウマと反応	福地 成

#### 講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部部長
大沼 麻実	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部研究員
大滝 涼子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部客員研究員
福地 成	東北医科大学精神科学教室病院准教授

**《令和4年度 PTSD 対策専門研修》**

令和4年12月15日から12月16日、令和4年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース1を実施し、「精神保健福祉センター、病院、保健所等において、PTSDに関する専門家が必要とされていることを踏まえ、精神保健医療従事者等に対し、最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ、有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、症例呈示のため、職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士）。過去に PTSD 研修 A.通常コースまたはその治療法に関する何らかの研修を受講していること、あるいは専門的な教育、研修を受けている方 217名に対して研修を行った。新型コロナウィルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

**12月15日（木）**

PTSD の診断と評価	大江 美佐里
トラウマ後の急性期対応と長期対応～新潟県中越地震と 東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	塩入 俊樹
PTSD の神経科学と薬物療法	堀 弘明
複雑性 PTSD	丹羽 まどか・金 吉晴

**12月16日（金）**

PTSD の心理療法各論 1	伊藤 正哉・井野 敬子・金 吉晴
PTSD の心理療法各論 2	井野 敬子・伊藤 正哉・金 吉晴
PTSD のソーシャルワーク	大岡 由佳
複雑性悲嘆の心理療法	中島 聰美

**講師名簿**

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽 まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員
伊藤 正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部長

大江 美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
塩入 俊樹	岐阜大学教授
大岡 由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
中島 聰美	武蔵野大学人間科学部教授

**《発達障害者支援研修》**

令和5年1月18日から1月19日まで、第3回発達障害者支援研修：行政実務研修を実施し、「自治体における発達障害者支援体制の整備およびかかりつけ医研修」を主題に、行政的な立場で各自治体の「かかりつけ医等発達障害対応力向上研修」の企画・実施に携わる者、もしくは発達障害者支援センター職員31名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 岡田 俊 課程副主任 石井 礼花・魚野 翔太

**1月18日（水）**

発達障害児・者に対する行政施策	加藤 永歳
発達障害者の就労・生活自立・余暇活動の支援	宇野 洋太
司法領域における連携と地域定着援助	熊上 崇
発達障害児へのトラウマインフォームドケア	亀岡 智美

**1月19日（木）**

乳幼児健診における早期発見と療育、家族支援	吉川 徹
特別支援教育と関係機関の連携	笹森 洋樹
医療における課題－初診待機解消、初期診療医の育成、医療連携	本田 秀夫
発達障害の啓発と権利擁護、地域連携構築	山根 和史

**講師名簿**

岡田 俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部部長
石井 礼花	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
魚野 翔太	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的・発達障害研究部室長
加藤 永歳	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害対策専門官
宇野 洋太	よこはま発達クリニック副院長
熊上 崇	和光大学現代人間学部心理教育学科教授
亀岡 智美	兵庫県こころのケアセンター副センター長
吉川 徹	愛知県医療療育総合センター中央病院子どものこころ科部長
本田 秀夫	信州大学医学部子どものこころの発達医学教室教授 信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部長
笹森 洋樹	国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員 国立特別支援教育総合研究所発達障害教育推進センターセンター長
山根 和史	厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部障害福祉課障害児・発達障害者支援室 発達障害施策調整官

《令和4年度 PTSD 対策専門研修》

令和5年1月19日から20日、令和4年度 PTSD 対策専門研修 B.専門コース2を実施し、「精神保健福祉センター、病院、保健所等において、PTSDに関する専門家が必要とされていることを踏まえ、精神保健医療従事者等に対し、最先端の専門的知識あるいは技術の習得をさせ、有効かつ安全に治療を行うことができる人材を養成する。受講者名簿を自治体に送付し、今後の災害、犯罪等におけるトラウマ支援のネットワークを形成する。」を主題に、症例呈示のため、職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士）。過去に PTSD 研修 A.通常コースまたはその治療法に関する何らかの研修を受講していること、あるいは専門的な教育、研修を受けている方 170 名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

1月19日（木）

PTSD の診断と評価	大江 美佐里
トラウマ後の急性期対応と長期対応～新潟県中越地震と	塩入 俊樹
東日本大震災のこころのケア活動の経験から～	
PTSD の神経科学と薬物療法	堀 弘明
PTSD のソーシャルワーク	大岡 由佳

1月20日（金）

PTSD の心理療法各論 1	伊藤 正哉・井野 敬子・金 吉晴
PTSD の心理療法各論 2	井野 敬子・伊藤 正哉・金 吉晴
複雑性 PTSD	丹羽 まどか・金 吉晴
複雑性悲嘆の心理療法	中島 聰美

**講師名簿**

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長
堀 弘明	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
井野 敬子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部室長
丹羽 まどか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部研究員
伊藤 正哉	国立精神・神経医療研究センター認知行動療法センター研究開発部長

大江 美佐里	久留米大学医学部神経精神医学講座准教授
塩入 俊樹	岐阜大学教授
大岡 由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
中島 聰美	武蔵野大学人間科学部教授

### 《精神科救急医療体制整備研修》

令和5年2月4日、第2回精神科救急医療体制整備研修を実施し、「精神科救急医療体制整備事業の現状と課題について理解したうえで、精神科救急医療体制整備に関連する課題やデータの見方、ReMHRADの見方と使い方等を学び、各自治体の精神科救急医療体制整備に係る施策の立案やモニタリングのためのスキルを習得する」を主題に、都道府県精神科救急医療体制整備事業担当者および精神医療相談窓口相談担当者35名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 藤井 千代

### 2月4日（土）

精神科救急医療体制整備事業について	戸部 美起
精神科救急医療の現状と課題	杉山 直也
「精神科救急医療体制整備に係るワーキンググループ」について	来住 由樹
「精神障害にも対応した地域包括ケアシステム」について	藤井 千代
各自治体の精神科救急医療体制に関するデータの見方と使い方	平田 豊明
各自治体の精神科救急医療体制整備事業の現状と課題等に関する	
	グループワーク 塚本 哲司

### 講師名簿

藤井 千代 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所地域精神保健・法制度研究部  
部長

戸部 美起 厚生労働省 社会・援護局障害保健福祉部 精神・障害保健課課長補佐  
杉山 直也 公益財団法人復康会沼津中央病院院長  
来住 由樹 岡山県精神科医療センター院長  
平田 豊明 千葉県精神科医療センター名誉病院長  
塚本 哲司 埼玉県立精神医療センター療養援助部部長

《令和4年度 PTSD 対策専門研修》

令和5年2月16日から2月17日まで、令和4年度 PTSD 対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コースを実施し、「犯罪・性犯罪被害者への適切な対応を行うために必要な専門的知識と心理社会的支援・治療対応について習得する。」を主題に、精神保健医療福祉業務に従事する医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士の資格を有する方、または公的機関や教育機関に勤務し、精神保健医療福祉業務に従事する方 347名に対して研修を行った。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

2月16日（木）

犯罪被害者のメンタルヘルスと治療・対応	中島 聰美
子どもの性暴力被害者のメンタルヘルス・治療・対応	野坂 祐子
犯罪被害者遺族の心理・ケア・治療	白井 明美
犯罪被害者支援	大岡 由佳

2月17日（金）

犯罪被害者に係る司法制度	柑本 美和
虐待を受けた子どもの治療	小平 雅基
性暴力被害者への治療	齋藤 梓
犯罪被害者支援と司法	小西 聖子

**講師名簿**

中島 聰美	武蔵野大学人間科学部教授
野坂 祐子	大阪大学大学院人間科学研究科教授
白井 明美	国際医療福祉大学赤坂心理・医療福祉マネジメント学部心理学科教授
大岡 由佳	武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科准教授
柑本 美和	東海大学法学部法律学科教授
小平 雅基	愛育クリニック小児精神保健科部長
齋藤 梓	目白大学心理カウンセリング学科准教授
小西 聖子	武蔵野大学人間科学部教授

### 《STAIR Narrative Therapy ワークショップ》

令和5年2月10日、17日、3月3日、10日、17日の5日間、STAIR Narrative Therapy ワークショップを実施し、精神保健医療福祉業務に従事する医師、公認心理師、臨床心理士、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士の資格を有する方で、PTSDの臨床経験、及び基本的な認知行動療法の教育または研修を受けている方50名に対して研修を行った。研修はオンラインで開催した。

課程主任 金 吉晴

#### <1日目>

イントロダクション

STAIR-NTの論理的根拠とエビデンス

セッション1: 感情という資源— クライアントに治療を紹介（イントロ）する。

セッション2: 感情という資源— 感情の認識（emotional awareness）

セッション3: 感情の調節：身体に焦点を当てる

#### <2日目>

セッション4: 感情の調節・思考と行動に焦点を当てる。

セッション5: 感情的な生き方。

セッション6: 人間関係のパターンを理解する。

#### <3日目>

セッション7: 人間関係のパターンを変える—自己主張・自己表現に焦点を当てる。

セッション8: 人間関係のパターンを変える—パワーのマネジメントと、敬意の維持

セッション9: 人間関係のパターンを変える—親密度の向上

#### <4日目>

セッション10: サマリーと、セルフコンパッション（自分への慈しみ）

セッション11: ナラティブ・セラピーの紹介

セッション12: 最初のナラティブ

セッション13-17: 恐怖、恥、怒り、喪失感のナラティブ

#### <5日目>

セッション13-17: トラウマに基づいたナラティブの見直し

一般的な、ナラティブ・セラピーの考え方

ナラティブ・セラピーにおける一般的ないくつかの問題点

セッション18: 最後のセッション

STAIR-NTの治療原則のレビュー

トラウマの療法士のためのセルフケア

講師名簿

金 吉晴

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所所長

Marylene Cloitre

National Center for PTSD／Stanford University School of Medicine

Christie Jackson

STAIR Institute President

### 《強迫症対策医療研修 認知行動療法コース》

令和5年3月28日、第1回強迫症対策医療研修 認知行動療法コースを実施し、「OCDのCBTを理解し、実際に患者に同療法を提供できる技能を習得する。」を主題に、症例呈示のため職業上守秘義務を持っている精神保健医療従事者（医師、看護師、保健師、精神保健福祉士、社会福祉士、作業療法士、公認心理師、臨床心理士）で、「令和4年度厚生労働省認知行動療法研修事業における[CP22-8-1]強迫症に係る認知行動療法研修」または日本不安症学会等での厚生労働省プログラムをベースとした強迫症の基礎研修の受講修了者、20名に対して研修を行った。

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、オンライン開催に変更した。

課程主任 金 吉晴

### 3月28日（火）

模擬カンファレンス・症例呈示・講義Ⅰ	松永 寿人・吉田 賀一・亀井 士郎
非典型例 OCD の治療	飯倉 康郎
OCD の多様性と ERP の適応について	中川 彰子
模擬カンファレンス・症例呈示・講義Ⅱ	芝田 寿美男・中尾 智博・村山 桂太郎 豊見山 泰史・松尾 陽

### 講師名簿

松永 寿人	兵庫医科大学医学部精神科神経科学講座主任教授
吉田 賀一	兵庫医科大学病院臨床心理部課長
亀井 士郎	京都大学大学院医学研究科精神医学教室客員研究員
飯倉 康郎	宗仁会 筑後吉井こころホスピタル診療部長
中川 彰子	千葉大学大学院医学研究院認知行動生理学特任教授
芝田 寿美男	福岡赤十字病院精神科部長
中尾 智博	九州大学大学院医学研究院精神病態医学教授
村山 桂太郎	九州大学病院精神科神経科助教
豊見山 泰史	九州大学病院精神科神経科助教
松尾 陽	九州大学大学院医学研究院精神病態医学

## 研修の推移

国立精神衛生研究所			
	36年6月～	54年度～	61年度
研修課程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学科研修</li> <li>・心理学科研修</li> <li>・社会福祉学科研修</li> <li>・精神衛生指導科研修</li> </ul>	<p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神衛生指導課程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神衛生指導課程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul>

国立精神・神経センター精神保健研究所					
	61年度	62年度～	18年度～	20年度	21年度
研修課程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神衛生指導課程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul>	<p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医学課程研修</li> <li>・心理学課程研修</li> <li>・社会福祉学課程研修</li> <li>・精神保健指導過程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> </ul> <p>→</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ACT研修</li> <li>・薬物依存臨床課程研修</li> <li>・児童思春期精神医学研修</li> <li>・司法精神医学課程研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神保健指導過程研修</li> <li>・精神科デイ・ケア課程研修</li> <li>・発達障害支援課程研修</li> <li>・摂食障害治療課程研修</li> <li>・社会復帰リハビリテーション研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・薬物依存臨床課程研修</li> <li>・児童思春期精神医学研修</li> <li>・司法精神医学課程研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・地域自殺対策支援研修</li> <li>・心理職等自殺対策研修</li> <li>・自殺対策相談支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・社会復帰リハビリテーション研修</li> <li>・薬物依存臨床看護研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・PTSD精神療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・ACT研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・地域自殺対策支援研修</li> <li>・心理職等自殺対策研修</li> <li>・自殺対策相談支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・社会復帰リハビリテーション研修</li> <li>・薬物依存臨床看護研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・PTSD精神療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・アウトーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> </ul>

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
	22年度	23年度	24年度
研修課程	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・PTSD医療研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・アウトーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・ACT研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
研修課程	25年度	26年度	27年度
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修</li> <li>・訪問による生活訓練研修</li> <li>・ACT研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・精神障害者に対する医療機関と連携した就労支援研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・精神科医療評価・均てん化研修</li> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修</li> <li>・ACT・多職種アウトリーチ研修</li> <li>・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・司法精神医学ワンドイセミナー</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・自殺総合対策企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・アウトリーチによる地域ケアマネジメント(福祉型)研修</li> <li>・医療における包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・司法精神医学ワンドイセミナー</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・心理職自殺予防研修</li> <li>・メンタルヘルス問題への初期対応指導者研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・薬物依存症に対する認知行動療法研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・精神科急性期医療の質を考える研修</li> <li>・精神科医療従事者自殺予防研修</li> <li>・犯罪被害者メンタルケア研修</li> </ul>

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研修課程	28年度	29年度	30年度
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害早期総合支援研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・地域自殺対策推進企画研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・多職種による包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害精神医療研修</li> <li>・自殺対策・相談支援研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害地域包括支援研修: 早期支援</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・地域精神科モデル医療研修プレセミナー</li> <li>・多職種による包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・自殺対策・相談支援研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・司法精神医学研修</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修: 早期支援</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・精神障害者地域包括支援研修</li> <li>・多職種による包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・地域におけるリスクアセスメント研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療</li> <li>・摂食障害看護研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>
	31・令和1年度	令和2年度	令和3年度
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修: 早期支援</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・多職種による包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・地域におけるリスクアセスメント研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修: 精神保健・精神医療</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・発達障害者支援研修: 指導者養成研修</li> <li>・発達障害者支援研修: 行政実務研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・発達障害者支援研修: 指導者養成研修</li> <li>・発達障害者支援研修: 行政実務研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> <li>・精神科救急医療体制整備研修</li> <li>・令和3年度PTSD対策専門研修</li> </ul>

### III 研修実績

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研修課程	31・令和1年度	令和2年度	令和3年度
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・精神保健指導課程研修</li> <li>・発達障害支援医学研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修:早期支援</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・多職種による包括型アウトリーチ研修</li> <li>・医療における個別就労支援研修</li> <li>・地域におけるリスクアセスメント研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・発達障害地域包括支援研修:精神保健・精神医療</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・発達障害者支援研修:指導者養成研修</li> <li>・発達障害者支援研修:行政実務研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・発達障害者支援研修:指導者養成研修</li> <li>・発達障害者支援研修:行政実務研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> <li>・精神科救急医療体制整備研修</li> <li>・令和3年度PTSD対策専門研修</li> </ul>

国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所			
研修課程	令和4年度		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達障害者支援研修:指導者養成研修</li> <li>・医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレント・トレーニング実施者養成研修</li> <li>・強迫症対策医療研修基本コース</li> <li>・災害時PFAと心理対応研修</li> <li>・摂食障害治療研修 ～初心者が知っておくべき外来治療～</li> <li>・統合失調症の標準治療研修</li> <li>・PTSD持続エクスポージャー療法研修</li> <li>・うつ病の標準治療研修</li> <li>・薬物依存臨床医師研修</li> <li>・薬物依存臨床看護等研修</li> <li>・摂食障害治療研修</li> <li>・認知行動療法の手法を活用した薬物依存症に対する集団療法研修</li> <li>・発達障害者支援研修:行政実務研修</li> <li>・精神科救急医療体制整備研修</li> <li>・令和4年度PTSD対策専門研修</li> <li>・STAIR Narrative Therapyワークショップ</li> <li>・強迫症対策医療研修認知行動療法コース</li> </ul>		

## 令和4年度精神保健に関する技術研修課程 実施計画表

研修日程	課程名	申込み方法		申込み期間 (センター書類必着日)	受講料	会場	定員	主任
		WEB	自治体推薦					副主任
令和4年 6月29日(水)～6月30日(木)	【オンライン開催】 (第3回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅠ		○	4月8日(金)～4月28日(木)	無料	オンライン	50	岡田 俊 石井 礼花 魚野 翔太
7月5日(火)	【オンライン開催】 (第1回)医療機関における注意欠如・多動症(ADHD)児の親へのペアレン特レーニング実施者養成研修	○※		4月15日(金)～5月6日(金)	¥10,000	オンライン	30	岡田 俊 石井 礼花
7月15日(金)	【オンライン開催】 (第1回)強迫症対策医療研修 基本コース	○		4月28日(木)～5月19日(木)	¥6,000	オンライン	100	金 吉晴
7月21日(木)	【オンライン開催】 (第9回)災害時PFAと心理対応研修	○※		4月28日(木)～5月20日(金)	¥6,000	オンライン	80	金 吉晴 大沼 麻実
オンデマンド配信 8/5(金)～8/27(土) ライブ配信:8/28(日)	【オンライン開催】 (第4回)摂食障害治療研修 ～初心者が知つておくべき外来治療～	○		5月26日(木)～6月15日(水)	¥3,000	オンライン	300	関口 敦
8月28日(日)	【オンライン開催】 (第1回)統合失調症の標準治療研修	○		6月17日(金)～7月7日(木)	¥7,000	オンライン	48	橋本 亮太
(前期) 9月1日(木)～9月2日(金) (後期) 9月29日(木)～9月30日(金)	【オンライン開催】 (第3回)PTSD持続エクスポージャー療法研修	○		6月21日(火)～7月11日(月)	¥60,000	オンライン	20	金 吉晴
9月4日(日)	【オンライン開催】 (第1回)うつ病の標準治療研修	○		6月24日(金)～7月14日(木)	¥7,000	オンライン	48	橋本 亮太
8月31日(水)～9月2日(金)	【オンライン開催】 (第35回)薬物依存臨床医師研修  (第23回)薬物依存臨床看護等研修	○		6月17日(金)～7月8日(金)	¥24,000	オンライン	50	松本 俊彦 嶋根 阜也
9月28日(水)～9月29日(木)	【オンライン開催】 (第3回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅡ		○	7月5日(火)～7月25日(月)	無料	オンライン	50	岡田 俊 石井 礼花 魚野 翔太
10月5日(水)～10月7日(金)	【オンライン開催】 (第19回)摂食障害治療研修	○※		7月26日(火)～8月15日(月)	¥15,000	オンライン	100	関口 敦
10月25日(火)	【オンライン開催】 令和4年度PTSD対策専門研修 A.通常コース1	○※		9月5日(月)～9月27日(水)	無料	オンライン	200	金 吉晴
オンライン開催 11月8日(火)～11月9日(水)	【オンライン開催】 (第14回)認知行動療法の手法を活用した 薬物依存症に対する集団療法研修	○		8月26日(金)～9月16日(金)	¥24,000	オンライン	60	松本 俊彦 今村 扶美
オンデマンド配信 11/11(金)～12/3(土) ライブ配信:12/4(日)	【オンライン開催】 (第5回)摂食障害治療研修 ～初心者が知つておくべき外来治療～	○		9月1日(木)～9月21日(水)	¥3,000	オンライン	300	関口 敦
11月16日(水)～11月17日(木)	(第3回)発達障害者支援研修: 指導者養成研修パートⅢ		○	8月23日(火)～9月12日(月)	無料	オンライン	50	岡田 俊 石井 礼花 魚野 翔太
11月25日(金)	令和4年度PTSD対策専門研修 A.通常コース2	○※		9月5日(月)～10月26日(水)	無料	オンライン	200	金 吉晴
12月1日(木)	【オンライン開催】 (第10回)災害時PFAと心理対応研修	○※		9月9日(金)～9月30日(金)	¥6,000	オンライン	80	金 吉晴 大沼 麻実
12月15日(木)～12月16日(金)	【オンライン開催】 令和4年度PTSD対策専門研修 B.専門コース1	○※		9月5日(月)～11月17日(水)	無料	オンライン	150	金 吉晴

### III 研修実績

研修日程	課程名	申込み方法		申込み期間 (センター書類必着日)	受講料	会場	定員	主任
		WEB	自治体推薦					副主任
令和5年 1月18日(水)～1月19日(木)	【オンライン開催】 (第3回)発達障害者支援研修: 行政実務研修	○		10月25日(火)～11月14日(月)	無料	オンライン	67組	岡田俊 石井礼花 魚野翔太
1月19日(木)～1月20日(金)	【オンライン開催】 令和4年度PTSD対策専門研修 B.専門コース2	○※		9月5日(月)～12月16日(金)	無料	オンライン	150	金吉晴
2月4日(土)	【オンライン開催】 (第2回)精神科救急医療体制整備研修	○		11月22日(火)～12月12日(月)	無料	オンライン	60	藤井千代
2月16日(木)～2月17日(金)	【オンライン開催】 令和4年度PTSD対策専門研修 C.犯罪・性犯罪被害者コース	○※		9月5日(月)～1月13日(金)	無料	オンライン	300	金吉晴
2月10日、17日、 3月3日、10日、17日	【オンライン開催】 STAIR Narrative Therapy ワークショップ	○		12月3日(日)～12月18日(日)	¥80,000	オンライン	50	金吉晴
3月28日(火)	【オンライン開催】 (第1回)強迫症対策医療研修 認知行動療法コース	○		2月1日(水)～2月20日(月)	¥20,000	オンライン	20	金吉晴

※  
推薦状  
が必要  
な研修

## IV. ランチョンセミナー開催実績および 研究報告会プログラム・抄録集

### 1. 令和4年度 精神保健研究所 ランチョンセミナー開催実績

日付	回次	演題	発表研究部	演者	参加人数
2022年4月25日	第49回	リアルワールドの精神医療の問題を解決するための研究とは？	精神疾病病態研究部	部長 橋本 亮太	63名
2022年5月23日	第50回	PTSDの理解と治療：心理仮説と分子記憶	行動医学研究部	金 吉晴 (精神保健研究所所長)	68名
2022年6月27日	第51回	神経発達障害仮説に基づく統合失調症モデルラットの行動学的特徴	精神薬理研究部	室長 古家 宏樹	38名
2022年7月25日	第52回	精神保健医療福祉分野の政策研究：評価指標とデータ活用	公共精神健康医療研究部	室長 眞田 謙太郎	53名
2022年9月26日	第53回	統合失調症の治療法開発の動向：クロザピンを超えて	児童・予防精神医学研究部	部長 住吉 太幹	64名
2022年10月24日	第54回	時間認知の生理学的背景と精神疾患病態との関連性	睡眠・覚醒障害研究部	室長 吉池 卓也	51名
2022年11月28日	第55回	思春期若者コミュニティにおけるメンタルヘルスリテラシー向上のための研究	地域精神保健・法制度研究部	研究員 小塩 靖崇	49名
2023年1月23日	第56回	大麻規制をめぐる最近の話題	薬物依存研究部	部長 松本 俊彦	72名
2023年2月27日	第57回	自閉スペクトラム症の社会認知機能	知的・発達障害研究部	室長 魚野 翔太	55名

(毎月第4月曜日 12:00～13:00 オンライン開催)

令和4年度 精神保健研究所リサーチ委員会  
岡田 俊 魚野翔太 小川眞太朗 小塩靖崇 三浦健一郎

## 2. 令和4年度 精神保健研究所 研究報告会 プログラム・抄録集

### 令和4年度 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 研究報告会

会期：令和5年3月20日（月）

会場：オンライン開催

9:15	開場
9:30	開会の辞（理事長 中込和幸） ご挨拶（所長 金 吉晴）
9:40	睡眠・覚醒障害研究部（座長 栗山健一） 演者 長尾賢太郎 演者 吉池卓也
10:10	知的・発達障害研究部（座長 岡田俊） 演者 林 小百合 演者 魚野翔太
10:40	休憩
10:50	地域精神保健・法制度研究部（座長 藤井千代） 演者 佐藤さやか 演者 川口敬之
11:20	行動医学研究部（座長 金 吉晴） 演者 篠 亮子 演者 丹羽まどか
11:50	昼食
12:50	薬物依存研究部（座長 松本俊彦） 演者 堤 史織 演者 富山健一
13:20	公共精神健康医療研究部（座長 西 大輔） 演者 片岡真由美 演者 三宅美智
13:50	休憩
14:00	精神疾患病態研究部（座長 橋本亮太） 演者 松本純弥 演者 長谷川尚美
14:30	精神薬理研究部（座長 山田光彦） 演者 三輪秀樹 演者 上條諭志
15:00	児童・予防精神医学研究部（座長 住吉太幹） 演者 Andrew Stickley 演者 山田理沙
15:30	閉会の辞（所長 金 吉晴）
15:40	

令和4年度 精神保健研究所リサーチ委員会  
岡田俊 魚野翔太 小川眞太朗 小塙靖崇 三浦健一郎

## お知らせとお願い

### 〈発表者の皆様へ〉

#### 1. 発表時間

発表時間は 1 演題につき 14 分（発表 10 分、質疑応答 4 分）です。発表者の交替を含め 1 演題 15 分の時間を確保してありますので、時間を厳守して下さい。

#### 2. 発表形式

Zoom の画面共有で発表してください。

#### 3. 通信状況の確認

当日の通信状況や Zoom 操作に不安がある場合には、事前に試写等の機会を設けますので、次のアドレスへご依頼ください。（tokada@ncnp.go.jp）

#### 4. お願い

当日は、少なくともひとつ前の回に行われている発表から参加してお待ちください。発表時間はタイマーを掲示しますので、それを参考に発表時間を遵守してください。

### 〈座長へのお願い〉

1. 座長は各部長にお願いします。タイトなスケジュールですので、発表時間を厳守して進行をお願いします。
2. 次の座長と発表者は、ひとつ前の回に行われている発表までには参加してお待ちください。

### 〈すべての参加者の皆様へ〉

1. セッションの参加に当たっては【事前登録】が必要です。QR コード（または以下の URL）より登録してください。下記の URL はデスクネットツにも掲載しています。リサーチ委員会（tokada@ncnp.go.jp）までメールをいただければ、下記の URL をお送りすることも可能です。  
<https://us06web.zoom.us/meeting/register/tZMrceirrz4qGtP7yFVrFlCIEUDOActPpQfA>
2. すべてのセッションにご参加いただいた先生には、若手発表奨励賞の投票をいただきます。投票方法は当日にご案内を申し上げます。
3. 各部長は、若手奨励賞とともに青申賞の投票をお願い申し上げます。投票方法につきましては別途ご案内を差し上げます。



## プログラム

【開会】 9:30 ~ 9:40

開会の辞 国立精神・神経医療研究センター 理事長 中込和幸

ご挨拶 精神保健研究所 所長 金 吉晴

---

【報告1】 9:40 ~ 10:10 睡眠・覚醒障害研究部 座長 栗山 健一

\*COVID-19パンデミック下における健康不安と感染予防行動の関連

○長尾賢太朗, 吉池卓也, 松井健太郎, 河村葵, 大久保亮, 金吉晴, 三山健司, 中込和幸,  
栗山健一

死別に対する悲嘆反応の遷延における共感性の役割

○吉池卓也, 守口善也, 浅野敬子, 矢島智貴, 金吉晴, 中島聰美, 栗山健一

---

【報告2】 10:10 ~ 10:40 知的・発達障害研究部 座長 岡田 俊

\*社会的報酬は注意欠如・多動症の成人における実行機能を改善するか

○林小百合, 江頭優佳, 魚野翔太, 高田美希, 請園正敏, 岡田俊

注意欠如・多動症のある成人において他者の視線方向への反射的な注意シフトが生じるか

○魚野翔太, 江頭優佳, 林小百合, 高田美希, 請園正敏, 岡田俊

(休憩) —————

---

【報告3】 10:50 ~ 11:20 地域精神保健・法制度研究部 座長 藤井 千代

自治体によるアウトリーチ支援 所沢市における未治療ケースへの支援実態を中心に

○佐藤さやか, 岩永麻衣, 山口創生, 中西清晃, 西内絵里沙, 下平美智代, 曹由寛, 紗井香,  
藤井千代

\*災害関連調査を通じた当事者主導型研究のプロトコル作成および記録—DIARYプロジェクトの  
実践に基づく検討—

○川口敬之, 山田悠平, 相良真央, 山口創生, 小池純子, 塩澤拓亮, 岩永麻衣, 五十嵐百花,  
紗井香, 安間尚徳, 山田裕貴, 佐藤さやか, 藤井千代

【報告4】 11:20 ~ 11:50 行動医学研究部

座長 金 吉晴

\*Hypothalamic-pituitary-adrenal axis and renin-angiotensin-aldosterone system in adulthood PTSD and childhood maltreatment history

○筧亮子, 堀弘明, 吉田冬子, 伊藤真利子, 林明美, 丹羽まどか, 成田恵, 井野敬子, 今井理紗, 篠山大明, 加茂登志子, 功刀浩, 金吉晴

\*児童期虐待に関連した複雑性PTSDに対するSTAIR Narrative Therapyの前後比較試験の成果

○丹羽まどか, 加藤知子, 大滝涼子, 大友理恵子, 須賀楓介, 菅原まゆみ, 成田瑞, 堀弘明, 加茂登志子, 金吉晴

---

(昼食)

---

【報告5】 12:50 ~ 13:20 薬物依存研究部

座長 松本 俊彦

\*薬物犯罪による保護観察対象者の地域支援からの脱落：保護観察から地域精神保健的支援への架け橋「Voice Bridges Project」

○堤史織, 宇佐美貴士, 高野歩, 熊倉陽介, 金澤由佳, 松本俊彦

新規合成オピオイドによる薬物依存性の解析

○富山健一, 船田正彦, 松本俊彦

---

【報告6】 13:20 ~ 13:50 公共精神健康医療研究部

座長 西 大輔

\*Association between COVID-19 infection and severe psychological distress in Japanese population: A Cross-Sectional Study

○Mayumi Kataoka, Megumi Hazumi, Kentaro Usuda, Emi Okazaki, Zui Narita, Takahiro Tabuchi, Daisuke Nishi

\*トラウマインフォームドケアの行動制限最小化に対する有効性の検討

○三宅美智, 白田健太郎, 羽澄恵, 川島貴大, 立森久照, 西大輔

---

(休憩)

---

【報告7】 14:00 ~ 14:30 精神疾患病態研究部

座長 橋本 亮太

4大精神疾患の大脳構造の類似度の解析：大脳皮質厚と大脳皮質表面積の多施設共同疾患横断解析

- 松本純弥, 福永雅喜, 三浦健一郎, 根本清貴, 岡田直大, 橋本直樹, 森田健太郎, 越山太輔, 大井一高, 高橋努, 肥田道彦, 山森英長, 藤本美智子, 安田由華, 伊藤颯姫, 山崎龍一, 長谷川尚美, 成田尚, 横山仁史, 三嶋亮, 宮田淳, 小林祐子, 笹林大樹, 原田健一郎, 山本真江里, 平野羊嗣, 板橋貴史, 中瀧理仁, 橋本龍一郎, タキンキン, 小池進介, 松原敏郎, 岡田剛, 吉村玲児, 阿部修, 鬼塚俊明, 渡邊嘉之, 松尾幸治, 山末英典, 岡本泰昌, 鈴木道雄, 尾崎紀夫, 笠井清登, 橋本亮太

\*統合失調症とうつ病の治療に対するEGUIDEプロジェクトの効果

- 長谷川尚美, 安田由華, 古郡規雄, 市橋香代, 小高文聰, 堀輝, 飯田仁志, 村岡寛之, 高江洲義和, 三浦健一郎, 松本純弥, 稲田健, 渡邊衡一郎, 橋本亮太

【報告8】 14:30 ~ 15:00 精神薬理研究部

座長 山田 光彦

*ZBTB18/RP58 ハプロ不全による知的障害モデルマウスはシナプス機能不全を伴う認知機能障害を示す*

- 三輪秀樹, 平井清華, 新保裕子, 中島啓介, 近藤真啓, 田中智子, 丸山千秋, 平井志伸, 岡戸晴生

\*マウス発達期小脳プルキンエ細胞の活動抑制による自閉症スペクトラム障害様表現型の探索

- 上條諭志, 山田光彦, 三輪秀樹

【報告9】 15:00 ~ 15:30

児童・予防精神医学研究部

座長 住吉 太幹

\*Perceived discrimination and mental health in the Japanese general population

- Andrew Stickley, Aya Shirama, Tomiki Sumiyoshi

\*統合失調症の精神病症状に対するセロトニン1A受容体部分作動薬の増強療法に関するメタ解析

- 山田理沙, 和田歩, Andrew Stickley, 横井優磨, 住吉太幹

【閉会】 15:30~ 15:40

閉会の辞

精神保健研究所

所長 金 吉晴

◇<凡例> \* 若手奨励賞選考対象演題 ○ 発表者

## 抄 錄

睡眠・覚醒障害研究部

## COVID-19 パンデミック下における 健康不安と感染予防行動の関連

○長尾賢太朗<sup>1,2</sup>, 吉池卓也<sup>1</sup>, 松井健太郎<sup>2</sup>, 河村葵<sup>1</sup>, 大久保亮<sup>2</sup>,  
金吉晴<sup>3</sup>, 三山健司<sup>2</sup>, 中込和幸<sup>2</sup>, 栗山健一<sup>1</sup>,

NCNP-COVID-19 観察研究グループ

1) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所睡眠・覚醒障害研究部, 2) 国立精神・神経医療研究センター病院, 3) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部

【目的】致死率、感染力ともに高く、多様な後遺症が報告されている新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の世界的流行により、広く身体健康的への不安が増大している。個人が実践可能な感染予防策の有効性が明らかになった現況下では、健康不安は感染予防行動の促進因子となることが予想されるが、両者の関係性は明らかにされていない。

【方法】当倫理委員会の承認を得て 2021 年 2 月に実施した「国立精神・神経医療研究センター職員における新型コロナウイルス感染症の実態と要因に関する観察研究」の調査データを解析した。当センター職員の健康不安、感染予防行動、濃厚接触の有無、精神機能障害、睡眠障害、年齢、性別、喫煙・飲酒習慣等を自記式質問紙により調査した。健康不安の評価には、疾患罹患への不安、および罹患後の不良な転帰への不安の 2 つの下位尺度から構成される Short Health Anxiety Inventory を用い、感染予防行動を、三密（密集、密接、密閉）回避、対人距離確保、マスク着用、手洗い・手指消毒の日常的な遵守性により評価した。健康不安と感染予防行動の関連を、一般化線形モデルを用いて検討した。

【結果】全職員のうち 657 名 (45.7%) が本研究に参加し、未回答項目のない 560 例を解析対象とした。参加者の約 1 割 ( $n=51, 9.1\%$ ) に重度の健康不安が認められ、約 3 分の 2 に中等度 ( $n=192, 34.3\%$ ) もしくは重度 ( $n=211, 37.7\%$ ) の精神機能障害、約 3 分の 1 に睡眠障害 ( $n=211, 37.7\%$ ) が認められた。多変量解析の結果、罹患後の不良な転帰への不安が増すほど感染予防行動が損なわれた（調整オッズ比 = 0.993, 95%信頼区間: 0.989, 0.998,  $p = 0.003$ ）。他方で、疾患罹患への不安（調整オッズ比 = 1.000, 95%信頼区間: 0.999, 1.002,  $p = 0.534$ ）、精神機能障害（調整オッズ比 = 1.000, 95%信頼区間: 0.998, 1.002,  $p = 0.802$ ）、睡眠障害（調整オッズ比 = 1.000, 95%信頼区間: 0.987, 1.004,  $p = 0.800$ ）はいずれも予防行動と有意に関連しなかった。

【考察】本結果は、重篤な疾患への罹患がもたらす不良な転帰に対する不安が増すと、適切な予防行動がむしろ損なわれることを示唆する。COVID-19 等の致死的転帰をとりうるパンデミック下において、健康不安は感染拡大リスクを予測する重要な精神健康指標であるとともに、健康不安のケアが感染拡大防止に重要な役割を担うことが示唆された。

## 睡眠・覚醒障害研究部

## 死別に対する悲嘆反応の遷延における共感性の役割

○吉池卓也<sup>1</sup>, 守口善也<sup>1</sup>, 浅野敬子<sup>2</sup>, 矢島智貴<sup>1</sup>, 金吉晴<sup>3</sup>, 中島聰美<sup>2</sup>,  
栗山健一<sup>1</sup>

1) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 睡眠・覚醒障害研究部, 2) 武藏野大学人間学部人間科学科, 3) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所行動医学研究部

**【背景】**親子、パートナー、グループメンバー等の個体間において形成・維持される愛着や絆はヒトを含む哺乳類の社会行動の最たる特徴であり、生涯にわたり個体の適応に著しい影響を及ぼす。死別は社会的絆の破綻を意味し、長期にわたり遺族に心理学的、精神医学的影響をもたらしうる。死別に対する悲嘆反応は抑うつ反応とは異なる神経基盤を有すると推測されるが、その認知構造や背景生理機構は明らかにされていない。他者の感情や認知の状態を理解する社会行動を表す共感性は、愛着や絆の形成・維持に密接にかかわることから、遷延性悲嘆症の病態生理において重要な役割を担うことが示唆される。

**【方法】**近親者との死別から1年以上経過した成人を対象とし、磁気共鳴画像撮像中に故人、存命家族、もしくは他人の顔写真を認知閾値下で提示し、その後に呈示した他者の痛みを表す画像に意識下で関連づけ、共感性指標として痛み強度の評定を求めた。痛み強度および関連脳活動と、質問票を用いて測定した日常生活における悲嘆重症度の関連を検討した。

**【結果】**痛み強度に対する悲嘆重症度と顔条件の交互作用が認められ ( $F=4.11, p=0.022$ )、悲嘆重症度が強いほど、故人の想起刺激と関連づけられた痛み刺激に対してのみ共感性が促進された。他方で悲嘆重症度は、故人ではなく存命家族もしくは他人に関連づけられた痛み刺激に対する脳活動と負の相関を示し、悲嘆重症度が強いほど、内側前頭皮質（例：前帯状皮質、補足運動野）における脳活動が低下した ( $T>4.13$ 、多重比較補正  $p<0.021$ )。これらは外傷後ストレス症状、うつ症状と独立した関連であった。また、痛み評定と関連脳活動のいずれでも、存命家族と他人の2条件間で中等度以上の相関が認められた ( $r>.58, p<0.001$ )。

**【考察】**本結果は、死別後の悲嘆反応と共感性の制御基盤の密接な関連を示唆する。遺族において悲嘆症状が共感行動に及ぼす影響は先行する社会的な手がかり刺激の種類により異なり、故人と社会的背景が類似した存命家族への共感行動は、故人よりもむしろ他人への共感行動に類似していた。さらに、悲嘆症状が強く残存するほど、存命家族や他人に関連した手がかり刺激が共感回路による行動調節を強く妨げることで、遺族の生活再建において社会的絆の形成・維持障害をもたらすことが示唆された。

知的・発達障害研究部

## 社会的報酬は注意欠如・多動症の成人における 実行機能を改善するか

○林小百合，江頭優佳，魚野翔太，高田美希，請園正敏，岡田俊

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的・発達障害研究部

**【背景】** 注意欠如・多動症（以下 ADHD）の児童に対する行動療法において賞賛を適切に与えることが望ましい行動を増やしたり、ADHD 症状を改善するうえで有用であることが明らかにされてきたが、ADHD 成人における有効性は確認されていない。本研究では、成人 ADHD における笑顔フィードバックが実行機能課題の成績に影響を及ぼすか検討した。

**【方法】** 対象は 18 歳以上の ADHD 診断を有する 39 名（以下 ADHD 群）、ADHD 群と年齢・性別・知能をマッチングした定型発達者 39 名（以下定型群）であった。笑顔フィードバック確率の異なる 3 条件（なし：正誤に関わらず笑顔フィードバックなし/確実：正答には必ず笑顔をフィードバックする/不確実：87.5% の確率で正答に笑顔、12.5% の確率で無表情をフィードバックする）下で、実行機能課題（go/no-go 課題）を実施した。課題成績（no-go 正答率）を算出し、群（ADHD 群・定型群）×フィードバック条件（なし・確実・不確実）を要因とする 2 元配置分散分析により、その効果を検討した。

**【結果】** 群 ( $F_{(1, 76)} = 11.1, p = .001$ ) の主効果があり、ADHD 群の課題成績は定型群よりも低かった。フィードバック効果の主効果 ( $F_{(1, 9, 143.4)} = 4.1, p = .02$ ) も有意であり、確実・不確実条件はなし条件より課題成績が高かった。群とフィードバック条件の交互作用は有意でなかったが ( $F_{(1, 9, 143.4)} = 1.3, p = .26$ )、各群でのフィードバック効果の確認のため、両群にてフィードバック条件を要因とする 1 元配置分散分析を追加で実施した。定型群では、フィードバックの主効果を確認したが ( $F_{(2, 76)} = 6.2, p = .003$ )、ADHD 群ではフィードバックの主効果は有意でなかった ( $F_{(2, 76)} = 0.66, p = .52$ )。また、ADHD 群を対象に ADHD 特性の高さと笑顔フィードバックの効果を相関分析により探索的に検討したところ、不注意特性の高い ADHD 者ほど不確実条件の課題成績が低い傾向が見られた ( $r = 0.31, p = .06$ )。

**【考察】** 成人 ADHD における笑顔フィードバック効果を支持する明瞭な結果は得られなかつた。また、特に不注意特性の高い場合には、不確実なフィードバックが成績を下げる可能性が示された。これは社会的報酬の有効性を示す小児期の ADHD を対象とした先行研究とは異なる結果である。社会的報酬と実行機能のインタラクションを担う神経基盤は 20 代前半頃まで発達し続けることが知られており、神経学的な発達が小児期との違いをもたらした可能性がある。また、成人期には社会的な報酬の有無に依らず、課題成績を保つ戦略（自発的な動機付けなど）を獲得できている可能性も考えられた。これらは発達に伴う笑顔フィードバック効果の変化や、ADHD のサブグループによる効果の違いを示唆する結果であり、脳機能を含めた検討が求められる。

## 知的・発達障害研究部

注意欠如・多動症のある成人において  
他者の視線方向への反射的な注意シフトが生じるか

○魚野翔太, 江頭優佳, 林小百合, 高田美希, 請園正敏, 岡田俊

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 知的・発達障害研究部

**【目的】** 注意欠如・多動症（ADHD）は発達に不適切なレベルの不注意や多動性、衝動性を持つ神経発達症である。ADHD のある子どもは、仲間からの拒絶など精神病症状のリスクとなる社会的な困難さを示し、心の理論や表情認識の障害もみられることから、社会的情報の処理に困難さを持つことが示唆される。しかし、診断基準に注意の問題が含まれるにも関わらず、社会認知機能の発達に重要な役割を果たす共同注意や視線追従といった機能に障害があるかについてのエビデンスは少ない。本研究では、ADHD のある成人が定型発達者と同様に他者の視線の方向に反射的に注意を向けるかについて検討した。

**【方法】** 参加者：ADHD 群 45 名（男性 9 名、年齢 :  $32.3 \pm 8.6$ 、FSIQ :  $107.8 \pm 10.0$ ）と年齢・性別・知能指数をマッチした定型発達(TD)群 45 名（男性 11 名、年齢 :  $29.8 \pm 11.1$ 、FSIQ :  $108.5 \pm 9.6$ ）が実験に参加した。自閉スペクトラム症、知的障害のある参加者は除外した。刺激：視線が直視から左右いずれかに変化する中性表情、視線とともに表情が中性から恐怖、幸福、もしくは怒りに変化する情動表情を手がかり刺激として使用した。

デザイン：視線方向とターゲット位置の一致性（一致・不一致）、表情（中性・恐怖・幸福・怒り）を参加者内要因、群（ADHD・TD）を参加者間要因とする混合要因計画であった。

手続き：注視点（600ms）、直視の中性表情（300ms）、中性もしくは情動表情の手がかり刺激を呈示した（132ms）。視線が左右を向いてから、83ms 後に左右いずれかにターゲット刺激（T）を呈示した。参加者は手がかり刺激を注視しながらターゲットが出たらできるだけ早くボタンを押すこと、手がかり刺激の向きとターゲットの位置に関係がないことが教示されていた。

**【結果】** 反応時間についての 3 要因分散分析の結果、一致性の主効果( $F[1, 88] = 216.40, p < .001$ )および群と一致性の交互作用( $F[1, 88] = 4.85, p = .03$ )が有意であった。視線手がかりの効果

(不一致と一致条件の反応時間差) は ADHD 群でもみられたが( $F[1, 88] = 95.52, p < .001$ )、TD 群よりも小さかった(ADHD:  $12.8 \text{ ms} \pm 8.8$ ; TD:  $17.3 \text{ ms} \pm 10.6$ )。また、ADHD 群では CAARS の不注意症状が強い人ほど視線手がかりの効果が大きかった(Spearman's  $\rho = .34, p = .02$ )。

**【考察】** ADHD 群では視線手がかりの効果が小さかったが、不注意の症状が強い人ほどその効果が大きかった。視線手がかり効果が生じるまでの処理は、手がかり刺激への注意の維持、視線方向の検出と処理、反射的な注意シフト、視線の情報を抑制しターゲットの検出に分けられる。本研究の結果からは ADHD には視線方向の処理に困難さがあるが、不注意症状が手がかり刺激への注意の維持やその情報の抑制の難しさをもたらした結果、不注意症状の強い人で視線手がかり効果が大きくなった可能性が考えられる。

## 地域精神保健・法制度研究部

## 自治体によるアウトリーチ支援 所沢市における未治療ケースへの支援実態を中心に

○佐藤さやか<sup>1</sup>, 岩永麻衣<sup>1</sup>, 山口創生<sup>1</sup>, 中西清晃<sup>2</sup>, 西内絵里沙<sup>2</sup>, 下平美智代<sup>2</sup>, 曹由寛<sup>2</sup>, 真井香<sup>1</sup>, 藤井千代<sup>1</sup>

1. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部
2. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部所沢市アウトリーチ支援チーム

**【背景】** 地域部では 2018 年 10 月より埼玉県所沢市「精神障害者アウトリーチ支援事業」を受託し、未治療者を含む全市民を対象としたアウトリーム支援を展開している。本発表では地域部が支援に関わる前後の対象者の臨床像や支援の変化（調査 1）および支援開始時に未治療であった者への支援の特徴（調査 2）について報告する。

**【方法】**

**調査 1：**訪問看護ステーションを母体とする前支援チーム（第一期）の 2015 年 10 月から 2018 年 9 月までの対象者と NCNP チーム（第二期）の 2018 年 10 月から 2020 年 3 月までの対象者について、患者属性、治療・支援歴、相談経路、アウトリーチチーム以外の支援リソース、支援開始後のコンタクト状況、支援開始後 12 カ月時点の転帰等について調査を行った。

**調査 2：**2015 年 10 月から 2020 年 3 月に支援を対象とした精神障害者アウトリーチ支援事業の全対象者のうち、電子カルテ上にサービス記録の残っているものが受けた支援内容を後ろ向きに調査し、支援開始時点で未治療であったものとそうでないものでサービスの強度がどのように異なるか回帰分析を実施した。

**【結果】**

**調査 1：**第一期（n=90）と第二期（n=23）の対象者の臨床像を比較すると、第二期のほうが平均年齢が若く、統合失調症よりもうつ病圏、神経症圏の診断をもつ人が多く、生活保護を受給している人が多い傾向であった。また未診断ケースも含まれていた。支援に登録される理由として「生活上の問題に加えて、治療中断」が該当する人が少なかった。支援プロセスでは支援開始後 12 カ月時点での電話による支援よりも訪問や通所による支援が多い傾向があった。12 カ月時点の転帰では、精神科への入院や福祉サービス利用が多い傾向があつた。統計的に有意差のある変数はなかった。

**調査 2：**サービス記録が確認できた 89 人中、37 人（42%）が未治療者であった。未治療群は治療群に比べ、保健所でのサービス提供時間が長く ( $b=0.311$ 、 $p<0.001$ )。日常生活課題支援 ( $b=0.224$ 、 $p<0.001$ )、家族支援 ( $b=0.818$ 、 $p<0.001$ )、精神症状 ( $b=0.270$ 、 $p<0.001$ )、危機 ( $b=1.081$ 、 $p<0.001$ ) についてより強いサービスを受けていた。また家族がサービスの受け手となる傾向が強かった ( $b=0.707$ 、 $p<0.001$ )。サービス開始 12 カ月後に未治療群の少なくとも 11% が入院し、35% が外来患者であった。

**【考察】**

前チームと比べて、NCNP チームによるアウトリーチ支援は多様な疾患や課題をもつ人に提供されており、統合失調症中心だった従来の精神科医療の枠を超えた新たな地域精神保健サービスのひな形となりうる可能性が示唆された。特に未治療のメンタルヘルス不調者は医療制度では対応しづらく、これらの人々に対する支援の特徴が明らかになったことは意義あることと考えられた。

## 地域精神保健・法制度研究部

### 災害関連調査を通じた当事者主導型研究のプロトコル作成 および記録 —DIARY プロジェクトの実践に基づく検討—

○川口敬之<sup>1</sup>, 山田悠平<sup>2</sup>, 相良真央<sup>2,3</sup>, 山口創生<sup>1</sup>, 小池純子<sup>1</sup>, 塩澤拓亮<sup>1</sup>,  
岩永麻衣<sup>1</sup>, 五十嵐百花<sup>1</sup>, 眞井香<sup>1</sup>, 安間尚徳<sup>1</sup>, 山田裕貴<sup>1</sup>, 佐藤さやか<sup>1</sup>,  
藤井千代<sup>1</sup>

1. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 地域精神保健・法制度研究部
2. 一般社団法人精神障害当事者会ポルケ
3. 特定非営利活動法人凸凹ライフデザイン

**【背景】**近年、障害福祉政策や支援サービスに障害当事者や家族の意見を直接的に反映させたいとする機運の高まりから当事者主導型研究が注目されている。当事者主導型研究とは、患者や市民が研究に参加するあり方を示す「患者市民参画（Patient and public involvement: PPI）」における類型の 1 つであり、当事者が研究を行う主体として、研究プロセスのあらゆる段階に影響を及ぼしながら実施する研究を指す。当事者主導型研究の論説は国際的には 2000 年頃から見られるようになった。本邦においても精神障害当事者や家族の団体による調査が行われており、研究者が持ち合わせていない精神保健福祉の利用経験に基づいた豊かな研究知見をもたらす好例もみられる。他方、調査目的に応じた研究計画立案や研究倫理審査における諸課題を抱えており、当事者主導型研究の実施プロセスや共同する研究者の役割の明確化は精神保健福祉の発展のために重要である。本研究の目的は、当事者主導型研究の実践事例となる「DIARY プロジェクト」を記録することにより、当事者主導型研究の実施プロセスおよび研究者の役割を記述的に検討することである。

**【DIARY プロジェクト】**プロジェクトの目標およびテーマは、「精神障害当事者が被災時に抱える困難に対する支援策が提示された災害時精神保健福祉体制に関するガイダンスの開発」である。研究体制はコアメンバー 3 名（精神障害当事者 2 名、研究者 1 名）に、研究者 10 名を加えた 13 名で構成され、概ね週 1 回の研究会議をもとに研究を遂行している。

**【研究計画】**研究期間は 2022 年 4 月～2025 年 3 月である。2022 年度は被災経験のある精神障害当事者へのインタビュー調査、2023 年度は災害時避難生活における精神保健福祉として必要な体制に関するアンケート調査を実施する計画である。

**【実施経過】**2022 年 7 月に熊本県、同年 10 月に福島県において精神障害当事者（23 名）および支援者・行政職員（15 名）を対象としたインタビュー調査を実施した。インタビューテーマは、精神障害当事者が困難を抱えることが想定される内服薬や医療的支援の確保を中心とし、被災時に経験した困難感や防災対策について広く聴取した。インタビューの音声データは逐語録に起こし、質的記述的分析を実施中である。研究者は、研究倫理審査申請書類やインタビューガイド作成、インタビュー実施、分析方法の提案において役割をもちながら、協働的に参加している。

**【展望】**プロジェクトの実践事例をもとに、当事者主導型研究による調査結果と専門家が行った先行研究との相違点や、当事者主導であり続けるための研究者の関与について検討する。

行動医学研究部

## Hypothalamic-pituitary-adrenal axis and renin-angiotensin-aldosterone system in adulthood PTSD and childhood maltreatment history

○ 篠山大明<sup>1)</sup>, 伊藤真利子<sup>1) 3)</sup>, 林明明<sup>1)</sup>, 堀弘明<sup>1)</sup>, 吉田冬子<sup>1) 2)</sup>, 丹羽まどか<sup>1)</sup>, 成田恵<sup>1)</sup>, 井野敬子<sup>1) 4)</sup>, 今井理紗<sup>5)</sup>, 加茂登志子<sup>7)</sup>, 功刀浩<sup>2) 8)</sup>, 金吉晴<sup>1)</sup>

- 1) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 行動医学研究部
- 2) 国立精神・神経医療研究センター神経研究所 疾病研究第三部
- 3) 北海道大学 環境健康科学研究教育センター
- 4) 名古屋市立大学大学院医学研究科 精神・認知・行動医学分野
- 5) りさ木中こころのクリニック
- 6) 信州大学医学部精神医学教室
- 7) 若松町こころとひふのクリニック
- 8) 帝京大学医学部 精神神経科学講座

心的外傷後ストレス障害（PTSD）は、重度のトラウマ性ストレスを契機として発症する疾患であり、ストレス反応システムの変化を伴う可能性が指摘されている。視床下部一下垂体一副腎系（HPA系）は、ストレス応答と恒常性維持に関与していることが知られているが、PTSDに関してはこれまで一貫した結果が得られていない。また、最近の研究結果では、レニンーアンギオテンシンーアルドステロン系（RAA系）と遺伝的要因がトラウマ・PTSD および HPA系調節に関与する可能性が示されている。本研究では、RAA系と候補遺伝子の SNP を同時に調べることで PTSDにおける HPA系機能を詳細に検討すること目的とした。対象者は PTSD女性患者 69名およびトラウマ体験のない健常対照女性 107名であり、自記式質問紙による心理社会的評価と、採血によるホルモン測定および遺伝子解析を行った。PTSD重症度は心的外傷後診断尺度（PDS）、小児虐待歴は幼少期トラウマ質問紙（CTQ）、機能障害は Sheehan 機能障害尺度（SDISS）を用いて評価した。血液中の Cortisol、ACTH、DHEA-S、Renin、Aldosterone濃度を測定し、また FKBP5 rs1360780 および CACNA1C rs1006737 の遺伝子型を決定した。5つのホルモン濃度について患者群と健常群との間に有意な差は見られなかった。一方、患者群の DHEA-S 濃度は PTSD 重症度（PDS 合計得点）（ $p=0.003$ ）および機能障害（SDISS）（ $p=0.008$ ）と有意な負の相関を示した。さらに、rs1006737 A 対立遺伝子をもつ患者は、GG 遺伝子型をもつ患者（ $p=0.002$ ）および A 対立遺伝子をもつ健常対照者（ $p=0.006$ ）よりも有意に低い DHEA-S 濃度を示した。これらの結果から、DHEA-S 低値は PTSD 患者の重症化に関連しうること、またその関連は CACNA1C rs1006737 によって修飾される可能性が示唆された。

## 行動医学研究部

## 児童期虐待に関連した複雑性 PTSD に対する STAIR Narrative Therapy の前後比較試験の成果

○丹羽まどか<sup>1)</sup>, 加藤知子<sup>2)</sup>, 大滝涼子<sup>1)</sup>, 大友理恵子<sup>3)</sup>, 須賀楓介<sup>4)</sup>,  
菅原まゆみ<sup>1)</sup>, 成田瑞<sup>1)</sup>, 堀弘明<sup>1)</sup>, 加茂登志子<sup>5)</sup>, 金吉晴<sup>1)</sup>

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 行動医学研究部,  
2) かとうメンタルクリニック, 3) 黒崎中央医院,  
4) 兵庫県こころのケアセンター, 5) 若松町こころとひふのクリニック

**【背景】**虐待関連の PTSD に対する複数の無作為化比較試験によって、Skills Training in Affective and Interpersonal Regulation (STAIR) Narrative Therapy が、PTSD 症状に加えて感情調整と対人関係の問題の改善に有効であることが報告されている。しかしながら、ICD-11 の複雑性 PTSD を対象とした検証や欧米以外の文化圏での検証は行われていない。本研究は、日本の臨床現場において、ICD-11 の複雑性 PTSD に対する治療の実施可能性、安全性、潜在的有効性を検討することを目的とした。

**【方法】**18 歳以前に身体的／性的虐待を経験し、ICD-11 に基づいて複雑性 PTSD と診断された成人女性患者を対象として、STAIR Narrative Therapy の前後比較試験を実施した。10 名（21–54 歳）が登録され、国立精神・神経医療研究センターまたは共同研究機関にて治療を受けた。治療はマニュアルに基づきながらも、個々の患者のニーズに合わせた柔軟な適用を許容し、マニュアル遵守度やセッション数、修正内容等を記録した。主要評価項目は、国際トラウマ面接 (ITI) で評価された治療後および治療終了 3 か月後の複雑性 PTSD 診断と重症度であった。副次評価項目として、うつ、不安、解離などの精神症状、感情調整や対人関係の問題、生活の質、否定的認知を治療前、中間、治療後、治療終了 3 ヶ月後に評価した。

**【結果】**治療完遂者 7 名のうち、6 名は治療終了時に複雑性 PTSD の診断を満たさなくなり、治療終了 3 ヶ月後には 7 名全員が複雑性 PTSD の診断を満たさなくなった。複雑性 PTSD の重症度得点は、治療前と比べて治療後および治療終了 3 か月後に有意な改善が認められ、いずれも大きな効果量が示された（治療後  $d = 1.69$ 、3 か月後  $d = 2.14$ ）。同様に、うつ症状をはじめとした様々な評価項目でも治療前後で有意な改善が認められ、これらの改善は 3 ヶ月後も維持された。治療を中断した 3 名（1 名は COVID-19 の影響）のうち、中間評価を受けた 2 名にも複雑性 PTSD 症状の改善が認められた。また重篤な有害事象は発生していない。

**【考察】**本研究の参加者は、長期にわたる持続的虐待を経験し、7 名は 1 つ以上の併存疾患、8 名は重度のうつ症状、6 名は自殺企図歴を有していたが、安全を保ちながら治療を進めることができ、複雑性 PTSD をはじめ、様々な精神症状や機能の改善が認められた。本研究の結果から、STAIR Narrative Therapy は複雑性 PTSD 患者にも適用可能であり、少数例の結果ではあるが、日本でも海外の先行研究と同等の効果が期待できることが示唆された。今後は無作為化比較試験や日本での治療の実装普及に取り組む予定である。

薬物依存研究部

## 薬物犯罪による保護観察対象者の地域支援からの脱落：保護観察から地域精神保健的支援への架け橋「Voice Bridges Project」

○堤 史織，宇佐美 貴士，高野 歩，熊倉 陽介，金澤 由佳，松本 俊彦

**【背景】**物質使用障害における治療・支援の脱落率は非常に高く、脱落者の傾向や脱落の関連因子等は先行研究で示されているが、地域支援の文脈における脱落者研究はない。我々は、保護観察と地域支援をつなぐシステムの構築と共に、地域の精神保健福祉センターからの「おせっかい」な電話によって、保護観察の対象となった薬物依存犯者のコホート調査を行う、「Voice Bridges Project; 「声」の架け橋プロジェクト(以下 VBP)を2017年3月より開始した。本研究では、電話による「ゆるやかな見守り」の地域支援から1年以内に早期脱落し支援が途切れてしまう層を分析し、地域支援を継続的に受けることができない人の特徴と、早期脱落の関連因子を検討した。

**【方法】**2017年3月～2022年9月にVBPへ参加同意した保護観察の対象となる成人した薬物事犯者724名のデータ用いて解析を行った。1年間の追跡完了者と1年以内の早期脱落者の2群に分類し、初回調査時の基本属性、健康状態、薬物関連事項、処遇・処罰関連事項、治療・支援関連事項に関して、カイ二乗検定、T検定にて比較した。次に、脱落の有無をエンドポイントとしたCox回帰分析により、早期脱落の危険因子・保護因子を解析した。

**【結果】**脱落群は、追跡完了群に比べ、女性、最終学歴が中学以下、家族との同居はなく、特に更生保護施設在住の人が多かった。また、物質使用障害以外の精神疾患をもち、過去一年の自殺企図がある傾向にあり、健康満足度が有意に低かった。さらに、脱落群では刑務所服役歴が2回以上あり、執行猶予がつかない仮釈放の人で、保護観察中のアルコールに関する遵守事項が定められている人が多くみられた。Cox回帰分析の結果、女性、家族と同居がないこと、過去一年の自殺企図があることが脱落のリスクを高める因子であった。一方で、過去一年の自殺念慮・企図がないこと、保護観察中のアルコールに関する遵守事項ないこと、全部執行猶予と一部執行猶予がつくことが脱落の保護因子として特定された。

**【結論】**VBPは薬物依存者にとって受動的な支援であり、本研究における脱落者は、そのゆるやかな見守りからをも自ら途絶えてしまう、治療・支援からより脱落しやすい人々である。本研究ではその脱落者の特徴と、脱落に関連する危険因子や保護因子を明らかにした。女性、身寄りがない者、過去一年の自殺企図経験がある者は、脱落のリスクが高く、また、保護観察中のアルコールに関する遵守事項がないことや刑の執行猶予がつくことが脱落の保護因子となることが示唆された。今後継続的な地域支援を考える上で、これらの危険因子に該当する者には特に注意をしてサポートしていく必要があると考えられる。また、本研究結果で得られた保護因子に関しては、薬物依存者の地域支援の文脈で、我が国の薬物事犯に対する執行猶予制度や保護観察制度を検討する上で、貴重な結果が得られたといえる。

## 薬物依存研究部

## 新規合成オピオイドによる薬物依存性の解析

○富山健一, 舟田正彦, 松本俊彦

## 【背景】

強力な鎮痛・鎮静作用があるモルヒネなどのオピエートやモルヒネ様の薬理作用を有するフェンタニルなどの合成化合物(オピオイド)は、医学的な有用性が認められる一方で、乱用による薬物依存の危険性や過剰摂取による死亡事故も発生している。さらに海外では、デザイナーズドラッグ(危険ドラッグ)として、フェンタニル骨格を有する多数の化合物が合成され、乱用されているが、近年従来の合成オピオイドとは構造の異なるニタゼン系化合物が登場し、我が国を含め世界的に流通が拡大しつつある。ニタゼン系化合物は、フェンタニルなどと同様にオピオイド受容体に作用すると考えられるが、その薬理作用や薬物依存性の発現についてはほとんど明らかにされていない。そこで本研究では、ニタゼン系化合物の薬理学的特性および薬物依存性の解析を行った。

## 【方法】

## (1) Isotonitazene の薬理作用

ニタゼン系化合物として最初に流通が確認された isotonitazene を試験薬として使用した。本研究では、 $\mu$ -オピオイド受容体を発現する細胞を作成し、Ca<sup>2+</sup>蛍光指示薬 FLIPR Calcium 4 Assay kit (Molecular Devices, LLC.)による受容体機能の解析を行った。

## (2) 条件付け場所嗜好性試験による isotonitazene の薬物依存性評価

薬物依存形成の評価には、conditioned place preference (CPP) 法を用いた。白黒 2 区画の CPP 装置 (ENS-CPP, Neuroscience 社) を用いて、1 日に午前と午後の合計 2 回条件付けを 4 日間にわたって行った。午前に isotonitazene または生理食塩液(SAL)を投与し、30 分間装置内に閉じ込め、午後(6 時間後)に午前に薬物を経験した動物は SAL を、そうでない動物は薬物を投与し 30 分間装置内に閉じ込めた。テストセッションは、5 日目に薬物および溶媒とともに投与せず、15 分間の白区画および黒区画の滞在時間を測定した。

## (2) マイクロダイアリシス法によるドパミン遊離作用の解析

ドパミンの遊離について、中脳辺縁ドパミン神経系の主要投射先である側坐核 (from bregma: anterior, +15 mm; lateral, -0.9 mm; ventral, -4.9 mm)をターゲットとして、微量生体試料分析システム HTEC 500 (Eicom, Co., Kyoto, Japan)を用いて解析した。

## 【結果】

オピオイド受容体を発現する CHO 細胞を利用して、isotonitazene のオピオイド受容体作用を解析した。その結果 CHO- $\mu$  細胞において isotonitazene の刺激により細胞内 Ca<sup>2+</sup>の有意な増加が確認された。マウスを使用し CPP 法による薬物依存性の評価を行った。Isotonitazene (0.025, 0.05 mg/kg)の条件付けによって、有意な CPP の発現、すなわち報酬効果の発現が認められた。マイクロダイアリシス法を実施したところ isotonitazene (0.05 mg/kg)によって、側坐核内で有意なドパミン量の増加が確認された。

## 【考察】

本研究では、isotonitazene の  $\mu$ -オピオイド受容体に対する薬理作用及び薬物依存形成能について検討した。その結果、isotonitazene は fentanyl や morphine よりも強力なアゴニスト活性を有していることが確認された。さらに isotonitazene は、CPP 法によって薬物依存形成能を有することも明らかとなった。マウスの側坐核内では、ドパミンの有意な上昇が確認され、ドパミン拮抗薬 SCH23390 などによって CPP 発現が抑制されることから、依存形成にはドパミンの関与が示唆された。以上の結果により新規オピオイド化合物 isotonitazene は強力な中枢作用と薬物依存形成能を有することから、その乱用拡大には特に注意を要すると考えられる。

Department of Public Mental Health Research

## Association between COVID-19 infection and severe psychological distress in Japanese population: A Cross-Sectional Study

○Mayumi Kataoka<sup>1)</sup>, Megumi Hazumi<sup>1,2)</sup>, Kentaro Usuda<sup>1)</sup>, Emi Okazaki<sup>1)</sup>, Zui Narita<sup>3)</sup>, Takahiro Tabuchi<sup>4)</sup>, Daisuke Nishi<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Department of Public Mental Health Research, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

<sup>2)</sup>Department of Sleep-Wake Disorder, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

<sup>3)</sup>Department of Behavioral Medicine, National Institute of Mental Health, National Center of Neurology and Psychiatry, Tokyo, Japan

<sup>4)</sup>Cancer Control Center, Osaka International Cancer Institute, Osaka, Japan

### Objective

Comparing the risk of psychiatric symptoms between individuals infected with COVID-19 and those not infected is important. People infected with COVID-19 had a greater risk of depression and anxiety than those non-infected in the Western country. However, it is unclear whether the result applies to other countries. We aimed to examine whether a COVID-19 infection is associated with severe psychological distress (SPD) in the Japanese population.

### Methods

This study was conducted using panels of an internet research agency in Japan with a web-based self-report questionnaire. 4856 infected and 26282 non-infected were involved. The risk ratio (RR) of the association of COVID-19 infection and SPD as the average treatment effect through Poisson regression analysis with a robust error variance using the stabilized inverse probability weighting of the propensity score. We performed a sensitivity analysis to estimate the E-value to test the robustness of the result. All procedures followed were in accordance with the ethical standards of the responsible committee on human experimentation (institutional and national) and with the Helsinki Declaration. Informed consent was obtained from all patients to be included in the study. The study was approved by the Ethical Board of the National Center of Neurology and Psychiatry in Japan (A2021-34).

### Results

The number of participants who applied for SPD was 448 (9.2%) in the people infected with COVID-19 and 2,212 (7.2%) in the non-infected people. The RR of SPD of the COVID-19-infected people was 0.85 (95% CI: 0.75–0.96,  $P < 0.01$ ). The e-values were 1.63 and 1.91 when the set of RRs were 1.0 and 1.1, respectively.

### Conclusions

We confirmed that in the Japanese population, people infected with COVID-19 had a significantly lower RR of SPD than non-infected people. The result was inconsistent with a previous study conducted in the Western country. While COVID-19 infection affects the mental health of individuals through various mechanisms, including biological aspects, the results of this study likely highlight that we should not underestimate the exposure of non-infected individuals to various stressors. Further research is needed to confirm the association with a representative sample and adjusting for adequate confounders.

公共精神健康医療研究部

## トラウマインフォームドケアの 行動制限最小化に対する有効性の検討

○三宅美智<sup>1)</sup>，臼田健太郎<sup>1)</sup>，羽澄恵<sup>1)</sup>，川島貴大<sup>2)</sup>，  
立森久照<sup>2)</sup>，西大輔<sup>1)</sup>

1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 公共精神健康医療研究部

2) 国立精神・神経医療研究センター病院 臨床研究・教育研修部門 情報管理・解析部

### 1. 背景と目的

トラウマを含む子ども期の逆境体験（ACEs）の頻度は高く、米国では研究参加者の52.1%が18歳以前に1つ以上の、6.2%は4つ以上の逆境体験を経験していることが疫学調査によって明らかになっている。またその影響はその後のメンタルヘルスのみならず身体疾患への影響も指摘されるなど広範かつ長期におよぶことが示されてきた。さらに重症精神疾患（統合失調症を含む精神病性障害等）患者の方が一般住民よりもトラウマ体験の経験率が高いことが指摘されている。ACEsの頻度の高さと影響の大きさが明らかになったこと等から、近年「トラウマインフォームドケア（以下 TIC）」が注目されている。TICはPTSDに特化した治療ではなく、トラウマ体験の影響を理解し、当事者がトラウマを体験したことが明らかではなくともその可能性を念頭に置き、それを踏まえた対応を通常の医療やサービスの中に組み込んでいくことである。アメリカでは、精神保健施設における隔離・身体拘束の最小化を目的とした戦略を示した「Six Core Strategies」が開発されている。その基礎理論の1つにTICが含まれており、先行研究では隔離・身体拘束施行数や時間の減少との関連が示されている。そこで本研究では、非ランダム化比較試験によって、TICの動画研修の行動制限最小化に対する効果を検討することとした。

### 2. 方法

データ収集システム（RESCOPE）を使用している精神科医療機関に研究参加を依頼し、同意が得られた11の医療機関をTIC研修を希望する群と希望しない群に分けた。2021年11月～2022年1月の3ヶ月を介入群における介入期間とし、2019年4月～2022年4月に研究参加機関に入院した患者を対象に、入院患者の処遇状況に関するデータを収集した。収集したデータは、施設属性として、病棟数、病床数、病棟入院料、看護職・看護補助者の配置数、患者属性として、主診断、性別、年齢、入院形態、隔離・拘束時間であった。介入前の2020年4月～2021年10月ベースライン期、介入期間終了後2022年2月～4月の3ヶ月をフォローアップ期とした。主要アウトカムは、在院患者延べ日数に対する隔離、身体拘束時間割合とし、差分の差分法（DID）を行った。なお、本調査は当該倫理委員会の承認を経て行った。

### 3. 結果

参加医療機関は、介入群（6施設33病棟）と対照群（5施設27病棟）に分類された。解析結果の詳細については、当日報告する予定である。

## 精神疾患病態研究部

## 4 大精神疾患の大脳構造の類似度の解析： 大脳皮質厚と大脳皮質表面積の多施設共同疾患横断解析

松本純弥<sup>1</sup>, 福永雅喜<sup>2</sup>, 三浦健一郎<sup>1</sup>, 根本清貴<sup>3</sup>, 岡田直大<sup>4,5</sup>, 橋本直樹<sup>6</sup>, 森田健太郎<sup>7</sup>, 越山太輔<sup>4</sup>, 大井一高<sup>8,9</sup>, 高橋努<sup>10,11</sup>, 肥田道彦<sup>12</sup>, 山森英長<sup>1,13,14</sup>, 藤本美智子<sup>1,13</sup>, 安田由華<sup>1,15</sup>, 伊藤颯姫<sup>1</sup>, 山崎龍一<sup>1</sup>, 長谷川尚美<sup>1</sup>, 成田尚<sup>6</sup>, 横山仁史<sup>16</sup>, 三嶋亮<sup>17</sup>, 宮田淳<sup>17</sup>, 小林祐子<sup>17</sup>, 笹林大樹<sup>10,11</sup>, 原田健一郎<sup>18</sup>, 山本真江里<sup>19</sup>, 平野羊嗣<sup>20,21</sup>, 板橋貴史<sup>22</sup>, 中瀧理仁<sup>23</sup>, 橋本龍一郎<sup>22,24</sup>, タキンキン<sup>25</sup>, 小池進介<sup>5,26,27</sup>, 松原敏郎<sup>18</sup>, 岡田剛<sup>16</sup>, 吉村玲児<sup>28</sup>, 阿部修<sup>29</sup>, 鬼塚俊明<sup>30</sup>, 渡邊嘉之<sup>31</sup>, 松尾幸治<sup>32</sup>, 山末英典<sup>33</sup>, 岡本泰昌<sup>16</sup>, 鈴木道雄<sup>10,11</sup>, 尾崎紀夫<sup>19</sup>, 笠井清登<sup>4,5,26</sup>, 橋本亮太<sup>1,13</sup>

<sup>1</sup> 国立精神・神経医療研究センター・精神保健研究所・精神疾患病態研究部, <sup>2</sup> 生理学研究所システム脳科学研究領域心理生理学研究部門, <sup>3</sup> 筑波大学医学医療系精神医学, <sup>4</sup> 東京大学大学院医学系研究科精神医学分野, <sup>5</sup> 東京大学国際高等研究所ニューロインテリジェンス国際研究機構,

<sup>6</sup> 北海道大学大学院医学研究院精神医学教室, <sup>7</sup> 東京大学医学部附属病院リハビリテーション部, <sup>8</sup> 岐阜大学医学部附属病院精神科, <sup>9</sup> 金沢医科大学総合内科, <sup>10</sup> 富山大学学術研究部医学系神経精神医学講座, <sup>11</sup> 富山大学研究推進機構アイトリビング脳科学研究センター, <sup>12</sup> 日本医科大学医学部大学院精神・行動医学分野, <sup>13</sup> 大阪大学大学院医学系研究科精神医学教室, <sup>14</sup> 地域医療機能推進機構大阪病院, <sup>15</sup> 医療法人フォスター, <sup>16</sup> 広島大学大学院医系科学研究科精神神経医科学, <sup>17</sup> 京都大学大学院医学研究科精神医学教室, <sup>18</sup> 山口大学大学院医学系研究科高次脳機能病態学講座, <sup>19</sup> 名古屋大学大学院医学系研究科精神医学・親と子どもの心療学分野, <sup>20</sup> 九州大学大学院医学研究院精神病態医学, <sup>21</sup> 東京大学生産技術研究所, <sup>22</sup> 昭和大学発達障害医療研究所, <sup>23</sup> 徳島大学病院精神科神経科, <sup>24</sup> 首都大学東京人文科学研究科言語科学教室, <sup>25</sup> 北海道大学大学院医理工学グローバルセンター, <sup>26</sup> 東京大学心の多様性と適応の連携研究機構, <sup>27</sup> 東京大学大学院総合文化研究科進化認知科学研究センター, <sup>28</sup> 産業医科大学医学部精神医学, <sup>29</sup> 東京大学大学院医学系研究科生体物理医学専攻放射線医学講座, <sup>30</sup> 九州大学大学院医学研究院神経画像解析学講座, <sup>31</sup> 滋賀医科大学放射線医学講座, <sup>32</sup> 埼玉医科大学医学部精神医学, <sup>33</sup> 浜松医科大学精神医学講座

主要な精神疾患である統合失調症(SZ), 双極性障害(BD), うつ病(MDD), 自閉スペクトラム症(ASD)における大脳皮質構造異常は疾患別には多くの報告があるが統一した手法でこれら4大精神疾患の疾患横断解析がなされた研究はなかった。我々は昨年度に認知ゲノム共同研究機構(COCORO)によるSZ 1426名, BD 230名, MDD 570名, ASD 206名, 健常 3068名の合計5500名による症例対照研究を進め SZ で皮質の厚と表面積の全般的な菲薄化と減少, BD で 68 領域中 34 領域での厚の菲薄化, MDD での 30 領域の厚の菲薄化と 11 領域の面積減少を見出した。今回我々はこれら疾患別領域別結果の類似度を定量的に解析した。

T1 強調 MRI 画像の FreeSurfer 解析で施設及び撮像プロトコル別に 68 の皮質領域の厚と表面積の平均値の群間差の効果量を年齢及び性別を共変量として算出してメタ解析した結果得られた 68 の効果量を 68 次元のベクトルとした。その内積の大きさを -1 から 1 に調整するコサイン類似度を測定した。これは 1 であればベクトルは同じ向きで各脳領域のパターンが同じであることを示し 0 であればベクトルが直行して全く類似せず -1 の場合はパターンが真逆と判断される。

大脳皮質厚のパターンは SZ, BD, MDD でコサイン類似度が 0.922~0.960 と類似していた。しかし ASD はどの疾患群との組み合わせもコサイン類似度が -0.002~0.005 で類似しなかつた。大脳皮質表面積のパターンは SZ, MDD, ASD でコサイン類似度が 0.811~0.945 と類似していたが BD はどの疾患群との組み合わせもコサイン類似度が -0.098~0.005 で類似しなかつた。単一研究での大脳皮質構造の 4 大精神疾患の類似度の定量化は今回の COCORO の取り組みが初めてでありコサイン類似度によって大脳皮質厚/表面積の類似度の定量的解析に成功した。皮質厚は SZ, BD, MDD の 3 疾患で、表面積は SZ, MDD, ASD の 3 疾患でパターンが類似していた。ところが大脳白質の 4 大精神疾患 COCORO 横断研究(Koshiyama, et al, Mol Psychiatry, 2019)では MDD 以外の SZ, BD, ASD の 3 疾患で白質微細構造異常が強く今回の大脳灰白質とはまた異なるパターンであった。また SZ の効果サイズが最も大きいことは皮質の菲薄化、表面積減少、白質微細構造異常の何れでも 4 大精神疾患の中で共通しており SZ は灰白質と白質の何れでも最も大きな障害を持ち脳病態が最も重い可能性が示唆された。BD, MDD, ASD では皮質厚、皮質表面積、白質のそれぞれで効果量の大きさの順序が異なり、この 3 疾患の脳病態は皮質厚、皮質表面積、白質に其々異なる効果を及ぼすことが示唆された。

## 精神疾患病態研究部

## 統合失調症とうつ病の治療に対する EGUIDE プロジェクトの効果

○長谷川 尚美<sup>1)</sup>、安田 由華<sup>1)2)</sup>、古郡 規雄<sup>3)</sup>、市橋 香代<sup>4)</sup>、小高 文聰<sup>5)</sup>、  
堀 輝<sup>6)</sup>、飯田 仁志<sup>6)</sup>、村岡 寛之<sup>7)</sup>、高江洲 義和<sup>8)</sup>、三浦 健一郎<sup>1)</sup>、  
松本 純弥<sup>1)</sup>、稻田 健<sup>7)</sup>、渡邊 衡一郎<sup>9)</sup>、橋本 亮太<sup>1)</sup>

1) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 精神疾患病態研究部、2) 医療法人フォスター、3) 獨協医科大学 精神神経医学講座、4) 東京大学医学部附属病院精神神経科、5) 東京慈恵会医科大学精神医学講座、6) 福岡大学医学部精神医学教室、7) 北里大学医学部精神科学、8) 琉球大学大学院医学研究科精神病態医学講座、9) 杏林大学医学部精神神経科学教室

診療ガイドラインは、エビデンスに基づいて作成され、患者と医療者の意思決定に用いられる。しかし、臨床現場において必ずしも採用されておらず、エビデンス・プラクティス・ギャップの存在が指摘されている。このギャップを解消し、診療ガイドラインを社会実装するために、「精神科医療の普及と教育に対するガイドラインの効果に関する研究(EGUIDE プロジェクト)」が 2016 年に開始された。同プロジェクトは、全国の精神科医を対象としたガイドライン講習会を開催し、受講者の治療行動変化を検証している。受講者の治療行動評価は、所属施設入院患者の退院時処方におけるガイドライン推奨治療の実施率とし、これまでに 2016~2018 年に収集したデータにおいて、EGUIDE プロジェクト講習会により抗精神病薬単剤治療をはじめとするガイドライン推奨治療の実施率が向上したことを報告した。今回はその際に課題とされた、患者背景などの交絡因子も考慮し、さらに新たに 2019 年に収集したデータも追加して再検討を行ったので報告する。本研究は国立精神神経医療研究センター倫理委員会にて承認（承認番号 B2022-004）を受けている。

解析対象は 2016~2019 年度に収集した統合失調症患者 7405 名と大うつ病性障害（以下うつ病）患者 3794 名の退院時処方データとした。統合失調症、うつ病それぞれについて、EGUIDE 講習未受講医師が担当した患者と、受講済み医師が担当した患者の退院時処方を比較し、ガイドライン推奨治療の実施率に対する EGUIDE の効果を検討した。統計手法は、ロジスティック回帰分析を用いた。

解析の結果、ガイドライン推奨治療のうち、統合失調症においては抗精神病薬単剤治療率、他の向精神薬を含まない抗精神病薬単剤治療率、抗不安薬・睡眠薬の非処方率が、うつ病においても、他の向精神薬を含まない抗うつ薬単剤治療率、抗不安薬・睡眠薬の非処方率が、EGUIDE 受講者群が EGUIDE 未受講者群より高い実施率であった。

以上より、EGUIDE プロジェクト受講者の方がガイドライン推奨治療の実施率が高く、ガイドラインの講習は、精神科医の治療行動を変化させ、エビデンス・プラクティス・ギャップを解消し、診療ガイドラインの社会実装に貢献できることが示唆された。

精神薬理研究部

## ZBTB18/RP58 ハプロ不全による知的障害モデルマウスは シナプス機能不全を伴う認知機能障害を示す

○三輪秀樹<sup>1,2</sup>, 平井清華<sup>2</sup>, 新保裕子<sup>2</sup>, 中島啓介<sup>2</sup>, 近藤真啓<sup>2</sup>,  
田中智子<sup>2</sup>, 丸山千秋<sup>2</sup>, 平井志伸<sup>2</sup>, 岡戸晴生<sup>2</sup>

1. 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神薬理研究部
2. 東京都医学総合研究所 神経細胞分化プロジェクト

**【背景】**ZBTB18/RP58(OMIM \*608433) は、1q43q44 微小欠失症候群(OMIM #612337)の原因遺伝子の一つであり、そのハプロ不全は知的障害を引き起こすとされている。しかし、これらの病態基盤については不明な点が多い。

**【方法】**ZBTB18/RP58 ヘテロ接合体マウスを作製し、生化学的解析・組織形態学的解析・行動学的解析・電気生理学的解析を用いた包括的な表現型解析により、RP58 の遺伝子異常が引き起こす病態メカニズムの検証を行った。

**【結果】**ZBTB18/RP58 ヘテロ接合体マウスは、生化学的解析:グルタミン酸受容体サブユニットの発現低下、組織形態学的解析:大脑皮質層構造に重大な異常は見られないが脳梁の異形成およびスパイク密度分布の変化、行動学的解析:オープンフィールド試験における過活動、明暗箱試験における明箱滞在時間の減少、ロタロッドにおける運動学習障害、Y字迷路試験での交替行動率の低下、水迷路試験における逆転学習障害など複数の行動異常を示し、電気生理学的解析:NMDA 受容体を介したシナプス応答特性の変化および興奮性シナプス伝達の長期増強の飽和レベルの低下、などを示すことが明らかとなった。

**【考察】**ヘテロ接合体マウスでは、興奮性シナプスの成熟が損なわれ、その結果、シナプス可塑性特性の異常が生じ、それを基盤とした認知機能障害が引き起こされることを示唆された。さらに、脳梁異形成が生じることが明らかにし、ZBTB18/RP58 ハプロ不全を持つ患者や 1q43q44 微小欠失症候群で報告されている脳梁異形成を再現することができた。したがって、本研究成果により、ZBTB18/RP58 ヘテロ接合体マウスは、ZBTB18/RP58 ハプロ不全の新規モデルとして樹立し、病態解明に有用となることを示した。

精神薬理研究部

## マウス発達期小脳プルキンエ細胞の活動抑制による 自閉症スペクトラム障害様表現型の探索

○上條諭志, 山田光彦, 三輪秀樹

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 精神薬理研究部

**【背景】** 自閉症スペクトラム障害（ASD）は有病率が数%に達する社会的なインパクトの大きい疾患であるが、その病態形成メカニズムには不明な点が多い。ASD 患者の剖検データでは小脳プルキンエ細胞密度の減少が一貫して報告されており、周産期に小脳を損傷した群では ASD の発症確率が数十倍にもなることから、ASD の病因の 1つとして小脳機能の異常が注目を集めているが、その神経基盤は不明な点が多い。

**【目的】** 発達期の一過性の小脳活動異常が、将来の個体の行動に永続的な影響を与えるかについて、主に ASD と関連する指標に着目し、行動試験を用いて調べる。

**【方法】** 小脳プルキンエ細胞特異的に組み換え酵素 Cre を発現する L7-Cre マウスと Cre 依存的に抑制性 DREADD (designer receptors exclusively activated by designer drugs)を発現する LSL-hM4Di マウスを交配し、小脳プルキンエ細胞特異的に DREADD を発現する仔マウスとその同腹コントロール仔マウスを得た。生後 11-15 日の 5 日間、マイクロピペットを用いて clozapine N-oxide (CNO; 5mg/kg)を一日一回経口投与し、プルキンエ細胞の活動を抑制した。その後は 8 週齢まで通常飼育し、行動実験バッテリーおよび組織解析を行った。

**【結果】** マウスの社会性を定量的に評価できる 3 チャンバー試験において、オスのみで Social preference index の低下が見られた。常同行動のモデルと考えられているグルーミング試験では、オス・メスマウスとともにグルーミング時間の異常を認めなかった。他の基本的な行動試験には概ね差がなかった。

**【考察】** 発達期のプルキンエ細胞の活動を一過性に障害する操作で、プルキンエ細胞脱落マウスと同様の社会性異常を惹起できることから、この表現型には発達期の小脳活動が関係していることがわかった。一方で、同マウスで見られていた他の ASD 様表現型については再現できず、①活動の抑制期間が短い、②活動抑制後の飼育期間に代償が起きた、③表現型が行動試験中のプルキンエ細胞活動異常に依存している、等の理由が考えられた。また、同じ薬理学的操作により雌雄で異なる表現型を得ていることから、発達期の小脳活動異常に対する脆弱性が脳の性別により異なっており、それが ASD の有病率の男女差の原因である可能性が示唆された。

Department of Preventive Intervention for Psychiatric Disorders

## Perceived discrimination and mental health in the Japanese general population

○Andrew Stickley, Aya Shirama, Tomiki Sumiyoshi

Department of Preventive Intervention for Psychiatric Disorders

**Background:** Research has shown that discrimination is prevalent in many countries and associated with poorer mental health. However, little is known about discrimination and its effects in Japan.

**Aims:** To address this deficit this study examined the association between perceived discrimination and mental health in the Japanese general population and the role of general stress in these associations.

**Method:** Data were analyzed from 1245 individuals (age 18-89) that were collected in an online survey in 2021. Perceived discrimination was assessed with a single-item measure as was lifetime suicidal ideation. Depressive and anxiety symptoms were respectively measured with the Patient Health Questionnaire (PHQ- 9) and Generalized Anxiety Disorder scale (GAD-7). General stress was assessed with the Perceived Stress Scale (PSS-14). Logistic regression was used to assess associations.

**Results:** Perceived discrimination was prevalent (31.7%) in the study sample. In fully adjusted analyses discrimination was associated with all of the mental health outcomes/general stress with odds ratios (ORs) ranging from 2.78 (suicidal ideation) to 6.09 (general stress) among individuals with a high level of discrimination. When the analyses were adjusted for general stress (as a continuous score) there was a large reduction in the ORs although high discrimination continued to be significantly associated with anxiety (OR: 2.21), while a mid level of discrimination was related to depressive symptoms (OR: 1.87) and had a borderline association with suicidal ideation.

**Conclusion:** Perceived discrimination is common in the Japanese general population and associated with worse mental health, with general stress playing an important role in this association.

児童・予防精神医学研究部

## 統合失調症の精神病症状に対するセロトニン 1A 受容体部分作動薬の増強療法に関するメタ解析

○山田理沙<sup>1,2)</sup>, 和田歩<sup>1,2)</sup>, Andrew Stickley<sup>1)</sup>, 横井優磨<sup>3)</sup>, 住吉太幹<sup>1,2)</sup>

- 1) 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・予防精神医学研究部
- 2) 国立精神・神経医療研究センター病院 精神診療部
- 3) 国立精神・神経医療研究センター病院 臨床研究・教育研修部門 教育研修部

**【背景】**統合失調症患者の治療において、既存の抗精神病薬の効果は充分でない場合があり、さらなる治療法の開発が望まれる。こうした中、セロトニン 1A (5-HT1A)受容体部分作動薬 (5-HT1A-PA; buspirone、タンドスピロンなど) による増強療法が、統合失調症の症状を軽減することが示唆されてきた。そこで本研究では、5-HT1A-PA による増強療法が、統合失調症患者の精神病症状を改善するかをメタ解析により検討した。

**【方法】**対象研究の選択基準は、1. ランダム化比較試験、2. 統合失調症または統合失調感情障害患者、3. 精神病症状をアウトカムに使用、4. 効果量評価が可能な情報を有する、5. 査読有の英語論文として公表、6. 4 週間以上の 5-HT1A-PA 投与期間とした。検索は PubMed、Cochrane Library、PsycINFO の 3 つのデータベースを利用し、2022 年 2 月までに公表された文献を対象とした。異質性の確認後、固定効果または変量効果モデルを用いてオッズ比を統合し、95% 信頼区間 (CI) および標準化平均差 (SMD) を算出した。

**【結果】**上記の基準を満たす 7 つの研究 (被験者数合計 435 人) が抽出された。いずれも、buspirone あるいはタンドスピロンが用いられていた。これらの 5-HT1A-PA による増強療法は、精神病症状全般 ( $SMD = -1.13$ , 95% CI =  $-1.98 \sim -0.27$ )、および陽性症状 ( $SMD = -0.72$ , 95% CI =  $-1.31 \sim -0.12$ )

軽減において有意な効果を示した。一方、陰性症状に対する効果は有意ではなかった ( $SMD = -0.93$ , 95% CI =  $-1.90 \sim 0.04$ )。

**【結論】**5-HT1A-PA による増強療法は、特に陽性症状の改善に有効であることが示唆された。以上の知見は、抗精神病薬の効果が限定的、あるいは忍容性が低い患者の治療法の開発を促進すると期待される。

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

令和 4 年度 研究報告会

(第 34 回)

プログラム・抄録集

©発行者 国立研究開発法人 国立精神・神経医療研究センター

本書の内容の一部または全体の複写・引用については事前にご一報下さい。無断での複写・転載を固く禁じます。

©2023, All rights reserved, Printed in Japan

## V. 令和4年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任、代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
公共 精神 健康 医療 研究 部	西 大輔	主担当者	「心のサポーター養成に係る調査・分析業務等一式」	委託事業	厚生労働省
	西 大輔	主任研究者	「良質な精神保健医療福祉の提供体制構築を目指したモニタリング研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	西 大輔	主任研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	羽澄 恵	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「COVID-19感染後の予後に関連する要因の検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	白田謙太郎	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「感染時期による罹患後精神症状の比較検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	片岡真由美	分担研究者	「新型コロナウイルスの罹患後精神症状に関する疫学的検討」内「COVID-19罹患経験の有無による精神症状の比較」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	白田謙太郎	研究分担者	「精神保健医療福祉施設におけるトラウマ(心的外傷)への対応の実態把握と指針開発のための研究」内「精神科医療機関に対するトラウマインフォームドケア研修の効果に関する検討」	厚生労働科学研究費補助金(障害者政策総合研究事業)	厚生労働省
	羽澄 恵	研究代表者	「眠気に伴う精神的苦痛が中枢性過眠症の治療経過に与える影響」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））	日本学術振興会
	羽澄 恵	研究代表者	「睡眠不足の維持増悪に関連する心理的機序の解明」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（若手研究））	日本学術振興会
	三宅 美智	研究代表者	「精神障害者当事者が参加する隔離・拘束を減らすためのプログラムの効果の検証」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	三宅 美智	研究分担者	「BPSD緩和を目的とした生活リズムの調整に着目した看護-介護共同介入モデルの作成」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究C））	日本学術振興会
	堀口 寿広	研究協力者	身体的・精神的・社会的 (biopsychosocial) に乳幼児・学童・思春期の健やかな成長・発達をポピュレーションアプローチで切れ目なく支援するための社会実装化研究	厚生労働科学研究費補助金(成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業)	厚生労働省
薬物 依存 研究 部	松本俊彦	研究開発代表者	物質使用障害を抱える女性に対する治療プログラムの開発と有効性評価に関する研究	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本俊彦	研究開発代表者	薬物使用障害に対する多様な治療法の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査（2022年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	松本俊彦	分担研究者	「アルコール・薬物使用者の行動変容促進アプリと適切なフィードバックAIモデルの開発」内「RCTリクルート、アプリ有用性評価」	文部科学省基盤研究（B）	文部科学省
	松本俊彦	分担研究者	「精神障害と物質使用障害を併せ持つ者の日本版統合治療支援ツールの開発と普及」内「研究全体に対して、依存症治療の立場からの助言」	文部科学省基盤研究（C）	文部科学省
	松本俊彦	研究代表者	S-812217の大うつ病性障害患者を対象とした第2相臨床試験	独立安全性評価委員会委員 咲野義製薬(受-330)	咲野義製薬
	松本俊彦	共同代表	拠点センター（薬物依存症）	厚生労働省依存症対策全国拠点機関設置運営事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究代表者	薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物乱用・依存状況等の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究」内「飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査（2022年）」	厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「大麻を乱用する少年における新たな大麻関連製品、危険ドラッグの乱用実態に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）	厚生労働省

薬物依存研究部	嶋根卓也	研究分担者	「覚醒剤事犯者の理解とサポートに関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「薬物使用と生活に関する全国高校生調査」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	「ダルク等の当事者団体による依存症回復支援の現状と課題に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	近藤あゆみ	分担研究者	「女性薬物依存症者の回復支援に関する研究」	厚生労働省依存症に関する調査研究事業	厚生労働省
	富山健一	研究代表者	神経筋共培養を利用した合成カンナビノイドの有害性予測モデルの開発	文部科学省基盤研究(C)	文部科学省
	富山健一	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「NMDA受容体機能解析のための細胞作成」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	富山健一	研究協力者	「急増する植物成分由来危険ドラッグの迅速な規制に資する研究」内「植物成分由来危険ドラッグの行動薬理特性の検討」	厚生労働行政推進調査事業費補助金(厚生労働科学特別研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「危険ドラッグと関連代謝産物の有害作用評価と乱用実態把握に関する研究」内「新規オピオイド化合物の薬理学的特性並びに薬物依存性の評価」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究協力者	「若年者を対象としたより効果的な薬物乱用予防啓発活動の実施等に関する研究」内「大麻を巡る国際社会の動向：米国及びカナダの規制状況について」	厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
行動医学研究部	金 吉晴	研究代表者	対話型カウンセリングAIの構築に向けたカウンセラーの効果的なコミュニケーションのバターン解析	共同研究	フロンティアリンク株式会社
	金 吉晴	研究代表者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	金 吉晴	研究代表者	トラウマを有する者における自殺行動の予測と予防に向けた認知機能・認知バイアスの検討	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのち支える自殺対策推進センター
	金 吉晴	研究分担者	「電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業」内「コホート研究を用いた研究連携と精神・神経疾患医療からみた疾患横断的予防」	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	実装科学推進基盤構築支援事業	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 JH横断的事業推進費	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	ウェブ持続エクスポートージャー療法の効果検証と普及 コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	金 吉晴	研究分担者	「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「文化的処方の有効性の検証」	共創の場形成支援プログラム(育成型)	科学技術振興機構
	堀 弘明	研究代表者	遺伝子発現プロファイリングによるストレス対処方略の個別最適化	武田科学振興財団医学系研究助成(精神・神経・脳領域)	武田科学振興財団
	堀 弘明	研究代表者	うつ病とPTSDにおける視床下部-下垂体-副腎系と炎症系の概日リズム解析	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	情動記憶における文脈情報喪失の発生機序の解明とこれを防止する心理介入法の開発	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(B)	日本学術振興会
	堀 弘明	研究分担者	トラウマを有する者における自殺行動の予測と予防に向けた認知機能・認知バイアスの検討	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人いのち支える自殺対策推進センター
	堀 弘明	研究分担者	「ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索」内「トランスクリプトーム、DNAメチローム、炎症マーカー解析」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成(精神・神経・脳領域)	武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構 戰略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中富健康科学振興財団研究助成	中富健康科学振興財団

V 令和4年度委託および受託研究課題

行動 医学 研究 部	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業 (全国拠点機関分)	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究分担者	摂食障害を抱える家族のピアサポート研修 プログラムの開発	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究分担者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	経皮的介在迷走神経刺激の簡便で客観的な評価手法の開発	日本医療研究開発機構 『統合医療』に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究分担者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	「ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索」内「CBT効果を予測する脳画像バイオマーカーの検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	小川眞太朗	研究代表者	プラズマコレステロールを新たな軸とした精神疾患の前臨床研究—治療・病態・バイオマーカー	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	小川眞太朗	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発—リン脂質を軸に—	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	PTSDに対するオンライン遠隔認知行動療法の効果検証とオンライン遠隔認知行動療法における診療連携モデルの確立	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)(若手育成枠)	日本医療研究開発機構
	井野敬子	研究代表者	ウェブ持続エクスボーラー療法の効果検証と普及 コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難治性パニック障害の予後予測因子解明と発達特性にマッチした修正型心理療法の開発	文部科学省科学研究費補助金 若手研究	日本学術振興会
	成田瑞	研究代表者	AI機械学習を用いた食行動によるうつ病予防モデルの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置(PFA)e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	上田奈津貴	研究代表者	時間感覚障害に着目した統合失調症の学習デザインの構築	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	上田奈津貴	研究代表者	PTSD患者における概日リズム障害の認知・神経モデルの検討	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性PTSDに対する診断評価尺度の整備と治療法の検証	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	伊藤(丹羽)まどか	研究代表者	複雑性心的外傷後ストレス障害に対する介入法の検証	文部科学省科学研究費補助金 特別研究員奨励費	日本学術振興会
	河西ひとみ	研究代表者	自己臭恐怖の病態と神経基盤の解明：精神症状と消化器症状の相互作用に焦点を当てて	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	河西ひとみ	研究分担者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群に対する認知行動療法のランダム化比較試験と治療効果の神経基盤の解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	船場美佐子	研究代表者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究(C)	日本学術振興会
	菅原彩子	研究代表者	医療機関を受診していない摂食障害患者と家族の支援ニーズの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	中島実穂	研究代表者	児童期トラウマがもたらす心理的影響メカニズムの解明	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
児童 ・ 予 防 精 神 医 学 研 究 部	住吉太幹	研究代表者	経頭蓋直流刺激による統合失調症治療効果のモノアミン神経活動に基づく生体指標の開発	科学研究費助成事業(科学研究費補助金) (基盤研究(B))	日本学術振興会
	住吉太幹	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「各種認知機能障害に関連する生物学的評価指標と新規治療法についての検討」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	分担研究者	「双方向性のニューロモデュレーション機構の解明と臨床応用の基盤整備」内「経頭蓋直流刺激の精神疾患治療における有用性に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	3つの神経伝達系の非侵襲的同時測定法を用いた統合失調症の認知機能障害の解明	科学研究費助成事業(学術研究助成基金) (基盤研究(C))	日本学術振興会

児童・予防精神医学研究部	住吉太幹	研究分担者	事象関連電位と瞳孔経変化から解明する発達障害におけるパニックの神経基盤	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業(学術研究助成基金)(基盤研究(C))	日本学術振興会
	住吉太幹	研究分担者	医療前のライログデータおよび健診結果を活用する予測先制医療のための研究	医療研究連携推進本部横断的研究推進事業費	国立高度専門医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	身体活動低下によるフレイルの包括的病態解明とフレイルバイオマーカー探索および予防医療への展開(JH-Frailty Biomarker Study: JH-FBI Study)	医療研究連携推進本部横断的研究推進事業費	国立高度専門医療研究センター
	住吉太幹	研究分担者	ICT・AIを活用した自閉スペクトラム症(ASD)児の悉皆の早期発見・診断システムと患者レジストリをもとにした「誰一人取り残さない」当事者支援及びオールジャパン体制によるASD研究コンソーシアムの構築	日本医療研究開発機構 医療機器等における先進的研究開発・開発体制強靭化事業	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	COVID-19等による社会変動下に即した応急的遠隔対応型メンタルヘルスケアの基盤システム構築と実用化促進にむけた効果検証	日本医療研究開発機構 長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究分担者	多様なソースから収集するデータの蓄積と利活用のための個人情報の非特定化手法の開発とデータ加工技術の確立並びにデータの質担保に関する研究開発	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業(精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	住吉太幹	研究代表者	大うつ病性障害患者を対象とした中央評価の妥当性に関する予備研究～対面評価と情報通信機器を介入した遠隔評価との一致性の検討～	共同研究	大日本住友製薬株式会社／武田薬品工業株式会社／Meiji Seikaファルマ株式会社／塩野義製薬株式会社／大塚製薬株式会社／ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	超ハイリスク基準群における生体情報評価及びサイトカイン測定による統合失調症の発現予測因子の探索研究	共同研究	ヤンセンファーマ株式会社
	住吉太幹	研究分担者	気分状態の安定した双極性障害患者の認知機能改善に対するLurasidone併用療法(ELICE-BD)の有効性評価のための6週間ランダム化二重盲検プラセボ対照多施設試験	共同研究	British Columbia大学
	住吉太幹	研究分担者	前治療抗精神病薬からブレクスピラゾールの切り替えを実施する統合失調症患者及び統合失調感情障害患者を対象とした服薬継続率に関する多施設共同単群非盲検介入研究	共同研究	大塚製薬株式会社
	松元まどか	研究分担者	「メンタル・ウェルビーイングの客観的生体指標の開発と検証」	JST共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)【共創分野】「全世界対応型遠隔メンタルヘルスケアシステム(KOKOROBO-J)によるメンタルヘルスプラットフォームの開発・社会実装拠点」	国立研究開発法人科学技術振興機構
	松元まどか	研究代表者	「ヒトMEGによる喜びと志の神経回路ダイナミクス」	JSTムーンショット型研究開発事業目標9「2050年までに、こころの安らぎや活力を増大することで、精神的に豊かで躍動的な社会を実現」コア研究「脳指標の個人間比較に基づく福祉と主体性の最大化」	国立研究開発法人科学技術振興機構
	松元まどか	研究代表者	「自己の神経回路基盤とその形成過程の解明」	科学研究費補助金・新学術領域研究(研究領域提案型)(公募研究)マルチスケール精神病状の構成的理解	文部科学省
	松元まどか	研究分担者	「経頭蓋直流刺激による統合失調症治療効果のモノアミン神経活動に基づく生体指標の開発」	科学研究費補助金・基盤研究(B)(一般)	文部科学省
	白間綾	研究代表者	3つの神経伝達系の非侵襲的同時測定法を用いた統合失調症の認知機能障害の解明	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間綾	研究分担者	事象関連電位と瞳孔経変化から解明する発達障害におけるパニックの神経基盤	科学研究費助成事業 基盤研究C	日本学術振興会
	白間綾	研究分担者	経頭蓋直流刺激による統合失調症治療効果のモノアミン神経活動に基づく生体指標の開発	科学研究費助成事業 基盤研究B	日本学術振興会
	末吉一貴	研究代表者	精神疾患における認知的効率が社会機能へ及ぼす影響ならびにその機序の解明	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	末吉一貴	研究分担者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業 基盤研究(C)	日本学術振興会
	長谷川由美	研究代表者	気分障害における認知機能評価バッテリー日本語版の信頼性・妥当性に関する研究	科学研究費助成事業 基盤研究(C)	日本学術振興会

V 令和4年度委託および受託研究課題

精神薬理研究部	山田光彦	主任研究者	バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	分担研究者	「ゲノム編集技術を用いたモデル動物作出による精神神経疾患の病態解明」内「ストレス精神疾患モデル動物の作成と評価」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	山田光彦	研究代表者	経皮的耳介迷走神経刺激の簡便で客観的な評価手法の開発	委託研究開発費（AMED）	日本医療研究開発機構
	山田光彦	研究代表者	統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常ににおけるリゾホスファチジン酸の役割	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討」の内「神経科学的検討、免疫組織学的検討」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	山田光彦	研究分担者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「遺伝子およびタンパク発現の解析」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	統合失調症における注意機能異常の神経基盤	科学研究費助成事業 国際共同研究加速基金	日本学術振興会
	三輪秀樹	研究代表者	トランスレータブル脳指標による精神疾患横断的機能解析	第11回第一三共TaNeDS	第一三共(株)
	三輪秀樹	研究代表者	睡眠による脳機能回復	リバネス研究費ウェルネス・エイジングケア賞	(株)リバネス
	三輪秀樹	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「トランスレータブル脳指標による異なる精神・神経疾患間に共通の病態基盤の解明」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「アディクションの病態・症候・治療に関する包括的研究」内「フェンサイクリジン(PCP)やケタミンなどNMDA受容体拮抗薬の中核作用の解析と薬物依存治療標的の探索」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	三輪秀樹	分担研究者	「統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討」の内「電気生理学的検討」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「脳老化を抑制する転写抑制因子RP58とのメカニズムの解説」内「生理学的解析」	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「電気生理学的解析」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「神経同期活動を軸とした統合失調症の橋渡し研究：病態解明と新規治療法開発にむけて」内「疾患モデル動物基礎研究の遂行」	科学研究費助成事業（基盤研究B）	日本学術振興会
	三輪秀樹	分担研究者	「手術検体を用いた脳腫瘍細胞と正常神経細胞間のてんかん原性回路の解明」内「バッヂクランプ法・Ca imagingを用いた機能的アプローチ」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	古家宏樹	研究代表者	ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「統合失調症のグルタミン酸神経伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割」内「行動薬理学的解析」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	古家宏樹	研究分担者	「恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討」の内「行動薬理学的検討」	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	上條諭志	研究代表者	視床-皮質回路形成における発達期小脳活動の意義解明	研究活動スタート支援	日本学術振興会
	上條諭志	研究代表者	発達期の小脳活動異常によるASD病態形成過程の解明・発達期の小脳活動による「社会脳」の形成	研究助成金	明治安田こころの健康財団
	上條諭志	研究代表者	ASDモデルマウスにおける感覚情報処理機構の多領域カルシウムイメージングを用いた解析	研究助成金	公益財団法人神経研究所
	中武優子	研究代表者	凄惨な場面の目撃による幼少期トラウマがストレス脆弱性に及ぼす影響と脳内基盤の解明	研究活動スタート支援	日本学術振興会
	山田美佐	研究代表者	恐怖記憶の処理過程に対するリルゾールの作用メカニズムの検討	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会

精神 薬理 研究 部	山田美佐	研究分担者	「統合失調症のグルタミン酸神經伝達異常におけるリゾホスファチジン酸の役割」内「生化学的解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会	
	山田美佐	研究分担者	「難治性うつ病に対する新規治療戦略：報酬系・免疫系クロストークから探る疾患制御」内「関連分子変動解析」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会	
	小林桃子	研究代表者	統合失調症関連遺伝子WDR3欠損による認知機能および疾患感受性への影響	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会	
	米本直裕	研究代表者	自殺予防対策の普及と適応に関するプロセス・アウトカム指標の開発	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会	
	米本直裕	研究分担者	国際レジストリ連携(iCRN)の臨床的意義と医療機関における課題に関する研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会	
	國石 洋	研究代表者	社会性を制御する前頭葉-扁桃体シナプスの発達の臨界期とその神経基盤の解明	特別研究員奨励費	日本学術振興会	
	國石 洋	研究分担者	「ヒストン修飾異常がげっ歯類の統合失調症様行動異常を生じるメカニズムの解明」内「動物の作製」	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会	
	國石 洋	研究代表者	幼少期ストレスモデルマウスに対する前頭葉ニューロモジュレーションの改善効果検討	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会	
	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構	
精神 疾患 病態 研究 部	橋本亮太	研究代表者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究の統括発」	脳とこころの研究推進プログラム(精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト)	日本医療研究開発機構	
	橋本亮太	研究代表者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「精神科治療ガイドラインの社会実装検証研究の統括」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構	
	橋本亮太	研究代表者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究 (B)	日本学術振興会	
	橋本亮太	研究分担者	「発達障害に関わる神経生物学的機構の晝長類の基盤の解明」内「発達障害のリスク遺伝子の同定」	科学研究費助成事業 特別推進研究	日本学術振興会	
	橋本亮太	研究分担者	「治療抵抗性統合失調症薬の安全性の検証による望ましい普及と体制構築に向けた研究」内「クロザビンモニタリングシステムの国際比較調査」	厚生労働科学研究費 障害者政策総合研究事業 (精神障害分野)	厚生労働省	
	橋本亮太	研究分担者	「継続的MRIデータに基づく成人期気分障害と関連疾患の神経回路の解明」内「気分障害と統合失調症の疾患連続性に関する脳画像等の総合的解析研究」	戦略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構	
	橋本亮太	研究分担者	「精神疾患レジストリの利活用による治療効果、転帰予測、新たな層別化に関する研究」内「脳神経画像の解析と継続データに基づく、精神疾患の治療効果及び予後にに関する層別化」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構	
	橋本亮太	研究分担者	「COVID-19 感染後の精神症状を有する患者レジストリの構築と病態解明及び新規治療法の開発に資する研究」内「COVID-19精神症状のレジストリにおける脳画像収集システムの構築と解析」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構	
	橋本亮太	研究分担者	「精神疾患の個別化治療を実現するためのゲノム・空間オミクス多施設共同研究」内「解析対象ASD/SCZ家系の選定と臨床情報の収集」	ゲノム医療実現バイオバンク利活用プログラム:B-Cureゲノム医療実現推進プラットフォーム・先端ゲノム研究開発事業	日本医療研究開発機構	
	橋本亮太	分担研究者	「バイオマーカーにもとづく精神疾患治療法の研究開発基盤構築」内「精神病症状に関連する生物学的評価指標の検討と患者層別化研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター	
	橋本亮太	研究代表者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発」	知的財産プロデューサー派遣事業	独立行政法人工業所有権情報・研修館	
三浦健一郎	研究代表者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業 基盤研究 (C)	日本学術振興会		
	研究分担者	「双方向トランスレーショナルアプローチによる精神疾患の脳予測性障害機序に関する研究開発」内「眼球運動の状況予測性解析法の研究開発と疾患横断的理解」	革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト	日本医療研究開発機構		

V 令和4年度委託および受託研究課題

精神疾患研究部	三浦健一郎	研究分担者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「理解度、実践度、治療に関するデータ管理」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「中間表現型とゲノムの特徴量抽出とデータ駆動型解析」	脳とこころの研究推進プログラム（精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト）	日本医療研究開発機構
	三浦健一郎	研究分担者	眼球運動と脳波計測を用いたアスリートの視覚認知能力の評価表の開発	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究（B）	日本学術振興会
	三浦健一郎	研究分担者	クロザピン抵抗性統合失調症のバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	三浦健一郎	分担研究者	「データサイエンスと計算論研究の融合による脳病態研究の推進」内「精神神経疾患の中間表現型情報による分類・層別化の研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	松本純弥	研究分担者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「理解度、実践度、治療に関するデータ収集」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	「iPS細胞技術とデータ科学を融合した精神疾患横断的な双方向トランスレーショナル研究」内「中間表現型情報と生体試料の収集とバイオマーカーの測定」	脳とこころの研究推進プログラム（精神・神経疾患メカニズム解明プロジェクト）	日本医療研究開発機構
	松本純弥	研究分担者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究（B）	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	クロザピン抵抗性統合失調症のバイオマーカーの開発	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	松本純弥	研究分担者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究代表者	精神疾患の処方行動における治療ガイドラインの普及と教育の効果検証	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	多次元脳神経画像とゲノムによる精神疾患の脳病態に基づく新たな診断体系の構築	科学研究費助成事業 基盤研究（B）	日本学術振興会
	長谷川尚美	研究分担者	精神疾患の視覚認知行動異常のシステム神経科学的研究	科学研究費助成事業 基盤研究（C）	日本学術振興会
	安田由華	研究分担者	「精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究」内「精神科診療ガイドラインの講習と医師に対する理解度の検証」	長寿・障害総合研究事業 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）	日本医療研究開発機構
	安田由華	研究分担者	「AI技術を活用した統合失調症の早期診断医療機器プログラムの開発に関する研究」内「統合失調症の早期診断のエビデンスの創出」	医工連携・人工知能実装研究事業	日本医療研究開発機構
睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	主任研究者	睡眠障害・睡眠ポリグラフデータバンク構築研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	栗山健一	研究代表者	適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究開発分担者	オンライン診療を介したリアルワールドデータを活用した「睡眠脳波と問診デジタルデータによるうつ病の検査-問診-診断支援システム」の開発・事業化	日本医療研究開発機構研究費	日本医療研究開発機構
	栗山健一	研究分担者	次期健康づくり運動プラン作成と推進に向けた研究	厚生労働科学研究費補助金（循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）	厚生労働省
	栗山健一	研究代表者	睡眠時間の主観-客観乖離と健康不安が不眠症診断・健康転機に及ぼす影響の包括的検討	科学研究費助成事業（基盤研究C）	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	科学研究費助成事業（基盤研究A）	日本学術振興会

睡眠・覚醒障害研究部	栗山健一	研究分担者	アルツハイマー病の病理と睡眠障害—アミロイドPET・タウPETと睡眠指標との関連	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	栗山健一	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	栗山健一	研究代表者	アルツハイマー型認知症に伴う不規則睡眠覚醒リズム障害 (ISWRD) を対象としたE2006の国際共同第3相試験	受託研究	エーザイ株式会社
	栗山健一	研究代表者	モディオダール錠100mg使用成績調査	受託研究	田辺三菱製薬株式会社
	栗山健一	研究分担者	ガンマ帯域フリッカーバイオレット光曝露による睡眠および認知機能への影響	受託・共同研究	株式会社坪田ラボ
	北村真吾	研究代表者	個人の概日リズム特性の決定に対する出生後環境の寄与	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究開発分担者	ヒトの時計老化年齢を評価する血液バイオマーカーの探索とその応用	日本医療研究開発機構研究費	日本医療研究開発機構
	北村真吾	研究分担者	睡眠の自然免疫機能への寄与解明のための実態調査および発展的介入試験	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	北村真吾	研究分担者	子どもの健康睡眠習慣を考慮したスクリーンタイム／グリーンタイムガイドラインの開発	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	北村真吾	研究代表者	ガンマ帯域フリッカーバイオレット光曝露による睡眠および認知機能への影響	受託・共同研究	株式会社坪田ラボ
	吉池卓也	研究代表者	脳構造の可塑性ダイナミクスと気分障害病態の関連探索	科学研究費助成事業 (若手研究)	日本学術振興会
	吉池卓也	分担研究者	概日可塑性に着目した気分障害病態指標の開発	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	吉池卓也	研究分担者	遷延性悲嘆障害の多層的治療技法の開発と効果検証および生物学的基盤の解明	科学研究費助成事業 (基盤研究B)	日本学術振興会
	吉池卓也	研究分担者	適切な睡眠・休養促進に寄与する「新・健康づくりのための睡眠指針」と連動した行動・習慣改善ツール開発及び環境整備	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
	河村 葵	研究代表者	月経前症候群・月経前不快気分障害の症状再燃と患者家族の感情表出の関連	ロート女性健康科学研究助成	ロート株式会社
	河村 葵	研究分担者	更年期女性の不眠の病態生理と身体運動に着目した睡眠改善プロトコルの開発と効果検証	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	篠崎未生	研究代表者	急性期治療後の高齢患者のリハビリテーション効果促進のための心理的支援に関する研究	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	肥田昌子	研究代表者	概日リズム睡眠覚醒障害の遺伝要因とその発症分子メカニズム	科学研究費助成事業 (基盤研究C)	日本学術振興会
	内海智博	研究代表者	アルツハイマー型認知症の病原因子と睡眠中の記憶定着・増強プロセスとの関連	学術研究助成	神経研究所 睡眠健康推進機構
知的・発達障害研究部	岡田 俊	研究代表者	表情認知障害を起点とする自閉スペクトラム症の二次障害の成立過程の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	疾患コホートを用いた22q11.21欠失症候群の表現型の追跡とゲノムパリアント探索	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	岡田 俊	研究分担者	子どものための診断アセスメントとサービス改善プロジェクト	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	岡田 俊	分担研究者	「発達障害の治療法の確立をめざすトランスレーショナルリサーチ」内「発達障害の認知神経科学的アプローチに基づく病態解明」	精神・神経疾患研究開発費 (2-7)	国立精神・神経医療研究センター
	岡田 俊	研究代表者	神経発達症の多様性の基盤となる病態解明と個別性に応じた治療法の開発と普及	精神・神経疾患研究開発費 (4-4)	国立精神・神経医療研究センター
	岡田 俊	分担研究者	児童青年精神疾患のコンピュータ適応型スクリーニング法およびコンピュータ支援診断面接法開発のためのプロトコル作成	AMED 障害者対策総合研究開発事業 (精神障害分野)	日本医療研究開発機構
	岡田 俊	分担研究者	前世代対応型遅隔メンタルヘルスケアシステム (KOKORO-J) によるメンタルヘルスプラットホームの開発・社会実装拠点	研究成果展開事業 共創の場形成支援	JST
	石井礼花	研究代表者	注意欠如他動性障害の神経基盤の男女差の解明—マルチモダルMRIを用いて	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省
	魚野翔太	研究代表者	「社会認知機能の個人差を生み出す基礎的な心的機能の解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C)	文部科学省

V 令和4年度委託および受託研究課題

知的・発達障害研究部	江頭優佳	研究代表者	「脳活動と行動に基づく注意欠如・多動症児の時間認知系機能検査パッテリーと治療法開発」	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究）	文部科学省
	江頭優佳	研究代表者	発達障害の二次障害発症リスクを形成する心理社会的要因と認知神経機能の解明	横断的研究推進費 若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	江頭優佳	研究代表者	時間知覚と脳構造脳機能に基づくADHD病態の類型化の試み	明治安田こころの健康財団 研究助成	明治安田こころの健康財団
	江頭優佳	研究代表者	ADHD児における時間知覚機能不全と不適応行動との関係の解明-介入方略の開発を目指して-	発達科学研究教育奨励研究助成金	発達科学研究教育センター
	林 小百合	研究代表者	自閉スペクトラム症における共同注視障害の心理学的基盤と促進要因の解明	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究）	文部科学省
	林 小百合	研究代表者	臨床表現型-神経心理評価-脳構造画像からなる神経発達症のレジストリ構築と病態解明	横断的研究推進費 若手研究助成	国立高度専門医療研究センター
	林 小百合	研究代表者	注意欠如・多動症児における社会的報酬の報酬頻度が実行機能に与える影響に関する検討	明治安田こころの健康財団 研究助成	明治安田こころの健康財団
	林 小百合	研究代表者	社会的報酬効果に基づく注意欠如・多動症の病態解明：中核症状と併存症の多様性を含めた検討	笹川科学研究助成金	笹川科学研究財団
	請園正敏	研究代表者	社会的促進の観察効果と共行動効果の発生機序解明に向けて	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（若手研究）	文部科学省
	請園正敏	研究分担者	母体免疫活性化による胎児発達と生後予後に關する生理学的特徴の抽出	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	請園正敏	研究分担者	ヒトにおける嗅覚コミュニケーションの解明：嗅覚感度と社会認知および社会的行動	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
	高田美希	研究代表者	親子総合交流療法の中斷要因の解明と治療開始基準作成を目指したパイロット研究	文部科学省科学研究費補助金 奨励研究	文部科学省
	高田美希	研究代表者	親子相互交流療法（PCIT）の治療プロセスと中断要因の解明	ファイザーヘルスリサーチ研究助成	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
	稻垣真澄	研究分担者	適応的歩行障害における神経性制御メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C）	文部科学省
地域精神保健・法制度研究部	藤井千代	研究代表者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に關わるサービスの提供体制構築に資する研究 内「精神科医療機関ニーズの調査と包括的支援マネジメントの患者特定調査」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	障害者総合支援法の見直しを踏まえた、地域で暮らす障害者の地域生活支援の効果的な支援方法及び評価方法の検討のための研究 内「調査の企画」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	研究分担者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムにおける若年者等に対する早期相談・支援サービスの導入及び検証のための研究 内「手引きの作成」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	藤井千代	主任研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	藤井千代	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	遭遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	藤井千代	研究分担者	ドメスティック・バイオレンス加害者の暴力重度化リスクアセスメントの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	山口創生	研究代表者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に關わるサービスの提供体制構築に資する研究	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究分担者	「地域共生社会の実現に資する障害福祉人材の確保、養成のための研究」内「大学生を中心とする人材確保が困難な原因及び福祉サービスにおける離職理由に関する調査研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	山口創生	研究代表者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会

地域精神保健・法制度研究部	山口創生	研究分担者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究代表者	重症精神障害者の地域支援を目的とした認知行動療法の遠隔トレーニングシステムの開発	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	佐藤さやか	研究分担者	精神科医療機関における包括的支援マネジメントの普及に向けた精神保健医療福祉に関するサービスの提供体制構築に資する研究内「ウェブサイトの開発および検証」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	小池純子	研究代表者	精神障害者による他害行為の予防に対する精神保健医療福祉体制の整備に関する研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究代表者	処遇の難しい精神障害者に対する医療支援体制の整備に向けた当事者参画研究	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	小池純子	研究分担者	認知機能を軸とした急性期の気分障害における評価と包括的支援の開発及び効果の検証	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	小塙靖崇	研究代表者	運動競技選手におけるメンタルヘルス疫学調査とスクリーニング法に関する研究	科学研究費助成事業 若手研究	日本学術振興会
	小塙靖崇	研究代表者	アスリートのメンタルヘルスケアのあり方—社会文化的背景の影響に関する日豪比較研究	国際共同研究加速基金（国際共同研究強化（A）	日本学術振興会
	小塙靖崇	研究代表者	アスリートの、アスリートによる、みんなのための、メンタルヘルス教育プログラム開発	イニシアティブプログラム助成金	トヨタ財団
	塩澤 拓亮	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「地域精神保健領域におけるコアアウトカムセットの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	川口敬之	研究代表者	精神障害者におけるリカバリーと生活の困難さの関連に基づく生活支援システムの構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究	日本学術振興会
	川口敬之	研究代表者	精神障害当事者と支援者との共創によるリカバリー促進に向けた協働意思決定モデルの構築	三菱財团助成 社会福祉事業・研究助成	三菱財团
	川口敬之	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「精神障害当事者との協働に基づく災害時の精神保健福祉体制に関するガイドンスの開発」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	阿部真貴子	研究分担者	音楽が誘発する身体運動の生起機序：その認知神経過程の解明および音楽療法への応用	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	杉山 直也	研究分担者	精神障害にも対応した地域包括ケアシステムの構築を推進する政策研究 内「精神科救急医療体制に関する研究」	厚生労働行政推進調査事業費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	河野稔明	研究代表者	自治体における精神保健福祉法の通報等事例と支援をモニタリングする基盤の構築	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）	日本学術振興会
	河野稔明	研究分担者	「医療観察法における専門的医療の向上と普及に資する研究」内「医療観察法対象者の類型化に関する研究」	厚生労働科学研究費補助金 障害者政策総合研究事業	厚生労働省
	松長麻美	研究代表者	授乳に伴う心理的苦痛測定尺度の開発および標準化	調査研究助成	公益財團法人神経研究所
	松長麻美	研究分担者	精神障害者就労支援における当事者視点の評価とサービス品質の自己管理システムの開発	科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）	日本学術振興会
	安間 尚徳	分担研究者	包括的精神保健サービスを実現するための協働のあり方と人材育成に関する研究 内「地域精神保健医療福祉に関わる支援者、行政職員を対象とした地域精神保健医療福祉研修プログラムの開発に関する研究」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
こす こト セロ ンのス タ情 報災 支援 援時	金 吉晴	研究代表者	ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	金 吉晴	研究代表者	対話型カウンセリングAIの構築に向けたカウンセラーの効果的なコミュニケーションのパターン解析	共同研究	フロンティアリンク株式会社
	金 吉晴	研究代表者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究(A)	日本学術振興会

V 令和4年度委託および受託研究課題

ストレス・災害時こころの情報支援センター	金 吉晴	研究代表者	トラウマを有する者における自殺行動の予測と予防に向けた認知機能・認知バイアスの検討	革新的自殺研究推進プログラム委託研究	厚生労働大臣指定法人 いのち支える自殺対策 推進センター
	金 吉晴	研究分担者	「電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤整備事業」内「コホート研究を用いた研究連携と精神・神経疾患医療からみた疾患横断的予防」	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 横断的研究推進費研究	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	実装科学推進基盤構築支援事業	国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 JH横断的事業推進費	厚生労働省
	金 吉晴	研究分担者	ウェブ持続エクスボージャー療法の効果検証と普及 コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	金 吉晴	研究分担者	「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」内「文化的処方の有効性の検証」	共創の場形成支援プログラム（育成型）	科学技術振興機構
	関口 敦	研究代表者	シナプス可塑性の個人差評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究代表者	ヒトのシナプス可塑性評価によるストレス関連疾患の治療反応性予測	武田科学振興財団医学系研究助成（精神・神経・脳領域）	武田科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害に対する認知行動療法の有効性の神経科学的エビデンスの創出	日本医療研究開発機構 戰略的国際脳科学研究推進プログラム	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究代表者	疼痛性障害の新規治療プログラムの脳科学的エビデンスの構築	中富健康科学振興財団研究助成	中富健康科学振興財団
	関口 敦	研究代表者	摂食障害の治療支援センター設置運営事業（全国拠点機関分）	精神保健対策費補助金	厚生労働省
	関口 敦	研究分担者	摂食障害を抱える家族のピアサポート研修プログラムの開発	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究分担者	PTSDの恐怖記憶と情動反応の分子基盤の解明と治療	文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (A)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	経皮的耳介迷走神経刺激の簡便で客観的な評価手法の開発	日本医療研究開発機構 『統合医療』に係る医療の質向上・科学的根拠収集研究事業	日本医療研究開発機構
	関口 敦	研究分担者	過敏性腸症候群の認知行動療法を社会実装する	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	関口 敦	研究分担者	「ストレス関連疾患の認知行動療法の治療反応性と遺伝子・バイオマーカーの探索」内「CBT効果を予測する脳画像バイオマーカーの検証」	精神・神経疾患研究開発費	国立精神・神経医療研究センター
	小川眞太朗	研究代表者	プラズマローデンを新たな軸とした精神疾患の前臨床研究—治療・病態・バイオマーカー	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	小川眞太朗	研究代表者	逆境的小児期体験とうつ症状の発現に関連するバイオマーカーの開発—リン脂質を軸に—	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	PTSDに対するオンライン遠隔認知行動療法の効果検証とオンライン遠隔認知行動療法における診療連携モデルの確立	日本医療研究開発機構 障害者対策総合研究開発事業（精神障害分野）（若手育成枠）	日本医療研究開発機構
	井野敬子	研究代表者	ウェブ持続エクスボージャー療法の効果検証と普及 コロナ禍にトラウマ治療を届ける	文部科学省学術研究助成基金助成金 基盤研究 (C)	日本学術振興会
	井野敬子	研究代表者	難治性パニック障害の予後予測因子解明と発達特性にマッチした修正型心理療法の開発	文部科学省科学研究費補助金 若手研究	日本学術振興会
	成田瑞	研究代表者	AI機械学習を用いた食行動によるうつ病予防モデルの開発	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会
	大沼麻実	研究代表者	心理的応急処置 (PFA) e-ラーニング開発と効果検証及び有効な普及方法の考察	文部科学省学術研究助成基金助成金 若手研究	日本学術振興会

精神保健研究所年報No.36（通号No.69）2023

---

令和5年7月1日発行

編集責任者 金 吉晴  
発行所 国立研究開発法人  
国立精神・神経医療研究センター  
精神保健研究所  
〒187-8553  
東京都小平市小川東町4-1-1  
(非売品) 電話 042 (341) 2711  
印刷：有限会社 太平印刷

©2023, All rights reserved, Printed in Japan